

---

# とある三人の転生者たち

秋月修夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある三人の転生者たち

### 【Nコード】

N3904K

### 【作者名】

秋月修夜

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生たち風間 翔、氷村 透、近藤 炎哉の三人を神様が間違えて殺してしまい神様が「お詫びに【とある魔術の禁書目録】の世界に転生させてあげよう」と言った。このお話はそんな少年たちのお話です。【とある科学の超電磁砲】の話も出たりします。駄文ですがよろしく願います。

## 主人公の紹介（前書き）

今回は主人公たちの設定みたいなものです。

## 主人公の紹介

名前：風間翔  
かざましろう

容姿：茶髪のウルフヘアで瞳の色は茶色だ。

体系は一般の高校生と変わらないが筋肉は結構引き締まっている。

リングぐらいなら余裕で握り潰すぐらいの握力を持っている。

顔立ちは少し子供っぽさが残っている。

身長・体重：173cm 61kg

能力：風使い エアロマスター カスタマイズ 改造

趣味：炎哉を弄ること・月見（夜の散歩のときは大抵高いビルの屋上で月を見るのが目的だ。）・道具の改造（例：スタンガン）

特技：剣術（風間流剣術）・料理・ナイフ投げ（料理とナイフ投げは母親から教えてもらっている）

家族構成：父親、母親、翔（前世：父親・母親・妹・翔）

基本的に冷静な性格だがノリは良い。おもしろいことには自ら首を突っ込み危なくなれば、その行く末をいつも安全圏で傍観している（例：上条の日常・炎哉にいたずらするとき）

友達思いなところもあり、頼まれれば文句を言いながらもやる（炎哉の飯）

目の前で困った人がいれば大抵は助けるが、どこぞの正義の味方と同じというわけでもなく 1（友人や家族）：9（他人）なら迷わず1を選択する。

前世で一度だけ人を殺したことがあり、その当時は殺人衝動があつたがいまのところまだ出ていない。だが、敵と認識したものは容赦がない

愉快犯なところもあるが一応常識人？あの眉毛事件のあと風紀委員を見ると反射的に逃走してしまうようだ（反省文がトラウマになつた）

最近、上条のトラブルメーカーが自分にも移つたのではないかと頭を悩ませている。

嫌いなタイプ：過去のことをうたうだと悩んだり・責任を他人になすりつけるような奴。すぐに諦める奴。大切なもの（友達・家族・気に入った人物）を傷つける奴、神父

好きなもタイプ：自分の信念をどこまでも貫き、意思が強い人間。

名前：近藤炎哉こんどうえんや

容姿：赤髪のライオンヘア（バカテスの雄二みたいな髪型）で赤色の瞳だ。

目つきが鋭く常に睨んでいるように見えてしまい、初対面には常に機嫌が悪そうに見える。

とんどない。

体系はリトバスの真人のような体系で脂肪がほ

顔立ちは黙っていればかっこいいはずなのだが普段の言動と目つきでチンピラに見えてしまう。

身長・体重： 182cm 72kg

能力：発火能力  
バイロネキス

趣味：翔との模擬試合・筋トレ

特技：早食い・岩割り

家族構成：父親、母親（父親、母親、兄）

基本的にバカで単純だが、翔と同じで目の前に困った人がいれば助けるお人好しだ。

翔と違って1：9どちらを取るかと言えば全てを助けると答える甘い性格だが、どんなことがあっても、自分の身を犠牲にしてもその信念だけは貫き通す。（その件で一度だけ翔と大喧嘩をしたことがある。）

喧嘩を売られればすぐに買ってしまう。そのせいでバーサーカーのあだ名が付いた。

戦うことが好きで、毎日鍛錬は欠かしていない努力家だが勉強にはそれは一切発揮しようとしなない。

恋愛に関しては意外と純情だ。

頭の良さはバカテスの明久並、いやそれ以上の珍回答を出すことがある。そのせいで毎回テストの採点の時に職員室笑い声が聞こえてくる。頭の悪さに関しては翔たちもすでに諦めている（何十回も勉強を教えたが一日たてば忘れてしまうから）

赤点の常習犯で反省文は書き慣れているが字が読めない・  
・というか暗号化してる

嫌いなタイプ：大切なもの傷つける奴、常に暗い奴

好きなタイプ：佐天さん、活発な子

名前：氷村透ひむらとう

容姿：髪型はグレーのショートカットで黄色の瞳だ。

身長・体重：149cm 49kg

能力：温度吸収フリージング

趣味：読書、魔術を学ぶこと、月見

特技：勉強、射撃（二丁拳銃）

家族：父親、母親（前世：義理の父、義理の姉）

基本温厚な性格で争うことが嫌っているが、決してしないわけではない。

前世はおどおどとして、引っ込み思案な性格だったが翔たち

と出会ってから段々と変わってきた。

温厚な性格だが怒らすと結構怖い。

風紀委員に所属しており、初春に恋心を寄せている。初春も同じ気持ちなのだがお互いに勇気が出せずに言えないようだ。・・・透は秋葉の気持ちにはまだ気づいていない

三人の中で一番頭が良く透の学校のテストでは常に1、2位の成績を行き来している。

学校と風紀委員ではファンクラブが出来ており7割が女子、3割が男子で構成されおり、人数も多く規模がでかい。

ファンクラブのリーダーは秋葉。初春もそのファンクラブに入っている。

男子が入った理由は、秋葉が昔ふざけて透を女装させた写真を落としてしまい、それを拾った男子がそれを透以外の男子に広めてしまった。最初は女子から肅清を受けたが、その後はファンクラブの一人になった。(ヒント：秋葉嬢と呼ぶ人物)

透自身はファンクラブの存在には気が付いていない

銃の腕は高く10発撃てば9発当たるほどだが、腕の筋肉が足りないため撃ったあと腕が痙攣するため、最近では腕立てをしている。

嫌いなタイプ：責任をなすりつける奴

好きなタイプ：初春、常に明るい性格の子

## 主人公の紹介（後書き）

気づいたらもう50000PV超えてました！！

読んでくれた方々ありがとうございました^^

次話は原作に入っていくつもりです。

こんな駄文ですが読んでくれて嬉しいです。

ではでは

## 神との出会い（前書き）

今回が初めてですので文章が変かもしれませんがよろしく願います。

では、はじまり～はじまり～

## 神との出会い

翔「どこだよここ？」

周りを見るが誰もいないしひとつも物がない。

まじでどこだよここ？

この青年の名は風間翔かみまじょうどこにでもいる普通の高校生である。

翔「ってか俺は何でここにいるんだ？」

思い出し中

翔「・・・あ！？そういえば俺たち【とある魔術の禁書目録】の小説を買いに行く途中でトラックに轢かれたんだっけ！・・・たち？」

翔「あー！ー！そういえばあいつらはどこだ！？」

もう一回周りを見るがやっぱり誰もいない・・・

翔「はあー（ため息）こういうときは寝るか・・・zzz」

翔「zzz「おーい起きるのじゃ」zzz」

翔「zzz「おーい起きとくれ」zzz「スッー」」

「起きるー！ー！！！」

翔「うわっ！何だ？！」

あまりの大声に飛び起きた

「ようやく起きたか・・・ハア」

翔「おっさん誰？ってかデカッ！？」

目の前にはどこぞの巨人族ですか？ってぐらいのでかい白いおっさんがいる・・・

おっさん？「ワシはお主たちで言うところでの神様じゃ」

翔「は？・・・（思考停止中）」

・・・起動

翔「か、神様あ？！なんで神様がここにいんだよ！そもそも何の神だよ！」

おっさん改め神様「少し落ち着かんか・・・今から説明してやるか

ら

落ち着けつてのが無理だろ！

神様「ゴホンッまずはワシが何の神かじゃがワシは『ゼウス』じゃ」

翔「おいおい！ゼウスって言えばギリシア神話にでてくる最高神じゃないかよ！なんであんなみたいな大物が俺のところに来るんだよ！」

ゼウス「それをこれから説明するわい」

ゼウス「落ち着いて聞くがよいお主は死んでるのじゃ」「うん、知ってる」って知っておったのか（汗）」

ゼウス「なら話が速い・・・実はの今回お主たちが死んだのはワシのミスじゃすまなかった。」

頭を下げるゼウス

翔「いや別にそれは良いが「いいのかよ」ああ、別にいいさっき」たち」って言ったよな」

ギロツ

翔「あいつらはどうした！！俺と一緒に死んだならなんでここにいなえんだよ！」

ゼウスに向かつて怒鳴るがゼウスはフーと息をつく

ゼウス「安心せい、他の二人は別のものが相手しておる。ワシ一人で三人を相手にするのは少し疲れるのじゃ」

全身の力が抜ける

翔「ハァーそういうことかよ。怒鳴って悪かったな」

ゼウス「別にいい、さて話の続きじゃがなぜワシがお主のところに来たかというの・・・お主のことが気に入ったからじゃ」

ゾワッ

翔「やめろっ！俺にそんな趣味はない！「ワシとてないわ！」うおっ！」

自分の体を抱きしめ離れようとした瞬間に怒鳴られた

ゼウス「ハァーお主を気に入った理由じゃが簡単に言えば自分のことを気にせず他人のことを心配できるその性格じゃ」

あれ、そうだっけ？自分の性格なんてあんまわからないものだな

翔「あゝ一つ言っておくが俺みたいな性格の奴なんて結構いるだろ」  
ゼウスは翔に向かってチツチツと指を振った

ゼウス「お主みたいな性格がたくさんいるなら殺人など起きはせんわい。お主は自分を過小評価しすぎじゃ」

翔「あ！そういえば、どうやって俺の性格を知ったんだ？」

ゼウスは今更かと言わんばかりに翔を見る

ゼウス「なに簡単じゃお主の記憶を覗かせてもら「覗くなよ（汗）  
過ぎたことじゃ」

ムカツときたがここは抑えとこう

ゼウス「さて、ここからが本題じゃがお主たちを死なせてしまったお詫びにお主たちを【とある魔術の禁書目録】の世界に転生そして好きな能力をひとつあげよう。ほしい能力を言うがよい」

良かったあいつらも来るのか

翔「少し考えさせてくれ」

・・・考え中・・・

3分後

翔「じゃあ、風の能力をくれ。ついでに原石ってことにしといてくれ」

ゼウス「風で原石か・・・まあ、いいじゃろう。じゃができてモレベル4までじゃ」

翔「ん？なんでだよ？」

ゼウス「世界の修正力を受けさせないためじゃ」

レベル5になりたかったが諦めるか

ゼウス「あと、お主には特別にひとつ能力をやるうその名も改造じや」  
カスタマイズ

へえーおもしろそうな能力だな

翔「じゃあ俺は多重能力者デュアルスキルってことか」

俺の答えにゼウスは頷いた

ゼウス「この能力は物の形や材質を変えることができるものじゃ。」

もつと簡単に言えば鋼の錬金術師を思い浮かべるがいい」

・・・なんで知ってたんだよ

ゼウス「神だからじゃ！」

翔「心を読まれた!？」

ゼウス「顔に出ておったわ」

俺って顔に出やすかったんだorz

ゼウス「さて話も終わったしなにか質問はあるかの？」

なにかあったけ?・・・あ

翔「俺たちって当麻と同じ年代なのか？」

ゼウス「一応そのつもりじゃ。そのほうがよかるう？」

翔「ああ、頼む。質問はもうない」

ゼウス「そうか、じゃあその魔方陣に乗っとくれ」

ゼウスが指差す方向にはさっきまで魔方陣がなかった場所に魔法陣があった。翔は言われたとおりに魔方陣に乗った瞬間に魔方陣が光った

翔「ありがとよ、じゃあな」

翔はゼウスに向かって右手を上げた

ゼウス「向こうで幸せに過ごすがよい」

と言った瞬間に光が消え翔は消えていた

ゼウス「さて、戻るかの」

と言ったあとにゼウスの姿は消えた。

これから風間翔たちの新たな人生が始まる

## 神との出会い（後書き）

誤字、脱字、感想などがあつたらお願いします。  
ゆっくりと更新する予定です。  
では

## 女神との出会い（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。  
では、第二話のはじまり〜はじまり〜

## 女神との出会い

SIDE透

透「あれ？ここはどこだろう？」

首を傾げてあたりを見回した

彼の名前は氷村透（むつむと）高校生であり頭も三人の中で一番良いのだが身長が低く童顔のおかげ高校生に見てもらえないのが悩みである

透「ん？あれって・・・炎哉？」

透が見た先には親友の一人が倒れていた。

透は炎哉に近づいて頬を軽く叩いた

ぺちっ、ぺちっ 頬を叩いた音

透「ねえ、炎哉起きてよ」

炎哉「うっん、あと地球が1周するまで寝かしてくれ」

普通こんな寝言言う奴はいない

透「そんなに待ってらんないよ、どうしよう？うっん」

・・・考え中・・・

透「あ！そういえば翔が（俺がいないときがあるかもしれないから教えとくがあ）のバカが起きないときはこの単語を言えばすぐに起きるぞ）言ってたような。えくとたしか」

透「（ゴリラ）だった「誰がゴリラじゃ〜〜〜！」「ふえ?!」

炎哉が空間が震えるほどの大声で叫んだ。まさに獣の雄叫び

（まあ、これ言うときは注意点があつてな。あらかじめ耳を塞がないと耳が死ぬぞ） もう遅いです  
うっ忘れてたてた〜耳がいたいよ〜

SIDE炎哉

透「ゴリラだった「誰がゴリラじゃ〜〜〜！」「ふえ?!」

彼の名は近藤炎哉（こんどうえんや）高校生なのだが頭が悪くて中学1年生の問題で頭を悩ますほどのバカである。

誰だ！？俺をゴリラって言った野郎は！今すぐこの気合の込めた左

腕で制裁してやる！

さあ、どこにいやがる！・・・ん？

炎哉が見たものは目に涙を溜めた親友の透だった。その道の人が見たら鼻血を出して失神してそうた。

炎哉「透よなんで泣きそうなんだ？誰にやられた言ってみろ！」

透は涙を堪え俯きながら俺を指差した・・・俺？！

炎哉「俺、お前に何かやつちまったのか？（冷汗）」

ヤバイこれが翔にばれたら・・・殺される？！翔の野郎、透に対してすげー過保護だし！まさかそつちの道・・・はないな

透「ううん、違うよ。炎哉の声に驚いただけだよ。」

透は目を手の甲でこすりながら言った。

俺そんなでかい声出したか？

炎哉「えくとすまん！」

透「べつにいいよ」

炎哉「そうか（ふうー良かった。危うく翔の野郎に殺されると・・・ろって・・・）翔の野郎はどこだ？その前にここはどこだ？」

透「僕にもわからない。ここがどこかも、翔がどこにいるかも・・・」

炎哉「お〜い！翔どこにいるんだ〜！いるんなら出てこ〜い！」

呼んだがまったく反応がない

透「翔だったら隠れるなんてことしないと思うよ。そもそも隠れる場所なんてないし」

炎哉「確かにそうだな。よし、こうなったら」

S I D E 透

炎哉「確かにそうだな。よし、こうなったら」

といきなり炎哉はいきなり準備体操を始めた。

これから何をするのかわかった気がするけどー応聞いとこ

透「え〜と何してるの？（汗）」

炎哉「なーにこの場所がいくら広くてもどこかに出口ぐらいあるだろ。」

周りを見ても真っ白で出口があるなんて思えない。

透「出口・・・あるのかな？」

炎哉「前向きにいこうぜ！まあ、透はここで待っていてくれ出口見つけたらすぐ戻ってくるからよ。よし」

あ・・・始まった

炎哉「いつだつて必要なのは」

炎哉が大きく息を吸い込んで

炎哉「気合いじゃあああああー！ー！ー！ー！」

と叫びながら走って行った。

ときどき思うけど、あの儀式ってなんの意味があるのかな？（呆れ

透「・・・なんか翔がゴリラって言った理由わかった気がする。（

汗

それにしても、ここはほんとにどこなんだろう？

もう一度回り見回すがさつきと同じで白い空間が広がってるだけだ

まだ炎哉が帰ってくるのにまだ時間が掛かるし僕ができることを考

えよう。うん何ががあるかな

透「あ、そうだ！携帯で翔に連絡すれば翔がどこにいるかわかるか

も

えくと携帯は・・・あれ？

透「あれ？・・・携帯がない」

全部のポケットを調べたが携帯がない

透「・・・おかしいな」「ああああ」「うん？」

ドドドドつと何かが走ってる音ともになにか叫んでる声が聞こえる

「じゃあああああああああ」

段々と足音と声が大きくなっている。

「合いじゃあああー！ー」

透「ん・・・あれって？」「気合じゃあああああー！ー！ー！ー！」炎哉

！？」

え？！な、なんで炎哉が後ろから来るの！？え、えくとともかく止

めなきゃ！

透は息を吸い込んで





炎哉がなにか言ってるけどいまは気にしないどころ、それより！

透「アテナ様は「アテナでいいわよ。あと、敬語もいらわないわ」え、うん。じゃあアテナはここがどこかわかる？」

アテナ「そうね、ここは天国よ」て、天国！「そうよ天国、だけどここは天国のなかでも特別な場所で・・・ちよつとさつきからどこ見てるのよ？」

とアテナは炎哉を睨んでる。

炎哉はどこを見てるんだろ？

炎哉の視線を辿るとアテナのスカートの中が見える／／／  
・・・っ！と、とにかくアテナに教えなきや！

透「ア、アテナそ、そのスカートの中見えてるよ／／／  
うしろ向いたほうがいいかな

アテナ「え、っ／／／／／！／／／／／」  
顔を赤くしたアテナがいきなり光でした。

透「え！ま、まぶし」

炎哉「な、なんだ!？」

光がおさまると身長が大人の女性と同じくらいのアテナがいた。

アテナ「これぐらいかしら？」

透「ア、アテナ？身長が・・・」

アテナ「ええ、変えてみたの」

炎哉「なんだよ、せつかくいいなが「黙れ、忘れろ!」ゴフツ、グ  
ヘツ」

アテナが炎哉の鳩尾を殴ったあとに回し蹴りで炎哉の顔面を蹴り飛ばした。

ダンツ、ダンツ（地面を跳ねる音、ゴロゴロゴロ・・・ピクツ、ピクツ・・・チーン

透「え、炎哉大丈夫？」

反応がない、まるで屍のようだ・・・南無

アテナ「あなたも忘れなさい！いいわね?（黒笑）」

こ、怖いよアテナ（汗



炎哉「おいおい、なんで翔の野郎のところそんなすげえ神様が来るんだよ！」

アテナ「お父様が言うにはその翔って子を気に入ったとのことよ」

炎哉「・・・なんだと、ゼウスって男でもokな「そんなわけないでしょ！」だよなw、冗談だからその拳をしまえ(汗)」

アテナ「まったく、その翔って子はお父様が相手をするから、あなたたちの相手をわたしが任されたのよ」

透「へえーそうだったんだ、でもアテナは神様でしょ。なんでわざわざ僕たちをこんなところに連れて来たの？」

炎哉「そういえば、そうだな。なんでだ？」

アテナ「その説明がまだだったはね、落ち着いて聞きなさい。」

炎哉「俺はもとから落ち着いてる・・・おい、なんだその目は？」  
冷めた目つきで俺を見ってくるアテナ・・・なぜだ？

アテナ「今のは聞かなかったことにするわ。さて、あなたたちがここにいる理由はお父様が間違っただけあなたたちを殺してしまったの」  
透「へ？」

炎哉「は？」

・・・ブチッ

炎哉、透「ふざけんなあ—————!!!!!!」

アテナ「きゃっ！」

あまりの大声にアテナはびっくりした

間違っただけ(怒)

炎哉「てめえら神は人の命をなんだと思っただよ！ああ！」

アテナ「ちょ、ちょっと落ち着きなさいよ」

炎哉「何言っただよ！落ち着けっただよが無理な話だろうが！だいたい「炎哉」なんだよ透！」

透「すこし、落ち着こうよ」

炎哉「なっ！お前はいいのかよ！「いよ」なんだって？」

透「いいわけないよ！もう二度と家族とも会えないんだからいいわけないでしょ！」だっただよ！」だからって、アテナに当たったとこ

るでなんにもならないでしょ！それに話し合いのためにアテナは僕たちをここに呼んだんだから！で、アテナ用件はなんなの？」

とアテナに尋ねるがその目には先ほど違つて敵意が含まれている  
炎哉「チツわかつたよ。おい、さつさと本題を言えよ」

まだ、腸が煮えくり返つてるが話しだけは聞いてやるか

アテナ「え、ええ用件だけどあなた達を死なせてしまったお詫びに  
【とある魔術の禁書目録】の世界への転生と好きな能力を1つあげるように言われているわ」

炎哉「なっ、マジかよ！」

行つてみたいと思つていたがこんな形でいけることになるとはな・

透「でも、なんで【とある魔術の禁書目録】の世界なの？」

アテナ「クジで決めたらしいわ」

クジつて・・・おいおい

アテナ「それより能力は決めたかしら？」

あゝそうだった。何にしようか？

透「それじゃあ、物を凍らす能力がほしいんだけど、できる？」

アテナ「それは空気や物資の温度を下げて凍らす能力と解釈していかしら」

透「うん、それでいいよ」

アテナ「わかつたわ、であんたは、なにするの？」

やっぱ俺だけ扱いがちげえ

炎哉「俺は炎を操る能力がほしい」

アテナ「ふーん、あんたは炎ね・・・」

なんだよ、そのなにか言いたそうな事がある顔は・・・

炎哉「文句あんのかよ？」

アテナ「別にないわよ、それで二人ともレベルの方は4でいいかしら？」

透「レベル5は無理なの？」

アテナ「こつちにも都合があつてね、それは無理なのよ」

炎哉「なんだよ、ケチくせえな」

アテナ「あら、そんなレベル5になりたいなら、私が今から10秒数えてる間に一発でもいれたらレベル5にしてあげるわよ」

炎哉「女に手を出すのは主義じゃね」怖気づいたの（嘲笑）「やってやるっじゃねえかよ！」

後悔させてやらあ！

## 女神との出会い（後書き）

次話は炎哉VSアテナ

初めての戦闘シーンです。

誤字、脱字、感想などがあつたらお願いします。  
ではっではっ

## 女神との対決（前書き）

では駄文ですがよろしくお願いします  
では、第三話はじまり〜はじまり〜

## 女神との対決

SIDE透

炎哉「女に手を出すのは主義じゃね「怖気づいたの（嘲笑）」やってやろうじゃねえかよ！」

炎哉「やってやっぱり単純だよ（呆れ）」

炎哉「おい！透」

透「ん、なに？」

炎哉「開始の合図をくれ」

透「わかったよ」

透は右手を上げて

透「始め！」

声と同時に右手を振り下ろした。

透が合図をしたと同時に炎哉はアテナに向かって走り出した。

アテナ「10」

炎哉「らあっ！」

炎哉はアテナに向かって左腕で殴りかかるが、パシッと掌で受け止め逃げられないように手首を掴んだ。

炎哉「なっ！」

アテナ「遅いわね、止まって見えるわ」

炎哉「はっ（嘲笑、この距離なら避けられねえだろ！」

炎哉はもう片方の腕で顔に目掛けて殴るがアテナは首を動かして避け、瞬時に手首を服の袖に持ち替え背負い投げを決めた。

炎哉「がはっ！」

・・・炎哉、大丈夫かな？・・・まともに受け身取れてなかったけどアテナ「9、8・・・もう終わりかしら？」

炎哉「誰が終わりって言った」

アテナ「へえ〜」

炎哉「俺はまだまだいけるぜ！」

頭から血を流しながら立ち上がる炎哉

アテナ「7、だったら掛かってきなさい！」

炎哉「言われなくてもな！」

炎哉はアテナに殴る、蹴るを繰り返すがアテナはそれを最小限の動きで避けている。

アテナ「6、5、4」

アテナはカウンントをしながら余裕で避け続ける

透「・・・すごい、それに綺麗」

今まで喧嘩で炎哉に負けることがなかった炎哉を圧倒している、なにより炎哉の攻撃を避け続けているアテナが舞っているようで美しかった。

SIDE炎哉

炎哉「がはっ！」

ヤバい意識が・・・

アテナ「9、8・・・もう終わりかしら？」

終わりだと・・・この俺が・・・ふざけんなっ！

炎哉「誰が終わりって言った」

つつ、さすがに今のはやばかったぜ

アテナ「へえ」

炎哉「俺はまだまだいけるぜ！」

アテナ「7、だったら掛かってきなさい！」

炎哉「言われなくてもな！」

炎哉はアテナに殴る、蹴るを繰り返すがアテナはそれを最小限の動きで避けている。

くそっ、なんで当たんねえんだよ！

アテナ「6、5、4」

時間もなくなってきたな・・・アレを使うか

炎哉はアテナから距離をとった

炎哉「おい、アテナ」

アテナ「3、様を付けなさいまったく、でなに？」

炎哉「次の一撃で決めてやるよ！それでお前を倒せなかったら俺の負けでいい」

アテナ「（条件が変わってるじゃない、でもおもしろそうだし）いいわよ、倒せるものならやってみなさい！」

炎哉「ふうー」

炎哉は息を整え体勢を低くして構えた瞬間、空気がピリピリとした。アテナ「へえー（まさか、氣を使えるなんて・・・いえ、無意識でやってるのかしら、どちらにしても）おもしろい」

炎哉「行くぞ！」

今までより数倍速いスピードでアテナに向かった

炎哉「我流奥義『金剛掌破』」

勢いを落とさず腰を捻って殴りかかる、そのスピードは先ほどよりも速かった

ダンツと音が回りに響く

炎哉「なっ!？」

アテナ「あなたの負けね」

アテナは炎哉の全力の一撃を掌で受け止めていた

炎哉「ハア、俺の負けだ」

炎哉はその場に座り込んだ

透「炎哉、大丈夫？」

二人の戦いが終わり透は炎哉のもとに駆け寄った

炎哉「ん、ああ平気だ。あれを使うとすげえー体がだるくなるんだよ」

透「そうなんだ」

アテナ「そろそろ、いいかしら？」

炎哉「ん、なんだよ？レベル5のことならもういいぜ」

アテナ「いえ、それじゃないわ」

炎哉「じゃあ、なんだ？」

アテナ「人間にしてはよくやったわよ、あなたは。それに楽しませてもらったことだし御礼として一つ願いを叶えてあげるわ」

なっ・・・こいつが俺を褒めるなんて、だが願いか・・・

炎哉「それはなんでもいいのか？」

アテナ「ある程度のことならいいわよ、最強にしろって願いは却下だけど」

何にするか・・・よし、これだな！

炎哉「決めた、俺の身体能力を上げてくれ」

アテナ「それぐらいならいいわよ」

頷いたあとアテナは透のほうを向いた

アテナ「それとあなたの願いも叶えてあげるわよ」

透もかよ！・・・まあ、俺だけ叶えてもらうのも不公平だし、別にいつか

S I D E 透

アテナ「それとあなたの願いも叶えてあげるわよ」

え、僕も！？

透「いいの？」

アテナ「いいわよ、一人だけ叶えるの不公平だから」

透「少し時間ちょうだい」

アテナ「いいわよ」

じゃあ、何にしようかな・・・うん・・・そういえば能力者って魔術使ったら危険なんだっけ？魔術使ってみたかったからこれいしよう。

透「じゃあ、魔術を使っても拒絶反応や出ないようにつて出来る？」

アテナ「ええ、出来るわよ、ついでに少しだけ魔術の知識をあげるわ」

透「ありがとう、アテナ」

アテナ「良いわよ、さてその魔方陣の上に移動してちょうだい」

アテナが指を差した方向に魔方陣があった

・・・さすが、神様なんでもありだね（汗

僕たちは頷いて言われた通りに魔方陣に乗った瞬間、魔方陣が微かに光った

アテナ「自我が目覚めるの1歳からよ」

透「いろいろいるとありがとうね、アテナ」

炎哉「世話になったな、後お前はこっちの世界に干渉できるのか？」

アテナ「え、それは難しいわね・・・誰かに憑依でもしないと」

炎哉「だったら誰かに憑依したらまた戦おうぜ！」

アテナ「クスツ、クスツ」

アテナは可笑しそうに笑っていた。

その姿はとても美しかった。

炎哉「おい、なに笑って「いいわよ」へ？」

アテナ「だから、良いつて言ったのよ。日にちはエンゼルフォール御使墮し起きると

きでいいかしら？」

炎哉「わかった、だけど誰に憑依するんだよ？」

アテナ「秘密よ、わかつたらつまらないじゃない」

炎哉「それもそうだな」

・・・この二人、バトルジャンキーだ

SIDE OUT

炎哉「じゃあな」

炎哉が別れの言葉を言うと魔方陣がさつきより強く光った。

アテナ「向こうで幸せで暮らしなさい」

アテナが言った瞬間、光は消えると二人の姿はなかった

アテナ「まさか、あれだけの力を見せてもまだ挑もうなんて」

神様を相手にしてまるで友達のように接するなんて

アテナ「フフツ、次に戦うときはもっと強くなってなさいよ、炎哉」

と言ってアテナは消えた

彼らの物語りはこれから始まる。

## 女神との対決（後書き）

ようやく転生までいきました。こんな駄文ですがこれからもお願い  
します

誤字、脱字、感想があったらお願いします。  
ではでは

転生、そして新たな日常（前書き）

更新遅れてすいません

はあく時間がない、誰か時を止める能力があったらください！

まあ、無理だけど

では、第4話はじまり〜はじまり〜

## 転生、そして新たな日常

### SIDE翔

(ん？なんだ、ここは・・・暗いな)

首を動かそうとするが

(あれ、動かない？)

(転生したんだよな？・・・ん？まぶしい)

まぶしい光と同時に自分が誰かにひっぱれる感覚があった

「おぎやーーーーー！(目があああ！、目があああ！)

」

「おめでとうございます、元気な男の子ですよ」

看護婦は俺を持ち上げてベッドで横になっている女性の横に置いた

「ありがとう・・・産まれてきてくれてありがとう」

涙を流している女性が見えた

「詩穂、よくがんばったな」

ベッドの近くにいた無精髭を生やした男が女性に優しく微笑んでいた

「おぎやーーーーー、おぎやーーーーー(これが俺の新しい母さ

んか、その隣にいるのは父さんか)」

「詩穂、疲れているだろうから、今は休みなさい」

「はい、そうさせてもらいます。おやすみなさい彰二さん」

「ああ、おやすみ。詩穂」

じよせ、じゃなくて母さんが安心してきつた顔で眠った

やばい、意識がだんだん遠くなってきた

「よかつ・・・お・・・が・・・事に産ま・・・て・・・てく・・・れて」

父さんがなにが言ってるかほとんど聞こえないな

「おやすみ、我が息子よ」

なぜか、今の言葉だけははっきり聞き取れた

「(おやすみ、父さん)」

1年後

ようやく1年がたった

この一年間を振り返ってみると・・・なにか大切なもの失くした気がするorz

だって、見た目は子供でも中身は高校生だからな。せめて自我が目覚めるのは1〜2歳の間にしてほしかった・・・マジで

はあ、これ以上過去を振り返るのはやめよう・・・立ち直れなくなりそうだ

「翔くん起きてますか」

ん？誰か俺を呼んだか？

トントントンと誰かが階段をあがってくる音がする

「翔くん起きてる〜？」

ああ、母さんか

翔「あゝ（起きてるよ）」

今はまだ言葉を話せない、だからどうしてもこういう返事になってしまう

母「おはよ〜翔くん」

この人の名前は風間詩穂俺の母さんである。かなりの美人だ

翔「あう〜（おはよ、母さん）」

と言ったあとに母さんは俺を持ち上げて階段を下りた

1階では父さんが椅子に座って新聞を広げて読んでいた

父「おはよう、翔」

と新聞から顔をあげて言った

この人の名前は風間彰二俺の父さん、そして剣術道場の師範だ

翔「あう〜（おはよ、父さん）」

しゃべれないから両腕を上げて示すことにした

はあ、はやくしゃべれるようになりてえー！

母「翔くん、席に座っててね」

そう言っつて母さんは台所に向かった

んじゃ、座りますか

翔は椅子によじ登りながら座った。  
「やっぱり小さい体だと座りにくいな・・・いつも思うが母さん、あなたはこのPAD長ですか」  
翔がよじ登ってる間にテーブルの上には既に朝食が置かれていた。  
翔が椅子に座るまでの時間はだいたい20秒ぐらいしか掛かっていない。

母「では、いただきます」

父「いただきます、相変わらず詩穂の料理はうまそうだな」

母「ふふ、褒めてもなにも出ませんよ」

父「いやいや、本心だよ」

そこで二人は同時に笑った

二人の周りにA・Tフィールドが見える

甘い、めっちゃ甘いですよ二人とも！軽く口から砂糖が出せそうだし、はあ、いつものことだから諦めて俺も食べよう

母「あ、そうだ翔くん」

翔「うゝ（なに？母さん）」

翔は母の方に首を向けた

母「今日、お母さん出掛けるから家で留守番していてね」

翔「うゝ（了解）」

翔は頷いた

父「ははっ、翔はえらいな」

母「ええ、だって私たちの子供ですから」

父「そうだな、自慢の息子だよ」

本当にこの二人が両親でよかった

父「ごちそうさま」

母「お粗末様です」

父さんは食器を台所まで持っていった。食器を置いた後、椅子に掛けてあったスーツを着た  
父「では、行って来る」

母「いつてらっしやい、ほら翔くんも」

翔「あゝ（いつてらっしやい）」

翔は手を振る

父さんはそれを合図に仕事に出掛けた

母「ごちそうさま、翔くんは自分のペースで食べててくださいね」

母さんは食器を持っていき父さんの食器と一緒に洗った

翔「うゝ（ごちそうさま）」

と両手を合わせた

食器を持っていこうとすると既に食器がなくなっていた

・・・いつの間持っていたんだよ

母「じゃあ、お母さん行って来るね」

翔「あゝ（いつてらっしやい）」

先ほどと同じように手を振る

・・・さて、なにをするか

考え中

・・・能力の確認でもしてみるか、さて俺の能力は改造と

風力使用エアロシューターだよな

風力使用はともかく改造を試してみるか

どこかに手頃なものないかな

探索中

おお、あったあった

翔は積み木を手に入れた

さて、これをどうするか・・・まずは形を変えてみるか

・・・ってどうやればいいかわからん

・・・まずはイメージしてみるか

翔は四角の積み木を掴み、目を閉じて丸い形を頭に思い浮かべた

・・・

・・・

・

手の中の感触が変わったことを感じて目を開けてみれば四角の積み

木が丸い形になっていた

おお！まじで変わってる、離れてても使えるのか？

翔は丸い積み木から数歩離れてさっきと同じように四角の形を頭に  
思い浮かべた

・

・

・

目を開けてみれば

あれ？

丸い形のままで四角になっではなっていないかった

なんでだ？・・・まさかと思うが直接接触していないと発動しないのか  
そう思いもう一度丸い積み木を掴み四角の形を思い浮かべた  
すると、丸い形が四角になっている

変わってるな、ん？体の一部ならどこでもいいのか試してみるか

足・・・成功

膝・・・成功

背中・・・成功

腹・・・成功

頭・・・成功

肩・・・成功

よし。全部成功だな

それより、疲れた。この力を使うと体力を使うみたいだな。それと  
もまだ体ができていないからか？

まあいい、それより寝るか

z z z , z z z z

転生、そして新たな日常（後書き）

誤字、脱字、感想があったらお願いします  
では〜では〜

当麻との出会い（前書き）

では第5話のはじめ〜はじまり〜

## 当麻との出会い

### 4年後

あれから4年が経った

俺もようやく5歳だぜ

さて、この5年間にながあつたか説明しよう

・父さんに剣術を教え込まれた。風間流剣術らしい。まあ、前世で剣道をやっていたから覚えるのにそれほど苦労はしなかったと言っておこう

・修行：山に1ヶ月放り込まれた 悪ければ死ぬわ！「どこの世界に4歳の子供を山に放置する親がいるか！！」と父さんに言えば「ここにいる」と開き直りやがった・・・いつかぶっ倒してやる

・能力の練習：裸足で地面に触れて地面を変形させてみたらある程度の形になった、ちゃんと元には戻したぞ。靴を履いてやってみたら一応出来たが裸足のときより体力を使うことがわかった。離れたところにある石の形を変えてみようとしたができなかった。自分との距離を2cmにしてみても使ったら形を変えることが出来たが疲れる。材質変換はまだ試していない

・父さんから筋トレメニューを出された

以下の通り

腕立て25回

スクワット30回

早朝ランニング3キロ

腹筋30回

背筋40回

素振り50回

という感じだ。3歳にやらす練習量じゃねえだろ!? しかも今じゃ練習量がランニングを除いた練習が3桁を超えてるぜ、ちくしょう!ランニングも今じゃ5キロの重りつけて15キロだよ!よく俺の体が壊れなかったな(汗  
まあ、そのおかげ肉体的にも精神的にも強くなったけどな

・そして一番驚いたことが我が母、風間詩穂は上条詩菜<sup>かみしょうしいな</sup>、そう当麻の母親の妹でした!?ということは俺と当麻は従兄弟だよ!?おい、ゼウス!これはお前の仕業か!静かに暮らそうとしていた俺の計画がぶち壊しだぜ、ちくしょう!  
おかげで俺の心は壊れた心だよ!

・上条家に訪問:当麻少年と会ったがなにもなかった...あれえ(おかしいなと思いつつ父さんに「外で遊んで来なさい」と言われたので当麻少年と一緒に公園に行くことにした。そこから不幸の連続だったぜ

・公園に行く途中で上から鉢植えが落ちてくる...蹴りで破壊。  
そのときの当麻少年の呆然とした顔は忘れられない。

・暴走した車がこっちに突っ込んできたので当麻少年を抱えて走って回避

・工事現場で鉄骨を吊り上げてたロープが俺たちの真上で切れた...  
・時間が足りなかったから当麻少年を投げた。あとは自力で回避、工事現場のおっさんたちと当麻少年は俺が出てくると人外を見るような目で見ていた。軽く傷ついたorz

ようやく公園に辿りついた。なんで、公園に行くだけでここまで疲れるんだよ!さすがトラブルメイカー!  
公園に辿りついた瞬間、当麻少年が「俺に関わらないほうがいいぜ、

さっきのでわかつただろ」と言ってきた。

あれ？当麻少年ってこんな性格だっけ？ともかく今の言葉、めっちやむかついた

だから当麻少年の頭を思いっきり殴ってやった。

ゴンツ

当麻少年「つ痛くなにすんだよ！いきなり！」

翔「はっ、なんでかなんて決まってる、むかついたからだよ！」

当麻少年「むかついたっておまえ（呆れ）」

翔「大体よー、そんなことで悩んでじゃねえよ」

当麻少年「なっ、ギリツ お前になにがわかんだよ！もう俺のせいで周りが傷つくのは嫌なんだよ！」

おれのせいだと？

翔「俺のせいってお前なにかやったのか？」

当麻少年「は？」

翔「だからよ、お前がなにかやったのかよ。どうせいつつも事件が起きる近くにお前がいるだけだろ。それを周りの奴等がお前のせいだっけ言ってるだけだろ？」

どうせ、ストレスの捌け口が欲しかっただけの屑どもだろ、そいつら。子供にあたるとかまじでねえわ

当麻少年「・・・たしかにそうだけど」

翔「だったらそんなの無視しちまえよ」

当麻少年「なっ！？」

翔「だっけそうだろ。ただぎゃーぎゃー騒いでるだけの奴なんか相手したって意味がない。もし、それがお前の運命だっけいうならそんなのブチ壊しちまえ」

当麻少年「ブチ壊せっておまえ（呆れ）」

翔「まあ、ようは前向きに生きろってことだ」

当麻少年「はあー、お前は強いな」

翔「まあな、地獄を生き抜いた男だからな」  
胸を張って言う

当麻少年「くく、はははなんだよそれ」

翔「はは、ようやく笑ったなお前」

当麻少年「え？」

翔「だつてお前今まで暗い顔してたからな」

当麻少年「そうか、心配かけてすまなかつたな」

当麻は笑いながら言った

翔「別に良いつて、なんせ友達だからな」

当麻少年「友達か、よろしくな翔」

翔「おう、こちらこそよろしくな当麻」

とお互い握手した。

こんな感じで上条家訪問は終わった

おまけ

修行内容を当麻少年に教えたら

当麻少年「よく、生きてたよなお前（汗）」

軽く同情された。軽く涙が出そうになった。

## 当麻との出会い（後書き）

このあとは炎哉のも出す予定です。  
ではでは〜

転生、熱血家族（前書き）

第五話のはじまり〜はじまり〜  
間違ったところがあったので修正しました〜

## 転生、熱血家族

SIDE 炎哉

ん？ここは、どこかの部屋にいるのはたしかだな

つてことはここは俺の部屋か、無事に転生できたみたいだな

時間を確認してみればAM7:00

まだ早いな、ともかく起きるか

それにしても体が軽いな、本当に身体強化されてるみてえだな

よっしゃ〜！

とガッツポーズを取る

まあ、確認のためにもなにか力を計るもないかな

探索中

おお、ちようどいいところに鉛筆があるじゃねえか

炎哉は鉛筆を手に入れた

さて、折れるか試してみるか。まあ、折れるわけねえがバキッ・・・

え

炎哉「う〜〜〜！！！（なんだとー！ー！ー！！！！）」

おい〜〜〜！！いくらなんでも強化しすぎだろ！？1歳児の時点で軽

く鉛筆折る程度の力あるなんておかしいだろ！？

「どうした、炎哉！」

ボタンツと誰かが扉を開けた

そちらを見てみれば熊並の体格をしたおっさんがいた。

炎哉「あう〜！？（誰だよ！？）」

「どうした、なにがあ・・・炎哉一つ聞くがそれはお前が折ったの

か？」

とおっさんは俺が折った鉛筆を指差した

一応、頷く

「そうか！！！！そうか！！！！お前が折ったのか！！！！さすがワシの

息子だ！！！！！！！！」

豪快に笑いながら言った。

「なんだ、いきなり笑いやがって！？って今、息子って言ったこのおっさん?!これが俺の親父かよ!？」

「朝からうるさいわよ!!!」

と赤い髪の人 came

「なにを言うかこれが笑わずにいられるか!!!」

「まったく、でなにがあつたんだい？」

「おお、そうじゃった嬉しさのあまり説明するのを忘れておつたわ!」

とおっさ・・・親父は俺が折つた鉛筆を俺から取つて赤い髪の人に見せた

「見る、これを炎哉が折つたんだ。まだ1歳なのに既にこれほどの力があるんだ!将来有望じゃないか!」

「それはすごいじゃないかい!?さすが私たちの息子だね!」

つてことはこの人が俺の母親かよ!?母親っていうより姉御だろ!?

親父「そこでだ、さっそく修行を始めようと思うのだがどう思う?」

母親「いや、まだやめたほうがいいと思うわよ。まだ体も出来ていな

いしせめてあと4年は待ちなさい」

親父「そうじゃな、では5歳になってから修行を始めるとするか」

母親「そうしな、私はまだ眠いから寝かせてもらつわ、炎哉もまだ

早出し寝てなさい」

と言つて母親は去つていった。

父親「ワシは起きてしまつたし運動でもしてくるかの、炎哉よ、まだ寝てていいぞ」

俺の頭を撫でたあと去つていった。ゴツゴツとしていてなぜか安心できた。

嵐が去つた・・・俺の家つて台風一家なのか?

なんにしても寝るか

zzz、zzz

4年後

あつという間に5歳になった俺、ようやく本格的な修行ができるぜ！  
今までの修行は主に筋トレしかやっていないからな

この体だといくら続けても疲れねえから暇でしようがねえ

親父「炎哉、起き取るか！」

炎哉「ああ、起きてるよ親父」

親父「今日から修行に入るが覚悟は出来とるか」

炎哉「んなもんとつくに出来てるよ」

母親「あんたたちご飯が出来たから速く来な！」

下から母親の声が聞こえた

父親「炎哉、先に降りてるぞ」

炎哉「わかった」

さっさと着替えるか・・・着替え完了

炎哉「着替えたし降りるか」

1階に降りれば既に飯を食ってる親父たちがいた

炎哉「俺が来るまで待っていてくれよ（汗）」

母親「おはよう、炎哉、あんたも食べな」

炎哉「おはよう、母さん」

母親に挨拶したあと自分の席に着いた

自分の前に置かれたごはんは大盛りだ

ガツガツガツガツガツガツ

我が家の飯は毎日が戦争だ

俺も結構食うのだが親父と母親がすごい

皿にあつた山盛りのおかずが次々と消えてゆく

父親、母親、炎哉「・・・ごちそうさま」「」

父親「ふうー、炎哉よ、1時間後に修行を始めるぞ」

炎哉「修行ってなにをやるんだよ？」

父親「そうだな、まずは山に籠もって滝打ち、今までの筋トレを1

0倍以上、ワシとの組み手をやってもらうつもりだ」

炎哉「・・・親父、俺を殺す気か？」

親父の腕力は本気でいけば岩ぐらい破壊できるからな、いくら身体

能力が強化されててもきついだろ（汗

父親「そんなもの気合で乗り越える」

母親「あきらめな炎哉、それに自分からやりたいって言ったんだ、男なら最後までやり遂げな！」

そうだったな、アテナとの約束もあるしな、次こそ勝ってやる

炎哉「そうだな、それじゃ行くぞ親父」

父親「それでこそワシらの息子じゃ！それでは母さん行って来る」

炎哉「いつてきます、母さん」

母親「行っておいで、くたばんじやないよ」

返事の変わりに拳を上に向けた

炎哉の地獄の修行が始まる

## 転生、熱血家族（後書き）

次話は透の話を出そうと思ったけどやめました。

けっっっしてメンドクサイワケデハナイデヨ、エエソウデストモ

では次話は学園都市の話にします。

ではでは

学園都市での日常（前書き）

では第7話のはじまりはじまり〜

## 学園都市での日常

SIDE翔

翔「つたく、当麻のやつどこに行っただ？」

今、俺がどこにいるか説明しよう

みなさんご存知の学園都市の中だ、正確に言えば第七学区の地下街にいる。ついでに日にちは7月16日である。

そこで、今、当麻を探してんだがまったく見つからん。

なんでこんなところにいるかと言えば当麻のおごりで飯を食おう思っただんだがその本人が来ないから飯が食えねえ

あの野郎「じゃんけんに負けた方が明日の晩飯おごりな」って自身満々に言っただけだからな。その右手がある限り一生に俺には勝てねえのによ（笑

はあ、それよりどうするかここに居てもダルいし帰ブルブルと携帯が鳴った

翔「誰だよ？・・・当麻か」

画面を見れば上条当麻の文字があった。

翔「もしもし、おい当麻てめえどこにいやがるんだ？」

当麻「もしもし、翔か！！すまないが今日の約束また今度にしてくれないか！！！」

翔「ああ？なんでだよ？まさかと思うがまた厄介事に首をつっこんだのかよ！！！」

当麻「そうだよ、ちくしょう！！上条さんは絶賛逃亡中です！！」  
まったく、またかよ。これで四桁は超えたかもな、あいつがゴタゴタに巻き込まれるの。いや今回は自分から首突っ込んだのかはあ、しかたがねえ

翔「おい、当麻」

当麻「なんだよ！！！！」

翔「今どこにいるか場所と人数を教える」

当麻「え〜と人数は大体10ぐらい!!!場所は公園の近くだよ!!!」  
翔「5分ぐらいでそっちに行く」

当麻「わかった!!!」

ブツツと電話が切れた。

んじゃ、行きますか

今まで鍛えたこの体なら走っても充分間に合うな、問題は人という名の障害物が多すぎるんだよなここ  
ともかく、急ぐか!

翔は早足で人ごみ掻き分けて外に出た

翔「ようやく、外に出れたぜ。さて能力でパッパッと行くか」

翔は足元のに空気の塊を作って、それを爆発させ、その勢いで空を飛んだ。その光景はさながら人間ロケット!

落下しないように先ほどと同じように空気の塊を作った

翔「さて、公園はあつちか」

翔は体を公園の方に向けて足の裏にある空気の塊を爆発させて目的地に飛んでいった。

S I D E 当麻

当麻「不幸だあー!!!」

「待てやガキ!!!」

後ろを見れば10人ぐらいの不良たちが追いかけて来る。

なぜ、追いかけてるのかと言うと、それを振り返ること約10分前

10分前

当麻「や、やばい。あと2分しかねえ」

当麻は全力で走っていた。

はあー最悪だ。昨日あんなこと言わなきゃよかったぜ

昨日

当麻「なあ、翔。明日の晩飯賭けてじゃんけんしようぜ」

翔『ああ？なんだよいきなり？だいたい運がゼロのお前が勝てるわけねえだろ』

とダルそうに翔が答える

当麻『そんなこと言えんのも今のうちだ！つーことでじゃんけんに負けた方が明日の晩飯おごりな』

翔『はいはい（よっしや、儲けだ！）』

当麻、翔『じゃんけん』』

当麻・・・ゲー

翔・・・パー

翔『よっし、俺の勝ちだ、つーことで明日は地下街で食いに行くぞ！』

当麻『わかったorz』

ということがあった

回想終了

当麻『はあはあ、さすがに疲れるな』

一度止まり呼吸を整える

当麻『ふうー、よし多少遅れるけど大丈夫だ「触るなっ！」「ん？」と騒がしいほうを見てみれば

ナンパ男A『いつてーな、こっちが下手出てれば調子に乗りやがって！』

ナンパ男B『おいおい、嬢ちゃんおとなしくしたほうが身のためだぜ。』

少女『私は忙しいのよ、そこをどきなさい！』

その少女の特徴は金髪、ツインテール（赤いリボンで縛っている）、青い目

ナンパ男B『へえ〜まだそんな態度を取るんだ？』

とナンパ男Bが少女の腕を掴んだ

少女「は、離しなさい！」

おいおい、やばいじゃねえかあの子。はあく、放っておくのもあと味わるいからな

当麻「おい、お前らその子嫌がつてんだろ離したらどうだ？」

ナンパ男A「なんだよてめえは？」

当麻「別に、たまたま通りかかったただだよ」

ナンパ男A「ああん？部外者が口だしてじゃね「グリツ、いって」  
どうし・・・あ、待ちやがれ！」

少女は当麻がナンパ男Aと話している間にナンパ男Bの足を踏んで腕を振りほどいて

少女「助けてくれてありがとね」

と言いなから逃げた

ナンパ男A「てめえどうしてくれんだよ！」

当麻「お前たちが悪いんだろうが」

まだ二人なら勝てるかもな・・・あれもう一人は？

「よう、竜也どうしたんだ？」

はあ！？

ナンパ男Aの後ろにはさつきまでいたBと他に8人ぐらいの怖いお兄さんたちがいる

ヤバくないか？（汗

ナンパ男B「すまねえな竜也女逃がして、そのかわり仲間呼んだからそいつボコろうぜ！」

ナンパ男A「ナイスだ。さあ、覚悟しやが・・・あれ？」

ナンパ男Aが当麻のほうを振り向くがそこに当麻はいなかった。

不良C「おい、あそこにいるぞ！」

不良が指差すさきには当麻が走っていた。

現在

ナンパ男A「まちやがれえー！」

当麻「誰が待つか！待ったらボコられるだけじゃねえかよ！」  
だけど、このままだと捕まるな・・・その前に翔に行けないこと連絡しとくか

ブルルツブルルツ・ガチャ

翔「もしもし、おい当麻でめえどこにいやがるんだ？」

ヤバい翔の奴怒ってる（汗

当麻「もしもし、翔か！！すまないが今日の約束また今度にしてくれないか！！！」

翔「ああ？なんでだよ？まさかと思うがまた厄介事に首をつっこんだのかよ！！」

当麻「そうだよ、ちくしょう！！上条さんは絶賛逃亡中です！！」  
ちくしょう、まだ追いかけてくるよ。しつけえなあ

翔「おい、当麻」

当麻「なんだよ！！！」

翔「今どこにいるか場所と人数を教えろ」  
なんだ、いきなり？ともかく教えとくか

当麻「え〜と人数は大体10ぐらい！！場所は公園の近くだよ！！」  
翔「5分ぐらいでそっちに行く」

当麻「わかった！！」

よっしゃー助かった！こうなったら公園まで走りきるか！

### 当麻逃走中

当麻「ぜーぜー、ようやく着いた」

当麻は公園の広場で足を止めた。

周りを不良に囲まれた

ナンパ男A「はあはあ、ようやく諦めたか。ここまで走らせやがって覚悟しろよ！」

ナンパ男B「ぜーぜー、さすがに疲れた」

不良C「はあはあ、まあここまで走らせてくれたんだ。お礼はたっ

ぷりとしてやる」

ナンパ男A「幸い夜だから誰もいないしな。いくらお前が叫ぼうが誰も助けにはこ」どけええええー！」なん、ぐべっ」  
ボキッ

ナンパ男Aは何かに蹴り飛ばされ地面を何度かバウンドしながら転がった

不良たち「た、竜也！？」

当麻「ん？まさか（汗）」

「よう、当麻無事か！」

砂埃の中から翔が出てきた。

当麻「ああ、助かったよ翔。それより何か折れる音がしなかったか？」

めちやくちや不吉な音が聞こえたぞ（汗）

翔「気のせいだ！」

当麻「いや、たしかに「気のせいだ！」そうか」

不良D「おい、てめえは誰だよ！」

体格のデカイの不良が尋ねてきた

翔「誰ってこいつの友達だよ」

と当麻を指差しながら答えた。

当麻「いや、そういう意味じゃないと思うぞ（汗）」

翔「そうか？まあいいや。それで、いい加減諦めてくれねえか？こつちは腹が空いてて早くなにか食べたいんだよ」

不良D「なめやがって！」

不良Dは左手から炎をだした。

不良「へへっ、俺はレベル3の発火能力だ！」  
パイロキネシス

翔「だからどうした？」

ブチッ

不良D「なめてんじゃねぞ！」

不良Dは翔に向かって手の平の炎を投げつけた

翔「はあ、当麻頼んだ」

翔は当麻の横に移動した。

当麻「い、いきなりどくんじゃねえよ！」

思わず”右手”を出した。炎が”右手”に触れた瞬間、炎が消えた。あ、あぶねえ！

不良D「なっ、なん「教えてやる道理はねえよ！」グフツ!？」

翔は移動したときと同じ手段で不良Dの懐に入り込み勢いをつけたまま鳩尾を殴った。

不良Dは腹を押さえて倒れた。

当麻「おいおい、あいつ白目向いてんぞ(汗)」

当麻が指差す先には先ほど殴った男が白目を向いて痙攣していた。

翔「・・・あ、やりすぎた(汗)」

前もそれで何人か病院行きにしたよな(汗)

不良E「おい、大丈夫か!？」

と不良Eが不良Dに声を掛けるがまったく反応がない。

翔「あゝ、まだやる?」

頭を掻きながら尋ねる

不良E「お前みたいな化け物とやってられるかよ!」

不良C「おい、お前ら逃げるぞ!」

不良たちは倒れた奴を放置して逃げていった。

翔「おゝいこいつら忘れてるぞ・・・って聞こえてないか」

当麻「どうすんだよこいつら?」

翔「放置の方向でよくないか?それよりいい加減、飯に行きたいんだが」

当麻「あ・・・そういえばそうだったな。近くのファミレスでいいよな?」

翔「ああ、それでいいよ。なんにしるはやく食いたい。お前お金持ってきてるよな?」

当麻「ああ、一応2000円ほど持ってきてるよ」

翔「じゃあ、さっさと行きますか」

当麻「そうだな」

と二人は公園を後にした。

ファミレス到着

当麻「はあ、ようやくついた」

翔「なんでもいいから、食おうぜ。もう限界だ」

ぐでーとテーブルの上でだらける翔

「ご注文はお決まりになりましたか？」

とウエイトレスの子が尋ねてくる

翔「俺はオムライスとカルボナーラで」

当麻「二つも頼むのかよ！」

翔「いいじゃん、それぐらい食わねえと死ぬる。それより注文言っ

てやれよ」

当麻「あ、俺は八宝菜のあんかけ卵チャーハンで」

「以上でご注文はよろしいでしょうか？」

当麻「はい」

ウエイトレスの子は一礼して去っていった

当麻「不幸だー！今日はついてない事ばかりじゃねえか！」

翔「今日はじゃなくて今日もだろ？」

当麻「うるせえー！」

言われなくてもわかってるよ！ちくしょう！

SIDE翔

当麻「不幸だー！今日はついてない事ばかりじゃねえか！」

いつも通りじゃねえかよ（呆れ

翔「今日はじゃなくて今日もだろ？」

当麻「うるせえー！」

さっきの俺と同じようにテーブルの上で、ぐでーっとなっている。

いい加減現実を受け入れるよな。お前は不幸の女神に微笑まれている

んだからよ

翔「はあ、それより当麻そろそろ夏休みだが単位は大丈夫なのか

？」

当麻「ん、なにがだよ？」

顔を上げて尋ねてくる

翔「だから、記録術かいほうの単位だよ。このまま行くとお前留年じゃねえのか？」

当麻「あゝ、たぶん大丈夫じゃねえか」

翔「その自身はどつから来るんだか。そういえばお前なんであいつらに追いかけられてたんだよ？」

当麻「ああ、実はよ」

### 当麻説明中

当麻「ということがあったんだよ。……って大丈夫か翔？」

翔の顔が盛大にひきつっていた

翔「と、当麻そいつ以外に他にいたか？たとえば赤い髪の女の子とか」

当麻「いや、いなかったけど、なんだお前あの子と知り合いなのかな？」

翔「はあゝ、まあな。当麻、お前俺の能力知ってるだろ」

当麻には前々から俺の能力を教える

当麻「えーと、風力使用エアロシキョウと改造カスタマイズだよな。せこいよなお前能力が二つもあるなんてよ。しかもレベル4大能力者だろ。俺なんてレベル0無能力者だぜ」

翔「そういうお前は能力者殺しだろうが。まあ、この話はあとだと。それで俺はよく能力を使って空中散歩してるんだけどな」

当麻「ああ、確かに。ときどきお前がいなくてよかったな」

翔「それで散歩中に路地裏に連れて行かれる女の子を見かけてな追いかけてみれば」

当麻「それがあの子っつーことか」

翔「そうだよ、そこから助けたまでは良かったんだが」

当麻「だが？」

翔「その子が気絶しちまってな。常盤台の制服を着てたから寮まで

送ってやったんだよ」

当麻「だったら別にいいじゃねえかよ」

翔「問題はそこからだよ。たぶんその子の同室の子なんだろうけどその子が門の前で仁王立ちしていてな。俺が地面に降りた瞬間、『そいつを離しやがれ変態野郎おー！』って言いながらとび蹴りしてきたんだよ」

当麻「はあ！？なんでだよ！」

翔「俺が誘拐したと思ったんだろうな・・・はあ〜」

翔のまわりに暗いオーラが見える。

当麻「だけど、翔なら軽くあしらえるだろ」

翔「ああ、一応転ばして気絶させた」

当麻「事態が悪化してるじゃねえか!？」

翔「しかもあの女が叫んだせいで寮監が来てな、しかもタイミング悪く俺がちよとど気絶させたところだよ。そこからが地獄だったよ。蹴りとパンチの応酬だ。しかも俺はその子を背負ってるから蹴りしか使えなかったよ」

当麻「だったら、その子を降ろせば良かっただろうが」

翔「それが無理なんだよ。俺のワイシャツを思いつきり掴んでて離さなかったんだよ。しょうがないからワイシャツを急いで脱いで逃げた、おかげで帰りが寒かったよ」

当麻「それは・・・ご愁傷様」

翔「唯一良かったのは暗がりて姿を見られてないことだろうな」

当麻「見られてたら今頃お前はロリコンのレッテルを貼られてるぞ」

翔「ははは、まあ将来ロリコンのレッテルを貼られる奴は知ってるけどな」

当麻「誰だよそれ？」

おまえだよ、おまえ

翔「まあ、気にすんな」

当麻「なんだよ、おしえ」お待たせいたしました」

先ほどのウェイトレスが料理を運んできた。

当麻「……………」

当麻が教えるところらを見てくるが無視だ無視  
さて、食うか

翔「もぐもぐ……そのうちわかるよ」

当麻「もぐもぐ……わかったよ」

食ってる間は無言

・  
・

完食

翔「ふうー、食った食った」

当麻「外でゆつくり食ったのは久しぶりだな」

翔「たしかにな、じゃあ帰るぞ」

そう言つて翔は席を立った。それに続いて当麻も席を立った。

「お会計2390円になります」

当麻「少し超えたな、翔！390円持ってるか」

翔「ほらよ」

翔は500円を指で弾いて渡した。

当麻「ありがとよ、じゃあ2500円で」

「110円のお返しになります。」

「またのお越しをお待ちしております。」

翔と当麻は店を出た。

帰宅中

翔「おやすみいー、当麻」

当麻「おう、おやすみ」

手を上げながら言った。

同時に扉を閉めた。

翔「ただいま、まあ誰も居ないけどな」

カチツと電気をつける

翔の部屋はゴミが一つもなく、ソファやプラズマテレビがあり他の部屋と比べれば豪華である。

翔「原作まであと4日か、19日は電化製品が全滅するんだよな。はあー最悪だ」

ベッドに寝転がりながら言う。

翔「明日は当麻がビリビリに追いかけられるのか、問題は明後日だな」

ブルツプルツと携帯がなる。

翔「こんな遅くに誰だよ、はいもしもし」

『もしもし、翔まだおきてる？』

翔「なんだ透かよ、めずらしいなお前がこんな時間まで起きてるなんて」

透とは学校は違うが偶然スーパーの中で会った。顔が長門に似ているのには驚いたな。

まあ、その話は今度な

透「うん、ちよつとね。明後日は虚空爆破事件が起きるからさ、翔はどうするのかなって思っ

翔「一応、介入する予定だよ。それより、くくっ」

透「な、なんで笑うの!？」

翔「な〜にせいせいお前の愛しの初春を守ってやれよ」

透「なっ!?!う、うるさいノノ」

ブツツと電話が切れた

翔「くくっ、からかい過ぎたか。」

そこで一度伸びをする。

翔「透は初春が好きで炎哉は佐天か、俺は・・・わからないな」

翔「俺はキャラクターより世界観が好きだったしな。それより当麻の記憶喪失はどうにかならないかな、あいつとは10年ぐらいの付き合いだしな」

電子時計を見るとAM2:00と表示されていた。

翔「やべっ、もう寝るか。風呂は朝でいいや」  
翔は電気を消して寝た。

## 学園都市での日常（後書き）

そろそろ春休みが終わる鬱だorz  
少し更新が遅れるかもしれませんが。  
ではでは

## 風紀委員と日常（前書き）

更新が遅くなってすいませんでしたorz

最近時間が足りない。誰か1日が1時間になる別荘をください！

まあ、ないけど・・・そんなことより第8話のはじまりはじまり〜

## 風紀委員と日常

SIDE透

透「その人たち止まりなさい！」

僕は今、通報にあつた強姦未遂の人たちを追いかけている

「誰が待つかがキが！」

と言つて路地裏の中に入つて行つた。

ムカツ これでも僕は高校生だよ！

しばらく追いかけていると行き止まりのほうに曲がつていった。

よしつ、ここで捕まえなきゃ

透「ジャッジメント風紀委員です。これ以上は逃げれませんおとなしく捕まつてく  
ださい！」

風紀委員の腕章を見せながら言つた。

強姦魔A「ははは！ガキがなに言つてやがんだよ！他の風紀委員供ジャッジメント  
が来ないようにわざとここまで逃げたんだよ！」

強姦魔B「それにしても嬢ちゃんなかなかにかわいい顔してんじや  
ねえか」

と舌なめずりをしながら言つ

他の2人の男も透をいやらしい目で見ている。

・・・今この人僕を嬢ちゃんつて言つたよね。僕を女の子として見  
たんだよね。だけど最後に一回だけチャンスあげる

透「これが最後の忠告です。おとなしく捕まつてください」

強姦魔C「くひひ、お嬢ちゃんこそ自分の状況を見たらどうだい？」

確かに3対1では一般的に見れば圧倒的に不利だよね。だけど僕を  
甘く見ないでほしいな

透「それでは武力行使でいかせていただきます」

透が言つた瞬間、周囲の温度が急激に下がった

強姦魔A「さ、さぶつ」

強姦魔たちは身を震わせた。

透「僕の能力はね空気や物質の温度を下げる事ができるんですよ。だからこんなことをされれば辛いですよね（黒笑）」

透は強姦魔たちに目掛けて制服の裏に隠していたペットボトルの水をかけた

強姦魔 B「うおっ、つめてえ！？ガキがこんなことして、ただで済むと思うなよ！っうお！？」

と言いいながら透に目掛けて走ったが突然すべりバランスを取ろうとしてこけて頭を打った。周りの地面が凍っていた。

透「さつき僕の能力を説明してあげたでしょう。地面に掛かった水を凍らしてみただ」

と説明すると強姦魔たちの顔が青褪めた。

透「存分にこの極寒の世界を楽しんでよ」

と強姦魔たちに笑顔でいった。強姦魔たちには悪魔の笑みに見えた強姦魔 C「ひいっ」

強姦魔 A「た、頼む。おとなしく捕まるからもうやめてくれ！」

強姦魔たちを見ると唇が紫色になっていて歯をガチガチとさせていた。

透「いいですよ、手錠をかけますのでそこでおとなしくしててください」

透は男たちに近づき A と C に手錠をかけた。

透「さつきから反応がないけど気絶してるのかな？」

透は強姦魔 B に近づいて、意識を確認しようとした。その瞬間はいきなり強姦魔 B は起き上がり透の押し倒し腕を押さえつけた。

強姦魔 B「けけ、所詮はガキだな。詰めが甘めえよ。さて、どうしてくれようか」

舌なめずりをしながら下卑た笑いをもらした。

強姦魔 A「おい、もうやめとけ！」

強姦魔 A がやめるように叫んだが

強姦魔 B「ばーか！こんなガキにやられやがってなさけねえ奴だなお前ら」

透「もう許しません」

冷徹な瞳で強姦魔Bを睨んだ。

強姦魔B「けけけ、この状況でてめえになにができるってんだよ」

強姦魔Bはもう勝った気でいる。

透「レベル4をなめないでください」  
大能力者

周辺の温度が更に下がり男の顔が青くなり歯をガチガチと鳴らし始めた。その隙に強姦魔Bの手を振りほどきもう一つのペットボトルを出して中身を全て強姦魔Bに掛けた。その瞬間強姦魔Bの体が凍りつき始めた

透「まだ抵抗をしますか？」

強姦魔B「た、たすけて、・・・」

言い終える前に強姦魔Bは意識を失った。透は強姦魔Bの体を自分の上から退かして手錠を掛けた。

他の強姦魔たちはその一部始終を見て更に顔が青くなった。

透「はあー、あんまりやりたくなかったんだけどな。」

「時間が掛かり過ぎですわよ。氷村さん」

「それより、寒いわねここ」

2人の少女が透の前に現れた。

透「あ、白井さんに御坂さん」

美琴「おはよう、透くん」

この人は御坂美琴さんみさかみこと学園都市でも7人しかいないレベル5の一人です。  
超能力者

透「おはようございます、御坂さん」

黒子「それで氷村さん、なぜこんなに時間がかかったんですの？」

透「え、え〜とですな実は」

### 説明中

透「ということなんです」

黒子「はあー、まったく甘いですわね」  
ジャックシメント

この人は白井黒子さんしほぐろくみ僕と同じ風紀委員でレベル4の空間移動能力  
大能力者 テレポート

を持っている人です。

透「できれば争いたくないんですよ。平和で解決するならそれに越したことはないですよ」

黒子「それが甘いというのですわ」

美琴「まあ、そのへんにしときなさいよ黒子。それにそれが透くんのいいところじゃない。」

黒子「お姉さままで、はあー今日はこのへんにしときますわ。回収は他の人たちを呼びましたので私たちは行きますわ」

「今日は」ってまたいつか説教されるのかな？うゝ嫌だなー

美琴「そうね、行くわよ黒子。じゃあね透くん」

黒子「では、またどこかでお会いしましょう氷村さん」

透「うん、じゃあね白井さん、御坂さん」

と手を振ると2人はその場から消えた。白井さんの能力でも使ったんだろつ。

「聞こえますか？透さん」

耳に掛けていたマイク越しに声が聞こえた。

この声は初春さんかな？

透「聞こえてますよ初春さん、通報にあつた人は捕まえました。」

初春「はい、白井さんから聞いてます。そちらに他の風紀委員を向かわせましたので透さんは犯人たちを一箇所に集めてください。」

透「うん、わかったよ。じゃあね初春さん」

初春「け、怪我がないようで安心しました／＼／＼それでは透さん／＼」

そこで通信が切れた

透「それは反則だよ、初春さん／＼」

顔を真っ赤にさせた。

透「と、とりあえず落ち着こう。」

すぐ深呼吸をした。

透「すーはーすーはー。よし、とにかくこの人たちを一箇所に集め「ここだな！」「ん？」

ドタドタと足音が聞こえる

ジャツジメント  
風紀委員 A 「風紀委員です！透さんお疲れ様です。」

ジャツジメント  
風紀委員 B 「あとは、私たちに任してください。透さんは休んでいてください」

透 「うん、ありがとうね」

満面の笑顔で言う。

ジャツジメント  
風紀委員一同 「……（か、かわいい！／＼／＼）」「……」

ジャツジメント  
風紀委員のマスクトになって透であった。

なんでみんな顔が赤いのかな？まあいいかな、それよりお言葉に甘えて帰ろうかな

透 「じゃあねー」

手を振りながら帰った。

ジャツジメント  
SIDE 風紀委員

ジャツジメント  
風紀委員たちも透が見えなくなるまで笑顔で手を振った。

透が消えると風紀委員たちの顔が真剣な表情になった。

ジャツジメント  
風紀委員 A 「さて、おとなしくついて来い」

ジャツジメント  
強姦魔 A と C を立たせた

ジャツジメント  
風紀委員 B 「ねえ、この氷付けになっている人どうする？」

ジャツジメント  
風紀委員 C 「俺が運ぶよ。」

よつこらせと言いながら強姦魔 B を担いだ。

ジャツジメント  
風紀委員 D 「それにしてもこいつもバカやな」

氷付けになっている強姦魔 B を見ながら言った。

ジャツジメント  
風紀委員 E 「そうですね、透さんが人を凍らすなんて滅多にしませ

んし」

その言葉に風紀委員たちは頷いた。

ジャツジメント  
風紀委員 A 「まあ、無駄口もこれぐらいにして、そろそろ行くぞ」

ジャツジメント  
風紀委員 A が先頭を歩いて、その後ろに強姦魔 A と C を歩かせた。

さらにその後ろに他の風紀委員を歩き挟むような形で歩いた。

SIDE 透

裏路地を出て信号を待っていた。

そういえば今日って身体検査だっけ？

「・・・お・・・る」

はあ、いくら計測したって僕のレベルは4のままなのに

「ねえ・・・い・・・て・・・る」

それに魔術もまだルーン魔術しかわからないんだよね。アテナも天草式の魔術の知識を覚えてくれればいいのに

「無視するな、バカ透！！！」

透「うわっ！？」

声をするほうを振り向けば幼馴染の霧澤秋葉きりさわあきは元気が取り柄の女の子です。ついでに能力はレベル2の透視能力クリアポイアンスです。

秋葉「さつきから私を無視して楽しいのかー！！！」

両腕をあげながら叫ぶ

透「え、えつとただ少し考え事してて気付かなかっただけだよ」

秋葉「ふ〜ん幼馴染の私を無視するほどの考えごとってどんなの？」

透「え！あ〜その〜・・・」

・・・どうやって答えよう。さすがに魔術のことを言うわけにはいかないし

秋葉「・・・で、なに？」

ジーとこちらを睨んでいる。

正直怖いです。アキちゃんお願いだから睨まないで（泣

透「あ！時間がないから学校に行かなきゃ！！！」

こつこつときは逃げるが勝ち！

秋葉「あ、こら逃げるな！」

鬼ごっこが開始された

学校まで走行中

やっと学校に着いたよ〜！

透「ハアハアつかれた〜」

秋葉「ハアハア透ってインドア派のくせにハアハアなんでそんなハアハア体力あるのよ」

透「これでも風紀委員ジャッジメントやつてるからね。そういうアキちゃんこそ体力つけたらどう？」

秋葉「ハアハア呼吸整えるの速過ぎ。ふうー私にはね必要ないのよ。それに太りにくい体質だから運動する必要もないしね」

確かにアキちゃんって運動はあまりしてないのに痩せてるよね

透「それって体重に悩んでいる女性に喧嘩売っていることになるよ  
(汗)」

秋葉「良いわよ別に、そうになったら透が守ってくれるでしょ？」

・・・他力本願なんだ

透「さすがに僕も女の人に手は出せないかな」

秋葉「えゝそこは男らしく、俺が守ってやる！って言ったらどうなのよ」

頬を膨らましながら言う。

透「う、う〜んできるだけ善処するよ。」

秋葉「まあ、今はそれでいいや。じゃあね透」

とアキちゃんは隣の教室に向かった。

透「僕も教室に入ろう」

教室に入れば

「おはようさん透」

「あ、おはよう透くん」

「よう、透。また秋葉嬢と一緒に登校か、仲がいいなお前ら(笑)」

透「おはよう、みんな。たまたま登校している途中で秋葉に会ってね。それで一緒に登校したんだよ」

2人以外の時は秋葉って呼んでいる。なぜか嫌がるんだよね。なんだろう？

「たまたまって・・・ほぼ毎日じゃねえか！羨ましいぞこの野郎！」

透「ははは(汗)」

先生「そろそろお前ら席に着きな」

いつの間にか教卓に先生がいた。それを合図にみんな一斉に席に着いた

先生「さて、今日は身体検査システムスキャンをする。各自移動をしてくれ、終わり次第帰っていいからな」

皆ぞろぞろと席を立って移動した。

透「僕も行かなきゃ」

「氷村さん着いてきてください。」

白衣を着た科学者が扉の前に立っていた。

いつものことだからいいけど

透「はい、今行きます。」

白衣の人たちに着いて行った。

着いた場所はどこかの施設の部屋である

「これより能力の測定を行います。」

部屋についているマイクから研究員の声が聞こえる。

「今からこの部屋を凍らしてください。」

透「わかりました」

両手を左右に広げる。

一気に周囲の温度が下がり周りのものが凍りつき始めた。

「タイム1分、温度 - 196 . . . 能力値レベル4」

透「ふうー」

体の力を抜き両手を下げた。

「氷村さんお疲れ様です。外に車を用意しているのでそれでお帰り

ください。」

透は無言で外に出た。

外に出ると言っていた通りに車が用意してあった。

車のドアを開けて中に入った。

運転席にはサングラスをかけた男が座っている。

透「こんにちは、鈴木さん」

鈴木「お疲れ様です透くん。目的地はどこにしますか？あと学校の方には連絡をしていますので帰っても大丈夫だそうです。」

この人は鈴木さん、名前は不明です。この研究所で働いている唯一のまともな人だと・・・思う。」  
透「いつもありがとうございます。え〜とスーパーの近くまでお願いします。」  
鈴木「わかりました」  
車を発進させた。

#### 移動中

鈴木「透くん、到着しました」  
透「ありがとうございます」  
鈴木「いえいえこれも仕事ですから。あ、それと新しいクレープ屋が出来たらしいので帰りに寄って見てはどうですか？」  
透「なんで鈴木さんがそれを知ってるんですか？」  
鈴木「なに、友人が新しく始めたそうなので軽い宣伝ですよ。」  
透「わかりました。帰りにでも寄ってみます。」  
ガチャと車のドアを開けて外にでた。  
鈴木「では」  
運転席の窓を開けて頭を下げたあとすぐに車が発進した。  
透「さて、晩御飯の材料を買わなきゃ」  
店の中に入っていった。

## 風紀委員と日常（後書き）

次回は炎哉の日常を書く予定です。  
ではでは

## 哀れなバカの日常(前書き)

大変遅くなってすみませんでしたー!!!orz

はあー最近忙しすぎて天に召されそうだ

まあ、そんなところより第9話のはじまりはじまり〜

## 哀れなバカの日常

SIDE 炎哉

今は朝の7時、そして俺は翔の部屋の前にいる。なぜかって？

そんなの決まっている！タダ飯を喰らいに来た！！っーことであるの  
野郎を起こすか

ガンガンと翔の部屋のドアを叩く

炎哉「おーい翔、起きてるかー！」

ガンガン・・・出ないな・・・

ガンガンガン・ガンガンガンガンガン「だあー！うるせえ  
！」ガチャ

翔が乱暴にドアを開けて顔を出した。

炎哉「よう、翔！朝飯作つてくベキツ　ぐはっ」

翔が炎哉の顔を思いつきり殴った

翔「てめえは少しは常識を学べや！どこの世界に朝つぱらから人の  
家のドアをガンガン叩くやつがいるか！そこにあるチャイム押せや  
！とっとう脳みそまで筋肉なったのか脳筋野郎が！！！」

炎哉「誰が脳筋野郎だ！」

翔「お前の事だよバカ野郎！！はあゝ朝から疲れる。とにかく上が  
れ飯ぐらい作つてやるから」

炎哉「ありがとよ！」

炎哉は上がつてすぐにソファーに座つてテレビをつける。

翔「おい、リクエストはなにかあるか？」

炎哉「今日は和食で頼む」

翔「はいはい今日は和食な。まったく俺はお前の保護者かよ」

翔の野郎はなんだかんだ言っても作つてくれるからな・・・ツンデ  
レ乙

翔「なんか言つたか？」

こちらを睨んでくる翔

炎哉「い、いやなにも言つてねえよ」

翔「そうか」

そう言つて台所に行った

あ、危ねえもшибれてたら飯の中に何入れられるかわかつたもんじやねえ（汗）

炎哉「あんまおもしれえもんやつてねえな」

テレビのチャンネル回しながら時間を潰していた

翔「今日は身体検査システムスキャンだったか？」

唐突に翔が質問してきた

炎哉「ああ、そうだが。またてめえはその能力隠すのかよ」

翔「当たり前だ。まあ、どこそのコウモリ人間にはばれてるかもしれないがな」

炎哉「こうもり？・・・ああ、そういうことか」

たしかにアレイスターは暗い中でいっつも逆様状態だしな

炎哉「それにしてもその能力は反則すぎるだろ。良いよなお前は」

翔「そういうお前こそ身体能力上げてもらったんだろ・・・よしできた。運ぶの手伝え」

炎哉「了解」

ソファーから立ち上がり自分の分を持っていきテーブルの上に置いた。

翔も自分の分を持っていきテーブルの上に置いた。

炎哉「相変わらずうまそうだな」

翔「お世辞はいいから速く食うぞ」

朝食：鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたし、キャベツの浅漬け、豚汁、肉じゃが、ご飯

翔、炎哉「いただきます」

と言つた瞬間ガツガツガツとものすごい勢いで飯を食らう炎哉。その様子はまさに飢えた獣

翔「おい、もう少し落ち着いて食ったらどうだ？飯は逃げねえぞ」  
炎哉「いつもこのぐらいスピードで食ってたんだから大丈夫だ」

翔「そう言って毎回、喉に詰まらしてるよなお前」  
箸でこつちを指しながら呆れた表情で言う

炎哉「同じ失敗は二度としなうぐっ」

案の定 喉に詰まりどんと胸を叩く

翔「いいかげん学習しろよな。ったく少し待ってる麦茶でも持ってきてやるから」

そう言って立ち上がり台所に向かって歩く

ヤ、ヤバイ頼むから翔のんびり歩いてないで速く取ってこいやー！

翔「ほらよ」

と言って炎哉の目の前に2Lのペットボトルの麦茶を置いた。

炎哉はそれを勢いよく飲みだす。

炎哉「ごくごくごくごく ぶは〜死ぬかと思った。」

翔「……お前飲みすぎだろ」

2Lあったペットボトルが半分ぐらい減っていた。

炎哉「うるせー！こつちは死にそうだったんだよ！つかなんでお前はゆっくり取りに言ってたんだよ！！親友が喉詰まらせて死にそうなんだぞ、もつと迅速に行動しろやー！！」

翔「だが断る！！だいたい俺は忠告したはずだが、それを無視してバカ食いしてたのはお前だろ」

炎哉「うっ」

それを言われるとなにも言えねえじゃねえか

翔「なにが同じ失敗は二度しないだ。今のを合わせたら20回以上いってんじゃねえのか（呆れ）」

グサツと胸に言葉のナイフが刺さった

翔「ごちそうさま。さて飯も食ったし行くか」

炎哉「お、おい俺はまだ食い終わってねえぞ！！！！」

翔「仕方がない。3分間待ってやる！！」

炎哉「なんで、そこでムス ！？」

ふるすぎだろっ!?

翔「あと2分だ」

炎哉「まだ一分もたつてないよな?!」

翔「あと1分」

炎哉「だから速えよ!待つ気ないよなお前!？」

翔「3」

炎哉「だあー!もうこうなったら詰め込んでやらあ!」

翔「2」

炎哉「バクバクバクバク」

翔「いーいーいーち(すごーくゆっくり)」

炎哉「ゴクツご馳走様!どうだ食い終わったぞ!」

どや!と言わんばかりの顔で翔を見る。

翔「少し小腹がすいたからおにぎりでも作ってくる」

と言つてソファーから立ち上がった。

炎哉「おい?!俺の努力はなんだったんだよ!？」

翔「食い終わったんなら食器を台所に持っていってくれ」

翔は自分の食器を持って台所に向かった。

スルーしやがった?!

炎哉「お前、俺への扱い酷くないか(泣)」

翔「いつものことだろ」

なんだよその当たり前だろって顔?!

炎哉「一発なく」昼は八バネ口入りカレーを食いたいか?」すいま

せんでしたー!」

その場で土下座をした。

逆らえねえー、ちくしょうー!!!

翔「んじゃ食ったし、いい加減行くぞ」

鞆を持ちながら玄関に向かって歩いた。炎哉もそれに続いた

ガチャッ

家の扉を閉め鍵をかける。

炎哉「おい、上条の奴は起こさなくていいのかよ?」

翔「あいつは今頃夢の中だろうな。しょうがないチャイム一回押してから行くか」

炎哉「せめて起こしてから行けよ(汗)」

翔「いいんだよ、別に。さっさと押して行くぞ」

ピンポンと当麻の部屋から音が聞こえる。

部屋の中からは反応がない。

翔「よし、いくぞ」

炎哉「そうだドタドタド　ん？」

途中でガンと何かが扉にぶつかる音がした。

ガチャと扉を開ける音がした。

当麻「ふ、不幸だあー」

といいながら当麻が部屋の中から出てきた

翔「朝からの第一声がそれかよ。まあ、おはよう当麻」

炎哉「よう、上条。相変わらず不幸だな」

当麻「あゝ、おはよう翔に近藤」

当麻は鼻をぶつけたらしく鼻を押さえながら挨拶をしてきた

翔「当麻行く準備はできているのか？」

当麻「少し待っててくれ」

そう言つて当麻は部屋の中に戻つて行つた。

翔「こりゃ、もう一回扉に激突するな」

炎哉「・・・たぶんな」

話している間にドタドタと当麻が玄関に走ってくる音が聞こえる

翔「ありゃ、今回はなにもないガンツ　わけないよな」

また当麻が扉に激突したようである。中でのた打ち回る音が聞こえる

炎哉「いくら女とフラグ立ててもここまで不幸だと割りに合わない気がするの俺の気のせいかな？」

翔「いや気のせいじゃないだろ」

即答かよ

炎哉「・・・だよな。」

翔「お前は欲しいのか？あのフラグ体質？」

炎哉「いらねえよ、さつきも言ったとおり割りに合わない。お前は  
どうなんだよ？」

翔「俺も遠慮しとく。今は恋愛ごとに興味ないからな」  
なに?! 恋愛に興味がない・・・だと

炎哉「お前まさか!? これか？」  
とオカマポーズを取る

翔「ちげえよ! だいたい恋愛なんて大人になってからでいいだろ。  
それより大丈夫か、当麻」  
扉ごしに当麻に声をかける

当麻「つつゝ大丈夫だよ」

当麻は扉を開けて出てきた。

炎哉「それじゃ、そろそろいこうぜ!」

とそれを合図に3人は歩き出した

当麻「はあゝ朝から元気だよなー近藤は」

翔「こいつは元気だけが取り柄だからな」

炎哉「おい!? それじゃ俺がそれ以外だめみたいじゃねえか!」

翔「その通りだろうがテストじゃ良くて赤点ストレス、宿題はやら  
ねえし、やつても期限が過ぎた1週間後だろうが」

炎哉「・・・その通りです」

翔「まあ、安心しろ。お前は青髪よりはましだから」

当麻「あいつと比べられたら終わりだろ」

炎哉「まあな、あの野郎女ならなんでもokしそうだし。というよ  
り」

翔、炎哉、当麻「」「犯罪者予備軍」」

と三人は顔を見合わせて同時に笑った

炎哉「ははは、やっぱ考えてることは同じかよ」

翔「くくくあいつに当てはめるとしたらこの言葉が適切だからな」

当麻「ははは確かにな」

三人は談笑しながら学校に向かって歩き出した

後で気づいたが結局バカと言ってることには変わらなかった

移動中

炎哉「何事もなく学校に到着したな」

翔「・・・俺とお前はな」

後ろからボロボロの当麻が遅れてきた

当麻「なぜ朝からここまで疲れるんだorz」

道中でバイクに轢かれそうになって避けたらその先の電柱に顔面をぶついたりetc、etc・・・

翔「おい、当麻鼻血出てるぞ」

ポケットティッシュを当麻に渡した。

当麻「あ、すまねえ」

当麻は鼻にティッシュを詰めた

三人は教室に向かった。

土御門「おはようだにゃー、カミヤんにしようやんとえんやん」

青髪「なんや朝から鼻血なんて・・・まさかカミヤん！？ちっちゃな女の子を見て興奮して鼻血を出したんかいな！？」

教室に入れば青髪ピアスと土御門がいた。

当麻「おい、それじゃ俺が変態みてえじゃねえかよ！？」

翔「・・・あながち間違つてないよな ボソツ」

炎哉「・・・だよな ボソツ」

当麻「おい、翔、炎哉何か言つたか？」

とこちらを睨んでくる

翔「いや、なにも」

青髪「やっぱ朝起こしてもらっんならツンデレキャラがいいと思うんや」

土御門「いや、ちがうぜよそこはロリキャラだにゃー」

当麻「いや、違うぞ！そこはお姉さんキャラだ！」

ぎゃーぎゃー 論議で盛り上がる三人

・・・始まったないつものバカ話が

翔「いつものことだろ」

炎哉「・・・俺の心を読むなよ」

翔「顔に出てんだよ」

炎哉「マジか！」

・・・俺って顔に出やすかったか？

翔「ああ、出やすい」

炎哉「お前はサトリか!？」

当麻「うがぁー！話が纏まらん、おい翔、炎哉お前らはどっちだよ！」

ビシツと俺たちに向かって指を差してきた

翔「なにがだよ」

土御門「決まってるぜよ朝起こしてもらうのならやっぱりメイドだにゃー」

当麻「おい、てめえさつきと話がちがうじゃねえかよ！」

土御門「なに言ってるんだにゃーカミヤん、ロリキャラ+メイドは最高の組み合わせだにゃー」

ロリキャラ+土御門の好きな奴+メイド・・・おいそれって

炎哉、翔「・・・それお前の妹じゃねえかよ」

土御門「なんでえんやんとしようやんが舞夏を知ってるんだにゃー

!？かみやんだけじゃなかったのかにゃー!？」

炎哉「いや、俺もこいつもデパートとかで会ったし」

翔「ああ、今じゃたまに料理教えたりしてるからな」

土御門「死ねーしようやん!!!!!!」

土御門が翔に向かって飛び蹴りをした。

翔「うおっ危ねえ！」

翔は屈んで避けたが

炎哉「ちよっ、おま、ごぶっ」

後ろにいた炎哉の鳩尾に命中しその場で悶えだした

位置関係：教室

扉 炎 翔 土  
当 青

—  
—  
—

炎哉「ぐおおおお、翔てめえ〜」

なんでいつも俺だけこんな役割なんだー！

翔「いや〜つい反射的にな」

あつはつはつはと悪びれた様子もなく笑っている

炎哉「てめえいつか泣か「言つとくがな、土御門」・・・おい（泣」

翔「お前の妹が俺のところに料理を学びに来てるのは『兄貴にもっとおいしい物を食べてほしいから』だそうだ」

土御門「うおおおおー！舞夏ーお兄ちゃんはうれしいぜよー！

！！！」

キャラが崩壊した？！

炎哉「お前・・・よくもそんなうごぶっ」

しゃべってる途中で鳩尾を蹴られた

翔「ん？大丈夫か炎哉」

と言つて俺の前に屈んでくる

翔「余計なこと言うなよ。それに1割方は本当なんだから」

黒いオーラーを後ろに出しながら俺にしか聞こえない声で言った。

炎哉「おい、それってほとんどう」

翔「世の中知らなくてもいいことが1つや2つあってもいいと思わないかね炎哉くん」

黙つてコクコクと頷くしかなかった。

キンーコンカンコーンとそこで予鈴が鳴った

翔「そろそろ子萌先生が来るな」

炎哉「ああ〜そうですね」

と倒れた状態で答える

ガラと扉を開ける音がした。

子萌「みなさーんおはようございまーす」

生徒全員「おはようございまーす」

子萌「みなさーん速く席についてください。特に近藤ちゃんはそこで寝てないで席に着いてくださいね」

ときどき炎哉が倒れていることがあるので子萌も慣れてしまっている。主な原因は翔である

土御門「えんやん速く席に着いたほうがいいぜよ」

翔「いくら眠いからってそこで寝るなよ（笑）」

いつの間にか俺以外の全員が席に着いていた。

ちよつと待てや、その2人!?

炎哉「お前らが原因だろうがー!」

翔、土御門「「なんのことやら（だにゃー）」「」

思いつきり目が泳いでるぞ!

炎哉「薄情ものがー!!!」

また倒れた状態で言った。

子萌「近藤ちゃんそろそろ席についてほしいんですけどおー」

子萌が困った表情になった。

そのせいでギロツと周りから睨まれてしまった。

炎哉はいそいそと立ち上がって自分の席に着いた。

子萌「みなさーん今日は身体検査システムスキャンなのです」

子萌「各自場所へ移動してくださいねー」

翔「あ、子萌先生」

翔が手を上げた

子萌「なんですか？風間ちゃん」

翔「終わったらそのまま帰ってもいいですか？」

そこで子萌は少し考えた

子萌「んゝわかりました。終わったらその場で帰ってもいいですよゝ」

よっしゃー、速攻で終わらして帰るぞ!

そして、また翔の家でタダ飯を食らって冷蔵庫の中の食材を全てなくしてやる！！

哀れなバカの日常（後書き）

次回はレールガンの話が混ざり  
ます  
では

## 超電磁砲と狂戦士（前書き）

いや〜更新するのが遅くなってすみません。  
また忙しくなるので遅くなるかもしれない  
では第10話のはじまりはじまり〜

## 超電磁砲と狂戦士

SIDE透

僕は今、スーパーで買い物をし終えて鈴木さんが言っていたクレイプ屋の近くにいます。

透「これからどうしようかな。風紀委員の仕事もないし」

「おーい、とーおーるー！」

誰かがこちらに向かって手を振っている

透「ん？誰だろ？」

手を振っている相手に近づいてみた。

透「あ、炎哉！」

近づいてみると炎哉であった。

炎哉「よつす！透」

こちらに向かって手を上げながら笑顔で言った。

透「こんにちは、炎哉。めずらしいね炎哉が買い物をするなんて」

炎哉「おいおい、俺だって買い物ぐらいはするぞ」

透「え、だって炎哉がいつも買ってるのってインスタントばかりだよ。

りだよ。なのに今日はインスタントが一つもないし」

炎哉「あゝ実はな翔の野郎に買出しを頼まれたんだよ」

一度頭を掻いて、ほらと言いながら食材が入っているビニール袋を見せた

透「それこそめずらしいよね。炎哉が人のお願いを聞かないで」

炎哉「しょうがねえだろ、あの野郎が『俺の家でタダ飯を食らったから材料ぐらい買って来い。ちよつどなくなってたからな。ほら、金とメモだ。これを見て買ってきてくれ』っていうんだからよ。タダ飯食わせてもらってるから反抗しておかずに減るのもいやだしな」

頭を掻きながら言った

透「あはは炎哉らしい理由だね」

炎哉「まあ、俺は料理が作れないしな。せいぜい作れたとしてもインスタントだよ」

透「・・・それって作るっていわないよね」

ジト目で炎哉を見た

炎哉「まあいいじゃねえか。それより透は昼飯は食ったのか？」

透「ううん、まだだよ」

と首を横に振った

炎哉「だったら透も一緒に翔の家で食わねえか？」

透「いいのかな？」

首を傾げながら訊いた

炎哉「いいんじゃないやねえの、透なら翔の野郎も歓迎するだろう」

透「じゃあ、行こうかな。あ、その前にクレープ買って来てもいいかな？」

目の前に見えるクレープ屋を指差した

炎哉「ん？ああ、いいぜ。ついでに翔の分も買ってくか」

透「そうだね」

翔のは何がいいかな？

炎哉「よし、そうと決めたらいこドカンッ　は？」

透「え？」

音がした方を見てみれば銀行のシャッターが爆発していた。

そこからツンツン頭の男を先頭に太った男と薄い茶髪の男が出てきた

「ほら、グズグズすんな、さっさとしねえと」

「お待ちなさいジャツジメントです。器物破損及び強盗の現行犯で拘束します」

透「あ、白井さん」

黒子が銀行強盗たちの前に立ちはだかっていた

炎哉「おお、そういえば今日は銀行強盗が出る日だったな」

透「あ、そういえば」

炎哉「お前も風紀委員なんだろ。だったら仕事してこい」

透「あ、うん。行ってくる」

と制服のポケットから腕章を取り出して腕に着けてから犯人たちのところに向かった

SIDE 炎哉

炎哉「俺はどうするかな・・・ん？」

突如ゲラゲラと笑う声だったのでそちらに顔を向ければ強盗犯たちが腹を抱えて笑っていた。

黒子の方を見れば黒子はむっとしたような顔をしていた。

バッグを持った男「ジャツジメントも人手不足か」

その言葉を合図に白井は強盗犯に向かってゆっくりと歩き出した。

太った男「おらぁ、お嬢ちゃん。とつとどつかいかねえと怪我しちゃうぜえ」

と言って勢いをつけて白井に向かって手を突き出すが

黒子「そういう三下のセリフは」

白井は横に移動してかわし瞬時に太った男の裾を掴み相手の足の前に自分の足を引っ掛け太った男の体がバランスを崩し宙に浮いた瞬間、掴んでいた裾を男が向かってきた逆方向に引っ張りそのまま一回転し

黒子「死亡フラグですわよ」

地面に叩きつけられた。

薄い茶髪の男「なっ!?!」

ツンツン頭の男「てめえ」

犯人の2人は仲間が自分たちより小さい子供に簡単に倒されたことに驚愕した。

炎哉「お見事」

黒子の一連の動きを見て感嘆した

透「ねえ、炎哉」

炎哉「うおっ?!びっくりさせんなよ透・・・ってお前あっちに行つたんじゃないかったのかよ」

と黒子の方を指差した

透「一応行こうとしたんだけど御坂さんに手伝って欲しいことがあるって」

炎哉「手伝って欲しいことって子供でも探すのか？」

透「あれ、なんで知ってるの？」

炎哉「あほか、俺たちには原作知識があるだろうが」

呆れた表情で言う

透「あ、そうだった。また忘れてた」

テヘツと舌を出して頭を少しを掻いた

炎哉「っ／＼／＼」

透「あれ？炎哉。顔が赤いけどどうしたの？」

炎哉「な、なんでもねえ／＼／＼！と、とにかくそのガキ搜すぞ！  
周りを搜すふりをして一度透から離れた。

あれはヤバかった／＼／＼ただでさえ女顔なのにあんな仕草をされたらいつか理性が・・・ってなに考えてんだ俺！？落ち着け俺、透は男だぞ。俺はいたってノーマルなんだー！！！！

はあ、頼むから透はもうちょっと自分の顔のことを理解してください

（泣

透「あ、ちょっと待ってよ炎哉。今から御坂さんたちに炎哉のこと紹介するからついてきて」

と炎哉の腕を引っ張って行った

炎哉「お、おい」

透「御坂さーん」

と美琴たちに向かって手を振る。

美琴「お、透くーんと・・・だれ？」

と美琴も手を振り返してきたが即座に首を傾げた

透「あ、御坂さん。さっき僕が言ってた友達の炎哉です」

炎哉「近藤炎哉だ。まあ、気軽に炎哉とでも呼んでくれ」

美琴「御坂美琴です」敬語はいらねえよ「そう、じゃあ男の子を搜

すの手伝つてくれるわよね？」

炎哉「もともとそのつもりだしな。その2人は後で自己紹介することにするか」

と2人を見ればビクツと一瞬だけ肩を震わせた。

佐天、初春「は、はい」

と少しどもりながら返事をした。

・・・その反応はすげえ傷つくぞorz

だけどやっぱり実際に見るとかわいいな佐天は、まあ会っていきなり怯えられたのは泣きそうになった

はぁー、鬱になりそうだorz

SIDE透

炎哉「もともとそのつもりだしな。その2人は後で自己紹介することにするか」

と2人を見ればビクツと一瞬だけ肩を震わせた。

佐天、初春「は、はい」

と少しどもりながら返事をした。

あ、今ので炎哉結構ショック受けちゃったかな？

でも、初対面にとってはしょうがないかな

だって炎哉見るからに不良っぽいし、でもさすがにかわいそうだし話題転換しなきゃ

透「じゃあ炎哉はバスの周辺調べてくれる」

炎哉「ん？了解」

と指示のあった場所に行った。

透「それじゃ各自で探してください」

この言葉を合図に美琴たちも探し始めた

透「いないなーどこにいるんだろ」

透は今広場の周辺にいる。

あたりを搜索してるが一向に見つかる気配がない。

おつかしいなー、一応原作から出てくる場所も探したのに居ないなんて

・・・まさか！佐天さんが犯人に蹴られるの決定事項なの？！

そんなのダメだ！ともかく炎哉に佐天さんの近くに行くように言わないと！！

S I D E 炎哉

つたく見つからねえなあー

確か透がいるあの周辺にいたと思っただけだなー

それより白井の方の戦況はどうなってるんだ？

探しながら白井のほうを見てみた

ツンツン頭の男「いまさら後悔してもおせえぞ」

と男の手の平からソフトボールぐらいの大きさの火の玉が出てきた

黒子「パイロキネシス（発火能力）」

黒子は冷静に相手の能力を分析した。

ツンツン頭の男「てめえには消し炭になっ」

男がしゃべってる途中で黒子は走り出した。

薄い茶髪の男「お、おい」

ツンツン頭の男「逃がすかよっ！」

その台詞セリフと同時に黒子に向かって火の玉を投げた。

火の玉は黒子を狙うように黒子に向かって行った。

黒子「だれが」

そして黒子が居た場所に着弾したが

ツンツン頭の男「消えた！？」

黒子「逃げますの？」

黒子は能力を使って犯人の前に瞬間移動した

ツンツン頭の男「うおっ?!」

ツンツン頭の男は黒子がいきなり目の前に現れたことに驚いた。

黒子は男の後頭部が見える高さに瞬間移動し後頭部を蹴ったあとすぐに瞬間移動して男が倒れた前に現れた。

黒子は太股に仕込んでいたダーツを自分の手に瞬間移動させ、それを瞬間移動で男の服に打ち込み地面に張り付けにし動けないようにした。

ツンツン頭の男「テ、テレポーター!？」

黒子「これ以上抵抗するなら次はこれを体内に直接テレポーターさせますわよ」

ツンツン頭の男はそこで抵抗をやめた。

やっぱり原作通りにやられたなさすがレベル4のテレポーター。それにしても瞬間移動って充分チートだよな。あんなひよいひよい移動されてたら攻撃なんて当たんないしな。

白井の方は終わったしそろそろ搜索を開始す

薄い茶髪の男「あ、あ、なんだてめえ離せよ」

透「あ!」

炎哉「ちっ!」

黒子「へ?」

美琴「ん?」

男の声に全員がその声のほうを見た

佐天「だめー!!!!!」

薄い茶髪の男「くそっ!」  
と毒づいたあと

ダンッ

と佐天の顔面に蹴りを入れた。

その瞬間どこかでブチッと切れる音がした

初春「佐天さんっ！」

黒子「っな」

透「くっ」

と黒子と透の2人は同時に動きだそうとするが

美琴、炎哉「「黒子（透）！！！」」

と2人の声に動きを止めた

黒子、透「「え？」」

美琴、炎哉「「こつからは私（俺）の個人的な喧嘩だから悪いけど

（わりいが）手出させてもらっわよ（もらっぞ）」」

美琴と炎哉の表情は怒りに染まっていた。

くそっ俺がさっさとガキを見つけてれば、いや今さら後悔したって  
しかたがねえとにかく

アノ野郎ヲ・・・ブッコロス！！！！

SIDE透

美琴、炎哉「「こつからは私（俺）の個人的な喧嘩だから悪いけど

（わりいが）手出させてもらっわよ（もらっぞ）」」

透、黒子「あ〜」

黒子と透は同時に間抜けな声を出した

はあーまた報告書の量が増えるよ〜（泣

炎哉がやり過ぎないことを祈ろう。

神父じゃないけど・・・アーメン（犯人にたいして）

SIDE黒子

透、黒子「あ〜」

黒子と透は同時に間抜けな声を出した

まったくお姉さまってば・・・それにしてもあの殿方は誰ですか？  
氷村さんの知り合いでしょうか？  
まあ、あとで聞いてみることにしましょう。

ツンツン頭の男「思い出したジャッジメントには捕まったら最後、  
身も心も踏みにじって再起不能にする最悪なテレポーターと悪魔の  
ような笑みを浮かべて身も心も凍らす温度吸収フリージングがいて」

黒子「誰のことですかのそれ？」 おまえだよ

透「あゝ、あはは」

透は思い当たる節があるのか笑って明後日の方を向いた。

むっ今誰かに失礼な事を言われた気がしましたの

黒子がツンツン頭の男と話してる間に薄い茶髪の男は車に乗り込み  
エンジンをかけ

薄い茶髪の男「ちくしょうこのまま引き下がれっかよ！」

バツクで車を向きを反転させ

ツンツン頭の男「さらにはそのテレポーターには身も心も虜にする  
最強のエレクトロマスターが！？」

美琴はスカートのポケットから一枚のコインを取り出した。

どこにでもありそうなゲームセンターのコインだ。

黒子「そう、あの方こそが学園都市の230万人の頂点7人のLV  
5の第三位」

美琴はコインを指で弾き空中に上げる。

それを合図に車を発進させ美琴に向かって突っ込んだ。

美琴は腕からバチバチと電気を出しながら、片目を閉じて落下して  
くるコインを弾いた。

弾くなんて生易しいレベルではなく弾丸のように轟音を立て、地面  
を削り飛んでいった。

薄い茶髪の男「のわっ！？」

視界が眩しくなつたと思つた瞬間、車は中を舞っていた。

黒子「超電磁砲<sup>レベルガン</sup>、御坂美琴お姉さま。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの」

美琴「ふっ」

そのまま空中で回転して美琴をの後ろの地面に突き刺さつた。薄い茶髪の男はエアバッグのおかげで気絶するだけで済んだ。

初春「すっ」

佐天「すごい」

美琴の力を見て2人は驚愕した。

炎哉「勝てる気がしねえ（汗）」

透「炎哉じゃ相性が悪すぎだよ」

炎哉「透ならいけるのかよ？」

透「無理だよ。・・・それより良かったの（ボソリ）」

炎哉にしか聞こえない声で話し始めた

炎哉「なにがだよ（ボソリ）」

炎哉もそれに習って小声で話し始めた

透「美琴さんに譲つて？（ボソリ）」

炎哉「まだムカついてるがここはアイツの見せ場だろ。それを奪う気はねえよ（ボソリ）」

透「炎哉がそれでいいならいいけど（ボソリ）」

さつきからあの二人はお姉さま相手に勝つ勝てないって失礼なことを言いますわね（怒）

それにさつきから小声でなにを話しているんですの？

黒子は2人に近づき

黒子「氷村さんいつまで話していますの。あなたも風紀委員ならあそこで気絶してる方を確「は、離して！」今度は何事ですか？」

声をした方を見ればまた佐天が最初に黒子が気絶させた太つた男にナイフを突きつけられていた

太った男「動くなよっ テメエら。動いたらわかってるんだろっな」  
更にナイフを佐天に近づけた。

佐天「ひっ」

恐怖のあまり目じりに涙が溜まっている

初春「佐天さんっ!」

美琴「くっ」

美琴は攻撃したいが今すれば佐天を確実に巻き込んでしまうので動けないでいた。

黒子「目を覚ましていたんですの」

太った男「ああ、さっきのは効いたぜえ。それよりさっさと車をよ

「あ、あの〜」なんだガキ!!!」

透がおずおずと犯人に話しかけた

透「速くその人を開放して逃げた方がいいよ」

黒子「なっ!?!」

この状況でなにを言ってますの、この方は!!!

太った男「はっ、なに言ってるやがんだガキ。お前にはこれがみ「ガシッ」は?」

と太った男の腕を誰かが掴んだ。

炎哉「これが、なんだ?」

後ろを見れば炎哉がその腕を掴んでいた。

太った男「い、いつの間に?!」

黒子「ど、どういうことですか?!」

さっきまで傍に居たはずですよ!?

まさか私と同じテレポーターなんですの!?

炎哉の握り締める力は段々と強くなりミシミシと嫌な音が聞こえてくる

あまりの激痛に拘束を緩めてしまいその隙に佐天は抜け出した。佐天が抜け出したの確認すると炎哉はその手を放した。

太った男は炎哉から距離を取った。

太った男「てめえ、ふざけた真似しやがって」

ナイフを構え

太った男「死にや「うるせえ！」ゴキツ ひでぶつ」

炎哉に向かってナイフを刺そうとしたが避けられ顔面に拳がめり込むほどの力で殴られた。

太った男は鼻血を出しながら地面を転がった。

数メートル転がったところで勢いが止み男はピクピクと痙攣しながら気絶している。

黒子「よ、容赦ないですわね（汗）」

黒子は思いつきり口が引き攣っている

透「えゝそうかなー、今回は結構軽いほうだよ」

黒子はその言葉にバツと透の方を顔を向けた

黒子「あ、あれで軽いといえますの？」

さきほど殴られた男を指差しながら言った。

透「そうだよ。あれ？白井さんは聞いたことないの、バーサーカー狂戦士のこと？」

黒子「な、なんですか？バーサーカー、思い出したぞっ！？」なにがですよ？」

ツンツン頭の男がいきなり大声をだした。

ツンツン頭の男「赤い髪をした男で喧嘩を売ってきた奴を能力を使わないで拳だけで全員病院を送りにしてきたのは数知れず。相手が

再起不能になるまで止まらない最悪の化け物っ！？」

ツンツン頭の男「なんであんな奴がここにいんだよっ！？」

ツンツン頭の男は顔を青くし体を震わしていた。

透「生まれ変わっても、そこは変わらないんだね（ボソリ）」

この怖がりを見ると本当なんですのね。

まったく次から次へと問題が出てきますわね。  
あー！こーなつたら今日はお姉さまの布団に忍び込んでこの疲れを癒すことにしますわ！

炎哉 S I D E

あれから時間が経ち現場に警備員アンチスキルが来て犯人たちを連行していった。太った男は今だ気絶していて数人がかりで引きずられながら車の中に押し込まれた。

目を覚ますころにはすでに刑務所のなかだろう。

炎哉「ふう〜これでようやく一件落着だな」

透「炎哉、手伝ってくれてありがとう」

美琴「私もいわせてもらうわ、ありがとうね。私だったら佐天さんも巻き込んだじゃうし」

黒子「わたくしからもお礼をいわせてもらうですの。それにしても氷村さん今回なにもしていませんわね」

ジト目で透を睨んだ

透「え〜と、あはは」

透は笑って誤魔化ことにした。

たしかに、透の野郎なにもやってなかったな。

というよりは、俺らがさっさと倒したからだろうな

黒子「それより少し聞きたいことがあるんですの？」

炎哉「なんだよ？」

黒子「どうやってあの犯人の後ろに移動したんですの。」

御坂「それは私も聞きたいわね」

美琴も興味津々といった具合だ

炎哉「お前もかよ。言っとくが俺はテレポーターじゃねえぞ。俺はレベル4の発火能力者だ。」  
バイロネキンス

佐天、初春、黒子、美琴「〜〜え、ええええええ〜〜〜」



と炎哉に頭を下げながらお礼を言った。

炎哉「別にいいよ、それより怪我がないようにで安心したよ。まあ、次からはあんな無茶はしないでくれよ。」

佐天「は、はい。あ、そういえば自己紹介はまだでした。私、佐天涙子って言います。」

初春「わ、私は初春飾利って言います」

黒子「では次にわたくしも。白井黒子ですの。どうぞよろしくですの」

炎哉「俺は近藤炎哉だ。炎哉とでも好きに呼んでくれ。あとは敬語はなしにしてくれ。あんま慣れてねえからよ」

なんか知ってる奴から自己紹介受けるって変な感じだな  
まあ、いつか。

それより、ようやく佐天さんと話しができたぜ。

自己紹介だろうと関係ねえ、今が最高に幸せな瞬間だ

美琴「どうしたのよ、いきなりぼーとして」

炎哉「いや、なんでもねえ。少し考え事してただけだ。まあ、今度こそじゃあな」

炎哉は手を振りながら帰って行った。

オマケ

炎哉「そういえば翔の野郎に頼まれた買い物袋はどこだ？」

あたりを探して地面に食材をぶちまけた状態の買い物袋を発見した。

……も、もしかしてあれか(汗

自分の物じゃないことを願いながら袋の中身を見ると翔に頼まれた食材が無残な状態で発見した。

炎哉「さ、最悪だ。どうする俺!？」

ポケットからラ フカードを出した

一枚目：諦める

二枚目：土下座する

三枚目：踊る

炎哉「まとも選択肢ないじゃねえかよ! ってか三枚目の踊るってなんだよ!?! この状況でなにを踊れと?!」

叫びながら三枚のカード床に叩きつけた

ブルル、ブルルと携帯がなりだした。

嫌な予感がする。

画面を見ると風間翔の文字が書いてあった。

サアーと血の気が引いてきた

勇気を振り絞って電話に出てみた。

炎哉「はい、もしもし炎哉だが」

翔「ヨウ、エンヤ。オマエイツマデヒトヲマタセルキダ」

ヤバイヤバイヤバイ切れてる!?! 翔の奴ぜってえー切れてる!?!

電話越しからすげえー殺気が伝わってくるんですけどー!?!?!?

炎哉「あ、あの〜翔さん。なな、なんでそんな片言なんですか?」

動揺のあまり口調が変になっている炎哉

翔「イヤ、ナンカイマハキブンガヨクテヨ。ドコカノダレカヲキリ

コロシタイキブンナンダヨ」

炎哉「ははは、そうなんだ。そいつも不運だな(汗汗)」

翔「ナア、エンヤ」

炎哉「ナ、ナンデスカ?」

ついに炎哉も片言になりだした

翔「アシタ、オボエテロヨ」

ブツツと電話が切られた。

プープーという音だけが回りに響いていた

炎哉「ふ、不幸だあ——————!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

」

炎哉にとっての最高の日は、はずが最悪の日に変わりましたとさ

## 超電磁砲と狂戦士（後書き）

次は虚空爆破事件のことを書いておきたいと思います。  
ではでは

## 学舎の園（前書き）

いやあ〜何歳になっても夏休みの宿題はやる気がでないですねえ〜  
とまあ、それは置いといて今回の話は翔たちが学舎の園に行くまで  
の話です

第1話のはじまりはじまり〜

## 学舎の園

SIDE 翔

翔「だりいゝ、暇だゝ。はぁー今日はなにも予定がないな。」

ソファアーの上で寝転びながらテレビを見て時間を潰していたがついに限界が来たようである。

翔「・・・もう2時か」

デジタル時計の時刻は2時を表していた。

翔「はぁー、寝るか」

ソファアーから立ち上がりベッドに行こうとすると台の上に置いてあった携帯が鳴り出した。

ものすごくダルそうな顔をしながら電話に出た。

翔「誰だ？・・・もしもし、翔ですけど」

炎哉「よう、翔。起きてるか？」

電話の相手は炎哉であった。

翔「起きてるに決まってるだろ。ところで何で電話なんだよ用件があるなら俺の部屋に来れば良いだろうが」

炎哉の部屋は俺の部屋の一つ下の階にある。

1分もあれば翔の部屋に行くことが出来る。

炎哉「いやゝ、実はよ。俺、バス停にいんだよ。あと透も一緒にいるぜ」

翔「なんだ、お前らどっかに出掛けるのか？」

炎哉「おう、まなひやのその学舎の園に行くつもりだ」

翔「・・・は？」

いま、何と言いました？コイツ

いやいや無理だろ！？なにゲーセン行こうみたいな軽いノリで言うてんの？！

炎哉「聞こえなかったのかよ。だからまな「バカか、お前は。どうやってあそこに入る気だよ。」あそこって内部の人間の招待があれば簡単に入れるだよ。」

翔「まあ、そうだな」

炎哉「実は妹に呼ばれてな、妹の招待があるから簡単に入れるんだよ。つーことでお前もこいよ。学び舎の園なんて滅多に入れないぜ！」

妹!?!?.....ちよつと待てこいつに妹なんて居たか?

きつと転生したから新しくできたんだよな.....たぶん

.....あれ、なんだろう.....なんでか嫌な予感しかしないんだが.....なんでだ?

まあ、いいか。こんなチャンス滅多にないし行くことにするか

翔「わかった、俺も行くことにする。それでいつバスは来るんだ?」

炎哉「あゝちよつと待ってくれ.....2時10分」

翔「はい? one more please」

炎哉「.....2時10分にバスが来る」

デジタル時計を見ると1時55分の文字が表示されていた。

翔「時間がないじゃねえかよ!?!」

炎哉「すまん!なんとかがんばつて来てくれ!」

翔「おい!?!?無茶言うなよ!?!?俺まだ寝巻だぞ!」

炎哉「お前の能力で移動すれば間に合うはずだ!」

翔「お前あとなんかおご「ねえ、炎哉向こうにいるのって初春さんたちじゃない」「なに!?!」ブツツ ツーツー」

とそこで電話が切れ、耳元で電話の切れる音が永遠と繰り返されていた。

突然のことに手に持っている携帯を呆然として眺めた翔であった。

翔「.....取り合えず着いた瞬間ライダーキックをかましてくれる。覚悟しろ炎哉!?!」

くだらないことを誓っている翔であった。  
そんなことをやってる間に時間が過ぎ残りのタイムが10分になっ  
ていた。

翔「ヤバイ、時間が!?しかも外、雨じゃん!」  
ベランダを見ると外は雨が降っていた。

翔は大急ぎで着替えた。そして雨合羽を着てベランダで靴を履き替  
えた。

翔「まったくこんなときに雨なんて降るなよな。まあ、愚痴言っても  
しょうがねえよな!」

と言ってベランダの柵の上に立ち能力で空に舞い上がりバス亭を目  
指して高速で移動した。

SIDE 炎哉

翔「お前あとなんかおご」ねえ、炎哉向こうにいるのって初春さん  
たちじゃない」「なに!」「ブツツ ツーツー」

炎哉、透「あつ!」

2人で切った携帯を見た。

やべっ、驚きのあまり携帯切っちゃった。

もしかしてこれってバツゲーム受けるの俺(汗

.....また、鼻にわさびを詰められるのはいやだぞっ!?

罰の内容：前回の買い物で罰として炎哉が部屋で寝てるときに  
翔が炎哉に気づかれないように部屋に不法侵入(窓の鍵の形を能力  
で変えて)して炎哉の鼻の穴に二つ同時にわさびのチューブを突っ  
込んで注入するものだ。

必死で忘れようとしていたそのときの記憶がよみがえったおかげで  
ついでにあの時の感覚もよみがえり顔が青くなりだした。

特に鼻のあたり気持ち悪くなってきた。

透「良かったの電話切っちゃって？って炎哉が顔が青いけど大丈夫！？」

炎哉の様子を見て透は慌てだした

炎哉「ナ、ナンノデコトダ。オ、オレハダイジヨウブダゾ」

透「と、とりあえず深呼吸でもしたら？」

透に言われその場で深呼吸をして落ち着くことにした。

落ち着いてる間に初春たちはもう近くに来ていた。

初春「あれ？こんにちは、透さんにえつと・・・炎哉さん」

初春は若干緊張してようにも見える。

そのせいで炎哉の名前を一瞬忘れかけていた

佐天「2人ともどこかに行くの？」

それに対して佐天は気さくに話しかけてきた。

あの事件が起きて以来、佐天は炎哉の事が怖くなくなってしまった。むしろ、自身の能力を誇示しないで無能力者に対しても普通に接している炎哉を好意的に思っている。

能力者にとっては能力の力が全てだと思っっているものもいる、故に自分より能力のレベルが低い物を見下すことなどこの学園都市ではよくあることだ。

炎哉「一応、学舎の園に行くつもりだ。」

佐天が相手からなのか普段より口調は柔らかかった

佐天「え、でもあそこって部外者は入れないはずじゃなかったっけ？」

驚いたようすで尋ねてきた。

初春「誰か知り合いでもいるんですか？」

透「うん、実は炎哉の妹さんに招待されたんだ」

佐天「・・・妹さんいるんだ」

炎哉「正確には妹みたいな奴で実の妹じゃないがな。あいつとは従姉妹だしな」

初春、佐天「へえ、そうなんだ（ですか）」

透「ねえ、炎哉そろそろバスが来るよ」

その時にちょうどバスが見える所まで来ていた。

炎哉「ヤバイな翔の野郎まに　ブワツ　お！来たみたいだな」

透「ほあ、間に合って良かったよ」

佐天と初春は突然強い風が吹いたことに驚いた。炎哉たちが指を指している方向を見れば空から何かがこちらに向かって突っ込んできているのが見えた。

よく見ると人の形をしているのがわかった

佐天「ちよ、ちよっと！！あの人こっち向かってきてるけど大丈夫なの！？」

初春「あ、あわわ！！！」

2人とも相当慌てていた。

学園都市でも人が降って来るなんて滅多にないことだ。

2人が慌てている間に翔はバス停から少し離れた場所に着地した。

そしてゆつくりと歩き始めた

翔「あぶねえ〜、間一髪と叫ぶところだな」

炎哉「本当にぎりぎりじゃねえかよ」

翔「うるせえ、お前が電話するのが遅いからこうなんだよ・・・ち

くしよう、あの2人がいるから蹴れなかった（ボソリ）」

と後半は聞こえないぐらいの声で言っつてバスに乗り込んだ。

炎哉「あ、おい待ちやがれ」

翔のあとを追いかけるように乗り込んだ

翔の野郎怒つてやがんな〜

まあ、その内機嫌直るよな・・・あとでなんか奢ってやるう

SIDE透

透「今の翔はご機嫌斜めかな。さあ、2人とも速く乗ろう」

佐天たちは困惑しながらもバスに乗り込んだ。

バスの中に入ると一番後ろの席に炎哉と翔が座っていた。

バスの中の女子生徒たちが変な物を見る目で炎哉と翔を見ていた。

まあ、そりゃそうだよな

片や不良顔、片や雨合羽を着てそのまま席に座る男  
このバスって常盤台中学に行くバスだから男いれば変だよな。でも  
なんでだろう？僕だけそういう目で見られないんだけど・・・僕も  
男（の娘）だよっ！

炎哉「おーい！透こっちだこっち」

こちらに向かつて手を振ってきた。

透たちは一番後ろの席に座った

席順は 佐天 初春 透 炎哉 翔の順番だ。

そしてバスは常盤台を目指して発進した。

向こうに着くまでに翔の機嫌が治っているといいな

SIDE翔

炎哉「翔、お前その雨合羽脱げよ」

翔「はあー、わかったよ。その前に炎哉、お前なんか持っていないか？」

雨合羽を脱ぎながら言う

はあーこいつの能天気さ見てたら怒る気が失せた

まあ、向こうに着いたら金がなくなるまで奢らせてやる

炎哉「なんかつてなんだよ？」

翔「別になんでもいい、この雨合羽を入れたいんだよ。」  
脱いで折リたたんだ雨合羽を見ながら言う。

炎哉「つて言ったてよー、袋なんか・・・ああ、能力を使うのか。  
でもいいのかよ？」

周りには聞こえないような声で言った

チラツと佐天と初春を見ながら言った。  
当然、佐天と初春は見られた意味がわからず首を傾げていた。

ああ、バレてもいいのか？ってことか  
正直コウモリ（アレイスター）にはバレてるだろうし  
それにこの2人なら広めるなと言えは広めないだろうし

翔「別に良いんだよ。ということでのこの傘もらうぞ」  
炎哉が持っていた傘を自分の所に持っていった。  
そして傘の素材を全てビニール変えた。もちろん持つ場所も骨組みも全てビニール変化した。

次に形が変わりゴミ袋サイズのビニール袋になっていた。実際は一瞬でビニール袋に変えることができるのだが能力の説明をするためにゆっくりとすることにした。

その光景を見た佐天と初春は「えっ」と言っただけで驚いていた  
翔はそんな2人を気にせず雨合羽を袋に入れていた。

翔「よし、これでokだな。あと傘はまた今度返す」

炎哉「りよ、いまのはなんなんですか？」「うおっ！」

初春は身を乗り出しながら大きな声を出して翔に質問してきた。  
ありえない光景を見て少し興奮状態みたいだ。

佐天「そ、そうですよ！あんな能力みたことないんだけど！？」

佐天も同じ状態だ。

翔「あゝ2人とももう少し声を抑えような。周りのみなさんがこちらを見てるから」

ほらっと言っただけで指をさす方向を見れば突然の声に驚いたらしくで女子生徒たちがこちらを見ていた。

佐天と初春は恥ずかしくなり席で縮こまっていた。

翔「俺の能力を説明する前に自己紹介といこうか。俺は風間 翔だ。気軽に翔って呼べばいいさ、あと敬語は別に良いから」

佐天「私は佐天涙子です。あと無能力者です。」

初春「う、初春飾利です。風紀委員をやっています。」  
翔「さて、自己紹介も済んだし俺の能力の説明でもするか」  
その言葉に2人は頷いた。  
バスが常盤台に着くまで自分の能力の説明や他愛のない話をしてい  
た。

#### 学舎の園の入り口到着

話している間に時間はあつという間に立ちバスは学舎の園に着いた。  
翔たちはバスから降り改札口で紹介者の名前を言って中に入った。  
中に入るときに多少のトラブルは起きたが紹介者との関係を説明し  
たらなんとかなった。

翔「へえ、すげえなこれは」

透「まるで別の国に来たみたいだよ」

炎哉「だよな」

学舎の園の中は全ての建物が洋風で外国の町に来た気分になる。

初春「はあー！なんてかわいらしい町なんでしょう」

初春は憧れの場所に来たおかげでその目は輝いていた

佐天「横断歩道や信号まで全部、外とデザイン違うんだもん。凝っ  
てるよねえ」

初春「本当に他所の国に来たみたいです」

佐天「だねえ」

初春「うわあー！」

翔たちと佐天たちは各自で歩きながら噴水の前まで来た。

初春「ん？」

と初春はあたりを見回した。

透「どうかしたの初春さん？」

初春があたりを見回したのを不思議に思い声を掛けた

初春「あの、私たちなにやら注目されていませんか？」

周りの女子生徒たちがこちらをチラチラと見てくる

佐天「え？ああ。この格好じゃない。ここじゃ外の格好が珍しいんじゃない、きつと」

翔「あとは俺らが原因だな。ここじゃ男が来るなんて滅多にないはずだからな」

初春「おお、なるほど」

2人の説明に初春は納得した。

炎哉「あつ、やべえ！約束の3時まであとちょっとじゃねえか!？」

佐天「えっ!？う、初春私たちも急ごう」

もう少しで3時になるところだった。

透「え〜!？」

翔「つたく、走ってくいぞ。つーことでお二人さんじゃあな」

各自それぞれ待ち合わせの場所に走っていった。

後ろでなにかこける音が聞こえたが気にしないことにした。

## 学舎の園（後書き）

最初は虚空爆破事件を書こうと思ったんですが変更することになりました。

正直まゆげ事件のことを忘れていた（汗

次回は炎哉の従妹が登場します。

誤字、脱字、感想があったらどうぞ  
ではでは〜

ゲジ眉事件と三人の不幸な日（前書き）

今回の話は長くなっちゃいました（汗  
はあゝ文才がほしいです。

まあ、そんなことより！

第十二話のはじまりはじまり〜

## ゲジ眉事件と三人の不幸な日

SIDE 炎哉

俺たちはいま目的の場所に向かって走っている。ちなみに透は俺がおんぶしている

理由は簡単この中で一番遅いからだかな。一応言っておくが、透は足が遅いわけじゃねえ。

ただ俺たちが速過ぎるだけだ。

翔「そういえば炎哉、集合場所はどこだよ？」

走りながら先頭にいる炎哉に言った。

炎哉「あそこの喫茶店だ！」

と目の前にある喫茶店を指差した。

翔「ならもう歩こうぜ。さすがに疲れた（汗）」

ここまでずっと全力で走ったせいでゼエゼエと肩で息をしている。

透「そうだね。よいしょっと炎哉ありがとね。おかげで疲れなかったよ」

透は炎哉の背中から降りて、笑顔で言った。

炎哉「お、おう。別に良いぜ／／」

透から顔を逸らして照れ隠しか頬を掻いていた。

や、やっぱり透の笑顔はあんま直視できねえな／／

しかも素でやってるから性質がわりい／／

翔「なーに顔を赤くしてんだよ。お前まさかそっちの気の奴か？」

後ろにいた翔がいつの間にか正面にいた。

炎哉「うおわっ?! な、な、んなっわけないだろうが!!!」

翔「くつくつく知ってるよ。この前の仕返しだ。(9話参照)」  
けらけらと笑いながら喫茶店の中に入っていた

透「炎哉ってそんな目で僕を見てたんだ・・・不潔」

グサツ、グサツ、グサツといくつもの言葉のナイフが炎哉を貫いた。炎哉「・・・・・・・・・・・・・・・・」

透の予想外の言葉に脳の処理が追いつかずその場で立ち尽くしていた。

表現するなら、真っ白に燃え尽きたぜ、の状態だ。

透はそんな状態の炎哉を無視して横を通り過ぎて店の中に入って行った。

翔SIDE

翔「容赦ねえなあ、おい。冗談でもあれは効くぞ。」

おいおい口から魂がでてるじゃねえか

あのまま放置したら旅立つんじゃないかねえのか？・・・はあ、旅立たれも困るし戻ってきてもらうか

翔「やれやれ、まったくしょうがねえな」

店の中にいた翔は一度店からでて炎哉の襟首を掴んで引きずりながら店の中に入っていた。

回りから変な目で見られたが無視することにした。その間も炎哉の反応はまったくくない

翔「透、ちよつとやりすぎだ」

透「ん、僕もさすがに予想外だったよ。とにかく炎哉を起こそう」  
翔はそうだなと言って炎哉の頭をスパーンつといった感じではいた。

炎哉「はっ、ここは？！・・・どこだ？」

翔「目が覚めたかバカ炎哉。お前が気絶したから運んでやったんだよ」

炎哉「バカっていうな。それよりなんで俺は気絶してたんだ？翔が店の中に入ったまでは覚えてるんだが」

透「え、炎哉が店に行く途中でこけちゃって、それで頭をぶつけて

気絶したんだよ」

炎哉「そういえばなぜか頭が痛いな」

先ほど翔に叩かれていた部分をさすっていた

あまりシヨックに脳がオーバーヒートでもしたか（汗

つていうかそこまで覚えてるなら覚えとけよ。

そして透よいくらなんでもこいつが頭を打っただけじゃ気絶しねえよ（呆れ

あと、お前の頭が痛いのは俺のせいだ。

翔「忘れたんなら別にいいだろ。それよりお前の妹を探そうぜ。ここにいるんだろ」

炎哉「いるはずなんだが、え〜と・・・どこだ？」

炎哉があたりを見回すが見つからないらしい

「お〜い、兄ちゃんこっちこっち」

と手を振っている少女がいた

炎哉「お、いたいた！」

炎哉は一目散にその少女のもとに向かった

透「あ！待ってよ炎哉！」

透も炎哉を追いかけて走っていった

翔「はあ〜、お前らもう少し落ち着いていけ。つーか店の中を走るなよ（呆れ」

翔だけゆっくり歩いていて行った

妹「久しぶりだな、兄ちゃん」

炎哉「おう、久しぶりだな。元気でやってたか？」

と少女の頭を撫でながら聞いた

妹「当たり前じゃん！」

少女も嬉しそうに目を細めながら答えた

「.....」

もう一人座っているが我関せずと静かに紅茶を飲んでいた。

透「ねえ、炎哉。そろそろ自己紹介しない？」

炎哉「すまんすまん、嬉しくつてな。おーい翔速く来いよ」

翔「はいはい、今行くから先に座ってる」

と言ったがスピードは変えずに歩いている。

炎哉「おう、そうさせてもらう」

と言つて炎哉が座り次に透が座った。

遅れて翔が座った

席順

炎哉 透 翔

テーブル ー

少女 妹

炎哉「じゃあ自己紹介と行きますか。俺は近藤炎哉だ。好きに呼んでくれ。」

透「僕は氷村透。でこつちが」

翔「風間翔だ。好きに呼んで・・・く・・・れ・・・へ？」

と言つて顔をあげるとどこかで見ることがある顔だ。

金髪ツインテールの子が助けた子にそっくりで赤い髪の子が『変態野郎おー！』と言つてとび蹴りしてきた子にそっくりだ。

透「翔、どうかしたの？」

顔がめちゃくちゃひきつっている翔を見て変に思い聞いてみた。

翔「い、いやいやなんでもない」

とその様子に4人は怪訝な顔をしたが気にしてる余裕などないほど混乱していた

おい、待て〜?!なんでここにこの2人がいるの!?

え、マジで!?!なにこれなんでよりもよってこいつ(赤い髪の女

の子)が炎哉の従妹なんだよ。

ま、まさか当麻の不幸が移ったていうのかよ!?ちくしょく!

それにいまここであの日のこと言われたらやばくね?!本当に変態のレットルを張られるのだけは勘弁だ!

と、とにかく落ち着け俺冷静になるんだ。それに今回はただ学舎の園に遊びに來ただけだ。あの日の話がでるなんて万に一つない!

夏希「私はあまもとなつき天本夏希!なつちゃんって呼んでいいよ!それで今日は兄ちゃんたちに相談があるんだ。」

炎哉「俺たちに相談ってなんだよ」

透「できることなら協力するよ」

相談?まさかあの日の話じゃないよな(汗汗汗)

ヤバイ脳内で二ゲロと避難勧告の警報が鳴ってるんですけどー!?

夏希「うん、実は「いいわよ私が言うから」じゃあ、お願い。私説明するの苦手だからね」

アイリス「私はアイリス・フェーンブルグ。で相談っていうのは人探しをしてほしいの」

炎哉「人を探してほしいって特徴はわかるのか?じゃなきゃ、きついで」

アイリス「エアロマスター一応風力使いつてことはわかるわ。それも強いね」

透と炎哉が同時に俺を見た。

こつち見んな!という意思を込めて睨み返した

アイリス「エアロマスターあなた風力使いなの?」

翔「あ、ああ一応な。それより話を続けてくれ」

透、炎哉!お前らのせいでめちゃくちゃ疑われてるじゃんか俺!?

アイリス「と言っても現段階で私が知ってるのはこれぐらいよ。な

にせあの時は夜だったし気絶しちゃったから顔も見えてないわね」

透「ねえ、なんでその人を探してるの」

アイリス「理由は簡単よ。その人に不良から助けられてわざわざ寮まで送ってもらったからお礼を言いたいだけよ私は。で、この子は」と言つて夏希を見た。

夏希「私はアイリが襲われてると勘違いしてとび蹴りかましたんだけど転ばされて、当たり所が悪くて気絶しちゃったんだ」

あははと笑いながら頬を搔いていた。

ア、アウトオオオオオー！

完璧にあの時の話じゃねえか！？

どうする今なら逃げられるが……いや待てよそういうえばこの話は当麻にしか話してなかったな

つてことは炎哉と透は知らないから俺つてことがばれることはない！

炎哉「お、おい大丈夫なのか。怪我とかしてないか？」

夏希「うん、大丈夫だよ。兄ちゃんは心配しすぎだつて」

炎哉「そうか、なら大丈夫だな。……そいつ見つけ次第ボコる(ボソ)」

後半は誰にも聞こえない声で言った。

そのボコる人物がすぐ近くにいるとは知らずに。

夏希「で、私はそいつに謝罪とリベンジしたいだけ」

透「そうなんだ。そういえばそれつて何時頃の話なの」

アイリス「えーと……たしか7月14日だったと思うわ」

夏希「こっちじゃ噂になつてるよ！なにせあの常盤台の寮監を相手に逃げ延びた相手だからね」

炎哉「うーん、どつかで聞いたことがあるような？」

翔「は？」

透「え！？炎哉なにか知ってるの?!」

な、なんですとおー！待て待て俺はお前に教えた覚えはないぞ！？

炎哉「・・・7月頃・・・時間帯は夜・・・常盤台女子寮・・・寮監相手に逃げ延びた（ブツブツ）」

翔「・・・」

翔は体から冷や汗がたらたらと流れるのを感じた。

まるで死刑判決を受ける囚人の気分だ

炎哉「ん〜、お！思い出した。それって翔おまえじゃん！」

翔にビシツと指を指してきた

翔「へ？」

アイリス、夏希、透「えええー！ー！ー！ー？！」

他の三人は一齐にこつちを見てきた

炎哉「いや〜前に当麻がそのことを話してたのを思い出せてよかったぜ」

とてもやり遂げたような顔をしている。

当麻「アアあああああああー！ー！ー！ー！！！！！！！！」  
なんでよりにもよって、こいつにばらしたんだあああああああ  
ああー！ー！ー！！！！！！

翔「え〜、あ〜、そういえばそんなこともあったな。ははは」

その場を笑ってごまかそうとした。

アイリス「あなたが・・・あの時はありがとうございました。」

翔「え？ああ、別にいい ガシツ・・・よ？」

会話の最中にいきなり左肩を掴まれた。

ギギギツと壊れたブリキのように掴んでいる相手を見ると

炎哉「なあ翔、俺の大切な妹に手を出したんだから覚悟はできたよな？つーことで一発殴らせる」

とてもいい笑顔の炎哉がいた。だが目がまったく笑っていない。いつの間にか炎哉と透の座っているが変わっていた。



がんだよあいつは（汗）」

透「さあ？でも、まだいっぱいもってそうだよね（汗）」

炎哉「そうだな、警戒していくか。じゃあ、俺はあの野郎を捕まえ  
てくる。透たちは遊んでくればいいさ」

一応、店内の窓から外を見るが既に翔の姿はなかった。

炎哉「ちっ、逃げ足の速い野郎だ」

席を立ち上がり、店を出てあたりをみましたがどこにもいなかった  
炎哉「俺から逃げられる思うなよ。さて俺の勘だとあっちに行った  
な。」

自分の直感を頼りに翔を探し始めた。

透SIDE

炎哉「そうだな、警戒していくか。じゃあ、俺はあの野郎を捕まえ  
てくる。透たちは遊んでくればいいさ」

席を立つて店を出て行った

透「あゝあ炎哉も行っちゃったか。えゝとどこか遊びに行く？・・・  
おゝい反応してよゝ」

アイリスはさっきのやり取りを見て放心状態になっていた

アイリス「はっ！ええ、大丈夫よ。それよりあの2人はいつもあんな  
感じなわけ」

透「んゝ基本的にそうだね。翔が炎哉をからかって、それに炎哉が  
怒るって感じだよ。それに2人ともどこか楽しそうだしね」

アイリス「喧嘩するほど仲が良いって言うのはあの2人にぴったり  
の言葉ね」

透「そうだね。じゃあ、そろそろ学舎の園の中を案内してもらえ  
かな」

アイリス「いいわよ。それより」

夏希「えへへ、兄ちゃんダメだよそこは。でも兄ちゃんがあ ビシ  
ッい つゝ！?!?!?!?」

トリップしているところをアイリスが脳天チョップで強制的に現実

に戻した。

ねえ、アイリスさん。君、翔に似てない？（汗

その容赦がないところ、普通肩を揺らすか声を掛けるぐらいするよね。

なのにいきなり脳天チョップって（汗

アイリス「いい加減戻ってきなさい。それと夏希の愛しのお兄様はここにいないわよ」

夏希「アイリス痛いじゃん！……ってほんとに兄ちゃんがない！？どこにいったの?!」

回りを見回すが炎哉がいないことを確認してショックを受けズーンと落ち込んだ

アイリス「はあく、あなたがトリップしてる間に風間さんを追いかけてどこかに行ったわよ」

夏希「じゃあ、私もいつて「待ちなさい！」ぐえっ!」

顔をバツと上げ勢いよく席を立て出て行こうとしたらアイリスに襟首を掴まれ、蛙が潰れたような声が出た。

アイリス「あなたも行こうとしない！まったくいくら重度のブラコンとはいえもう少し考えて行動してよ。それに夏希のお兄さんから氷村さんを案内しろって言われているんだから」

言いたいことを言っただけでようやく手を放した

夏希「ケホツケホツ もう！アイリいきなり襟首掴むのはやめてよ！結構苦しいんだよ！」

アイリス「では、どうしろと?」

透「手首でも掴んであげたら?これだった夏希さんは苦しくな「いやよ」へ?……えっと、どうして?」

少し夏希を不憫に思ったのか透がフォローしようとして夏希に被害が出ないで方法を言ったがアイリスは拒否した。

アイリス「だって前に、その方法でやったらそのまま何メートルも

引きずられたのよ！それに案外、こう見えて夏希って力強いのよ」  
透「えっ！？」

バツと夏希を見るが夏希は明後日の方向を見て口笛を吹いていた。

い、意外だよ。

筋肉ムキムキってわけでもないからそんなに力があるように見えな  
いののに、でも炎哉の従妹だしある意味納得できるかも

もしかして炎哉の家系の人って皆こんなだったりして（汗

透の考えはほぼ合っているが、それを知るのまだ先になりそうだ。

夏希「そ、それより透ちゃんを案内するんですよ。速く行こー！」

夏希はその場を誤魔化すようにレジに向かった。それに続いて透も  
行こうとしたがこの一言でフリーズしてしまった。

透「と、透ちゃん？」

あまりの衝撃的な言葉にもう一度聞き返してしまった。

夏希「え、だめだったかな？ほら透って男っぽい名前だから、せめ  
てかわいいいく呼ぼうと思ったんだけど。それに女の子なんだからズ

ボンじゃなくてスカート履いてみたら？きつと似合うよ！」

透「ゴフッ」

透はあまりのダメージに吐血してそのまま俯いて動かなくなった。

夏希「あ、あれ？え、なんで？」

透「・・・お」

怒りのあまりプルプルと肩を震わせていた。

夏希「お？」

透「僕は男だー！ー！ー！ー！ー！！！！」

バツと立ち上がり両腕を挙げながら男であることを宣言したが  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

夏希はどこるか店の中にいる客及び店員も驚いていた。本格的に男  
として見られていないようだ。

透はずーんと沈み込みまわりに暗いオーラが見える。  
アイリスだけはわかっていたらしく、くすくすと笑っていた

そこまで驚くことじゃないよね（泣

それにアイリスさんも笑ってないで助けてくれれば良いのに（泣  
たしかに今までに男子に告白されたことはあるけど・・・それも  
2桁は超えたかなフ、フッフッフッフ  
フッフッフッフ・・・グスツ炎哉でも翔でもどっちでもいいから帰  
つてきて僕が男であることを証明して〜！！！！（泣

翔SIDE

ん？いまどっからか透の悲痛な声が聞こえた気がしたが気のせいかな？  
それにしてもさっきから視線がうざいな  
珍しいのはわかるがチラチラと見てくるなよな。

翔はあの喫茶店からだいぶ離れたところにいる。

一人でぶらぶらと歩いている。

翔「はあくイラつくな。こういうときは糖分でもとって落ち着くか。  
どこかに店は・・・おっ！あるじゃん」

周りを見回せば数メートル先にケーキ屋を見つけ、すぐさまその店  
の中に入った。

カランカランと音を立てて扉を開けると目の前には種類様々なケ  
キがあった。

翔「おお！すげえ！」

その光景に感動していた。

翔「さて、どうしたものか？ありすぎて困るな」  
しばらく悩んだが欲しいものが決まったらしく4種類のケーキを買  
って店を出た。

そのまま能力で建物の屋上まで飛んで適当な場所に腰掛けた。  
翔「やっぱり高いところはいいな。景色が良いし、さて食うか」

翔はあっという間に3個を食べてしまい、残り一つを食べようとしたときに

翔「ん？・・・あれは炎哉か？」

下を見ると炎哉が歩いていった。

翔「まさか、あいつ勘を頼りにここまでできたのか？・・・あいつなら有り得るな（汗）」

翔は最後のケーキを食べてゴミを砂に変えてから炎哉の元に降り立った。無論おちよくるために追いかけても逃げられることは能力を使えば十分に可能だ。

翔「よう！炎哉よくここがわかったな」

炎哉「あゝ！？てめえ翔いままでどこにいやがった！」

翔「あそこの屋上」

先ほどまでいた建物の屋上を指差した

炎哉「どつりで見つからねえわけだ。だが！ここであつたが百年目今日こそお前を捕らえてやるぞ翔！そして一発ブン殴る！」

翔「くつくつく、やって見ろよ炎哉、パワーならお前には負けるがスピードじゃ俺には勝てないぜ。」

2人してノリノリである。

それにお互い楽しそうに笑っている

翔「これが落ちたら開始の合図だ！なお、終了は夕日が落ちるまでだ」

炎哉「いいぜ！」

ポケットから10円玉を出して指で弾いた。

10円玉は空中に舞いゆつくりと地面に落ちていく。

チャリンと音とともにゴウツと風が吹き荒れると同時に翔は逃げた。それを炎哉が通常ではありえないスピードで追いかけた。

回りにいた女子学生たちは突然の強風に驚き反射的にスカートを抑えているのが大半だった。

中には冷静にどこかに電話してるものもいた。

こうして翔たちの鬼ごっこが始まった

## SIDE 黒子

現在黒子は常盤台の生徒を連続で襲っている犯人を捜索していた。襲っていると言ってもただ気絶させられてゲジ眉を書かれるだけである。佐天も常盤台の制服を来たせいで勘違いされてしまい被害者の一人になってしまった。

初春が犯人の能力を元に犯人の詳細を調べ上げたおかげで顔も名前もすでに知ることが出来た。

犯人の名前は重複じゅうふくみほ省帆はレベル2の視覚阻害ダミーチェックという能力を持っている。

どんな能力かと言えば、対象物を「見ている」という認識そのものを阻害することで、誰からも見えなくなることができる。

だが、欠点があり鏡や監視カメラにはばつちりと映ってしまう。

今、初春が学舎の園の監視カメラにアクセスして犯人を監視しながら、犯人がどこにいるかを黒子たちに教えている。

こうなってしまうは無能力者と同じだ。

学舎の園の裏路地の壁にもたれかかりながら犯人を待っていた。

黒子「まったくせつかくの非番ですのに」

はぁーとため息をつくときとタタタとこちらに向かって走ってくる音がする。姿は見えないが裏路地は狭く2人いればギリギリのスペースしかない。そこでタイミングを合わせて軽い蹴りを放った。

犯人はドンツと勢いよく尻餅ついていた。

すでに能力は解けていてその姿は見えていた。

相手が倒れている間に風紀委員の腕章を相手に見せながらお決まりのセリフを言う。

黒子「ジャツジメントですの。おとなしくお縄についてくださいまし」

犯人は一度舌打ちをして再度能力を使って逃げたっていった。

黒子「ってつくわけないですわね」

わかりきっていたことだが、ふとため息が出てしまう。

気を取り直して

黒子「初春、ナビをお願いしますわ」

初春「はいはい」

という声が通信機から聞こえてくる。

初春「路地を出て左、三番街に入ってください」

と指示があつた。

黒子「了解ですのっ」

通信を切り向かおうとした瞬間。ピリリツと電話の着信が鳴った。

黒子「なんですか?」

怪訝な顔をしながらも電話に出た

黒子「もしもし、白井ですの」

個法「もしもし、白井さん。もう一つ厄介事を受けてくれるかしら」

風紀委員の先輩であり自分の上司的立場にあたる個法こほうみい美偉からの電話だつた。

黒子「厄介事ってなんですか?」

個法「さつき学屋の園にいる生徒から連絡があつたんだけど、どうにも茶髪の男と赤い髪の男が学舎の園の中で爆走しているらしいのよ」

黒子「へ?」

予想外の回答に固まつてしまった。

個法「茶髪の男は風使いエアロマスターみたいで能力で移動しているから物が飛んだりして少し被害が出るらしいのよ。それに赤い髪の男は普通ではありえないスピードで走っているらしいから誰かにぶつかれば怪我人が出るだろうから捕まえてほしいのよ」

黒子「そ、そんなんですの(汗)できるだけ速く捕まることにしますですの。では」

ブツツと電話を切つてからこめかみを押さえた。

ま、まさかとは思いますが、いえ、ほぼ確実にありえないスピードで走っている赤い髪の男とは近藤さんですの(汗)

ただの不良なら、まだ知れず近藤さんとなると厄介ですわね。まあ、いざとなれば実力行使に出るのです。では、さっそく初春に探してもらおうですの

黒子「初春、少し探してほしいことがあるのです」

初春「はいはい。なにを探せばいいんですか？」

黒子「赤い髪の男と茶髪の男ですの。」

初春「……はい？」

黒子「その2人が学舎園の中を爆走しているらしく被害が出ているらしいですの……って聞いてますの？」

初春「あ、はい。え〜と、もしかして近藤さんと風間さんですか？」

黒子「風間さんという殿方はわかりませんが、赤い髪の男は間違いないく近藤さんですわね」

初春「わかりました。調べておきます」

黒子「お願いしますわね。」

ここで通信を切って先ほど支持があつた場所に向かった。

SIDE翔

いや〜炎哉もがんばるね〜

俺は能力で移動しているだけだから、楽なんだよな〜

お！公園があるじゃん。そろそろ夕日が出てきたしどこかで撒いてみるか

翔「そろそろ諦めたらどうだ？」

一応確認を取ってみるが

炎哉「だが断るっ！」

まだやる気のような。

翔「んじゃ、これを使わしてもらおうか」

と先ほど使ったスプレーを適当に噴射した。

炎哉「やべっ！」

反射的に目を覆ってしまった。

翔「ははは、それはただの着色料がついたスプレーだ。じゃあな、炎哉」

炎哉「へ？」

目を覆っていた手を退けると翔の姿がなかった。

あたりを見回せば空を飛んで公園の中に入っていくのが見えた

炎哉「だ、だまされたぁー！ー！ー！ー！ん？透じゃねえか！どうし、うおっ！ぎゃー！ー！」

という声が後ろから聞こえた。

翔「よし、撒いたな・・・ん？」

と公園のブランコの棒の上に座るとキィキィとブランコを漕ぐ音が聞こえた。

翔「だれ・・・っげビリビリ（汗）」

気になって下を見ると、かの有名なビリビリがいた。

美琴「ん、あんた誰よ？それよりなんでここに男がいるのよ？」

ブランコから立ち上がりこちらを見上げて首を傾げていた。

どうやら「っげビリビリ」という言葉は聞こえてないようだ。聞こえてたらお得意のビリビリを喰らったかもしれない

そういえば、今日ってゲジ事件の日だったな。

まあ、ビリビリに会っても当麻がいなければ被害はでないから大丈夫だよな

翔「いや、ちょっと筋肉ゴリラから逃げてきたただだ。」  
手を軽く挙げながら答える。

美琴「筋肉ゴリラ？なにそ タタタッ 来たわね」

言い終わると同時に重複省帆が公園に来た。

だいぶ疲れているらしく肩で息をしている。

その後ろから黒子と佐天が来た。

翔「団体様ごとうちやく」

これから面白そうなことが起きると思ひ、なにもしないで傍観すること

黒子「初春の報告どおりここにいましたわね。ジャッジメントですの！今すぐお縄についてくださいまし」  
はできないようだ。

思いつきり重複ではなく翔を見てる

翔「え、おれ？彼女じゃなくて」

重複を指差しながら答える

黒子「あたりまえですの！学舎の園で暴れたのを忘れたんですの！え、なにやっつてんの！？といった顔で佐天たちが見てくる

翔「いや、暴れたって（汗 鬼ごっこしてただけだぞ」

黒子「どこが鬼ごっこですの！回りのものを吹き飛ばす鬼ごっこなんてわたくしは知りませんの」

ツインテールが逆立っている、どうやらかなりご立腹のようだ。

翔「俺の中じゃ普通なんだが・・・まあ、いいか。それより炎哉はどうしたんだ？公園の入り口辺りにいたと思うが」

と言った瞬間、変な目で見られてたが気にしないでおこつ

黒子「近藤さんなら氷村さんに捕まってるころだと思ひますの。

初春が氷村さんと呼んでくれて助かりましたわ」

翔「あら、捕まったのか。で、今度は俺か？」

黒子「わかりきったことを聞かないでほしいですわね」

翔「まあ、いいけど。それより先にその子を捕まえなくて良いバチッ 早いな」

話してる間に美琴が軽い電気を重複にながして気絶させた。

美琴「黒子もう終わらしたわよ。次は」

と行ってこちらを見てくる。やる気満々のようだ。その証拠に体からバチバチと電気が出ている

翔「万事休すだな、俺。こういうときは三十六計逃げるに如かず！

ガシッ がはっ！」

能力を使って上空に上がって逃げようとしたが黒子がテレポートで

翔の襟首にぶらさがっていた。

やばっ、首が！？息ができ・・・な・・・い！？

必然的に首が絞まり呼吸困難になっていた。その証拠に顔が青くなっている。

黒子「すこし座標を間違えましたわね。それよりおとなしくお縄についてくださ・・・って落ちてますの！？」

翔は首が絞まつてるおかげでうまく能力が使えなくて落ちてしまっている。しかもそれなりに高くあがったため落ちたらお互い重傷は間違いなさそうだ。

透「なんかヤバイことになってるよ！？」

アイリス「落ちたら重傷は間違いないわね」

夏希「冷静に分析してる場合っ！？」

そろそろと公園の入り口から透たちが来た。

炎哉は絶賛気絶中だ。

翔「お・・・い・・・はな・・・せ」

声をなんとかしぼりだして黒子の手を叩きながら言った。

だが、黒子は気づかなかつたらしくまだ掴んでいた。その手首を掴み襟首から無理やり引き剥がした。

翔「ゲホッゲホッ・・・ふうー死ぬかと思った。それにしてもエア

ロマスターが落下で死んだなんて笑えねえ」

黒子「なにを冷静にしているのですの！絶賛落下中ですのに！」

あまりの余裕な態度に少しいらつきを感じた黒子。

それに若干涙目だ

翔「いや、落下の原因はお前だから。はあ、ったくおとしなくしてろよ」

と言って黒子を自分のほうに引き寄せお姫様抱っこをした。

黒子「な、なにをしますのですの！今すぐ、離すですの！／／／」

こういう経験がないのか顔を真っ赤にしながら離れようと手足をバ

タバタさせた。

翔「まったく暴れんかって！それにいま、離れたら怪我するぞ。」  
そう言うと黒子は抵抗するのをやめた。

翔「よし！それじゃ降りるからそのままにいるよ」

再び能力を使い地上にゆっくりと降りた。

地面に降り立った瞬間、美琴たちがこちら駆け寄ってきた。

ただ、一人アイリスだけがムスツとした表情をしていたが翔は気づいていない

それに本人もなぜムカつたのかはわかっていないようだ。

黒子をそつと地面に立たせた。

小さな声で、ありがとうですの、という声が聞こえた

透「翔、大丈夫！」

翔「よう、透！軽く三途の川を渡りそうになったよ。それより、なんで気絶してるんだこいつは？」

透「炎哉なら翔が前に教えてくれた背負い投げをして、スタンガン使ったら気絶しちゃった」

翔「いや、気絶しちゃったってお前よくこんなものを持ち上げられたな（汗）」

あえて、スタンガンのところは触れなかった。なぜならそのスタンガンは翔は改造して透に渡したものだからだ。

威力は、最大で人を殺すぐらいまで出せる。違法ではあるが、ばれなければ問題なし！

透「結構大変だったんだよ。それより」

ガチャンと手錠を掛けられた

翔「ちょ、おまっ！」

透「じゃあ、これから反省文書いてもらうからよろしくね」  
とてもつもなくいい笑顔だ。

そう、笑顔ならいいのだが後ろ黒いオーラが見えるの気のせいだろうか？

翔「いやいやいや！お前ってそんなキャラだっけ?!」

透「大丈夫だよ。数十枚書くだけだから」

翔「多いわっ！・・・ん？佐天なにやってるんだよ？」

佐天「えっ！？え〜と、こいつにちよつとした仕返しをしようかと」

佐天は手にマジックを構えて、もう片方の手で重複の前髪をかきあげていた。

そこから短いゲジ眉が見える。

翔「ふーん仕返しねえ〜、そいつ、そろそろ起きるぞ」

佐天「へ？」

と言ったと同時に

重複「ん、ここは？きゃあ！？」

重複は目を覚まし佐天の手を振り払い再び前髪で眉毛を隠した。

佐天「え、えつと〜」

予想外の反応にどう反応すればいいか困っている佐天

重複「おかしいでしょ。笑いたければ笑えばいいのよ！あの人みたいに！」

ヤケクソ気味に叫んだ

「……………あのひと？」「……………」

その場にいた炎哉を除いた全員が疑問の声をあげた

もちろん、透と翔はただの演技だ。

重複は自分の過去を語りだした

（回想中）

重複「この世の全ての眉毛が憎い。だからっ、みんなおもしろい眉毛にしてやろうと思ったのよ！」

黒子「え〜と」

美琴「ごめん、途中から話が見えない」

アイリス「こんなことするより男に復讐しなさいよ」

うん、うんと他のメンバーも頷いている。

佐天だけはポカーンと口を開けて呆然としている。

重複はその反応にむかつき

重複「なによ、笑いなさいよ」

バツと自ら前髪をかきあげ佐天にズイツと近づけた

佐天が困っているのを見かねて

翔「その前に、お前。その眉毛をどうにかしようとしたのか？」

少し咎めるような口調で言った。

重複「えっ？それはしたわよ！だけど何回も剃っても逆に濃くなっ

ていくばかりだし……」

そこまで言っただけで俯いてなにも言わなくなった

翔「いや、そうじゃなくて（呆れ）」

アイリス「この学園都市なら、そのゲジ眉を普通の眉毛にできるん

じゃないかって言ってるのよ風間さんは」

確実に傷口を抉る一撃だ。

翔「ストレートに言うなお前（汗 まあ、その通りなんだがな。う

くん、だったらその眉毛、俺が直してやるのか？」

重複「え?!」

佐天と透を除いた全員が驚いた。

黒子「どうやってやるというのです!? あなたの能力はエアロマ

スターのはずですの!」

夏希「もしかして、彼女の眉毛をセットしてあげるとか!」

翔「いや、できねえことはないがしないから。まあ、黙って見てろ」

翔は重複に近づき前髪をかきあげ眉毛を隠すように手で覆った。

既に透に頼んで手錠を外してもらっている。

重複「にやつ!」

その行動に重複は顔を真っ赤にした。

透「出たよ。無自覚症状が（呆れ）」

透は呆れていたがなにやるのか気になっていた。

他の全員も興味津々に見ている

唯一、アイリスと黒子はおもしろくなさそうな表情をしているが翔がやることには興味津々のようだ。

透、聞こえてるぞ（呆れ  
別にこれぐらい普通だろ！

それに、こいつが憐れすぎるからやってるだけだ。

普通と思っっている時点でどこかズレている翔だった。

翔「それじゃ、むず痒いかもしれないが動くなよ」

重複「んっ！」

重複は眉毛からむず痒さを感じた。

翔「よし、終わりだ。もう、いいぞ。すまんが誰か手鏡持ってるか？」

と聞いてみたら黒子が持っていたので重複に貸すように頼んだ

黒子が持っていた手鏡を重複に渡した。

重複は手鏡を受け取り恐る恐る見た。

重複「えっ！？ほんとだ！本当に普通の眉毛になってる！」

重複は眉毛が普通になっていることに歓喜し、泣いた。

#### SIDE OUT

時は過ぎ、重複はアンチスキルの車に乗って行った。

最後に頬を染めて翔を見ていたが、翔はその意味に気づいてはいない

美琴「あの子完璧に姿を消してたよね？」

黒子「そういえば、レベル2だという話でしたのに、変ですわね」

美琴「変っていえば、翔さんが使っていたあの能力も今まで見たこ

とないわね」

黒子「たしかに、今まで見たことないですわね」

とこちらを見てきた。

目で、さっさと白状しろ」と語っている。

すでに自己紹介は終えている。

翔「別に教えてもいいが、また後日にしようぜ。これから反省文を書かなきゃいけないからな」

透「そうだね。今日は徹夜になりそうだよ」

炎哉「俺と翔がな・・・はあ〜」

気絶していた炎哉がなぜ起きているかというところ。

気絶していた炎哉を翔が人体のツボを押して激痛を与え強制的に起こした。

反省文を書くことを伝えたらorzの状態になっていたが翔も一緒に書くことを伝えたら絶望の顔からザマアと表情を変えていた。

勿論そんな顔をした瞬間、例のスプレーをかけられ悶絶していたが・・・

翔「あ、そうだ。アイリスこれ渡しとく」

アイリスを呼び捨てにしているのは本人がそう呼んでくれと頼んだからだ。

翔はなにかが書いてあるメモ用紙をアイリスに渡した。

アイリス「これは？」

首を傾げていた

翔「なに俺のメアドと番号が書いてある紙だ。困ったことがそれと呼んでくれ。じゃあ透、炎哉行こうぜ」

そういつて先に歩いて行った

炎哉「夏希、今日はごめんな。今日の埋め合わせはまた今度するかだよ。じゃあな！」

翔の後を追いかけた

夏希「うんっ！絶対だよ兄ちゃん」

と手を振っていた

透「それじゃ白井さん。僕が翔たちを連れて行くから今日は休んでていいよ」

白井「わかりましたわ。存分に休ませてもらうとしますの。」

透「あ、あはは」

予想通りの反応に苦笑していた。

透「それよりアイリスさん良かったね！」

アイリス「へ？」

透「翔は気にいった相手にしかメアドを渡さないし名前も呼び捨てじゃ呼ばないからね」

アイリス「え、それって」

透「それは翔に聞いてね。それじゃ」

アイリスの質問を遮って、透は翔と炎哉の後を追った。

黒子「まったく騒がしい人たちですわね」

美琴「確かにね。それより翔さんってあいつのこと知ってる気がするのよね〜今度聞いてみようかな？」

黒子「また、あの殿方ですね！きい〜！」

どこからともなくハンカチをだして、それを噛んでいた

夏希「よかったねアイリ！」

アイリス「フフフ。ええ、とてもいい休みになりました。ありがとうございます  
う夏希」

全てを魅了するようなとても綺麗な笑顔だった

実際にその笑顔に全員顔を赤くさせていた。

夏希「え、う、うん！」

顔を赤くさせていたが満足そうに頷いた。

佐天「ほ、ほんとにお嬢様って感じ」

美琴「実際にお嬢様よ」

佐天「え、そうなんですか！」

アイリス「ええ、そうよ」

佐天の疑問に頷き、軽く話してから解散した。

おまけ

カリカリツとある部屋で紙になにか書く音が響いていた。

翔「終わんねえ〜！透もう少し量を減らしてくれ！」

あまりの多さに透に懇願するが

透「ダメ」

たった二文字で却下された

炎哉「はっはっは。普段から反省分を書いている俺にとっちゃん

なの楽勝だ！よし、透。終わりだ見てくれ！」

まったく自慢にならないことだ。それを胸を張っていえるのだから、ある意味大物だ

書き終えた反省分を透に見せた。

透はそれを見るが、眉間を険しくさせていた。

透「え」と書き直して

炎哉「なんでだよっ！」

透「だって炎哉の文字読めないんだもん！」

翔「どれどれ・・・なにこれ暗号？」

翔が横から見ると、あまりの字の汚さに字が暗号化していた。

炎哉は速く書くことに集中していて字の丁寧さなど二の次どころか遠くに投げ捨てていた。

透「だから、書き直し！」

炎哉「ちくしょおおおー！ー！ー！」

翔「くつくつくザマア」

炎哉「なんだとっ翔！やんのかゴラア！」

席をたち胸倉を掴むが

透「いま、ここで事を起こしたら10倍に増やすよ（ボソッ）」

すぐに手を引っ込めた。

透「わかった？」

とてもいい笑顔だ。

だが目が笑っていない。しかも黒いオーラ出ている。

透「返事は？」

翔、炎哉「sir, yes, ser！」

今の透には逆らわないどころと2人は思った。

書き終わった頃にはすでに朝日が出ており、屍が2体出来ていた。

透だけはぐっすり寝ていた。

翔、炎哉「妬ましい！」

自業自得だ。

## ゲジ眉事件と三人の不幸な日（後書き）

誤字、脱字、感想があつたら遠慮なく言ってください。

美琴と翔の出会いですが至つて普通にしました。

まあ、美琴は翔が当麻の知り合いとは知らないから、ああいう態度を取っただけで知つたら変わるかもしれないがねw

これにて第十二話の終了！

また次話で会いましょう！ではでは！

虚空爆破事件（前編）（前書き）

また、投稿に時間が掛かってしまいました。  
すみません

では第13話のはじまりはじまり〜

## 虚空爆破事件（前編）

### 翔の部屋

翔の部屋では翔と炎哉が昼ご飯を食べていた。  
無論全て翔が作っている。

翔「ふああゝ、ねむ。それにしても今日が虚空爆破事件か。さてさて透はどう動くやら」

あくびをしながら独り言のようにつぶやいた。

炎哉「さあな、あいつなりがんばるじゃねえの。それよりこれもうぞ」

言い終わるころには翔のアジフライをもう食べていた。

翔「っておい！？人の最後のアジフライを！返しやがれ！」

炎哉「残念だったな翔！もうすでに俺の胃の中だ。それでもいるのか？」

ソファーから立ち上がり炎哉の胸倉を掴んで前後に揺すりながら言ったが炎哉の言葉を聞いてやる気が失せ、舌打ちをしながら胸倉を離し、ドツカリとソファーに座った

翔「で、お前は介入しないのか？」

目の前で今だに飯に喰らいついている野獣炎哉に聞いた。

炎哉「いや、ここは透が活躍してくれるだろ？だったら俺たちはゆっくりして」

とそこで炎哉の携帯が鳴り出した。

炎哉「もしもし炎哉だが・・・おお、夏希か！どうしたんだ今日は？」

どうやら電話の相手は夏希のようだ。

電話の相手が夏希だと知ると炎哉の頬がすこし緩くなっていた、ボソリツと翔が「シスコン」と呟いたが聞こえてはいないようだ

炎哉「そういえばそんなこと言ったな。わかった、男に二言はない！・・・ん、翔もか？」

チラツと翔を見るが本人は理由がわからず首を傾げていた

炎哉「わかった。で、場所はどこだ？・・・いや、なんでもない。2時ごろに集合すればいいんだな。わかった、じゃあな」

電話を切ろうとしたときに電話の向こうで騒ぎ声が聞こえたが炎哉は軽くスルーしていた

そして、電話を終えると同時に炎が落ち込みだした。

炎哉「ズーン・・・はあ」

翔「なぜ、そこで落ち込む？！」

いきなり落ち込みだした炎哉に翔は驚いた

炎哉「なあ、翔。神様っていると思うか？」

ハハハと虚ろな目で笑い出した

翔「いや、いるといたないとかじゃなくて、俺はその神によって生き返させられただろうが！」

いきなり変なこと言い出す炎哉に翔はすかさずツツコミをいれた

翔「で、相手はお前の妹らしいがどこかに行くのか？」

炎哉「セブンスミスだよ」

翔、炎哉「……………」

しばらく沈黙続いたが

翔「くつくつくくくははははははは。なんだよそれ、さっきまで行きたくなえとか言ってたやつが行くことになるとはな！」

いきなり翔は腹を抱えて笑い出したが

炎哉「言つとくが翔がためえもだぞ」

翔「へ？ナゼオレマデ？」

炎哉の一言で笑いが一瞬で止まった。

あまりの予想外な言葉に片言になってしまった

炎哉「ほら、この前あったフェーンブルグってのがお前のことをい

指名だそうだ。よかつたなモテ野郎」

翔「Noooooooooooooooooo！」

頭を抱えて叫んだ

炎哉「いや、そこは喜べよ！？」

翔の予想外のリアクションにツツコミを入れた

翔「いや、嬉しいけど・・・場所があれだろうが！」

炎哉「そうなんだよな・・・なあ、いいこと思いついたんだが」

翔「ああ、俺もいま思いついた」

ニヤリと笑みを浮かべて翔を見ると翔もそれにニヤリと笑みを返した。

翔、炎哉「事を起こす前に犯人を見つけ次第ぶつ潰す！」

同時に席を立ち上がり宣言した。

炎哉「そうと決まれば、さっさと潰しに行こうぜ！」

翔「ああ、そうだな。この透にあげた予備のスタンガンで仕留めてくれる！」

翔、炎哉「フフフフ、アハハハハハハハハハハ」

不気味な笑い声が周りに響いていた。

翔、炎哉「さあ、狩りに行こう！」

2人は同時に部屋から出て行った。

その後ろ姿はこれから戦場に行く男の姿だった。。  
というか行く目的がすでに変わっている2人であった。

アイリスたちの部屋

夏希「うっ、ひまっ」

夏希は枕を抱きしめベッドの上で転がりながらうめいていた

アイリス「そんなに暇なら課題でもやったらどう？」  
咎めるような口調で言う

夏希「え〜、だってまだ日にちがあるから大丈夫だよ！ねえ、アイリなんか良い提案ない？」

アイリ「はあ〜、だったらあなたの愛しのお兄様に電話して買い物にでも出掛けたらどう？」

夏希「う〜ん？でも、大丈夫かな？」

首を傾げながらアイリスに訊ねる

アイリス「この前の約束を言えば大丈夫でしょう」

夏希「あ！そっすいえばそうだね！さっそく電話電話」

退屈そうな顔からペアと嬉しそうな表情に変え、電話をかけていた。コロコロと表情が変わる子だ。

アイリス「まったく退屈しない子ね」

呆れたような嬉しそうな声で言った

夏希「あ、もしもし兄ちゃん あたしだよ夏希だよ！」

とても嬉しそうな表情だ。

その様子はまるで恋する乙女のようなのだ。・・・実際そうだけど

夏希「この前、埋め合わせしてくれるって言ったよね。それで今日買い物に付き合っ！」

そこでチラッとアイリスを見てから

夏希「やったー！あと風間さんも連れてきてくれない？アイリが会いたいんだって」

アイリス「ふえ！？／／／」

ニヤニヤ笑いながら言った。

アイリスは驚きのあまり変な声をだし、顔を真っ赤にさせ固まっていた。

夏希「ありがとう。場所はセブンスミストだよ。・・兄ちゃんどしたの？」

いきなり向こうからの反応がなくなったことに首を傾げていた。

夏希「そう？じゃあ、二時ごろにセブンスミストの前に来てね」な、  
夏希「いいいいー！！！！」わひゃあ！？じゃ、じゃあね兄ちゃん」

再起動したアイリスが夏希に襲い掛かった。

それに驚いた夏希は慌てて電話を切って必死に避けた。  
追いかけるこはしばらくづづいていた。

アイリス「よ、よくもあんな嘘を言ってくれたわね！／／」

夏希「でも、風間さんに会えてうれしいでしょう？」

お互いハアハアと肩で息をしていた。

アイリスはまだ恥ずかしいのか顔を赤くさせていた。

アイリス「あう／＼／＼／＼／」

凶星なのか更に顔を赤くさせ縮こまり、ごじごじによとなにか咳いていた。

このとき夏希は「なに、このかわいい生き物」とつぶやいていたが聞こえてはいないようだ。

夏希「ほら、縮こまってないで行こう！」

とアイリの手を引っ張った。

アイリ「ちよつ、ちよつとまだ心の準備が／＼せめて着替えさせなさい！」

夏希「うくん、わかった！じゃあ私も着替えることにしよう。」

指に顎を乗せ一瞬考える仕草をするが、すぐにクローゼットのほうに向かった。

アイリスもそれに続いてクローゼットに向かいどの服を着るかを悩んでいた。

夏希「これとこれにしよう 兄ちゃん驚くかな」

アイリス「まったく、相変わらずのお兄ちゃんLOVEね」

夏希「そういうアイリだつてずいぶん気合入ってるよね、それお気に入りの服でしょ」

アイリス「う、うるさい！？／＼／」

話しながらも着替える手は休めてはいない。

夏希「じゃあ、着替え終わったらし行こうアイリ！」

アイリ「そうね、少し急いだ方がいいかもね」

時計を確認するとここからゼボンミストまで歩けばギリギリに着く

時間だった。

2人は急いでセブンスミストに向かった。

SIDE翔

俺たちはセブンスミストの入り口近くでアイリスたちを待っている。そこで虚空爆破事件の犯人がいないかを探しているが

翔「おい、炎哉。周りにあやしいやつはいるか？」

炎哉「いや、いねえ。はあくこんなことなら透に特徴聞けば良かったんじゃないか？」

翔「ばかやろう！また、あんな量の反省分を書くのはいやだぞ！？」

炎哉「はあくなんで憶えてねえんだよ」

翔「それはこつちが言いたいわ！」

そう、俺たちは犯人の顔をまったく憶えていない  
それに気づいたのは約数分前

数分前

セブンスミストが目の前に見えてきた。

炎哉「そっぴや、翔。お前犯人の顔知ってるか？」

唐突に炎哉が聞いてきた。

翔「はあ？知るわけないだろ。俺はどつちかていうと禁書派だぞ。  
それに超電磁砲レールガンなんてアニメで一度しか見てないから大まかな流れ  
しか憶えてねえよ・・・まさかお前？」

ギギギと首を動かし横にいる炎哉を見る

炎哉「おう！忘れたぜ！ブフォツ！？」

とても良い笑顔で、サムズアップして答えやがった。  
ムカついたので思いつき殴ってやった

翔「なんで、憶えてねえんだよ！？てめえと透が漫画とアニメを繰り返し見てたじゃねえか！答えろや、脳筋ゴリラが！」

炎哉の胸倉を掴み思いつきり前後に揺らす

炎哉「忘れたもんはしょうがねえだろうが！だいたいあんな影の薄いモブキャラの顔なんて憶えたくもねえよ！あと、脳筋ゴリラ言っ  
な！」

翔「何回も見てたんなら、あんな幽霊並に影がうすいモブキャラでも特徴の一つや二つぐらい憶えてるーーーー！！！！！」

そのあと犯人に対する罵詈雑言は続いた。

ここに犯人がいたらきつと今頃、樹海で身長を伸ばしに行ってるかもしれない。

翔「はあ~~~~！憶えてないならしょうがねえ。とりあえず怪しい奴がいたら即狩るぞ！」

炎哉「おう！」

現在

翔「そろそろ約束の時間だな。おい炎哉、一旦中止だ」  
炎哉「もうそんなじか「兄ちゃん」来たみたいだな。お〜い夏希  
！」

声のした方向を見ると大きく手を振っている夏希とその横を静かに歩いているアイリスがいた。いつもと違って髪を下ろしており、綺麗な金色の髪が腰まで届いていた。

その姿に翔は思わず見惚れてしまった。

炎哉「おい、翔。なにボーツとしてんだ？」

翔「・・・はっ！いい、いやなんでもない」

炎哉「へえ、もしかして翔。フェーンブルグの姿に見惚れてたのか？」

翔「なっ／＼／う、うっせえ！」

顔を赤くしながら怒鳴るが照れ隠しにしか見えない。

夏希「ごめ〜ん。ちょっと遅れた」

アイリス「待たせてすいません」

炎哉「ぜんぜん遅れてねえよ。むしろ時間ぴったりだからな」

翔「そういうことだ。それじゃ、中に入るか」

四人はセブンスミストに入っていた。

#### セブンスミスト4F

夏希「ここからは別行動しよう。それじゃあ行こっか、お兄ちゃん」

ぐいっと炎哉の腕を引っ張る

炎哉「お、おい?!いきなりなにを!？」

夏希「実はね・・・ゴニヨゴニヨ・・・ってことだから行こっ!」

炎哉「わかった。んじゃ、俺たちはここで別行動取らせてもらっつ。

いくぞ夏希！」

夏希「うんっ、兄ちゃん」

翔「っておい!?!」

そう言つて2人は翔の静止の声を聞く前にどこかに行つてしまった。

翔とアイリスは突然のことに呆然とした2人が残された

虚空爆破事件（前編）（後書き）

いろいろな感想ありがとうございます。

特にシヨウウさんの指摘をこれから生かしていこうと思います。

ありがとうございます。

主人公たちの自己紹介もそろそろ出そうと思います

では第13話これにて終了

ではでは

誤字、脱字があったので修正しました。

虚空爆破事件（後編）（前書き）

今回は早めに投稿することができて良かったです。  
では第14話のはじまりはじまり〜

## 虚空爆破事件（後編）

SIDE翔

翔「はあく、あいつらなに变な気を回してんだか。まあ、いいか。アイリス俺たちもいこうぜ・・・おい」

いまだに固まっているアイリスの前で手を振ってみるが反応がない。

翔「はあく、しょうがない・・・秘儀ねこだまし！」

パンツとアイリスの顔の前で猫だましをした。

アイリス「にやっ!？」

猫みたいな声を出して驚いていた。

猫だましだけにか・・・くだらないことを考えるのはやめとこ

翔「さて、もう一度言っけど別行動みたいだから俺達は俺達で行動するか」

アイリス「そ、そうね・・・まったくなにを考えてるのよ夏希は・・・いきなり2人きりにするなんて（ボソツ）」

いきなり顔を俯かせてブツブツといい始めたアイリスなに言ってるかまったく聞き取れない。

翔「どうかしたか？」

アイリス「い、いえなんでもないわ!／／／／」

顔を近づけて聞いてみたら、バツと離れて距離を取られた

・・・あれ、もしかして俺嫌われてるのか？

翔「そ、そうか。で、行きたいところはないのか？」

アイリス「特に考えてなかったからいろいろ見て回りたいわね」

翔「了解」

それから2人はいろいろ見て回っていた。

翔「へ〜いろいろあるな」

アイリス「そうね。こう多いと欲しいものが多すぎて迷っちゃわね」

翔「欲しいものがあつたら言えよ。買ってやるから」

アイリス「そ、そこまでしてもらわなくても自分で買っわよ」

翔「まあ、そう言うなつてここは俺に払わしてくれよ。ちよつとした男の意地だよ」

アイリスの頭を撫でながら言う顔と顔を真っ赤にさせていた。

・・・そっぴや妹のときも頭撫でたら顔真っ赤にさせてたっけ

アイリス「わ、わかつたわよ／＼／＼／＼」

消え入りそうな声で返事をした。

翔「よしっ、じゃあもう少し見て回つてから決め・・・ん、あれは？」

あのとげとげ頭つて当麻か？

アイリス「どうかしたの？」

翔「いや、あそこにいる奴が知り合いに似てたからな。ん〜ちよつと待つててくれ」

そう言つて一目散にその人物のもとに向かった

アイリス「あつ、もう！」

アイリスもその後を追った。

翔「おーい当麻」

当麻「ん？よう翔！」

お互い手を挙げて言葉を交わした

翔「なんで男のお前がここにいるんだよ。・・・まさか、当麻お前！？女装に目覚めたのか！？」

当麻「ちげえよ！そういうお前も一人じゃねえかよ！」

翔「いや、俺は一人じゃね」「いきなりどこかに行かないでください！」ということだ

後ろからアイリスが文句を言いながら来た。

アイリスを見た当麻がこちらを指差し

当麻「か、彼女！？」

と言った

アイリス「ち、違うわよっ！／＼／」

翔「いや、そんなに全力で否定しなくてもいいだろ」

なに、そんなに俺って嫌われてるのか？

んゝ原因がわからん

アイリス「い、いえ、あの、その／＼／／」

アイリスはあわあわと慌てだした

翔「まあ、落ち着けアイリス。で、なんで当麻がここにいるんだ？」  
当麻「ああ、実は「おにいちゃん」」

当麻の後ろから幼い女の子の声が聞こえた。

その女の子は当麻の隣には立った

……おちよくるネタ発見！（キラン 目が光る音

当麻「ということだ。……って待て翔！？なんで無言で携帯を出す！？」

そんな当麻の言葉を見無視してあるところに電話をかけた。

翔「もしもしアンチスキルですか」

当麻「アンチスキル！？おい、マジで待て冗談になつてねえから！？」

翔「目の前に幼女誘拐犯がいるので早急に捕まえ「すいません今は間違え電話です！……つてあれ？」くくく」

翔から電話を奪い取って訂正を入れてみるが、向こうから反応がまったくない。

携帯電話を見ると待ちつけ画面のまま履歴を見るとアンチスキルに電話をかけた形跡がまったくない。

ギギギと翔の方を見れば腹を抱えて笑っているところを見て察した

当麻「また騙されたー！」

過去にも何回か翔に騙されて遊ばれていることがある当麻

翔「はははは、ゲホッゲホッ……ナイスリアクション！」

咽ながらも親指をグツと立ててとてもいい笑顔で言った。

当麻なんでそんないい笑顔?!あと、その2人も笑わないでください!上条さんの心はもうボロボロです!」

アイリスと女の子も当麻のリアクションに笑っていた

翔「いや〜あそこまでリアクションをしてくれるのはお前と炎哉だけだぜ」

当麻「はあー不幸だ。ったくお前のイタズラは心臓に悪いぞ!」

翔「イタズラにも全力を尽くすのが俺だ!」

当麻「つんなことに全力だすな!」

翔「それでその女の子は誰だ?」

当麻「スルーですかこの野郎。はあ〜この子が洋服店探してるっていうからここまで案内してきただけだ。けっっっしてお前が考えることはないからな!」

翔「ちっ、つまらん(ボソツ)」

当麻「ボソツと不吉なことというな!まあ、俺たちはこっちにいくからじゃあな」

そう言っただけで女の子と手をつないで翔たちとは逆の方向に歩いていった。

翔「さて、当麻で遊んだしまった見て回るか」

アイリス「そうね。それにしても フフツ あの驚き方は面白かったわ」

翔「あいつの周りは常に笑いが絶えないからな」

アイリス「なんか、わかるかも。あっ、あれなんていいわ」

翔「どれどれ」

アイリスが指差した先にはフリルのついた黒のスカートとそれに合うような黒い服が飾られていた。

翔「へえ、かわいいな」

アイリス「ええ、これ気に入ったわ」

翔「じゃあ、買いに行こうか。値段は・・・合計で5万越え!？」

アイリス「え」と私が出すわよ」

翔「いや、いいよ。たしか財布に8万入ってたはずだからな」

アイリス「えつ、風間さんの家つてお金持ち?」

翔「ん、普通よりは裕福な家庭だな。まあ、レジに行こうか」

2人はレジに向かいその服を購入した。

服が入った紙袋をアイリスは胸元で大事そうに抱えていた。

アイリス「ありがとうございますっ!」

満面の笑みで翔にお礼を言った。

翔「お、おう。喜んでもらえてなによりだ」

少し気恥ずかしくなりアイリスから顔を逸らして頬を掻きながら言った

アイリス「では、夏希たちと合流しましょ」

翔「もう、いいのか?」

アイリス「ええ、今日は充分楽しめたわ」

翔「そうか、それは良かった。」

アイリス「またお願いしてもいいかしら?」

翔「わかりましたよ。お姫様」

アイリス「では、夏希に電話」お客様にご案内申し上げます。』ん

「なにしかしら」

突然の放送にその場にいた人全員が首を傾げ耳を傾けていた

『現在、電気系統の故障が発生したため、誠に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。』

「ええ、そんな」

「なにが、あつたんだろう？」

と言う声がちらほら聞こえてくる。

『係員がお出口までご案内致します』

アイリス「なにがあつたのかしら？」

翔「さあな、でも出口まで行くか。．．．．．たたく透の奴なにやってんだ（ボソリ）」

アイリス「なにか、言いましたか？」

翔「いや、なんでもない行こう」

2人は他の人と一緒に出口に向かい、外に出た

外

翔「さて、炎哉たちはどこだ？でかいからすぐわかるはずなんだが」  
アイリス「見当たらないけど」

周りを見渡すが炎哉たちの姿が見えない

アイリス「あれって御坂さんとさっきの男の人！？」

アイリスが見てる方向を見れば当麻とビリビリがセブンスミストの中に入って行った。

翔「おい、アイリス」

アイリス「は、はいっ！」

翔が真剣な表情になり、その表情に少し緊張してしまったアイリス。

翔「すまないが、炎哉たちを見つけたら先に帰ってきてくれ」

翔はそう言ってセブンスミストの中に入って行った

アイリス「な、なんなの？」

アイリスはその場で呆然と立ち尽くしていた

### セブンスミスト1階

翔「え〜と何階だっけか？」

当麻「おい、翔！なんでおまえがここに？」

美琴「そうよ。非難誘導は出たはずよ！」

当麻たちの後ろでボソツと呟いたのが聞こえたのか、ようやく翔の存在に気が付いた。

翔「そういうお前らこそなんでここにいるんだ？ジャツジメントでもないのに」

当麻「実は女の子が見当たらないんだよ！翔は見てねえか？」

翔「いや、見てない。それで御坂はその付き添いか」

美琴「そうよ！」

翔「じゃあ、最近物騒な事件が起きてるし急いで探しますか」

三人は頷き走り出した。

当麻「で物騒な事件ってなんだ？」

走りながら横で当麻が訊ねてきた

翔「なんだ、当麻。ニュース見てねえのか？」

当麻「ニュース？」

美琴「もしかして虚空爆破事件のこと？」

翔「正解！」

当麻「なんだ、その虚空爆破事件ってのは？」

本気でニュース見てねえのか（汗

まさか、ビリビリにテレビをぶっ壊されたのか？

翔「簡単に言えばぬいぐるみや空き缶などが爆発する事件のことだよ。しかも時間や場所に法則性がないから犯人の特定は未だに至っていない。」

当麻「おいおい、やばいんじゃないかねえのかそれ」

翔「ああ、しかも最悪なことに爆発の威力も相当でかいみたいだしな……ん？こつちだ！」

微かに人が走る足音が聞こえた

美琴「いきなりどこに行くのよ！」

翔「こつちから足音が聞こえたんだよ！」

美琴「なっ、あんたは聞こえたの？」

俺の隣にいる当麻に訊ねる美琴

当麻「いや、聞こえなかったが翔が言うんだ。たぶん、そうなんだろっよ」

美琴「ずいぶん信頼してるわね」

少しムツとした表情になる美琴

そんな美琴を見て翔は苦笑した。

翔「まあ、幼馴染だからな。いたぞっ！ん、あれは透！」

美琴「あ、あれは！？」

目の前に透と初春と女の子がいた。

女の子が初春に人形を渡しているところだった。

翔「おいっ！それを投げろ！」

初春「えっ？」

透「貸して、そりゃ！」

一瞬ポカンとしてた初春から透は人形を奪い取りすぐに投げた。投げられた人形は段々と圧縮され始めた。

初春「逃げてください！それが爆弾ですっ！」

透「翔、それを吹き飛ばして！」

翔「了解！」

言われたとおりに手で銃の形を作り狙いを人形に定め

翔「吹き飛ばっ！」

風の弾丸を人形に向かって撃ち、宣言通りに遠くに吹き飛ばしたが、

途中で爆発してしまった。

爆風が翔たちに襲い掛かってくるが当麻がその間に飛び出し右手を掲げて爆風を相殺した。

所詮は能力で作られた爆弾。当麻の幻想殺しイマジンブレイカーの前では無と化した

翔「すまん、当麻。助かった」

当麻「無茶すんなよな」

翔「できるだけ善処するよ。さて、ちょっと行くところあるからじやあな。おい透も行くぞ」

透「えっ・・あつ、そうか（ボソツ）うん、今行く！初春さんあとのことお願い」

初春「は、はいわかりました。」

翔の意図を察したのか、初春の返事を聞いてからその後を付いて行った

#### 裏路地

裏路地に一人メガネをかけて音楽を聴いている学生がいた。

ここにいる学生こそが今回の虚空爆発を起こした犯人介旅初矢だ。かいたひはつや

介旅「あと少し数をこなせば無能なジャツジメントも、あの不良どもも皆まとめてふきとばあつ」

言っている途中で誰かに後ろを蹴られ、目の前のゴミ箱を撒き込み倒れた。

介旅「いつたいなになが」

よろけながらも顔を上げると常盤台の制服を着た女子学生、美琴がいた。

御琴「はあい。用件は聞かなくても判るわよね。爆弾魔さん」

介旅「な、なんのことだか僕にはさっぱり」

美琴「まあ！威力はたいしたもんよね。でも残念、死傷者どころか誰一人掠り傷負ってないわよ」

介旅の発言を遮るよう最初の一言を大きな声で言った。

介旅「そ、そんなばかなっ！僕の最大出力だぞ！」

美琴「へえ〜」

自分で暴露してしまったことに気が付きすぐに言い繕う

介旅「あつ、いや〜外から見てもすごい爆発だったんで中の人は」

言いながら鞆の中から飛び出しているスプーンを掴み

介旅「とても助からないんじゃないかって！」

投げるモーションに入った瞬間、レールガンで撃ち抜かれた。

その衝撃により介旅は吹き飛ばされた

介旅「レ、レールガン。クツ、フツツ　今度は常盤台のエース様か。いつもこうだ力で地面にねじ伏せられる。殺してやるっ。お前みたいなのが悪いんだ！「さつきからグダグダうっせえなお前」えっ？　ぐほっ！？」

いきなり後ろから声が聞こえ振り向いた瞬間、顔面を蹴られ、また再び倒された。

美琴「えっ？風間さんに透くんなんでここに」

翔「なに、最初は傍観してようと思ったんだがそのクソ野郎の言葉聞いてたらムカついてな」

透「今回ばかりは僕も怒ってるから同意だよ」

倒れている介旅の後ろで翔とその背中に透は乗っていた。

透「翔そろそろ下ろして」

翔「ん、了解」

透「よいしょっと。それじゃ、大人しく捕まってもらえるかな」

手錠を出して介旅に問いかける

介旅「クソツ今度はフリージングか。だけどこんなところで捕まって

カツツ ひいいい！」

手元に転がっていた空き缶を掴んだ瞬間、翔が介旅のすぐ横の壁に向かってナイフを投げた。

その際に軽く頬を掠り血が軽く流れ、腰を抜かしてなさけない悲鳴をあげた。

美琴「な、なんでナイフなんて持つてるのよ!？」

翔「まあ、それは後で話す。で、お前は大人しく捕まるのか、それとも抵抗して捕まるとっちがいい？」

美琴は翔がナイフをもっていたことに驚いたが、話してくれると聞いてすぐに引き下がった。

翔は腰を抜かしている犯人を見下ろして言った。

翔「言うておくが抵抗するようなら死ぬ一歩手前までお前を追い込

むからな」

介旅「ひい！そ、そんなの理不尽だろうが！そんなこと力があるから言えるんじゃないか！」「うるさいよ」「なに？」

透「黙っててもらえるかなこれ以上のその口でしゃべらないでくれる。力、力ってなんにも努力してない君がそれを言うの？」

今まで黙っていた透がここで怒った

・・・やっぱり透も我慢の限界か。まあ、それもしかたがないIFの話になるが初春が死んでた可能性だってあるしな

介旅「な、なにが努力だよっ！能力なんて努力じゃなんにもならないじゃないか！そんなの最初から才能がある奴が言える言葉じゃないか！」

吐き捨てるように言った

美琴「あゝもうイライラするわね！いい加減その口を閉じろっ！」

バチバチと電撃を介旅の回りに放ち、またなさけない悲鳴をあげた  
翔はゆつくりと介旅のもとに歩いた

翔「おい、クソ野郎てめえに聞きたい事がある。」

介旅「な、な、なんだよ」

恐怖のあまり歯をカチカチと鳴らしている

この質問だけではどうしても聞きたかった。

アニメを見てても同じ事を思っていた疑問だしな

翔「お前あの女の子に人形渡したよな」

介旅「そ、そ、それがなんだよ」

翔「あれってあの女の子も死んでいいと思ったから渡したんだよな」

介旅「あっ、あの時はジャッジメントに復讐することで頭がいっぱ

いでそこまで考えてなかったんだ！」

ようやく言われたことに気が付いて言い繕うがもう遅かった  
既に翔はその言葉聞いてキレていた。

翔「へえ、ってことは感情のまま動いて結果的にあの子を殺しか  
けたんだ。今回は当麻がいたから全員死ななかったものを」  
とここで壁に突き刺さったナイフを抜き

翔「やっぱお前死「ストップですよ！」ちっ！」

胸倉を掴み刺そうとするが黒子の静止の声を聞いて見られる前に瞬  
時にナイフを砂に変えた。

黒子「風間さんこれ以上は捕まえますわよ」

翔「了解、これ以上はなにもしねえよ。たく胸糞がわりい。透す  
まんが先に帰らせてもらおう」

透「う、うん。」

翔「おい、クソ野郎！」

介旅「は、はいいい！」

翔「お前は能力は才能で決まるって言ったが、そこにいる常盤台の  
E-1は努力の積み重ねによってレベル1からレベル5になってん  
だ。てめえもそれを見習って少しは努力しとけ。」

言いたいことだけを言ってその場を去った

SIDE透

翔が見えなくなってから透はその場へたりこんだ。

透「よ、よかった。白井さんが来なかったらどうなっていたこと

か

黒子「たしかにあの場でわたくしが止めていなかったら・・・考えるだけでも恐ろしいですわね」

美琴「さ、さすがにあれは怖いわね。透くん、風間さんってヤの付く職業の息子さん？」

透「うん、違うよ。翔が言うにはただの剣術道場の師範の息子って言うてたけど」

黒子「し、信じられませんの」

透「でも、翔がキレルなんて久しぶりに見たよ。」

黒子「やっぱり今まで何回かあったんですの？」

透「うん、でも今回の3回目だよ。それに翔は滅多なことがないと本気で怒らないよ。怒っても半分くらいが冗談だし」

美琴「そうなんだ」

透「うん、それに翔は優しいよ。最後にだって遠まわしにがんばれって君に言うてたしね」

介旅のほうを向きながら言う

介旅「あつ、そういえば」

透「さあ、お話はここまでにしておとなしく捕まってもらえるかな  
介旅「ああ」

介旅からはまったく抵抗する気配が感じられない。

どうやら素直に捕まる気のようにだ。

透は介旅の両腕に手錠をかけた。

透「あつ、そつだ白井さん」

黒子「なんですの？」

透「今回のことで翔のことはできるだけ伏せてもらえるかな？翔は目立つのは嫌いみたいだし」

黒子「十分目立っていると思うんですけど……まあ、わかりましたわ。」

透「ありがとう白井さん。彼は僕が連れて行くから現場の方に行っているよ。あとこれ翔から渡しといて言われた物」

黒子「これはスタンガン？」

ポケットから出したスタンガンを黒子に渡した。

見た目は普通のスタンガンだから黒子は首を傾げていた

黒子「風間さんはなんでこんなものを渡すのです？スタンガンなら普通に手に入るはずなのに？」

透「それは翔が改造したスタンガンだよ。一応そこにあるメモリを最大まですると人を殺すぐらいまでの威力はあるよ。翔が言うには

『ジャツジメントなんだから危険なことに突っ込むだろうし持たしとけ』だって。たぶん白井さんに危険な目にあってほしくないんじゃないかな」

透の言葉を聞いて少し顔を赤くさせていた黒子

黒子「そ、そうなんですの／＼／せっかくもらったので持っておくことにしますの」

本当に仕方なしという感じで受け取っているが少し顔が嬉しそうだ。

透「じゃあ、現場の方はよろしくね」

黒子「わかりましたですの」

そう言ってテレポートを使って消えた。

美琴「まったく黒子にも春が来るとわね」

透「うーん、いいことじゃないかな」

美琴「そうね。じゃあ私も行くわ」

透「じゃあね御坂さん」

見えなくなるまで手を振った。

透「それじゃ、僕たちも行くよ」

介旅「うん」

透は介旅をアンチスキルの車まで連れて行き介旅をアンチスキルに引き渡した。

透「あとは本部に報告して終わりかな。ふうー、あと二日これから本当の物語が始まるんだよね」

とポツリと呟いた

透「翔には悪いけど僕は僕で学園都市の平和を守るよ。なによりここには秋ちゃんに初春さんもいるからね。それに翔なら責めるどころか、がんばられて応援してくれるだろうし。さあ、がんばろう！」

透は新たに決意を胸に秘め本部に向かった

おまけ

美琴と黒子は帰り道を歩いていた

黒子「それにしても、風間さんのあの能力はなんですか？」

美琴「ほんとよね・・・あつ!？」

黒子「なっ、お姉さまいきなり大声をあげるなんてどうしたんですの？」

美琴「いやね、ナイフのこともあの能力のこともまた聞きそびれち

「やたなーって思ってたね」

黒子「ナイフ？ナイフなんて持ってましたの？」

黒子は首を傾げていた

美琴「え、黒子。アンタ見えなかったの？」

黒子「氷村さんがちょうど死角になっていて見えませんでしたの。なにかをしようとはしてたのはわかったのですが・・・そのことについて聞く必要がありますので」

美琴「ええ、そうですね。今度こそあの能力のことを聞いてやるわ」

2人から微妙に黒いオーラが出ていた

#### 翔の部屋

翔「はあ〜今日は気分がのらないから外で食　ゾワツ　うおっなんだ急に寒気が」

外に出ようとドアノブを触った瞬間、急に寒気が襲ってきた。

翔「なんか今外に出たら絶対何かに巻き込まれる気がする・・・おとなしく家にいるか」

ドアノブから手を放し、その日の夜は家から出ないでおとなしく過ごしていた。

虚空爆破事件（後編）（後書き）

ではこれにて虚空爆破事件の話は終わりになります。  
ではでは

不幸な夏休みの開始！（前書き）

今回はけっこう文章が長くなってしまいました。

読みにくかったらすいません。

では第15話のはじまりはじまり〜

## 不幸な夏休みの開始！

### 1年7組の教室

今日は7月19日夏休みの前日だ。

小萌「はいみなさん。明日からお楽しみの夏休みなのです。」

小萌先生が夏休みの注意事項を説明しているところだ。

小萌「それと、外での`能力`の行使は絶対禁止なのですよ!!！」

とここで説明が終わり、礼をして生徒たちは帰ったり、教室でしゃべったりと思いいいの時間を過ごしていた。

そしてここにも一人

翔「zzzzz」

机に突っ伏してぐっすり寝ているものもいた。

炎哉「おい翔、起きやがれ」

と翔の肩を揺らして見るが起きる気配がまったくなくない。更に激しく揺らしてみると、ようやく起きた。

翔「くう」。もう説明は終わったのか？

炎哉「とつくに終わってやがるよ」

当麻「相変わらずマイペースだよな」

一度伸びをしてから炎哉に聞いた。  
炎哉と当麻はそんなに翔に対して呆れた表情で答えた。

翔「まあ、ちよつと改造して遊んでたら寝るのが遅くなったんだよ。  
それじゃ、帰りますか」

炎哉「おい待て、その改造したやつをまた俺に使う気か!？」

翔「さあね」

と適当に答えてフラフラしながら歩いて行った

当麻「どんまい」

炎哉「俺に被害が来ねえことを願うか」

当麻はポンツと炎哉の肩を叩いて同情した。

今まで見た限り翔が改造したものは全て炎哉が実験台になっているからだ。

当麻と炎哉は一度ため息を吐いてから翔のところに向かった。

当麻「明日からどうすっかなー」

炎哉「ゲーセンにでも行つて一日中遊ぶのもいいな」

翔「お前らにそんな余裕はないと思うがな」

当麻と炎哉は夏休みに浮かれていた。

そんな2人を見て翔は呆れていた。

翔「小萌先生さよなら」

炎哉「小萌センサーさいなら」

当麻「小萌センサーさよーならー」

廊下に歩いている小萌先生を見かけ三人は帰りの挨拶をした。

小萌「はい風間ちゃんさよなら。上条ちゃんと近藤ちゃんまた明日」

笑顔で挨拶を返してきた。

が、その内容に聞いて当麻と炎哉は固まった。

特に後半の言葉を聞いた瞬間、ピシツとなにかにひびが入る音がした。

2人は数秒固まってから

炎哉、当麻「え・・・？ええ〜〜〜〜！？」

炎哉「こ、小萌センサー」

当麻「い、今なんと！？」

起動した

見事な連携プレーだ

2人の顔は信じられないといった表情だった。

小萌「んも〜、聞いてなかったんですか？明日からの指定者補習」

文句を言いながらも丁寧に説明してくれた。

小萌「このままじゃ留年決定かもですよーつ。特に上条ちゃんは記録術単位、近藤ちゃんは記録術以外のその他の時間割カリキュラムの単位もオールレッドですよー」

翔「当麻はともかく、炎哉お前そこまでひどかったのか」

当麻「記録術以外全てオールレッドはすごいな」

炎哉「その2人！そんなかわいそうな奴を見る目で俺を見んのはやめろ！！」

ここでちよつとした豆知識  
記録術とは？  
かいはつ

表向きは「記録術」や「暗記術」とされているが、その実態は投薬や生体刺激あるいは催眠暗示によって人為的に「超能力」を開発するというとびぬけたものだ。

発現する能力は個人の資質による所が大きいが、一通りの時間割をこなせばたいていの生徒はスプーンの一つくらい曲げられるようになる。

以上！

SIDE翔

俺達は今、学校を出て、帰宅してる途中だ  
そして俺の横には

当麻「はあぁぁぁ、また目隠しポーカーとかスプーン曲げやらされるのかぁぁできるまで」

炎哉「はあぁぁぁ、また小テストやんなきゃいけねえのかぁぁ頭がいたくなりそうだ」

炎哉、当麻「ふこーりーだーりー」

負のオーラを背負った二人がいる。

さっきからずっとこの調子でいい加減鬱陶しいんだが

翔「お前らの自業自得だろ。つーかいい加減その負のオーラを閉まってくれないか？」

と言ったら2人がびたつと動きを止め、バツと裏切り者を見るよう

な顔でこちらを向いた。

そして2人同時に翔の肩をガシツと片方ずつ掴み、グイツ顔を近づけてきた。

翔「ちよつ、お前らなんだ?! つつか顔がちけえ!!」

炎哉「そういや〜翔。お前は何で補習を受けねえ〜んだ」

当麻「そうだよな、お前も結構サボってたのにないのはおかしい〜よな〜」

翔「はあ〜・・・とりゃ」

炎哉、当麻「ぐほつ!!」

翔は一度ため息を吐いてから、炎哉と当麻の眉間に高速チョップを叩き込んだ。

かなり聞いたらしく眉間を押さえて悶えている

そしてめちやくちや呆れた表情で炎哉たちを見て言った

翔「あのな〜俺が補習を受けないのはサボった分を課題をやることで帳消しにもらったんだよ」

炎哉「課題!? そんなものもらった覚えはねえぞ????」

炎哉の頭の大量の?が浮かんでいる

翔「そりゃあ、個人的に行ったからな。それで小萌先生に相談しに行ったら、最初は断れたんだがその状況を見てた黄泉川先生が『おもしろそうじゃん。小萌先生こいつに課題を出して出来たら補習を免除にするってのはどうじゃん?』って言ってくれたおかげで最初は渋ってたが了承をもらったんだよ。」

当麻「ちなみにどれぐらいもらったんだよ?」

翔「え〜と、30枚ぐらいだったかな。しかも両面刷りで期限は相談した日から次の日のSHRが始まるまで」

炎哉、当麻「30枚で両面刷り!?しかも期限短かつ!?」

条件の厳しさに炎哉と当麻は驚きの表情を隠せない

翔「ああ、俺もあまりの多さにもらった瞬間呆然としたよ。まあ、課題を出すときの小萌先生と黄泉川先生の顔は笑えたな、2人して口をポカーンと開けてたからな。ははは」

炎哉「お前良く間に合ったな。それだったら補習受けてるほうがよっぽどましだと俺は思うんだが」

うんうんと隣で当麻も頷いている

翔「というわけで俺は補習がないんだよ。さて、この話は終わりにして明日は夏休みだ。景気づけになんか食うか」

炎哉「おっ、いいな!」

当麻「んじゃ、そのファミレスでなんか食うか」

そうして三人はファミレスの中に入って行った。

当麻「丸々一学期分のサボリが一週間でチャラになるなら安いもんだよな!」

炎哉「そうだ!たった一週間の地獄を生き抜けばその先に希望がある!」

翔「俺はもう地獄を味わったからゆっくり過ぎさせてもらう。それにしても当麻お前マジでアレを食うのか?」

当麻「食うに決まってるだろ!こうなりゃヤケ食いじゃー」

アレとはファミレスの外の看板に書いてあった。

夏の新メニュー 苦瓜ゴヤと蝸牛エスカルゴの地獄ラザニアだ。

なんかネーミング的に食いたいとは思えない。

「お待たせしました。苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア、オムライス、海鮮ドリアです。」

ウェイトレスは一度礼をしてから仕事場に戻った。

翔「んじゃ、食いますか」

当麻「つしゃー！！せつかくの夏休みだ！！景気づけにブワッと無駄喰いでも」

同時に当麻の後ろからウェイトレスがこけそうになり、お盆から手を放してしまい、お盆に乗っていた飲み物がブワッと当麻に掛かった。

翔「宣言通りにブワッととなったな」

炎哉「ああ、さすが不幸の避雷針」

当麻がウェイトレスの対応しているときにこんなことを呟いている2人そして、この後の展開を知ってる二人は大急ぎで食べ始めた

当麻「お前ら、なに急いで食ってんだよ。飯は逃げねえぞ」

当麻は2人には聞こえてないらしく一心不乱に食べている。

翔「ばくばく・・・ごくっ。よし、ごちそうさまっ。

炎哉「ふうー食った食った。」

当麻「じゃあ、俺も食「よオ ねーちゃん一人イ〜？」ん？」

「おいアレ常盤台の制服じゃねーか？」

「きいてんのかオラ！！」

店内がざわつき始めた。

まあ、誰が絡まれていているかわかりながらも店の中を見回してみるとやっぱり不良に絡まれてるビリビリがいた。

当麻は立ち上がり不良のいる場所に向かった。

炎哉「よしときゃーいいのによ。当麻の野郎自分から厄介ごとに向かうこととはねえだろ。相変わらずお人好しだな」

翔「そこが当麻のいいところだろ。それにお前も言えたことか？」

炎哉「何が言いてえんだよ」

翔「前世じゃ、道に迷った爺さんを目的地まで案内する。迷子の子供がいれば親が見つかるまで一緒に探してやる。etc、etcって感じだっただろ。ほら、お前も十分お人よしだ」

炎哉「なに言つてやがんだ。目の前に困った奴がいれば助けるのが普通だろ」

それを普通と思ってる時点でおかしいんだよ。

まあ、お前のそういうところは嫌いじゃないんだがな

翔「まあ、結局お前もお人よしだ。それよりお前はいいのか？」

炎哉「なにがだよ？」

翔「この後御坂が雷落として電気製品がパーになることだよ。俺はとっくに対策をしているから安心だがな」

炎哉「やべっ、すまん俺は先に帰る」

顔を真っ青にさせ、急いで帰って行った。

翔は立ち上がりレシート取ろうとテーブルを見ると

翔「あれ、あいつ金置いていってね「おい、翔。逃げるぞ」「はっ！」はっ！？」

「さて、ゴラァー！！」

当麻にいきなり襟首を引つ張られた  
そして後ろからさきほど御坂に絡んでいた不良と他7人が追いかけて来た

つつか、これって食い逃げじゃね？

翔「おいッ、当麻！手をは ガンッ ぐおおお〜！」

とくだらないことを考えていると後頭部に激痛が襲った

出て行く際に扉の横の柱みたいなところに後頭部を強打しようだ

店を出て行くときに当麻は逃げることに頭がいっぱいで翔のことを考えていなかったようだ。

おかげで、頭を抑えて悶絶していた。

うおおお〜頭がいてえ〜つか割れる！？

と〜う〜まこの恨みをはらさでおくべきか〜！！！！

つてやばっ！？

翔「おいっ！？当麻前に電柱があるから右によ ゴンッ ぐはあっ！」

当麻「なんか言ったか翔！聞こえ・・・あ」

当・・・麻・・・アト・・・デ・・・オボエ・・・テ・・・口・・・ガクッ

翔はそのまま気絶してしまった。

SIDE当麻

翔「・・・！？・・・と・・・ま・・・み・・・よ」

当麻「なんか言ったか翔！聞こえ・・・あ」

鈍い音とともに翔の声が突然聞こえなくなった。  
一度止まり後ろを振り向くと、頭からものすごい勢いで血を流し白目を向いてる翔がいた。

当麻「やっちまったー！？やばい絶対やばい！起きたら翔に殺されるー！！ふこーーだー！！！！！！！！」

「あの野郎止まったぞ！！今の内追いついてやる！！！！」

当麻「やべっ！？」

気絶してる翔を背負って全力疾走した。

先ほどまでであった距離が翔を背負っているせいでだんだん縮まってきた

走りながら不良集団を撒く方法を考えると翔の鞆になにか入ってないかと思いい鞆の中を手で探ってみた。

当麻「頼むからなにかあれ・・・ぎゃーなんか刺さった！？」

ブスツと刺さった自分の手の中にあるものを見ると

当麻「まきびし?!?!?!なんでこんなものが入ってんだよ?!?!?!くそっ！他になにか・・・これは!?!」

更に鞆の中を探してみると導火線がついた白いボール？とライターを見つけた。

これは何だ？と考えるうちに不良集団がだいぶ近くまで来ていた。

「もう諦めやがれ！！」

当麻「誰が諦めるか！これでも食らっつけ」

白いボールに火をつけ不良たちのいる手前に投げつけるとボンツと軽い爆発音と同時に大量の赤い煙が出てきた

「ぎゃー！ー目が！ー！ー！！」

「鼻がいてえー！ー」

「息できねえー！ー！ー！ー！っつか、かれえー！ー！ー！！」

煙の中から、無数の悲鳴声が聞こえる。

どうやら赤い煙の正体は辛いなにかのようだ

その様子を見た当麻はお前なんて物を作ってたよと思いつつながら翔を見ると

当麻「・・・おまえ実は起きてるだろ」

気絶しながらニタアと嫌な笑みを浮かべていた

当麻は不良集団が苦しんでいる間に走りだした。

当麻「はあはあ、よしっなんとか撒いたか。少し休憩するとしますか」

走り続け不良集団が見えなくなりようやく走るのやめ、近くのベンチに向かって歩いて行った

そして翔を適当なベンチの上に降ろして、寝かせたとき

当麻「なんだ、こりゃ？」

ヒラリッと翔のポケットから何度も折られた紙が落ちた。

内容が気になってしまい広げて中身を見ると

『炎哉専用激辛爆弾の設計図』

当麻「……………」

題名を見た瞬間言葉が出なかった

そして無言のまま設計図にライターで火をつけて燃やした。

当麻「よし、これでまた一つ被害減った！」

とてもやり遂げた顔をしている。

きつとこの爆弾に被害にあつたのは炎哉だろう。

そう思うと炎哉に同情せずにはいられない

その後数分休憩していると近くで集団で走って来る音が聞こえた。

当麻「もう復活したのかよ。しょうがねえ翔はここに置いていくか」

ベンチから立ち上がり再び逃げようとする

「あの野郎どこに行きやがった！」

「おい！こつちに血の跡があるぞ！」

「そういえば、アイツが背負ってた奴血を流してたな」

「……………」

「よし、血の跡を追うぞ」

チンピラたちの声が聞こえた。

声の大きさからしてだいぶ近いようだ。

当麻「やばいな、翔が血を流してたことすっかり忘れてた。不幸だ」

当麻は不良たちから距離を置いた場所から再び逃走した。



ベンチから立ち上がって、頭を抑えながら回りを見渡すが見たことのない景色と目の前に知らない男が4人

D「お！パシリ君が起きたぞ」

A「ぎやはは、まずはボコろうぜ」

C「そうだよな。どちらが上か教えてやらねえとな。ぎやはは」

翔「なんで気絶したのかがまったく覚えてねえ。え」と

翔は不良たちを無視してこうなった原因を思い出してみる

そして数秒考えて、思い出したのか手の平をポンツと叩いた

翔「おお！思い出した」

C「無視してしてんじゃねえぞ、てめえ！」

その様子を見たチンピラは翔の態度にキレた

そして4人の中で一番の体格のいい奴が翔に向かって拳を突き出すが

翔「はあ、めんどくさ」

C「っ！?!?!」

翔に手首を持たれそのまま背負い投げを決められ、さきほど翔が座っていたベンチを巻き込み倒れた。

そして体格のいい男はあまりの激痛にのた打ち回っているところを鳩尾に踵落しを打ち込みトドメをさした

その証拠に口から泡を吹き、白目を向いている

翔「さして、だれがパシリ君だつて？だれをボコるつて？」

D「あ、あつ　ガクガク」

先ほどの光景を見て不良たちは震え上がっていた。だが、一人だけ勇敢に震えながらも鉄パイプを持って立ち向かおうとしていた。

A「お、おいてめえらなにびびってんだ！相手は一人だ、三人で行けば楽勝だ！」

B「そ、そうだな。おいDいつまで震えてんだ！」

D「す、すまん。」

Aの言葉により他の2人もやる気を出したようだ。

「まったくどこの青春漫画だよ。まあいいか鬱憤晴らしにはちよつどいい」

翔「いいから速くかかってこいよ。どちらが上か教えてやるよ」

A「やったらあー！」

「うおおおー！」

不良たちは一斉に翔に襲い掛かった。

結果は・・・瞬殺

地面に伏せてピクピクと痙攣しているチンピラの三人しかも顔がぼこぼこに膨れ上がって元の顔が判らない

そんな不良を放置して頭にこびりついた血を水道で洗い流した。

さっぱりとした後、当麻への仕返しを考えようと鞆の中にあるはずの爆弾を探すか

翔「さて、当麻を探しに行くか。そして昨日作った激辛ばく・・・だん？・・・あれ？」

・・・見つからない

首を傾げながら鞆をひっくり返してみても数個のまきびしとほこり

のみ

・・・爆弾とライターが・・・ない・・・だと

翔「誰かが使ったとなると・・・とおおおおおおーうう  
うううー！ーまああああああー！ー！！！」

答えに辿りついたらしく能力を使って高速で移動していった  
そうきつと今頃、当麻がいるであろう橋を目指して

SIDE当麻

気が付いたら橋のどこまで走っていた。

後ろから不良たちが来ないことを確認してその場へたり込み息を  
整えていた。

当麻「はあはあ、はあーやっと撒いたか」

「ったく」

当麻「ん、お！」

いきなり後ろから声が聞こえ振り向いてみると

美琴「なにやってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、熱血  
教師ですか？」

ビリビリがいた。

・・・こいつが来てあの不良たちが来ないってーことは

当麻「あいつらが追っかけて来なくなったのって」

美琴「うん、めんどいから私がやっといいた」

言いながら髪を軽く掻き上げていた。

髪を掻き上げるときにバチバチと青い火花が散った。

当麻は2、3回瞬きしてからため息を吐いた

当麻「やっぱいい〜」

頭を掻いて呆れた。

そんな当麻を他所に美琴はスカートのポケットからどこにでもあるようなゲーセンのコインを取り出した。

美琴「ねえ、レールガンって知ってる？」

当麻「れーる、がん？」

聞きなれない単語に疑問系の答え方になってしまった。

美琴「別名超電磁砲。フレミングの運動量を借りて砲弾を撃ち出せるものなんだけど」

コインを指で弾いて空中に上げた。

コインは空中で回転して再びの美琴の親指に載って

美琴「こつというの言うらしいのよねっ！」

言葉同時に撃ちださされるオレンジ色に光るレーザーが頭のすぐ横を突き抜けた

当麻「うわっ」

すさまじい閃光と破壊力に思わず腕で顔を覆った。

レールガンの威力はすさまじくコンクリートに撃ったあとが削れて

残っている

その光景を見て体中の血の気が一気に引くのわかった。

美琴「こんなコインでも音速の3倍で飛ばせば、そこそこ威力がでるのよね」

当麻「まさか連中を追い払うのにそれを？」

美琴「バカにしないでレベル0の無能力者ものの料理法ぐらい心得てるわよ」

得意げな顔で言い放つ美琴

そして美琴は何かに気が付いたのか少し考える仕草した。

美琴「そういえばアンタ、風間さんはどうしたのよ？」

当麻「翔のことか？翔なら適当にベンチに置いて ポンツ 「呼んだかい？」 ビクウツ！ い、いえ呼んでませんのことよ」

突然後ろから肩を置かれ聞きなれた声が聞こえた。

嫌な予感をしながらもゆっくりと後ろを振り向くと

翔「小便是済んだか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いする準備はおk？」

さらりと、とんでもないことを言い放つ親友がいた

バツと翔から離れようとするが、離れる前に頭をガシツと捕まれた。そして、段々と頭を掴んでいる手の力が強くなっていた。

当麻「ちよっ、おま！？いだだだだっ！！！！ストップブストー  
ツプー！！！」

翔「当麻てめえよくも人が徹夜で作り上げた努力の結晶を無断で使いやがってくれたな」



翔「おいおい、俺や当麻じゃなきゃ死んでるぞ（汗）」

翔は肩を竦めてやれやれといった態度を取っていたが美琴にはそれより驚愕することがあった

美琴「なっ！？ダイヤモンドの壁！？」

当麻の前に現れた壁がダイヤモンドでできていたからだ。

当麻「これ売れば億万長者になれんじゃね？」

コンコンと左手で壁を叩ききながら翔に聞いてみた

翔「お断りだ。俺は能力をそんなくたらないことに使う気はねえよ」  
当麻「それにしても相変わらず反則だよな」

翔「自覚はしてるよ。さて、御坂。お前に前見せたナイフもこれと同じことをやったんだよ。まあ、簡単に言えば物の形や本質を変える能力だな」

もう一度パチンツと指を鳴らすと、まるであの時のナイフを砂に戻すときと同じようにダイヤモンドの壁を砂に変えた。

美琴「なによそれ！？書庫バンクでもそんな能力は載ってないんだけど」

美琴はキツと翔を睨みながら言うが

翔「載られても困るんだがな（汗）」

当の本人は頭を掻いて困った顔をしていた。

翔「それにこれ使うとダルくなるし、範囲は短いし、銃みたいなのは構造全てを理解しなきゃ作れないときた。この三つつがなければ完璧なんだけどな」

当麻「そうなたらお前が最強じゃねえか」

翔「無理無理。俺よりチートくさいやついるし。第一位と第二位あれこそほんとのチートだ。」

美琴「私なんて眼中にないって言うの」

翔「そう睨むな。そう意味じゃねえから。あれはまた次元がちげえんだよ。それに能力の相性もあるしな。例えば、こいつの異能殺しとかな」

指でこちらを指してくる翔

頼むからまた標的を俺に戻さないでくれー！

翔、テムエのせいでビリビリがこっちを思いつきり睨んでるじゃねえーか！！

当麻「別に俺はただの無能力者ってあぶなっ！？」

言葉の途中で美琴が放った雷撃を右手で防いだ。

美琴「じゃあ、なんで無能力者のあんたが傷一つないのかしら？」

当麻「俺の幻想殺しはそれが異能の力なら神様の奇跡でさえ打ち消すことができるだよ」

ニヤリツと笑いながら不敵な表情で説明してやった。

本当は余裕の表情を取り繕っているだけで、実際は死ぬーっ！と心の内で叫んでいる。

美琴「風間さんもそうだけど、そんなわけわかんない能力なんて書

庫にすら載ってないわよ。」

翔「俺たちのこの能力は科学的には証明なんてできないから能力として扱われないんだよ。つーか御坂はなんで当麻に喧嘩売ってるんだよ？」

翔は心底不思議そうな顔をしていた。

美琴「そんなの決まってるわよ。私は自分より強いヤツが存在するのが許せないのよ!!！」

返答ついでに翔と当麻に向かって砂鉄をできた剣が飛んできた

翔「こっとうときは上条シールド!!!!！」

なんの躊躇もなく近くにいる当麻を盾にした。

当麻「おいしい!ちよ、まじであぶなっ!??」

慌てて右手で消した。

バクバクという心臓を落ち着けながら息を整えた。

当麻「お前は鬼かつ!」

翔「違うっ!愉快犯だっ!!！」

当麻「なに誇らしげに言ってるやがんだ!」

ババンツと効果音がつきそうな感じ宣言した。

美琴「これも聞かないなんて・・・ならっ!」

自分の技がまったく効かないことに美琴は焦っていた。

こちらに向かって走ろうとしたらしいが疲れたのか足をもつれさせ

その場でドサツと膝を突いた  
当麻はそれを見て安堵してしまい、つい口元が笑ってしまった。  
それを美琴は余裕の態度と勘違いしてしまい悔しさのあまり体中から放電していた

美琴「くっ、こんのおおおお〜〜!!!!」

翔「やべっ（汗汗）」

そして橋の下に極大の雷を落とした。

きつとそこら中の電化製品が使えなくなってしまっただろう。

おまけ

SIDE 炎哉

炎哉は自室で電化製品をどうやって守ろうかと考えていた。

炎哉「やべえ、翔が言わなきゃ今頃、俺のお陀仏してやがったな。  
だがどうやるか・・・ダメだ思いつかねえ。こういうときは寝て  
頭をスツキリさせるか」

炎哉は布団に潜り眠そうな顔をしていた。

炎哉「幸いまだ時間はあるしまだ間に合うだろ。一応タイマーセッ  
トしとくか・・・ZZZZ」

そして炎哉は眠りについてしまった。

深夜

炎哉「くっく寝た寝た！さて、電化製品をどうす・・・る・・・」

か？外がく、暗い・・・だ・・・と」

バツと効果音がつきそうな勢いで置いてあつた時計を取るとスクラップになつていた。

とういかダンプカーに潰されてしまったかのような感じでぺしゃんこになつていた

炎哉「え、なんで？・・・またやつちまつたー！ー！！！！！」

少し考えこうなつた原因がすぐにわかつた・・・自分が壊したのだと炎哉はとても寝相が悪く過去にも数十個以上の時計をスクラップにしていた。

炎哉「つてことはまさか！」

急いでテレビの電源を付けてみるが・・・付かない

炎哉「ふこー！ー！ーだ！ー！ー！ー！！！！！！！！！」

深夜のとある学生寮で炎哉の声が響き渡つていた。

その後窓から侵入してきた翔にうるせえゴリラ！と言われながらスタンガンで気絶させられた

ある意味今回の一番の被害者かもしれない

不幸な夏休みの開始！（後書き）

今回はようやくインデックスが出てきます。

ついでにオリジナルの話も混ぜながらやっています。と思っています。  
ではでは

多少修正しときました^^

## 少女との出会い（前書き）

更新するの遅れてすいませんっ！！！！

ですが、またしばらく更新するのは遅れる予定です。

今回は当麻のみの話です。

最後に翔がちょっと出るだけです

では、第16話のはじまりはじまり〜

## 少女との出会い

SIDE上条

昨日の雷でエアコンが壊れてしまい蒸し風呂というなの部屋でとても寝苦しそうにしている当麻

上条「あぢ〜」

布団から起き上がってみると汗でベトベトになったシャツが体に張り付いて気持ち悪かった。

気分を切り替えるためにと朝ごはんでも食べようと冷蔵庫を開けると

当麻「・・・全滅か、はぁー不幸だ」

予想通り冷蔵庫は動いてなく中の物は全て腐っていた。

確認のために中に入った焼きそばパンを臭ってみるとすっぱいにおいがした。

焼きそばパンを放り投げ、気を取り直して非常食のカップ麺でも食べようとすると湯切りをしているときにお湯が指にかかり思わず手を放してしまい中身を流し台にぶちまけてしまった。

それを二回ほど繰り返し返してしまい食う物がなくなってしまった。

当麻「こうなったら外で買うか。それにしてもこれはひどい（汗）」

部屋の中を見回すと水漏れで床はびしょびしょ

借りてた漫画と制服もびしょびしょ

そして部屋のそこから臭う腐臭

当麻「分かった、分かってましたよ！！夏休みになったからって

空から幸運しあわせが振ってくるってわけじゃないってさ!」

半ばヤケになって叫んだ

そしてはぁーと深いため息を吐いた。

気持ちを取り直して

当麻「いいーい天気だし、布団でも干しとくかなー」

さっきまでのことはなにもなかったかのように布団を持ち上げた

当麻「空はこんなに青いのお先は真っ暗」

無理して明るく言っつもりが思いつきり逆効果だ。

なんか言ってる悲しくなってくる

当麻「つつか、いきなり夕立とか降ってこねえよな。」

一度空を見上げていた視線を下に戻すと

当麻「あれ?もう干してある?」

ベランダの柵に白い布団?が掛かっていた

一度自分が持っている布団を見てから布団?をもう一度見た。

よく見てみると女の子だった。

・・・女の子・・・え?

当麻「ええ〜!?!」

なんでこんなとこに女の子が!と驚愕のあまり布団を落としてしま

った。

当麻「女の子というかこの服シスターさんか？外国人だよな？」

呆然と女の子を見てると女の子の細くて白い指がピクンツと動き、  
下げていた首をゆっくり上げこちらを見た

絹糸のような銀髪がサラリと左右に別れ可愛らしい顔が見えた

うわっうわっ！？

どこの国かも分からない人にまくしたてられたという不安から当麻  
はうるたえていた

女の子「おな・・・」

女の子の可愛らしい唇がゆっくりと動いた

思わず数歩後ろに下がった、その時に足にグニユツとした感触があ  
った。

チラッと下を見るとラップに包まれた腐った焼きそばパンがあつた

これってさっき冷蔵庫からなげたやつじゃねえか！？不幸だ

女の子「おなかへった」

当麻「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬自分の頭がバカすぎて外国語を勝手に日本語に置き換えたのか  
と思った。

女の子「おなかへった」

当麻「……………」

女の子「おなかへった」

当麻「……………」

女の子「おなかへった、て言ってるんだよ？」

固まっている当麻に、ちよっぴりムツとしたように銀髪の女の子は言った

「……………これ日本語だよな？いや、どう聞いても日本語にしか聞こえねえ

当麻「えつと、ナニ？ひよつとして、あなたはこの状況で自分は行き倒れですかおっしやりやがるつもりでせう？」

女の子「倒れ死にとも言う」

超日本語ぺらぺら少女だった

女の子「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

女の子は純粹で穢れをしらなさそうな笑顔で言った

それを見て……………この子にはどこか遠いところで幸せになってもらおうと思った

何にしてもお関わりにならないほうが良いに決まっている。

そう思い足元でぐにゅぐにゅ言ってる潰れたやきそばパンをラップに包んだまま女の子の前に突き出した。

いくら何でもこんなすっぱい匂いを嗅げば逃げるだろうと邪まな考えで。

女の子「ありがとう、そしていただきます」

そんな当麻の考えを知らないで出されたやきそばパンに齧り付いた。

・・・当麻の腕ごとガブリツと

当麻「ぎゃーーーーーー!??!?!?!?!」

こうして、今日も当麻の一日は悲鳴とともに不幸から始まっていく

女の子を部屋の中に入れ、ガラステーブルを中心に向かい合わせに座った。

女の子「まずは自己紹介をしなくちゃいけないね」

当麻「・・・いや、まずはなんであんなとこに干してあったのか」

女の子「私の名前はね、インデックスって言うんだよ？」

この子はなにを言ってるんでございませうか？

インデックス「・・・え〜と意味は目次だったような・・・じゃなくて!？」

当麻「誰がどう聞いても偽名じゃねーか！大体何だインデックスって!」「目次」かお前は!」

インデックス「見ての通り協会の者です、ここ重要。あ、バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね」

当麻「意味わかんねーしこっちの質問は無視かよ!？」

インデックスは目の前でギャーギャー騒いでる当麻のことなど一切気にしていなかった。

故意なのかマイペースなのかわからない。

前者なら、見た目に反してなかなか腹黒い

インデックス「うーん、禁書目録の事なんだけど。あ、魔法名なら『Dedicator 545』だね」

当麻「もしもし？もしもし？一体ナニ星人と通話中ですかこの電波は？」

もう目の前の女の子が何を言ってるのかがわからなくなり小指で耳をほじっていた。

その態度にむかついたのかインデックスはガジガジと自分の親指の爪を噛み始めた。

癖、なんだろうっか？

インデックス「それでね、このインデックスにおなかいっぱいご飯食べさせてくれるとうれしいな」

当麻「何でだよ！ここでお前の好感度<sup>パラメーター</sup>上げてどーするよ？変なフラグが立ってインデックスルートに直行なんて俺あ死んでも嫌だからな！！」

インデックス「えっと・・・流行語<sup>スラング</sup>、なの？ゴメンなさい。何を言ってるのか分からないかも」

流石は外国人、日本のオタク文化は知らないご様子

インデックス「けど、このまま外に出たらドアから三步で行き倒れるよ？」

当麻「・・・いや、行き倒れるよじゃなくて」

インデックス「そしたら最後の力を振り絞ってダイイングメッセージを残すね。君の似顔絵つきで」

当麻「なん・・・ッ!？」

驚いている当麻を無視してそのまま続けた。

インデックス「仮に誰かに助け出されたら、その部屋に監禁されてこんなやつれるまでいじめ倒されたって言っちゃうかも・・・こんなコスプレ趣味押し付けられたとも言つ。・・・お隣の部屋の人に試してみちゃうかも」

とインデックスが指した隣の部屋の住人は・・・翔じゃん!?

いや〜翔でも子供のいたずらって思ってくれるよな・・・待て、待てよ。

よく考えるんだ上条当麻!!

今までアイツが目の前にネタがあるのに放置したことがあったか・

・いや、ない。断じてない!!

もし、アイツに見つかれば今度こそ本当に変態のレッテルが貼られてしまう!!

どうにかして話の逸らさなければ!悪魔に知られてしまう前に!!

当麻「そういえばインデックスさん。さっきお腹減ったって言っていましたよね。僭越ながらこの上条めがご飯作ってさしあげますがどうでせう?」

インデックス「え、いいの!」

当麻「お腹すいてんだろ」

インデックスはそれはもう嬉しそうに頷いた。

まるで欲しかったおもちゃを買ってもらえた子供のようだ。

当麻は話が逸れたことに心の内で喜び急いで台所に向かった。

そして冷蔵庫を開ける・・・が生ゴミしか存在しなかった

当麻「いや、生ゴミでも火を通せば大丈夫だろ」

リビングにいるインデックスには聞こえないように小さな声で呟いた。

そしてフライパンに残り物全てをぶち込んで炒めた

当麻「でさー、何だってお前はベランダにほしてあった訳？」

悪意満々を野菜炒め風に醤油をぶち込みながらずっと疑問に思っていたことを聞いてみた。

インデックス「干してあったわけじゃないよ」

当麻「じゃあ、何なんだよ？風に流されて引っかかってたんかお前」  
インデックス「・・・似たようなモノかも」

冗談のつもりで言った当麻は、フライパンを止めて思わずインデックスの方を振り返った。

インデックス「落ちたんだよ。ホントは屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど」

屋上？と天井を見上げる当麻

このあたりは安い学生寮が立ち並ぶ一角だ。

八階建ての同じようなずっと並んでいて、ビルとビルの間が2メートルしかない。

たしかに、走り幅跳びの要領でやれば屋上から屋上へと飛び移ることもできない事もないが

当麻「でも、八階だぜ？一歩間違えば地獄行きじゃねーか」

インデックス「うん、自殺者にはお墓も立てられないもんね」

お互い話が微妙にかみ合っていないかった。

インデックス「けど、仕方なかったんだよ。あの時はああする他に

は逃げ道がなかったんだし」

当麻「逃げ、道？」

不穏な言葉に思わず眉をひそめると、インデックスは子供のようになんげと頷いて

インデックス「追われてたからね」

予想外の言葉に、熱するフライパンを揺する手が思わず止まった。

インデックス「ホントはちゃんと飛び移れるはずだったんだけど、飛んでる最中に背中を撃たれてね」

インデックスと名乗る女の子は、笑っているみたいだった。

インデックス「ゴメンね。落っこちて途中で引っかけちゃったみたい」

自嘲でもなく、皮肉でもなく、ただ上条当麻に対して微笑みかけるために

当麻「撃たれたって・・・」

インデックス「うん？ああ、傷なら心配ないよ。この服、一応『防御結界』の役割もあるからね」

防御結界ってなんだ？防弾チョッキの種類のひとつか？

改めてインデックスを見ると、怪我人には見えない。て言うか、ホントに撃たれたのだろうか？

何もかも虚言妄想ウソっぱちの方が現実味あると思う。

けれど、この少女がベランダに引っかけたのは本当のことだ。

もし、彼女が言うことが本当なら彼女は『誰』に撃たれたのだろうか？  
当麻は考えるが答えに辿りつくことはできなかった。

インデックス「ごはん」

と当麻の後ろから、にゅっとインデックスの顔が伸びてきた。

日本語は使えてもハシには慣れていないのか、スプーンみたいにグ  
ーで握ってフライパンの中をわくわくと眺めている。

例えるなら、雨に濡れたダンボールから拾い上げられた子猫みたい  
な目

当麻「……………あ  
……………あ」

で、フライパンの中には生ゴミ同然の食材をぶっ込んだ野菜炒めモ  
ドキ（有毒）

当麻「あ、あーっ！け、つけどアレだ！そんなにお腹すいてるなら  
こんな残り物ぶっ込んだいかにも不味そうな男料理じゃなくてキチ  
ンとファミレス行こう！何なら出前でもいいし！」

インデックス「そんなに待てないよ？それに不味そうなんかじゃな  
いよ。私のために無償で作ってくれたご飯だもん。美味しくないは  
ずがないんだよ？」

こういう時だけシスターさんっぽくにつこりとキラキラ微笑みやが  
った。

俺の良心がー！！！！胃と胸がキリキリと痛むー！！！！！！  
そんな当麻をよそに、インデックスはグーで握ったハシでフライパ  
ンの中身をすくって口に運んでしまう。

インデックス「ぱくぱく。ほら、やっぱり不味くなんかない」  
当麻「・・・あ、そですか」

ほっ、と安堵したのも束の間

インデックス「あれだよな、さりげなく疲労回復のためにすっぱい味付けしてる所がにくいよね」  
当麻「げっ！すっぱ！？」

インデックス「うん、だけどすっぱいの平気。ありがとうね、何だか君、お兄さんみたいだね」

につこり笑顔だった。ほっぺたにもやしがつくほどの純真な食いつぶりだった。

これ以上、当麻の良心が耐え切れなかった。

当麻「・・・ぐっ・・・う、う、ううおおおおおおおおお  
おおあああああああ！」

インデックスからフライパンを音速で取り上げ、勢いよく掻きこんだそして思った、地獄に落ちるのは俺一人で十分だと

味の方は言うまでもなくとにかくすっぱい。

醤油で味が多少ごまかされていてあまり食べた物じゃない。  
今回ばかりは不幸がどうというのではなく、完璧に自業自得だ。

インデックスは当麻にご飯？を食べられたせいで、むーっと文句を  
言いたそうな顔でビスケットをガジガジと食べていた

当麻「で、追われてるって。お前一体何に追われてるわけ？」  
インデックス「何だろうね？ローゼンクロイツ薔薇十字か黄金夜明け《S M》か。  
その手の集団だと思っただけ、名前までわからないかも。・・・  
連中、名前に意味を見出すような人たちじゃないから」  
当麻「連中？」

インデックスの言いぶりからすると相手は集団か組織のようだ。

インデックス「魔術結社だよ」

当麻「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思考停止・・・・・・・・・・・・・・・・起動！

当麻「はあ。まじゆつって・・・・・・・・はあ、なんじゃそりゃあ！！ありえねえ！！」

インデックス「は、え、アレ？あ、あの日本語がおかしかった、のマジック？マジックキャバル魔術だよ、魔術結社」

英語で言うとさらにわからなくなった。

そもそも『お前は一生鎖国してる』と先生に言われるほどの当麻に外国語なんて理解できるわけがない

当麻「なに、なに？それって得体の知れない新興宗教がLSD教祖サマを信じない人には天罰がくだるのでせう』とか言ってお薬飲ませ  
て洗脳したりする危ない機関のこと？いやいろんな意味で危険なん  
だが」

インデックス「・・・・・・・・、そこはかたなく馬鹿にしてるね」

当麻「・・・・・・・・」

インデックス「馬鹿にしてるよね？」

当麻「ゴメン無理だ。魔術は無理だ。俺もバイロネキシス発火能力とかクレアボヤンス透視能力と

か色々『異能の力』は知ってるけど、魔術は無理だ。」  
インデックス「・・・？」

インデックスは首を傾げた

当麻「だいたい魔術、つたつてなにが出来んだよ。手から炎が出るぐらいじゃこつちだつて、そんなことが出来る奴なんていくらでもある。それにどこぞの漫画みたくMPを消費しただけで死人が復活するつてんなら誰も<sup>かいほう</sup>育脳なんかやんねーしな。まったくもつて<sup>げんじつ</sup>科学と無関係な代物は、俺でも信じらんねーぞ」

他から見れば不思議に見える力だが、それは単に<sup>超能力</sup>バカだからで。超能力さえ科学で説明できてしまうのが、ここでの常識だ。

インデックス「けど魔術はあるもん」

当麻「まあ、良いけど。で、何でソイツらがお前を狙って」

インデックス「魔術はあるもん」

当麻「・・・」

インデックス「魔術はあるもん」

意地でも認めさせたいみたいだ。

当麻「じゃあ、仮に魔術なんてものがあるとして」

インデックス「仮に？」

当麻は無視して続けた

当麻「お前がそんな連中に狙われてる理由って何なんだよ？その服装となんか関係があるのか？」

どこからどうみてもシスターの服を着ているインデックスを見てどうせ宗教絡みかなにかだろうと当たりをつけていた。

インデックス「・・・私は、禁書目録だから」

当麻「は？」

インデックス「私の持つてる、10万3000冊の魔道書。きつと、それが連中の狙いだと思う」

・・・ナニヲイッテルンデスカ、コノコハ？

当麻「・・・まーたまた、よく分からない話になってきたんですが」

インデックス「だから、何で説明していくたびにやる気が死んでいくの？もしかして飽きっぽい人？」

当麻「えっと、整理するけど。その『魔道書』ってなんのかがよくわからないけど、とにかくそれって本なんだよな？国語辞典みたいな」

インデックス「うん。エイボンの書、ソロモンレメゲトンの小さな鍵、ネームレス、食人祭祀書、死者の書。代表的なのはこういうのだけど。死ネ霊術書クロノミコンは有名すぎるから亜流。偽書が多くてあてにならないかも」

当麻「いや、本の中身はどうでも良いんだ」

どうせ、ラクガキみたいなものだ、と言う言葉が出てきそうになったのを抑えた。

当麻「で、10万冊って・・・どこに？」

10万冊と言えば図書館丸々一つ分の量だ

当麻「なに、どっかの倉庫のカギでも持つてるって意味なのか？」

当麻の問いにインデックスはフルフルと首を振った

インデックス「ちゃんと10万3000冊、一冊残らず持ってきてるよ?」

当麻「は?」

インデックスの回答に当麻は眉をひそめた

当麻「・・・バカには見えない本とか言うんじゃねーだろーな?」

インデックス「バカじゃなくても見えないよ。勝手に見られると意味がないもの」

当麻「はあ」

もう、こんな電波少女に付き合ってられんと言わんばかりに当麻は大げさにため息を吐いた

インデックス「超能力は信じるのに、魔術は信じないなんて変な話」

インデックスはむすつと口を尖らせて

インデックス「そんなに超能力って素晴らしいの? ちょっと特別な能力を持つてるからって、人を小馬鹿にしていいはずがないんだよ」  
当麻「ま、そりゃそーだわな、お前の言う通りだよ。こんな一発芸を持つてる程度で、誰かの上に立てるだなんて考え方は間違ってる」

と自分の右手に視線を落としたり。

そこからは炎も雷も出ない。ましてや手首に変な模様が浮かぶわけでもない

だが、それでも『異能の力』なら全て打ち消せる力を持っている。

それが神話に出てくる神様の奇跡システムだとしても問答無用で

当麻「ま、この町に住んでいる人間ってな能力チカラを持つてる事が一個の心の支えパソナリテイになってっから、その辺は多めに見て欲しいかな。ってか俺も能力者の一人なんだけど」

インデックス「それじゃあ、君は一体何ができるって言うの」  
当麻「・・・えっと、何がって言うか」

その問いには言葉を濁してしまう。

そもそも自分の幻想殺しイマジンプレイカーについて、誰かに説明する機会は滅多にな  
い。

しかもこの少女に『異能や超能力』なんて言ってもわかるはずがな  
い。

そうになると『異能や超能力』の事について一から説明しなくては  
いけないと・・・非常に面倒だ

当麻「えつとな、この右手。あ、ちなみに俺のは合成着色ドーピングじゃなく  
て天然素材うまれつきなんだけど」

インデックス「うん」

当麻「この右手で触ると・・・それが異能の力なら、原爆級の火  
炎の塊レルガンだろうが戦略級の超電磁砲レルガンだろうが、神様の奇跡だっ  
て打ち消せます、はい。」

インデックス「えー？」

当麻「・・・つかテメエ何だその幸運を呼ぶミラクルストーンの通  
販見てるみてーな反応は？」

当麻の言うとおりインデックスはめちゃくちや胡散臭そうな顔を  
している

インデックス「だってー、神様の名前も知らない人にー、神様の奇

跡だつて打ち消せますとか言われてもー」

驚くべき事にインデックスは小指で耳の穴をほじって鼻で笑いやがった。

お前本当にシスターか、と疑いたくなるような行動だ。

当麻「くっ、ムカつく。こんな、魔法はあるけどアナタには見せられませんなんて言うインチキ魔法少女に小馬鹿にされた事がここまでムカつくとは・・・!!」

インデックス「い、インチキじゃないもん！ちゃんと魔術はあるもん！」

当麻「じゃあなんか見せてみるや！ソイツを右手でぶち抜きゃ俺のイマジネーションイカ、  
幻想殺しも信じるしかねーんだろ、このファンタジー頭！」  
インデックス「いいもん、見せる！」

そう言つて台所に向かうインデックス

そして居間に戻つてくるとその手には包丁があつた。

当麻「ちよつ、おま!?!」

インデックス「これ、この服！これは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだからっ！」

当麻「何だよ『歩く教会』って、もう意味わかんねーよ！さっきから聞いてりや禁書目録だの防御結界だの専門用語ポンポン出しやがって、この不親切野郎！説明つてのは何もわからない人に向かつて噛み砕いて教えるモノなんだ、そこそこ分かつてんのか！」  
インデックス「なっ、ちつとも理解しようとしないう人が言う台詞！  
セリフ  
？だつたら論より証拠！ほらこの包丁で私のお腹を刺してみる！」

と無理やり包丁を渡してきた

当麻「じゃあ刺してみる！……ってふざけんな、俺を人殺しにする気が！きつかけは些細な出来事でしたってオチか？」

インデックス「あ、信じてないね！この服はね『教会』として必要最低限な要素だけを詰め込んだ『服のカタチをした教会』なんだから。布地の織り方、糸の縫い方、刺繍の飾り方まで……全てが計算されてるの！包丁ぐらいじゃ傷一つつかないんだよ」

当麻「つかないんだよ……じゃねえよ！……あのな。じゃあ八イぐっさり刺してみますなんていう馬鹿がいるか。未曾有の少年犯罪だぞ、それ」

やれやれといった感じでため息を吐いて首を横に振った

インデックス「とことん馬鹿にして……これはトリノ聖骸布……  
・神様殺しの槍に貫かれた聖人を包み込んだ布地を正確にコピーしたものだから、強度は法王級なんだよ。うん、君たちで言うなら核シェルターって感じかな。物理・魔術を問わず全ての攻撃を受け流し、吸収しちゃうんだから……さっき背中を撃たれてベランダに引っかかっただっていつたけど、『歩く教会』がなかったら風穴が開いてたんだよ。そこんところわかってる？」

物わかりの悪い生徒にいうような言い方をするインデックス

一気にインデックスに対する好感度ゲージが下がった当麻

まあ、元々それほど高くはなかったが

当麻「……ふうん。てか、つまりはアレだ。それが本つつつつつ当に『異能の力』だっつたら、俺の右手が触れただけで木っ端微塵って訳だな？」

インデックス「君の力が本つつつつつ当な・ら・ね？うつふっふん」



そのまま途中で開けていたドアを閉めて外に出て行った。  
最悪だ！よりもよってこのタイミング不幸すぎる！！！！！！

当麻「おい、待て翔。誤解だ！！！！ガブツ　ぎゃあーーーー！！！！  
「！！！！！！！！」

慌てて翔を追いかけようとすると後ろからインデックスに頭からかぶりつかれた。

そりゃあ、もうワニもびっくりな顎の力で  
その悲鳴は寮全体に響き渡った。

こうして、ヒロイン少女と主人公上条当麻の物語が始まる

## 少女との出会い（後書き）

今回は原作を読みながら自分なりに纏めてみました！！

これにて第16話は終わりです。  
ではでは〜

選択そして狩りの始まり（前書き）

ううゝ（泣

感激です！

気付いたらPVが6万超えていました！？

こんな、駄文を読んでくださってありがとうございます！

今回は全て翔視点の話です。

では、第17話のはじまりはじまりゝ

## 選択そして狩りの始まり

SIDE 翔

翔は昨日の雷の被害を受けなかったおかげでクーラーがガンガン利いた涼しい部屋で過ごしている

翔「いやー涼しいねえー」

部屋でごろごろダラけまくっている。

翔「さて、飯でも食うか」

適当に朝飯を作り（適当と言っても十分においしいが）テレビを見ながら食べていた。

チャンネルを回していると興味が惹かれるニュースがやっていた。

翔「へえー、無能力者襲撃事件ねえー。まあ、珍しくもないけどな」

ニュースでやっていた内容は無能力者が何者かによって襲われているというものだ。

まあ、別に学園都市（こ）では不思議な事ではないが、なぜニュースにまでなっているかというのだ。

襲われた相手のほとんどが学生で、しかも重傷者が多いとまで来た。そりゃあ、事件になってももおかしくはないな

だが、ふと疑問に思った。

翔「ん？待てよ原作でこんな事が起きた覚えはないぞ」

と頭を悩ませていると携帯の着信音が鳴った。  
画面には『氷村 透』の文字があった

翔「もしもし、透なんか用か？」

透『あ、もしもし翔。ねえ今日暇？』

翔「まあ、暇だが」

透『ちよつと協力してほしいことがあるんだけどいいかな』

翔「まさかと思うが今ニユースでやってる無能力者襲撃事件か？」

透『あ、ニユース見てたんだ。うん、その事なんだけどいいかな？』

翔「了解。で、俺はどうすればいいわけ」

透『じゃあ、これから第一七七支部 に来てもらえる』

翔「・・・ちよつと待て透。そ「じゃあ、9時頃に来てね」

翔の言葉を途中で遮り電話を切った。

まるで逃げ道を塞ぐように

翔「はあ、まったく誰に似たんだか。」

まちがいなくお前だっ！とここに炎哉がいたらツツコミを入れてる事だろう

翔「しょうがない、行くとするか。と、その前に当麻に飯ぐらい持つてくか。どうせ朝飯なんて食べてないだろうし」

私服に着替えてから台所に向かいサンドイッチを作って部屋を出た。すると当麻の部屋からやけに騒がしい声が聞こえた。  
となると

翔「インデックスと会って、今は話してる最中か。まあ、いいか」

当麻の部屋に入るために、試しにドアノブを回すと

翔「ん？開いてんのかよ。無用心だな」

ガチャと簡単に扉が少し開いた。

そしてそのまま入ると

翔「おい、当麻。朝飯作ってきてやつ……すまん邪魔した」

裸の少女の肩を掴んでいる当麻がいた。

うん、原作でも見たけど襲ってるようにしか見えねえ。

つか、俺もすげえ場面に遭遇したな。

運がいいのやら悪いのやら

扉を閉めたときに後ろでなにか叫んでたけど無視無視

当麻「ぎゃーーーーーーー！！！！」

翔「ご愁傷様だ」

絶叫を上げている当麻に対して手を合わせてた。

今まで頭を噛まれるという経験はしたことはないが痛いのだろうか？

まあ、経験したくもないがな

さて、ここは一つ

翔「当麻が！！部屋に女「ストオオオオオオオオオオプ！！！！」

！「ちっ」

当麻「翔てめえ！何を言おうとしやがった！？しかも舌打ちしただろ！！！！」

勢いよく扉が開き、そこから当麻がすごい形相で出てきたが体中には噛み跡だらけ  
正直笑える

翔「すまん、当麻。お楽しみの中に邪魔して（ニヤニヤ）」

当麻「ちがうわっ！っ！かその笑みをやめろっ！」

翔「はいはい、であの子は誰なんだ？（ニヤニヤ）」

当麻「お前ぜっつっつてえええわかっつてねえだろ！はあゝ不幸だ。とにかくあがつてくれ中で話すから」

翔「はいよ、お邪魔しますっ」と

当麻の部屋に入ると、当麻のベッドの上でシートに包まくっている少女がいた

そして部屋には少女が着ていた思わしき服が放置されていた。

しかもバラバラで

翔「当麻、弁明はないか？」

当麻「いや、ちよつと落ち着け翔！？これには海よりも深い訳が！」

翔「遺言はそれだけか？介錯ならしてやるが」

当麻「いや、まずは上条さんの話を「ねえ」ちよつと黙っててくれ

！今は上条さんの人生最大の危機なんです！！！！」

そんな当麻の言葉を無視して

インデックス「ねえ、その手に持つてるのって食べ物？」

翔「ん？まあ、食べ物だが食うか？」

インデックス「うんっ！」

ずいっ、と手に持っているビニール袋からラップに包まれているサンドイッチを二つぐらい渡しといった

渡すときのインデックスの嬉しそうな顔が生前の妹に似ていて少し頬が緩くなるのがわかる。

翔「当麻、弁明は飯食いながら聞いてやるから、お前も食っとけ。ほら」

当麻「ありがとよ。ん、カツサンドかラッキー！」

そりゃあ、ビニール袋の中からカツサンドを探して渡したからなこれぐらいの幸運があってもいいだろう

翔「で、この子は誰よ？」

ビシッとものすごい勢いでサンドイッチを平らげている少女を指差した。

当麻「え〜と、話せば長くなるんだがな」

翔「別にいい、話せ」

……説明中……

当麻「というわけなんだ。だから上条さんはまったく持って変態ではありません！」

翔「まあ、お前の変態伝々の話は置いといてだ。魔術ねえ〜」  
インデックス「むっ、君も魔術はないなんて言うのっ！」

と横から口を挟んできたインデックス

翔「いや、別に否定しねえよ。むしろあるんじゃない魔術」

当麻「へ？いやいや落ち着け、翔！？魔術なんて架空の産物じゃねえかよ！」

翔「つつてもその証拠にその子の服はバラバラになってるが」

首を動かしてバラバラになっている服を見た

当麻「まあ、そうなんだが」

インデックス「ほらっ！魔術を信じてくれる人もいるよ」

翔「でだ、話は変わるがその服応急処置として直すこともできるが・  
・直すか？」

インデックス「え、できるの!？」

さすがにアレ（アイアンメイデンもどき）はかわいそうだからな

翔「いや、あくまでカタチを取り繕うだけだ。その法王級の防御結界を復元することはできないがな。服がないのは不便だろ」

インデックス「じゃあ、お願い」

翔「了解。当麻、裁縫道具はあるか？」

当麻「ああ、ちよつと待っててくれ」

当麻が立ち上がり部屋の中を移動しているとベキツと何かを割るような音が聞こえた

音の原因を探ると当麻の足からの用だ。

当麻が恐る恐る足を上げると

当麻「キャツシュカードが・・・」

ズーンとその場でorzの体勢になった。

翔「お前がちゃんと管理しないからだろうが。金なら貸してやるから裁縫道具くれ」

当麻「・・・ほら」

当麻から裁縫道具を受け取り速攻で直す作業にかかった

翔「よし、完成。ほら。これで良いか？」

インデックス「うんっ！ありがとう」

翔「どういたしまして」

当麻「相変わらずこういうのは得意だよな。これでお前が女だったらさぞやモテるだろうな」

翔「気持ち悪いこと言うな。それにこんなの練習すれば誰だってできんだよ。っとそろそろ時間がやばいな」

腕時計で時間を確認すると8時15分を過ぎていた

当麻「やべえ！？そーだ補習だ補習！」

翔「がんばれよ〜」

当麻「くっ、裏切り者が・・・あ、そうだ。俺これから学校行かないきゃなんないけど、お前どーすんの？ここに残るんならカギ貸すけど」

やっぱりこいつの頭の中にはインデックスを追い出すと言う選択肢はもうないか。

まあ、それでこそ俺が好きだった『上条当麻』だな  
言っておくがLikeだぞ。

インデックス「いい、出てく」

そう言って当麻の横をすり抜けて言った。

その途中でポスツとフードが地面に落ちたのにも気づかずそのまま扉に向かった。

このとき俺には二つの選択肢が浮かんだ

・フードを取る「インデックスは助からないが当麻は記憶を失わないし危ない目にあわないで済む

・フードを取らない「原作通りに進んでしまい、インデックスは助かるが当麻は・・・記憶を失う

翔「ギリッ！（奥歯を噛み締める音）」

当麻「どうかしたか、翔？眉間に皺が寄ってんぞ」

翔「い、いや、なんでもない」

悩む。

俺はどちら取るべきか・・・親友か不幸な少女か考えた末俺は

翔「さて、俺も行くか」

インデックスに続くように歩いて行った。

フードの事は一切気づいてないフリをして。

当麻「あっ、あー」

インデックス「うん？違うんだよ」

インデックスは当麻に振り返り

インデックス「いつまでもここにいと、連中ここまできそうだし。

君だって部屋ごと爆破されたくないよね」

当麻「・・・ッ!」

サラリと答えるインデックスに当麻は絶句している。

俺はただ扉を出てすぐ横でそれを聞いてるだけ  
インデックスそんな当麻を置いて玄関のドアを出て行く。  
それを見た当麻はインデックスを引き留めようと勢い良くドア枠に  
足の小指が音速で直撃した。

当麻「み、みぎゃあああああ!?!?!?!」

片足を押さえて奇声をあげる当麻に更なる不幸が襲い掛かる。

あまりの激痛に暴れている内に当麻のポケットからスルリツと携帯  
電話が滑り落ちた。

そのままディスプレイが固いコンクリートに激突し画面にひびが入  
り、とどめに足で踏んでしまいバキツと不吉な音がした。

当麻「う、うづうづう!ふ、不幸だ」

インデックス「不幸というよりドジなだけかも」

インデックスはちょっとだけ笑った

俺は

翔「ぶはっ!くくくつ。し、死ぬ。笑い死ぬ」

腹を抱えて盛大に笑った。

他人の不幸は蜜の味というだろう

インデックス「けど、イマジンプレイカー幻想殺しってというのがホントにあるなら、仕  
方がないかもしれないね」

当麻「・・・どういうことでせう?」

インデックス「うん、こっち魔術の世界のお話なんて君はきっと信じない  
と思うけど、神様のご加護とか、運命の赤い糸とか。そういうもの  
があったとしたら、君の右手はそういうものをまとめて消してしま

っているんごと思っんだよ。」

インデックスは俺が直した修道服をひらひらさせながら

インデックス「『歩く教会』にあった力も神ラッキーの恵みだからね」

と言った

当麻「待てよ。幸運だの不幸だのって言葉は、確立と統計のお話だぜ？んなのある訳・・・」

言った瞬間、ドアノブに触れていた当麻の指に壮絶な静電気が襲い掛かった。

反射的に体がビクンツと震えると、筋肉が変な風に動いたのか右足のふくらはぎがつったようだ。

そのあと、数分間悶絶していた

当麻「・・・あの、しすたーさん？」

インデックス「なに？」

当麻「・・・ごせつめいを」

インデックス「ご説明っていうか」

当たり前のことを言うようにスラスラと告げた

インデックス「君の右手の話が本物ならね、その右手があるだけで『幸運』ってチカラもどんどん消していつてるんだと思うよ」

当麻「・・・つまりあれですか？」

インデックス「君の右手が空気に触れているだけで、バンバン不幸になっていく訳だね」

当麻「ぎゃあああああああああああああ！?!?!?不幸だ

あああああああああ！！！！！！」

ここまでの大声を上げたのは今日が初めてじゃねえかこいつ  
・・・哀れだ

インデックス「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちやっただけ不幸だね」

にっこり笑顔のインデックスに思わず涙を流しそうになっている当麻。

「つか、そろそろ話がズレてることに気づきましょう」

まあ、ここは俺が言っとくか

翔「で、お前は結局どうするんだ？追われているって言うてたがどこか匿ってもらえる場所はあるのか？それにご自慢の防御結界の機能はこのバカに潰されただろ」

当麻「バカって、てめえ。とにかく『誰か』が追ってきてるってわかってんのにお前を外に放り出せるかよ！」

インデックスはきょとんとしている。

その表情だけを見ると、ほんとどこにもいる女の子だ

インデックス「・・・じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

笑顔だった。

完璧な笑顔だった、だからこそ演技だとわかってしまう。

そして、その笑顔はこう語っていた。

『こっちにくるな』と

その表情に俺と当麻は言葉を失ってしまふ。  
あまりにも悲しそうな笑顔だからだ。

インデックス「大丈夫だよ。私も一人じゃないもの。とりあえず教会まで行けば匿ってもらえるから」

当麻「・・・ふうん、で、その教会ってどこよ」

インデックス「ロンドン」

当麻「遠すぎ！一体どこまで逃げ切るつもりだお前！！」

インデックス「うん？あ、大丈夫だよ。日本にもいくつか支部があると思うし」

翔「と言ってもここにはないだろうな。教会と言っても、それぞれ宗派が違うから、自分が所属してないところに行っても門前払いに合うだけだしな。」

当麻「・・・？」

わけがわかりませんって顔するな

翔「簡単に言うなら、いきなり見ず知らずの他人が家に泊めさせてください、って言うてる様な物だ。知り合いならともかく見ず知らずの人間を止める理由はないからな」

当麻「なるほどな。実にわかりやすい」

わかるように説明したからに決まってるんだろ。

当麻は心配そうな顔でインデックスを見ている

インデックス「大丈夫。英国式の教会を見つけるまでが勝負だから当麻「おい！・・・なんかあったらまた来いよ」

インデックス「うん、おなかへったら、またくる」

インデックスは笑顔だった。

だが、わかる。

二度と彼女はここに来ないと当麻は感じとっている。

・・・だが、あのフードがある限りインデックスはここに戻ってくる。

翔「じゃあ、当麻、俺はもう行くな。学校行くついでに炎哉の奴を起こしといてくれ。あと扉の鍵はかけとけよ」

当麻「あ、ああ。そういえば昨日の疲れで閉めるの忘れてたな」

翔「じゃあな」

手すりの上に乗り、そのまま下に飛び降りた。

同時に後ろでガツンツと音がした。

翔「インデックスにも当麻の不幸が移ったか？」

原作どおりなら清掃ロボに驚いて壁に後頭部が激突してることだろう。

翔「さて、透のところに行きますか。透はともかく風紀委員にはできるだけ関わりたくないな。反省文なんて二度とごめんだ」

ぼやきながらも空中で高速で移動している。

透が所属している第一七七支部のビルって何気に遠いんだよね

移動中

翔「到着つと。さて、二階だっけか・・・の前に俺って登録されるのか？電話してみるか」

携帯を取り出し電話をかけようとする

「あゝ」

後ろから声を掛けられた。

翔「ん、誰だ？つて初春か」

初春「あ、こんにちは風間さん。ここで何してるんですか？」

翔「透に頼まれてな。今朝ニュースでやってた、無能力者襲撃事件のことで協力してほしいんだとよ。で、ここまで来たは良いが認証登録されてるからわからんから透に連絡を取ろうとしたところだ。」

初春「そうなんですか。たぶん、大丈夫じゃないでしょうか。」

翔「…………たぶんつてのが怖いな。まあ、良いや行くか」

ビルの中に入り、登録されていたのか指紋・静脈・指先の微振動パターンのチェックを無事に済ませることができた。そして初春に中を案内してもらった。

初春「ここです。」

と初春はドアの前で立ち止まり、丁寧にドアまで開けてくれた。礼を言ってから中に入ると

黒子「あら、なんでここにいますの？」

固法「部外者はいれないはずなんだけど……もしかして氷村くんが呼んだ助っ人くん？」

翔「ああ、それで間違つてない」

白井と固法がいた。

呼んだ張本人はどこか？と首を動かすと机の上で何かをじっ、と見ていた

夏休みの課題でもやってるのか？

翔「お〜い、透。来たは良いがどうすればいいんだ？」

透「……………」

聞こえていないのかまったく反応がなく、近づくと机の上に置いてある紙を見ていることがわかった。

透の集中力はすごいのだが集中しすぎるってのも問題だな。はあ〜、気づくまで待つのもだるいしな

翔「楓がまた、お前に女装させようとしているぞ（ボソリッ）」

誰にも聞こえないように耳元で囁いた。

楓つてのは透の義理の姉だった人だ。過去形なのは俺たちが死ぬ前のことだからかだ

うん、あいつはいろいろとすごかった。っとこの話はまた今度

囁いた言葉は効果てきめんらしく、一瞬で座っていた椅子から飛び退き、あたり見回し始めた。

その様子に回りが驚いていた。

このまま行くと物音一つでもすれば窓ガラス割ってでも逃げるなコイツ。

翔「透、冗談だから」

と気軽に言うと、ゆっくりとこつちを振り向いた。

しかも、その目には涙が溜まっていた。

そして安心したのかその場でへたり込んだ。

……そこまで嫌かお前（汗

あー、回りの目が冷たいです。

なんか俺が悪者みたいじゃん・・・とにかく慰めよう

翔「あゝ、すまん透。そこまで嫌だとは思わなかった」  
透「ううゝ、質の悪い冗談はやめてよ！」

透の身長が小さいせいで上目遣いでこちら睨んできた。  
涙目のオブションつきで

よく考えてほしい長門似の顔メガネありでこのコンボ

うん、ここに子供が好きな奴がいたら速攻で『お持ち帰り』してる  
ことだろう。

っーか、やっぱりここでもファンクラブみたいなものが出来てるな。  
前世でもファンクラブあったからな。

ん？俺か？もう慣れたと言っておこう

どこからか視線を感じてあたりを見回すと変態がいた。

顔を赤くして鼻を抑えながら、羨ましそうにこちらを睨み付ける男  
子がいる。

今回は男も入ってるのかよ（汗

しかも鼻息荒いし・・・無視しよ。正直関わりたくない

翔「すまんすまん」

昔やってたように頭をわしゃわしゃと撫でてやった・・・なぜだ  
ろうか？

周りから暖かい目で見られてんですけど。

どこからか黄色い声を上げる女子の声が聞こえた。

しかも「あの人が攻めかな」とトンデモ発現が聞こえた・・・まさ  
かと思うがここでもBLのネタになるのか俺たち！？（俺が攻めで  
透が受け）

向こうでも楓にネタにされたからな〜・・・もちろんアイツが書いた本は全部処分したが

・・・先ほどからこちらを睨み付けた男子は目が血走っていた。しかも目でこう語っていた『いますぐ、その場所変われや!!』

・・・まさかの同性愛者ってオチか？もちろん、無視したが

しばらく、撫でてやると涙が引っ込んでいた。

透「もう、いいよ。気付かなかった僕も悪いし」

翔「そうか。で、俺はどうすればいいんだ？」

初春「風間さんには、この人を見つけ次第、動向を見張っててほしいんです。」

初春から渡された資料を見ると、一人の生徒の詳細が事細かに書いてあった。

軽く内容を言うのだ。

名前：「宮川 大助」

能力：重力操作グラビトン・・・レベル2

××高校の三年生

とこんな感じだ。

ありがたい事に顔写真まで貼ってある。

翔「こいつが今回の犯人の可能性が高いということか」

固法「まだ、確定というわけじゃないわ。それにこれを見て」

机の上にあるノートパソコンの画面を見ると

翔「へえ〜」

路地裏で3人の学生が血を流しながら倒れている映像が映っていた。回りはクレータやら壁が焦げていたりした。

黒子「これを見て、言う事はそれだけですか？」

翔「さてね。まあ、わかったことは犯人は集団だろうな」

固法「ええ、最低でも4人はいると踏んでいるわ。」

翔「ふ〜ん。じゃあ、他の奴の資料があれば見せてくれ」

透「これだよ」

透から渡された資料をパラパラと見て、名前と顔を脳に焼き付ける。ここで、推測だろうがコイツらは幻想御手レベルアップに手を出してるだろうな

幻想御手レベルアップとは？

ネット上の都市伝説のようなもの。

能力のレベルを簡単に引き上げる事が出来る道具だと囁かれているという代物だ。

これを使えばレベル2のあなたでもレベル4に早替わり！・・・つてどこのCMだ

翔「大体頭に入れた。でコイツが怪しい行動をしたら実力行使にでていいのか？」

透「一応、話し合いが無理ならしかたがないよね。」

そういつて顔を少し俯かせる。

まあ、透の性格からして争いごとは嫌いだろうしな

翔「了解。じゃあ、俺は行くからな」

透「うん。気をつけてね」

翔「了解。」

黒子「風間さん。無事に帰って来てくださいですの」

翔「は？」

予想外の言葉に情けない言葉を出してしまった。

間抜けにポカッと口を開けてることだろう。

黒子「い、言っておきますがあの時の能力について知りたいだけですの。ですから、か、勘違いしないでほしいですの／＼／」

ああ、そういうことね。

そういえば、あの時以来会ってないからな。

それにしても、くくっ

自然と笑いが込上げてくる

翔「くくくっ。ああ、無事に帰ってきてやるよ。」

背を向け

軽く手を振りながら扉を開けて廊下に出た。

まさか白井に心配されるとはな。

しかし顔を赤くしてたんじゃ、説得力ねえよ。くくくっ。

まあ、俺が好きとかじゃなくてただの心配で言ったただけだろうな  
・・・そろそろ気分を切り替えるか

翔「さて、狩りを始めるとしますか」

誰もいない廊下でポツリッ呟き

ニイ、と笑みを浮かべた

それは狂気の笑みだった。

それは人が見れば背筋が凍るような笑みだった。

コツコツと誰もいない廊下をゆっくり歩いて行く。

その歩みは獲物目掛けてゆっくりと進んで行く。

選択そして狩りの始まり（後書き）

感想が自由にどうぞ

ではでは

## 犯人たちの目的（前書き）

今回はす・ご・く短めです。

では第18話のはじまりはじまり〜

## 犯人たちの目的

7月19日

透が翔に相談する前の日に事件は起きた。

時間は夜の9時を過ぎている

そんな時間に路地裏で血を流して倒れている学生が2人とそれを眺めている学生が3人

周りには焼け焦げたや壁や地面が鋭利な何かに削られた跡がある。眺めていた内の一人が無常にも倒れている学生の腹を蹴り上げた蹴られた学生は蹴られた箇所を抑え、何度も咽た

A「ああ、楽しいーなー」

B「おい、速くしないと風紀委員ジャッジメントに気付かれるぞつと」

C「捕まりたいなら構いませんが」

A「それはごめんだね。じゃあリーダーが来るまで待、おっ、リーダー終わったのか？」

D「あつけなくな。それにしても涙と鼻水流しながら『助けて』つて永遠に呟くんだぜ。ヒヒッあれはおもしろかったぜ」

4人は一斉に笑った。

その笑いは弱者を見下す笑いだった。

D「じゃあ、行くか」

C「リーダー計画の方は何時始めるんですか？」

D「そうだな。そろそろ良いかもな」

A「よっしゃー！ようやく始められるな」

B「あんま油断していると足元掬われるぞつと」

D「ヒヒヒッ、まあいいじゃねえか。これで能力の試運転も終わっ

た事だしよ。じゃあ始めるか」

「ジャッジメント風紀委員とアンチスキル警備員への復讐を」「「」」

四人は夜の闇に溶けるように消えた。

それから5分ぐらいが立ちたまたま歩いていたアンチスキル警備員に倒れていた学生たちは発見された。

発見した警備員はすぐに仲間に連絡をしてから、救急車を呼んだ。

警備員「とにかく止血しないと」

倒れているうちの一人の状態を確かめると

警備員「なっ!?!」

わき腹をなにか鋭利なもので斬られていた。そこからドクドクつと止めどなく血が流れていた。

警備員は着ていた服を脱いで止血を始めた。

止血を終え、もう一人の方を確かめると軽度の火傷だけで安堵の息が漏れた

そして仲間が来るまで何か証拠になる物はないかと更に奥行くと

警備員「うっ、君大丈夫か!?!」

足や腕は変な方向に折れ曲がり、口や折れた箇所から大量の血がこぼれ倒れている学生がいた。

目の前の光景に吐きそうになるのを堪え、倒れている学生に駆け寄った。

警備員「誰がこんな酷い事を」  
学生「うっ、げぼっ、がぼっ」

意識を取り戻した学生は口に溜まっていた血を一気に吐き出した。目を開けようとするが、少し開いた程度でそれ以上は動かなかった。

警備員「君、大丈夫か！」

学生が意識を取り戻したのを確認し声を掛けるが、すぐに気を失ってしまい言葉を発することはなかった。

警備員は学生の体を揺らさないようにそっと抱え、他に2人倒れていた学生のところまで運んだ。

運んでいる最中に自分が来た道から誰かが走ってくる音が聞こえた。

黄泉川「待たせたじゃん！」

警備員「黄泉川さん！他の子たちは！」

黄泉川「安心するじゃん。もう救急車に運ばれてるじゃん」

警備員「そうですか。じゃあ俺も今すぐこの子を渡してきます」

黄泉川「了解じゃん。・・・それにしても」

黄泉川はあたり見回すといくつものクレーターがきている

黄泉川「この感じからしてレベルは高そうじゃん。」

自分ではいつも通りしゃべっているつもりだが、知らず知らずの内拳を握り締めていた。

黄泉川の中に渦巻いているのは怒り、ただその一点のみだった。

あの学生たちをボロボロになるまで傷みつけた犯人への怒りそれだ

けだった

黄泉川「絶対見つけてやるじゃん」

ギリツと奥歯を噛み締めその場所を去った。

## 犯人たちの目的（後書き）

さて、次話から翔と風紀委員が犯人と戦う話になると思います。

ではでは

能力の使い方を知れ！（前書き）

最近、自分の文を見て思う。

文才が欲しいです！！！！

戦闘シーン書くのは正直難しいと思った今日このごろ  
とまあ、悩んでもしかたがないですね。

では、第19話のはじまりはじまり〜

## 能力の使い方を知れ！

### SIDE翔

第一七七支部を出て人ごみに紛れながらターゲットを探している途中だ。

さすがに3時間も探して見つからなきゃ萎える

翔「宮川 大助ねえ。どこにいるんだか」

あたりを見回してもそれらしき人物は一切見えない。  
いつそのことメガホンで叫んでやるうか

とくだらないことを考えていると携帯の着信が鳴り、めんどくさげに通話ボタンを押した。

翔「もしもし」

初春「もしもし風間さんですか？」

翔「初春か。なんでこの番号知ってるんだ？」

初春「透さんに番号を教えてもらいました。それより宮川 大助の場所がわかりました。」

翔「どこだ？」

初春「え、はっ、はい！第七学区のファミレスに他の3人と一緒にいます」

いつもと違う性質に初春は驚いて少し固まっていた。  
その声はいつもと違って怖い感じだったからだ。

翔「そうか。今すぐ向かう」

初春「あの、白井さんたちも向かっているので一度合流してください」

翔「了解」

と携帯を切った

翔「くくくっ、それは見つからないよな」

いきなり笑ったせいで周囲から変な目で見られたが気にしなかった。それより、もつと別の事に意識が向いていた

翔「さーて、楽しませてくれるかな」

空を飛んで犯人のいるファミレス目掛けてロケットのごとく移動した

SIDE透

僕は今、白井さんと一緒に犯人たちがいるファミレスに向かっている。

初春さんの連絡で翔がこちらに向かっているから合流する打ち合わせだ

黒子「それにしても、初春が言っていたことはなんだったんですの？」

透「僕にもちよつとわからないかな」

それは初春さんが僕たちに翔がファミレスに向かっていることを知らせた時に言っていた言葉だ。

『風間さんの声がいつもと違って怖かったです。まるで別人と話しているようでした』と

白井さんにはわからないと言ったけど僕には一つだけ心当たりがあった。

それは・・・また今度翔がこっちに向かって走ってきたから

翔「ここにいたか」

黒子「案外速く合流できましたわね。」

翔「能力使って上から探してたんだよ。」

透「翔も来たことだし、中に入って彼らがどう動くか見てみる？」

翔「いや、それよりおもしろいことを考えた。ちよっとお前ら耳を貸してくれ」

僕と白井さんは翔に近づいた

翔「俺が考えた作戦は至ってシンプルだ。アイツらが犯人なら無能力者を襲う・・・だろ？」

白井「ええ、確かにそうですね。だから何だと・・・そういうことですよ」

透「翔の作戦で行ってみようか」

翔「の前にだ。白井お前は私服に着替えて来い。さすがにそれじゃあバレル」

ビシッと白井さんを指差す翔。

白井さんの服装は常盤台中学の制服。あそこに無能力者はいないはずだ。

白井「風間さん。さすがにここから寮まで時間が掛かりすぎますの。」

翔「・・・わかった。白井これで私服を買ってきてくれ。」

翔は財布から2万円を出して白井さんに渡した。

渡された白井さんは突然の事に慌てていた。

白井「えっ!?!」

翔「とにかくそれで、私服を買って約束の時間に遅れた感じで俺たちが座ってる席に来てくれ」

そう言つて翔はファミレスに入つて行つた。

黒子「もう、勝手な殿方ですの。それにしても別に変わったところはありませんですの」

透「そうだね。初春さんの勘違いじゃないかな」

と誤魔化したけど、今の翔は僕と初めて会つたときと同じ雰囲気になつてる気がする。

あの時の翔は人を平気で傷つけていた。それも笑いながら自分の勘違いだと必死に思い込ませ店の中に入つて行つた。

SIDE翔

ファミレスの中に入ると4人は雑談しているどこにでもいる学生にしか見えない

4人に感づかれないように自然に席に座つた

それに続いて透も同じ席に座つた

それから数分が立つてから私服に着替えた白井が入店してきた

黒子「遅れてすいませんですの。」

翔「い、いや、俺たちも来たばっかだし気にすんな」

透「翔、もしてかして照れてるの?」

翔「なっ、うっせえ!」

そう言つて透から顔を背けるが  
多分俺の顔は赤くなつてんだろうな  
しかも白井の奴はクスクス笑いながら席に座つた。  
俺がこんな反応すんのはそんなにめずらしいのか？  
とにかく演技を続けるか

翔「おし！今日は俺の奢りだ好きなだけ食いな」  
透「え、いいの！」

黒子「お言葉に甘えるとしますですよ」

そうして、俺たちは適当に注文したんだが・・・だが

翔「どこにそんだけ入るんだお前（汗）」

黒子「甘い物は別腹といひますの

テーブルには空になつたパフェやケーキの皿がいくつあつた  
いや、確かに好きなだけと言つたがこれほどまでとは・・・財布の  
中身足りるかな（汗

翔「さいですか。透も食べてるか」

透「うんっ」

子供っぽく頷く透。

そろそろ、話を切り出してもいいか

翔「そういえば透、知ってるか？」

透「ん、なにが？」

翔「最近、無能力者が襲われてるって話だぜ」

透「そういえば、よくそんな話を聞くね」

そんな話題を出すと向こうに座っていた4人がピクンツと動いた。獲物が餌に食いついたようだ。さて、もう一手間加えるか

翔「それにしても、情けない奴らだよな。無能力者しか狙えないなんて」

黒子「そうですね。予想するにその人たちは相当の臆病者ということですよ」

4人聞こえるように少し大きめの声で言ってやった。

チラッと見ると微かに肩を震わしていた。くくっ、怒ってる怒ってる

透「でも、僕たちも無能力者だよ？」

翔「なに弱気になってんだ。そんな奴ら自慢の剣で斬ってやるよ。つっても今はないけど」

黒子「あつては困りますの。それに氷村さん、そんな連中にビビる必要はありませんの。」

透「なんで？」

透が首を傾げた。

翔、黒子「「所詮は小心者ですのだからだ」」

声を合わせて言った。

あわせるつもりはなかったが、偶然とハモツた。

十分に効果があったのか、さきほどより大きく肩を震わしていた。

翔「っと、こんな時間か。すまんが俺はバイトがあるから行くとするか」

透「ほんとだ！？僕も課題があるから帰るよ」  
黒子「では、わたくしも行くとするのですの」

俺たちは同時に席を立って外にでた。

店の入り口で別れの挨拶をしてから解散した。

予想通り4人も俺たちが出ると同時に少し遅れて出てきた。

そして、俺に2人、透に1人、白井に1人という感じで向こうも別れて尾行してきた。

翔「少し近道でもするか」

尾行している2人を誘い出すために路地裏に入った。

路地裏に入って、しばらく奥に進むと後ろから声を掛けられた

「そこのお前、ちょっと待てよ」

翔「誰だ、お前ら」

「簡単ですよ。あなたたちが先ほど話していた無能力者襲撃者事件の犯人ですよ」

翔「なっ！？マジかよ?!」

まだ演技を続けておいた。

だってその方が面白いだろ。

綾斗「私は佐川 綾斗言います。せいぜい覚えておいてください。」

大助「綾斗が名乗ったなら、俺も名乗るか。俺は宮川 大助だ。だけど、ヒヒツ覚えたところで、ここで死ぬけどな。おい綾斗やれ」

綾斗「はい、では死んでください」

そう言っつて綾斗は服の中から芝刈り機の歯の部分を出し、自分の左

側に放り投げた。

すると、その歯はゆっくり回転し徐々に速さを増して、簡単に人が切れるぐらいまでの速度になった。しかも空中に浮いたままだ。

綾斗「どうです？おもしろいでしょう、私の能力は。では、バラバラになってもらいましょう！」

綾斗が手を振ると同時に歯は回転しながら、速いスピードでこちらに向かってきた。

翔「う、うわっ！？助けて！・・・なんてな」

風の塊を歯の上に落とした。

すると、飛んできた歯の先端が、地面を削りながら止まった。予想外のことに犯人たちは驚いていた。

おおーおおー、驚いてんなー。

大助「お前能力者だったのか！？」

翔「そうだが何か？」

あくまで冷静に返すが実際は

そくだよ、これ。この反応が見たかったんだ！

いいねえ、羊と油断したら、中身はまったく別の物でしたっけな！

傑作だぜ、その顔！

結構ハイテンションだった。

綾斗「リーダー私たちは騙されていたようですね」

大助「そうみたいだな。ってことは他の連中もそうなのか？」

翔「正解！後の2人は風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>。俺はただの助っ人だ」

俺がそう答えると向こうはニヤツと笑った。

綾斗「そうですか。では、あなたを殺して仲間の所に向かうとしましよう」

翔「おいおい、本気で言ってるの？これでもレベル4だぞ」

小指で耳をほじくって言った。

明らかに挑発行為だ。

大助「ヒヒヒツ、そういうお前こそ大丈夫なのか。言っとくが俺たちもレベル4だ。そして俺の能力は」

ゾクツと嫌な物を感じすぐにその場から後ろに跳んだ。  
瞬間、ドンツと音共にその場所にクレーターができた。

大助「重力操作<sup>グラビティマスター</sup>だ」

と自信満々に宣言した。

だが、俺はそんな声など聞こえていなかった。

翔「くひっ！くくくくくくくくく」

自然に笑いが込み上げてくる。

その笑いは止まりはしない。止めようとも思わない。

だって、コンナニモタノシイノダカラ・・・



綾斗「わかりました。あなたでもこの弾丸は避けられませんよ」

翔「確かに。さっきの歯なら横回転だから上か下に風をぶつければ簡単に無力化できるが・・・それはな」

俺の態度が気に入らなかったのか綾斗とかいう奴の額に血管が浮いている。

綾斗は周囲に転がっている石を5個ぐらい掴み

綾斗「その余裕いつまで続く見物ですね。蜂の巣でもなっけてくださいー！」

こちらに向かって投げた。

飛んでくる石は高速回転し弾丸のように飛んできた。

当たれば、体を貫かれるだろうな

翔「ブチッ・・・ッ!!」

3発は避けれたが残りの2発は右肩と左のわき腹の肉を軽く抉り、体中に激痛が走った。

抉られた場所から大量の血が流れ、その場で膝を突いてしまった。向こうも、その隙を逃さず重力の塊を上からぶつけてきた。

重圧に耐え切れず、ミシミシと嫌な音を立てながら地面と激突した。

翔「がはっ!？」

大助「ヒヒツざまねえな。さっきまでの余裕はどこいったんだ？」

綾斗「油断してるから、そうなるんです。」

2人は近づいて、翔を見下ろしていた。

それが、自分たちの負ける敗因になるとは知らずに

翔「そうかよ。だけど、近づいてきたのは間違いだったな」

大助「は？なにいつ　ガンツ　ごふっ！？」

カスタマイズ  
改造の能力を使って、地面を柱に変えた。

大助の足元から生えた柱は、大助の顎に直撃した。

大助は痛みで、翔にかけていた重力を解いてしまった。

綾斗「何ですか！？その能力は！？」

翔「あゝいてえ。何って、カスタマイズ改造だが。って聞いた事あるわけないか」

大助「てえゝ。やってくれるじゃないか。」

顎を摩りながら、こちらを睨んでくる。

翔「さすがに俺もふざけるのはやめるか」

先ほどとは、まったく違う雰囲気になっていることに、2人は気付いていなかった。

綾斗「できるものならやってみなさい！」

綾斗は石の弾丸を撃つために、石を拾おうとするが、いきなり右肩を何かが貫いた

綾斗「があああああああああ！?!?!?!」

なにをされたのか分からず、その場で激痛で悶えていた

大助「綾斗?!お前一体なにをした!」

翔「殺し合い中にぎゃーぎゃー騒ぐなよ。みっともねえ。ほら」

続けざまに左肩、右足、左足と容赦なく『ナニか』を撃ちこんだ

綾斗「ツーーーーー!!!!!!」

大助「綾斗っ!?!」

声にならない悲鳴があがった。

足を撃たれ、立つ事すら許されなかった。

仲間の悲鳴を聞いて大助は足がすくみ何もできなくなっていた。

翔「はあく、さっきの攻撃はなかなかにおもしろかったのに。爪が甘いな」

綾斗「はあはあ、いつたいなにをしたんですか?」

痛みが少し引いたのか、倒れながらも顔をこちら向けながら言った、

翔「何っってお前と同じように弾丸を撃つたんだよ。こんな風にな」

第一間接ぐらいの大きさの石を何個か拾い、一発を綾斗の顔のすぐ横の地面に撃った。

綾斗は顔だけを動かして当たった弾丸を確認すると

綾斗「ほ、本物っ?!」

本物の銃弾が自分の横に撃ちこまれていた

翔「俺の能力は物質であれば、好きな形、本質に変えることができんだよ。だからさっき拾った石を銃弾にカスタマイズしただけだ。」

大助「デュアルスキル多重能力者かよ」

翔「正解だ。さて、おとなしく捕まるか? 捕まるならなにもしないが。正直、お前らと殺し合いができると思ったのがっかりだ。」

綾斗「そこまで、殺し合いが好きですか？」

翔「は？何言ってるんだよ、お前。好きに決まってるんだろ」

当たり前な事のように答えた

翔「大体、お前から言ったんだろ、『殺す』って。それによお前ら。その能力あんま把握してないだろ？」

大助「なにっ！」

翔「能力の使い方があまりにも雑すぎる。その綾斗だけか。石を回転させて弾丸みたく飛ばすってのはおもしろい発想だけ。お前は、ただ重力の塊をただ落としてくるだけじゃねえか。正直に萎えるんだよね」

後半部分は大助を指差して言った

めちやくちやつまらなさそう顔をしていた。

翔「もう少し他にねえのか？俺のみに重力をかけて動きを鈍くさせて、その隙にそいつの銃弾をぶち込めることができれば大抵のやつは死ぬのによ。一発で決めようとするからダメなんだよ」

大助「あ」

翔の言葉に言われてようやく気付いたようだ。

だが、その作戦を実行しようにもすでに片方は四肢を撃たれて動くことすらできない。

翔「俺に言われてるようじゃだめだな。さて、おとなしく捕まるか？」

大助「だれがっ！」

翔「あつそう。じゃあ、そいつと同じ運命を辿ってもらうか。安心しろ、死にはしねえよー！」

先ほど拾った石を銃弾に変え、大助目掛けて全弾撃つたが、近づいていく途中で銃弾が下に落ちた。

翔「重力を使って落としたか」

大助「ヒヒヒツ。お前はバカだな！わざわざ敵にアドバイスするなんてよ！」

重力を操作して、自分以外全てを重くした。

綾斗「リ、リーダー！？ぐうつ」

翔「……体が重いな。んで、お前そこに苦しんでる仲間は良いのか？」

大助「ヒヒヒツ知るかよ！俺に弱い仲間なんて必要ねえんだよ！」

その言葉を聞いて綾斗の顔は絶望に染まっていた。

そして、シヨツクのあまり気絶してしまった。

それを見た翔から一切の表情がなくなっていた。

翔「じゃあお前は俺の敵として認識していいのか？」

大助「はあ？今更だろ。どうせお前もここで死ぬんだからな！」

翔「そうかよ。最後に警告だ……大人しく捕まる気は？」

大助「ねえよ！」

重力の塊を翔の上に落とす。

先ほどとは違いいくつも連続的に落とす。

だが、翔はそれを避けていた。

大助「おらおらどうした！さっきから避けてばっかじゃねえか！」

翔「……こんなものか」

翔は自分いた場所のコンクリートを砂に変えて、風を起こして砂煙をを起こした。

大助「ちつ、小細工を使いやがって」

苛立たしげ呟いていた。

翔は砂煙が起きてる間、日本刀を作っていた。

大助「そこかつ！」

勘を頼りに重力の塊を落とすと、その衝撃で砂煙が晴れた。だが、どこにも翔の姿はなかった。

大助「どこだっ!?」「後ろ」がつ!？」

大助の後ろにいた翔は、日本刀でその腹を貫いた。

大助「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

翔「やかましいな」

激痛のあまり翔の言葉など聞こえていなかった。

そして、日本刀を抜くと、噴水のごとく血が吹き出た。

大助は痛みのみならず、その場で崩れ落ちた

翔「本来なら殺したいところだけど、今回は風紀委員の助っ人だからな。俺が個人的に判断することはできないんだよ」

あれほどのことをしておいて、翔の顔は一切変わっていなかった。

能面を張り付けたような無表情だった。  
なにも感じず、なにも考えない。まるで機械のようだった。

大助「がああつ！はあはあ、お前みたいな強者が悪いんだろっが！」  
翔「あ？」

大助は激痛に苛まれながらも立ち上がり、自らの思いを吐き出した。

大助「いつだつてそうだ！俺たちみたいな能力レベルが低い奴らは能力が強い奴らから虐げられても、風紀委員は事件が起きてから来やがつて、それに警備員アンチスキルの奴だつてそうだ！結局は風紀委員ジャッジメントと同じで、役立たずじゃねえか！！だつたら俺たちの手で潰してやるうとおもっぐぼっ！？」

翔「ほざけ」

容赦なく大助の腹に膝蹴りをいれた。

大助は腹を抑えながら、再びその場で崩れ落ちた。

翔「自分たちがやられた原因を他人のせいにしてんじゃねえよ。大体その言い分だと、今回の件でお前らはもう加害者側だ。ミイラ取りがミイラになってどうする。」

倒れ伏しながらも、翔を睨み続けている。

翔「言つとくが、これ以上抵抗するなら腕の一本は覚悟してもらっぞ。」

日本刀の先端を向けながら、言った。

その目は本気だった。

情けなどなく躊躇なく腕を斬り落とすことを物語っていた。

大助「ひい！」

そのとき初めて大助は翔の顔を見た。  
そして思った。

大助「（ひよ、表情がねえ！こ、こいつ本当に俺たちと同じ人間か？！まるで機械と話してるみたいだ・・・ば、化物！？）」

痛みより恐怖が勝った

さつきまでの威勢はどこかに消えて、その場で震えだした。  
それを見て抵抗する意思はなしと判断し、透に電話をかけた。

翔「透か？こつちは終わった。そつちはどうだ？」

透「こつちも終わったよ。それより翔」

翔「なんだ？」

透「その声からして怒ってるの分かるけど、犯人たちを・・・」

翔「殺してない。ただ、動けなくしただけだ」

透「はあ、やっぱり。でも、よく我慢できたね」

電話越しでも、透が頭を抱えてる様子が簡単に思い浮かんだ。

翔「あの時の惨劇は二度と起こさないと、俺たちで決めた事だからな。」

透「そうだね。でも、あれは僕が「ストップだ」え？」

翔「起きたことを後悔してもしかたがない。それよりコイツらを回収する奴を呼んでくれ」

透「わかったよ。じゃあ、そこで待機しててくれる？」

翔「了解」

電話を切った

翔「おい」

大助「は、はいいい！」

ビクンツ、と体を震わせ翔のほうを向く大助

翔「お前らを回収する奴を呼んだから、おとなしく待ってる。妙なマネしたら・・・わかってるよな」

コクコクと壊れるんじゃないかと思うほどの勢いで何度も頷いた。

翔「・・・疲れた。ツゝ、また痛みだしたな」

その場に座り込み、深く息を吐いた。

そして、ジャツジメント風紀委員が来るまでじっとしていた。

数分立つとジャツジメント風紀委員が来てアイツらを回収して行った。

まあ、最初は惨状を見た一人が悲鳴があげたが・・・そこまでひどいか？いや、学生でこの光景は辛いか

そして、俺はと言つと

黒子「聞いてますの、風間さん！」

翔「ああ、聞いているよ」

第一七七支部のビルのある部屋で説教されていた。しかも、自分より年下の子に・・・泣けてくる

黒子「先ほど言いましたように、あそこまでやる必要があったのですの」

犯人に重傷を負わしたことについて聞いてくる。  
延々と話しが続きそうだったので、話題を変えることにした。

翔「いや、相手が2人もいたから手加減できなくてな。それより包  
帯くれないか？布でもいいから」

黒子「・・・わかりましたですの。少しの間待っててくださいです  
の」

ドアを開けて出て行った。

翔「はあく、疲れる。アイツらと戦ったときより疲れるってどうよ。  
ふあく、やべつ、気が・・・抜・・・けて・・・ねむ・・・ぐく」

机に突っ伏したまま寝てしまった。

一定の寝息をたてて、疲れた体を休ませていた。

能力の使い方を知れ！（後書き）

突然ですが、皆さんにアンケートに答えてもらいたいと思います！最近、携帯で書いているものなんですけど、IFストーリーみたいなもので翔たちを別の世界に転生させようと思っています。で、候補が

・ネギま

・魔法少女リリカルなのは 無印

・バカテス

の三つです。

期間は11/18～11/23日の5日間の予定です。

答えてくれるとありがたいです！

ではでは～

## 翔の決意（前書き）

今回の話も長くなってしまった。

それでは第20話のはじまりはじまり〜

## 翔の決意

SIDE 黒子

いま、わたくしは風間さんに頼まれて、包帯を取りに行ってるのです

黒子「たしか、この辺に救急箱があったはずですよ」

部屋に入りガサゴソと探していると

透「白井さん、なにしてるの？」

黒子「いえ、風間さんが包帯が欲しいと言っているので、探しにきたんですの」

後ろから氷村さんに声を掛けられたが、驚くことはなかった。

ここではよくあることですの。

透「そうなんだ。後、個法さんが話が終わったら翔を連れ来て欲しいって言ってたよ。」

黒子「わかりましたですよ。では」

話してる間に包帯を見つけ、それを持って風間さんがいる部屋に向かった。

部屋の前に着き、扉を開けようとする

黒子「物音がしないのですの？」

物音がしないことに不思議に思い

扉を開けて中を窺うと机で突っ伏して眠っている風間さんが見えた。



透「翔、寝ちやってるんだ。」

黒子「はっ！え、ええそうですね。気持ちよさそうに寝ていたので、少し困っていたですよ。」

透「……明らかに寝苦しそうなんだけど。」

氷村さんは目線を風間さんに向けながら言った。

眉間に少しだけ皺が寄っていた

翔「固法さんが呼んでるから翔を起こそう?。」

黒子「そ、そうですね」「はい」「これは何ですか?。」

透「スタンガン」

氷村さんが手渡してきた物は、起こすのにまったく必要ないものですの

それどころか、今より深い眠りにつくことに間違いなしですの  
これを渡すなんてどういう神経をしていますの

黒子「そうではなくて、なぜこれを渡すのです?!」

透「翔って寝起きがすごく悪いから危険だよ?それに良くても抱き枕にされるし」

黒子「だきっ?!／／／／／」  
「コホンッそれでどういう風に危険ですの?」

透「前に炎哉が、起こそうとしたらボコボコにされてモザイクがかかるほどの酷い状態になった」

黒子「……そうですね。」

あの強そうな近藤さんをボコボコに……少し想像できませんわね  
そう考えると普通に起こすのが怖くなりますわね

透「威力は最小でいいよ」

黒子「人をスタンガンで起こすなんて初めての経験ですよ」

透「逆にあつたら怖いよ。じゃあ翔を起こしたら連れてきてね。僕は書類を片付けないといけないから」

黒子「えっ?!お待ち バタンツ . . . .」

黒子の制止の声も聞かず透は出て行った。

ため息を吐き、右手に持っているスタンガンを眺めた。

黒子「ほんとにこれで起きるんですの? . . . 物は試しですわね」

翔の後ろに近づき、スタンガンを背中に押し当てた

そして、威力を最小にしてスイッチを入れた。

バチツと音とほぼ同時に

翔「ふぐりっ!?!」

風間さんは変な奇声を上げて、そのまま動かなくなった

. . . . 大丈夫なんですか?

SIDE翔

夢の中

俺の前で腰に手を当て仁王立ちしている白井がいる

そして、手に持っている物に目が行く。

黒子「風間さん覚悟はできたんですの?」

翔「死んだかも俺 . . . . し、白井さん、その手に持っている物はなんでございませうか? (汗汗)」



と絶叫をあげ、ここで夢は終わった。

## 現実

黒子「ほんとにこれで起きるんですの？物は試しですわね」

夢から醒めると同時に聞こえる白井の声

・・・なんか非常に嫌な予感がする。

背中にナニカを押し付けられる感触と同時にバチツと音ともに体中に電気が走った。

翔「ふぐりっ!？」

変な奇声を上げると同時に痺れて体が動かなかった。

黒子「だ、大丈夫ですの？」

心配する声が聞こえるこっちはそれどころじゃなかった。

起きた瞬間にスタンガンをやられたおかげで心臓がバクバク鳴ってるそれに俺自身も状況についていけなかった。

それから数分後

痺れがひいてき、ようやく体を動かせるようになった。

翔「ひ、酷い目にあった」

黒子「す、すいませんですの」

頭を下げて謝ってきた。

こんな素直に謝られたら怒る気も失せる

翔「いや、いいんだが……ところでどうやって俺を起こした？」

黒子「これですの」

と出してきたのはスタンガン……ってスタンガン！？

まさか、夢と同じことが起きるとは……ってか普通スタンガンで起こすか？

もしかして白井って俺のことが嫌いなのか？

嫌いじゃなきゃ、こんなとんでもない手段使わねえよな

あれですか？手すら触れるのも嫌とか……やべえ、少し泣ける

翔「白井、それ、ちよつと貸してくれ」

黒子「え、ええ。いいですわよ」

渡されたスタンガンを調べてみると

正夢って本当にあるんだな。ここまで夢と同じだと恐怖を感じる。なぜなら、これは……

翔「これ俺が作ったやつじゃん……し〜ら〜い〜？」

黒子「は、はいいいいい！」

ゆっくりと白井のほうを振り向くと、白井は体をビクツとさせ、体を直立不動になった。

きつと俺は怖い顔をしてるんだろうな  
だって白井の顔から血の気引いてるし

翔「これ、間違ったら死ぬタイプのやつなんだが？一応透に説明受

けてるはずだが、その辺どうよ？」

黒子「・・・その氷村さんにスタンガンで起こせと言われたのです  
が」

翔「え？」

ポカンと口を開けて固まった。

マジか・・・よし、アイツ絞める

翔「わかった。疑って悪かったな」

黒子「わかつてくれたら・・・ってなぜ頭を撫でますの！？／／／」

反射的に白井の頭を撫でてしまった。

翔「おっと、すまんな」

黒子「あ」

頭から手を放した。

その手を名残惜しそうに見ていたが翔は気がついていなかった。  
逆に

思わずやっちゃったな・・・嫌いな奴に頭撫でられるのはいやだろ  
うな

こついう癖気をつけねえとな

と思っていた。

翔「さて、白井。包帯を持ってきたんだろ。くれないか？」

黒子「え、ええ、どうぞ。」

翔「あと、後ろ向いててくれ。あんま見せれるものじゃないからな」  
黒子「わかりましたですの。終わりましたら声を掛けてくださいで

すの」

白井から包帯を受け取り、後ろを向いたか確認して処置を施すために片手でシャツを脱いだ

その体には大量の傷跡と今回の戦いで傷ついたがあった。

チラツとこちらを見ていた白井が俺の傷を見て驚いた顔をしていた。

黒子「その大量の傷跡は・・・いったいなんですか？」

翔「ったく、後ろ向かせた意味ないだろうが。はあく、あんま見せたくなかったんだがな。簡単に言えば、修行してたときにできた傷

だ」

黒子「修行、ですか？」

首を傾げて聞いてくる白井は少し可愛かった。

翔「ああ、俺は剣術を習ってたな。その修行の時にできた傷だ。さて、すぐ巻くから待っててくれ」

まず腹に包帯を巻こうとするのだが

翔「っ！ちくしょう腕が動かすのきついな」

痛みでうまく腕が動かせなかった。

動かすたびにズキンツと鈍い痛みが体を襲う。

それでも、包帯を巻こうとしてもうまくいかず悪戦苦闘していた。

黒子「ちよつと貸してくださいですの！」

翔「いや、ちよつとま」

黒子「そこでおとなしく座ってなさいですの！」

それを見かねてか白井は俺から包帯を奪い取った。  
取り返そうと立とうとしたら怒られてしまい、おとなしく座ることにした

翔「すまん、手間掛けさせちゃって」

黒子「まったくですの。それにこれほどの傷なら病院に行って治療してもらうべきですの」

白井は呆れながらもテキパキと包帯を巻いていつてくれた。

おかげで、あつという間に腹と腕を巻き終わった

翔「借りができちゃったな」

黒子「そんなものはいいですの。それより着いてきてくださいですの」

翔「了解。後、何か困ったことがあったらいつでも言ってくれ。すぐに駆けつける」

黒子「まずは、その怪我を治してから言ってくださいですの。それに気持ちだけ受け取っておくとしますの／＼」

少し顔を赤くさせ、扉を開けて歩いていった。

俺もそれにつづくように後ろに着いて行った。

さっきから、白井の顔が赤いが風邪でも引いたか？

まったく的外れなこと考えている翔だった。

少し歩くと、今朝入った部屋に連れて行かれた。

中に入ると透と固法が飲み物を飲んで寛いでいた

固法「ようやく来たのね」



翔「で、俺に何か用か透」

透「ううん、僕じゃないよ。固法さんが翔に用があるんだって」  
固法「少し話が長くなりそうだから、そこに座ってくれる」

言われたとおり近くのイスに座る。

場所的に固法と向かい合う状態だ。

翔「話ね。話し合いなら、まずは自己紹介でもするか？」

固法「ええ、そうね。私は固法このり美偉みいよ。よろしくね」

翔「ご丁寧に。俺は風間かざま翔しょうだ。こちらこそよろしく」

少し間を置き

翔「で、話つてのは？」

固法「その前に2人とも、ごめんんだけど、部屋から出てもらえ  
る。」

白井「えっと、なぜですか？」

透「??????」

固法が言った事に2人とも首を傾げていたが、すぐに部屋から出て  
行った。

そして部屋には俺と固法しかいなかった。

SIDE固法

この部屋には私と彼しかいない。

目の前の彼は、どこにでもいる学生にしか見えない  
本当に彼があんな事をしたのだろうか？

固法「聞きたいことは1つよ。なんであんな事をしたの？」

翔「あんな事？まさかと思うがあの犯人たちにしたことか？」

固法「当たり前前よっ！何もあそこまでやることはなかったはずよっ！」

固法は声を荒げているが、翔は飄々としていた。

翔にとっては、あれぐらい当たり前のことなのだから、責められる筋合いなどないと思っっているからだ。

惚けて・・・私をバカにしてるの！

それになんで不思議そうに聞いてくるのよ！

あんな事をして罪悪感すら感じてないって言うの

翔「別にあれぐらい普通だろ？それにこっちだって怪我したんだし」

固法「それはどう見てもあなたの自業自得のはずよ。」

厳しい目で彼を睨みつける。

翔「まあな。それにしてもあの映像を見てよく気分が悪くならなかったな？」

固法「私はともかく初春は気絶したわ。それに私だって正直気分が悪くなつたわ」

翔「初春には悪いことをしたな」

固法「ええ、しばらくは会わない事をお勧めするわ。で、なんで大怪我するまで犯人を追い込んだの？あなたなら余裕であの2

人を簡単に無力化できたはずよ」

翔「答えは至ってシンプル。ただ、殺し合いをしたかっただけだ」  
固法「なっ！？」

翔の答えに固法は驚愕をあらわにした。  
普通殺し合いをしたいと言う人間はいない。  
そんな回答ができるのは、狂った人間しかない

殺し合いをしたいから、遊んでたって言うの!？  
そもそも、殺し合いをしたいなんて、狂ってるわ!  
正気の沙汰じゃない……

翔「ああ、言っておくが俺は別に殺人鬼じゃない。今回の件だって、あいつ等から先に『殺す』って言ったんだ。殺そうとしてくる相手に容赦なんてする必要はないだろ？」

固法「なら、聞くけどこれからあなたの前に殺そうとしてくる人間がいれば、全員殺すのかしら？」

翔「なに当たり前のことを言ってるんだ？当然だろ。なんで、手加減する必要がある？」

なにおかしなことを言ってるんだ？といわんばかりに訊ねてくる

やっぱり彼はおかしい。

私たちとはどこか感性がズレてる。  
人を殺すことに罪悪感の欠片も持ってないわ。

固法「それが友達でも？」

翔「いや、それはやんない」

即答だった

その答えに、私は呆気にとられていた。  
てつきり殺すと回答すものだと思っていたからだ。

翔「俺にとって友達は家族と同じくらい大切だな。あいつ等傷つけるぐらいなら死んだ方がマシだ」

固法「意外ね。てつきり殺すと思っていたわ」

翔「勘違いすんなよ。俺が殺す相手は俺や俺の大切な物に害なすものだけだ。大体アンタは甘いよ」

彼は背もたれに腰を預けながら、こちらを指差してくる

固法「なにが甘いっていうのかしら？」

翔「じゃあ、例え話だ。あなたは無能力者です。あなたの目の前に凶器を持っている人がいます。その人のターゲットはあなたと

その友達です。あなたはどうしますか？更に条件を加えると自分が持っている物は銃とスタンガンと携帯のみ」

固法「簡単よ。スタンガンで相手を気絶させて、携帯で警備員を呼ぶわ」

翔「では、その人が捕まり、その後釈放されて、またそれを殺してきたらどうしますか？しかも、最初のターゲットはあなた、次にあ

なたの友達です」

そう言われて少し考える。

この話の流れから考えて、また捕まえても、また出てきて私たちを狙い続けるってことよね。それも死ぬまで

翔「言つとくが、ソイツは死ぬまで狙い続ける。」

やっぱりね。

そういうと思っていたわ。  
結局は

固法「殺すしかないってことね」

翔「そういうことだ。まあ、目と耳、鼻を二度と使えなくして襲われないようにするって方法もある。一応は生きてるぞ」

固法「残酷すぎるわよ！殺すよりひどくなってるないかしら！？」

翔「だけど、俺からしたら正解と言いたいね。時にそういう甘さが自身の身を滅ぼすぞ。後悔してからじゃもう遅いんだよ。」

まるで、そんな体験をしたかのような言い方だった。

固法「・・・じゃあ、アナタは彼らに対して罪悪感はないのね」

翔「ないな。これっぽちも」

指で の形を作って言った。

翔「大体俺が殺し合いたいのも、強い奴と全力で戦いだけだ。命懸けともなれば本気で戦うしかないだろ？」

固法「そういうことね。結局はただの戦闘狂<sup>バトルジャンキー</sup>ってことね」

翔「そういうことだな。それにまだ、殺人衝動なんて出てねえよ。」

呆れた。

そんなことのために命を賭けるなんて。

それに、まだってことは何時かはそうなるってことよね。

監視でも付けようかしら

翔「それに、綾斗だっけか？アイツはただ動けないように四肢に銃弾を撃ち込んだだけでそれほどひどくはないんだろ？」

固法「ええ、そのかわり何ヶ月かは動けないみたいね。それより一番ひどかったのは「宮川って言うやつだろ？」ええ」

翔「今回はジャツジメントの助っ人って言う事で殺しはしなかったが、正直今でも殺したいね」

言い方からしてとてもイラついていることが分かった。

固法「なぜかしら？」

翔「アイツは自分がいじめられた原因をジャツジメントやアンチスキルのせいにしたんだよ。自分がいじめられているときに『なんで助けてくれなかったんだ！』ってな。自分は悪くない、悪いのはジャツジメントやアンチスキルって感じで、今回の事件の責任を全

てを他人に押し付けたんだよ。まるで自分が被害者のようにな」

それを聞いて、正直気分が悪かった。

たしかに助けて上げられなかったが、ジャツジメントも万能じゃない。

その言い方では風紀委員わたしたちが悪者扱いだ

翔「なにより一番気に入らねえのは、アイツ、仲間を裏切ったしな。綾斗ってやつを動けないようにしただろ？」

固法「ええ」

翔「その時に『俺に弱い仲間が必要ねえ』ってな。綾斗はショックのあまり気絶。それを見て少しプツンしてな。で、日本刀ブスツ

と刺した。臓器は傷つけてないはずだが？」

固法「ええ、でも重傷には違いないわ。」

翔「そうか。言っておくが俺は反省する気もないからな。」

固法「話を聞いて十分にわかったわ、これ以上言っても無駄だっ  
ね」

翔「それは良かった。」

固法「でも、今回は私たちの助っ人ってことで捕まえないけど、次  
はないわよ」

彼の瞳を真っ直ぐ見つめながら言う

翔「へえ、捕まえられるのかお前らに？」

固法「ええ、本気よ」

部屋は緊迫感に包まれていた。

だが、それは彼の笑い声によって唐突に破られた。

それは楽しそうな笑い声だった。

翔「くくくくははは。了解した。俺もそれなりに控える」

固法「絶対はないのね？」

翔「当たり前だ。そのかわり相手が俺の大切な物を傷つけたときは  
殺す。これは譲れない」

固法「今回みたいな事を控えてくれるなら、それで妥協するわ。で  
きれば殺すとかそういうのはやめて欲しいけど」

翔「一応、善処はする」

はあ、と深いため息を吐く。

彼と話すのは疲れるわ。

翔「さて、そこで盗み聞きしてる2人にも入ってもらおうか」

固法「え？」

私が驚いてるのを他所に

彼は立ち上がり、ドアを開けると白井さんと氷村くんがヤベツと言った顔をして立っていた。

2人はそのまま部屋に入ってきた。

はあ、追い出した意味がないじゃないの  
2人とも後で反省文ね

透「えつと、何時から気付いてたの？」

翔「最初からだが。物音を立てなかったのはよかったが気配が駄々漏れだ。」

固法「最初から気付いてたなら、何で言ってくれなかったのよ」

翔「その方がおもしろそうだから」

固法「・・・愉快犯」

翔「ふ、褒めるなよ」

透、黒子、固法「、「褒めてないっ!」「」

まさか、褒め言葉として捕らえるとは思わなかったわ。

それも本気で思ってるなんて・・・案外バカなのかしら？

黒子「それで、さっき言った事はほんとなんですの？」

翔「ああ、本当だ。俺は人を殺すことに躊躇いなんてない。」

さつきまでのふざけた態度とは違い、真剣な顔で答えていた。

その答えに白井さんは一瞬悲しそうな顔をした。

黒子「何でそんな考え方ができますのっ!」

翔「俺はそういう考え方ができない。固法にも言ったが、その甘さが自身の身を滅ぼすぞ。」

黒子「わたくしもそれはわかってますの。しかし「ストップだよ」氷村さん?」

突然氷村くんが白井さんに制止の声を掛けた。

氷村くんがいつもの優しそうな顔ではなく、凜とした表情だった。

透「これは翔の決意であり信念だからこれ以上言っても無駄だよ。」  
黒子「わかりましたの……」

少し納得が言っていない表情をしていたが、それ以上はなにも言わなかった

翔「そういうことだ。……もう、6時か少し長居しすぎたな。じやあ最後に白井に教えてなかった俺のもう一つの能力を教えてやるよ

「  
固法「もう一つの、能力？」

翔「俺の能力は物質であれば、その形を変えたり本質を別のものにするができる」

固法「そんな与太話を信じることはできないわよ！？まるで」

翔「魔法みたいだろ。まあ、言っても信じられないだろうし……これにするか」

と言つてデスクの上にあるシャープペンを持った

翔「白井、今欲しいものはあるか？」

白井「えっ、ではダーツを」

翔「了解」

彼がシャープペンを握り締めると、手の中が微かに光っていた。  
ゆっくりと手を開くとシャープペンはダーツに変わっていた。

翔「ほら、これでいいか？」

白井「ほ、本物ですの……」

私も見せてもらったが、間違いなく本物だった。

翔「白井なにか手伝いが必要ならここに連絡を入れてくれ。今日のお礼だ。」

電話番号とメールアドレスが書かれた紙を白井さんに渡していた。それを渡され、白井さんはきよとした表情をしていた。

白井「この番号は？」

翔「俺の携帯とメアドだ。それと固法、ジャツジメントは人材不足か？」

ニヤニヤと笑いながら訊ねてくる。

……なんか企んでそうね  
人材不足と言えはどうかしら？  
でも、多い事に越した事はないわね

固法「多い事に越した事はないわ。なに助っ人でも送ってくれるの？」

翔「ああ、バカだが他人のために命を張れるやつだ。しかもLV4だ。」

固法「欲しいはねそんな人材なら。」

翔「了解。じゃあそいつに連絡入れとく。」

透「ねえ、翔。それって……」

どうやらその人物は2人の知り合いのようね。

うん、LV4ともなると欲しいけどこの2人の知り合いと思うと・・・判断誤ったかも(汗)

翔「じゃあ、俺は行くとするか」

透「うん、じゃあね翔！」

氷村くんは子供みたいに手を振っていた。

ほんと、こんな姿をファンクラブが見たら嫉妬するでしょうね

氷村くん自身はファンクラブの存在には気付いてないみたいだけど

ばたんつと扉を閉めると共に、体の力が抜けるのがわかる。

なんで、ただ話すだけなのこんなに疲れるのかしら

透「白井さん良かったね。翔の連絡先を知ることができて」

白井「なっ!?べ、別に知りたいなどと思った事は一度もありませんのっ!／／／」

透「え、でも顔が赤いよ」

白井「少し風邪を引いただけですよ!／／／・・・それにこれはしかたなく受け取っただけですよ!」

そう言いながらも、もらった紙を大事そうに握り締めていては

固法「説得力がないわね」

白井「ふ、ふん。私は書類を片付けるとするのです。では、お先に失礼しますの」

不貞腐れたのか、こちらを振り向きもせずに出て行った。

固法「青春してるわね」

透「そうですね。白井さんも素直になればいいのに。もしかして自

分の気持ちに気付いてないのかな？」

固法「そういう氷村くんはどうなの？」

透「え、僕？」

固法「初春と秋葉ちゃんどっちにするの？」

透「え、えつとあの・・・うう／＼／＼／＼／」

顔を真っ赤にさせ、そのまま縮こまった。

そのうち頭から煙が出そうな勢いだ。

今日は来てないけど秋葉ちゃんは氷村くんに会いによくここに来る。

立場的には佐天さんと同じかな

まったく氷村くんにしても彼にしてもモテモテね

もうちょっと氷村くんを弄ってから書類をまとめて取り掛かるとし  
ましょう

固法「で、どっちにするの？」

透「もう、勘弁してー！ー！ー！ー！ー！！！！」

その日とあるビルで叫び声が聞こえたとか聞こえなかったとか

うんっ、氷村くんを弄るのは楽しいわね。

じゃあね

## 翔の決意（後書き）

アンケート、できれば答えてくれると嬉しいですっ（泣  
ついでに、誰と誰をカップリングさせたいなどの希望もOKですっ！  
感想や思った事があれば、遠慮せずに書いてください。

次回はロリコン神父が出ます。  
ではでは

## 魔術師出現（前書き）

アンケートに締め切りは明日の21時にすることになりました。  
では、第21話のはじまりはじまり〜

## 魔術師出現

SIDE翔

固法と話し終えたあと、

翔はぶらぶらと歩きながら寮にゆっくりと向かっている

翔「ヤバい。カスタマイズ使ったせいで、腹が……」

その証拠に5分刻みにぎゅるゝと腹から音が鳴っている

……なに？お金持ちならファミレスで食べればいいだろって？

ないから困ってんだよー！ー！！朝のファミレスの時に予想外の出費で残金56円という驚きの真実！？

『バカだろ』って？悪かったな計画性がなくて！俺もあそこまで白井が食うとは思わなかったんだよ！！！！

しかも、バイトの給料が下りるのは3日後でした！？不幸だー！！！！！！

と1人心の中で叫んでいた。

翔「寮がここまで遠いとは……腹が減りすぎてるせいで能力を使うほどの集中力もねえし」

はあゝ、ため息を吐きながらも足は止めない。

なぜなら部屋に昨日の晩飯の残りがあるからだ。

今の翔にとってこれほどの馳走はない。

ただひたすら寮を目指して歩いて行った。

ようやく寮が目の前に見えてきた。

翔「よっしゃ、飯が食える……ん？とうとう腹が減って幻覚が見えるようになったか？」

寮の7階から煙がもくもくと出てんだけど、ついでに通路から炎がチラチラと見えるんだが

……もしかして

翔「来たなステイル」マグヌス。それにしてもタイミングが悪いぜ。俺もトラブルメーカーになったのか？」

とぼやいていると6階の階段降り場の場所から当麻が降って来た……

翔「って、冷静に見てる場合じゃねえー!?!？」

原作知識のおかげで落下地点の駐輪場の屋根の上に急いで、飛んで行った。

そして、受け止めようとするが腹が減っては力が出ないという状態になり、当麻の下敷きになりながら、自転車を巻き込みながら地面に仲良く落ちた。

当麻「いっつつ、なんかクッションみたいなのがあったおかげで助かった」

翔「・・・当麻早くどいてくれ」

当麻「うおっ！？翔いたのか?!」

翔「ええ、いましたともお前がさっき言ったクッションみたいなのは俺だからな」

当麻「そうなのか、すまんなそれとサンキュ」

当麻の手を借りて立ち上がった。

当麻「そつだ、警察」

当麻は公衆電話に向かい、警察に電話をかけようとした。

それを見た翔は当麻が持っているを奪い受話器を元の位置に戻した。それを見て

当麻「何すんだよつ、翔！」

怒鳴るが、翔は表情を変えことなく告げた。

翔「インデックスは学園都市に侵入した人間だ。今ここで助けたとしても、すぐにここを追い出されてまた襲われるぞ」

当麻「あつ」

それを聞かされた当麻は冷水をかけられたような錯覚を感じた

そして、熱くなっていた頭が冷えていった。

突然、翔はニヤリツと笑みを浮かべた

翔「なあ、当麻。俺がお前に昔言った事を覚えてるか？」

当麻「昔?・・・ああ、そうかよ。アイツがそんな運命ならそれをぶち壊せってことか」

翔「そつだよ。別に俺たちが地獄に向かう必要はない。インデック

すが地獄の底にいるなら」  
当麻、翔「地獄の底から、引きずり上げてやるしかねーよなあ  
だろ」

2人は同時にお互い拳をぶつけ合い、それぞれ別れた。

翔は火災報知器を動かすために

当麻は魔術師を倒すために

翔「お姫様を助けてやれよ、当麻。」

と当麻には聞こえないような声で言った。

SIDE ステイル

当麻が落ちた事などにせず、目の前に倒れている目的の少女をど  
うやって運ぶかを考えていた。

と次の瞬間、建物中に設置されていた火災報知器が一斉に鳴り出し  
た。

ステイル「!？」

その轟音と共に、スプリンクラーから台風のような人工の雨を撒き  
散らされた

ステイルは考えた。

面倒なことを避けるためにイノケンティウス魔女狩りの王にはセキュリティセンサー警報装置に触れないよ  
うに命令文を書いてある。となると、あの少年が火災報知器のボタ  
ンを押したんだろう。

ステイル「まさか、イノケンティウス魔女狩りの王という炎の塊を消すために？」

馬鹿馬鹿しくて、笑いも起きないが、そんなつまらない理由でびしょ濡れにされると思うと腹立たしい。

思わず頭の血管が切れるかと思っただくらいだ。

赤く光ってる火災報知器を忌々しげに睨みつける。

だが、それをすぐにやめ消防隊が来る前に去ることにした。

・・・エレベーターは動いているんだろうね？

緊急事態にはエレベーターは停止するように作られているらしい。

ステイルにとつてはスプリンクラーの雨によって濡れる事より、そ  
ちの方が憂鬱だ。

ここは7階、そこから女の子とはいえ一階まで運ぶのは疲れる

だから、背後からエレベーターが来る音を聞いて少しホッとした。

だが、その安心もすぐに疑問に変わった。

誰が？誰がエレベーターに乗ってきた？

ガーツと音を立てエレベータの扉が開くと中から一步だけ濡れた地面を歩く音が聞こえた。

それを聞いて、急に体が小刻みに震えだした。

その音は段々と近づいてきた。

そして、ステイルはゆっくりと振り返った。

そこには

当麻「よう」

友人に挨拶するような軽い挨拶をする上条当麻がいた。

SIDE 当麻

翔と別れてから、俺はエレベーターに向かって走った。

当麻「あの炎の塊は翔がどうかしてくれるだろ。俺は……」

当麻はインデックスがいるであろう7階の通路を睨んでからエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが7階に向かっていている途中で火災報知器のベルが鳴り響いた。

スプリンクラーが作動するってことは？

当麻「翔がやったのか……スプリンクラーの水なんかであんな炎を塊が消えるのか？まあ、翔がやるんだから意味がないってことはないか」

それほどまでに当麻は翔を信頼していた。

当麻にとって翔は親友であり、家族みたいなものだ。

なにせ、小、中全て同じ学校、クラスも同じで、よく遊んでいたからだ。

チーンと、エレベーターが7階についたことを知らせた。

当麻「行くか」

気を引き締めて、スプリンクラーによって濡れた廊下を歩いて行った。

少し歩くと、倒れているインデックスとその近くに魔術師がいた。

魔術師は当麻を確認すると、ありえないと言った表情をした。

当麻「よう」

片手を挙げ、友人にするような挨拶をした。

ステイル「イノケンティウスはどうしたんだ？」

当麻「それなら俺の親友がどうにかしてくれたぞ」

ステイル「たかが能力者ごときに僕のイノケンティウスがどうにかできると思っているのかな？」

当麻「アイツはいろんな意味で規格外だからな。これぐらいなら簡単に解決してくれるさ」

ステイル「フンツ、残念だったね。魔術を知らない超能力者じゃ僕のイノケンティウスは倒せない。今頃、君のお友達は真っ黒な灰に変わってるよ」

魔術師は鼻で軽く笑い、余裕の表情をしていた。そして、すぐに真剣な表情に変え

ステイル「イノケンティウス魔女狩りの王！」

自身の切り札を呼んだ。

それは、当麻の背後にそびえたつ炎の塊の巨人だった。

ステイル「はははははは、残念だったね。君のお友達じゃ、イノケンティウスを倒す事が出来なかった様だね。それにね、コピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだよ。たかが、水に濡れた程度で、完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ！君も今すぐお友達の所に送ってあげるよ。殺れ！」

炎の巨人は腕を当麻に目掛けて振り下ろすが

当麻「邪魔だ！」

裏拳で炎の巨人を殴った。

当麻の右腕の方が触れるのが速く、炎の巨人は体を四方八方に飛び散らせた。

そして、炎の巨人は復活することはなかった。  
呆気ない結末に終わった。

ステイル「な!?!」

魔術師の顔は驚愕で凍りついた。  
そして、なぜだ!?!言わんばかりに表情で語っていた。

ステイル「ば、かな。なぜ、何故!僕のコピー用紙はまだ死んでないのに!」  
「インクは消せるだろ?」

突然背後の階段から聞こえる声に魔術師バツと勢いよく振り向いた。  
ゆっくりと階段から上がってきた人物は魔術師にとっては見知らぬ学生がいた。

それは、俺の親友の翔だった。

当麻「翔、あんがとよ」

翔「どういたしまして。そして、始めましてだ魔術師。」  
ステイル「き、君が僕のイノケンティウスを」

仇を見るような目つきで翔を睨んでいた。

翔「そういうことだ。俺は魔法とかが好きでな。ルーン魔術については本で少し読んだことがあるからな(前世で)」  
ステイル「なっ!?!」

魔術師は超能力者が魔術を少しでも知っていることに驚いていた。

翔「さて、当麻やつちまえ」  
当麻「おう！」

当麻は弾丸のごとく魔術師目掛けて駆け出した。

ステイル「い、いのけんていうす……イノケンティウス、イ魔女  
ケンティウス狩りの王！」

魔術師は叫び続けるが、炎の巨人が復活する事などなかった。  
その間も当麻はだんだんと距離を縮めていった。

ステイル「ア、AsatoAsb DustToDust灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅《Squeam  
ithBloody》ガツ!？」

テストの点があがるわけでもない、女の子にモテるわけでもない、  
異能の力しか消すことが出来ないこの右手  
だが、右手はとても便利だ。

何せ、目の前のクソ野郎を殴れるのだから

詠唱が終わるより速く当麻は拳を魔術師の顔面に打ち込んだ。

魔術師の体は、それこそ竹とんぼのように回転し、後頭部を金属の  
手すりにぶつけ意識を失った。

SIDE翔

インデックスを当麻に任せ、俺は救急箱を取るために部屋に戻った。  
扉のノブが溶けていたが、そこは気にせず、腹が減るのを我慢し、  
金属の扉を砂に変えて中に入った。  
ついでにステイルを部屋に連れてきている。

消防団の連中に見つかったら面倒だし

翔「とにかく、カロリーメイトで腹を膨らますしかないか。」

2箱をポケットに突っ込んだ。

そして、包帯、消毒液、テーピングを学生鞆に突っ込んだ。

翔「こんなものか？・・・さて、行くか」

ステイルを背負い、玄関の近くの棚からある鍵を取り、誰にも見つからないように外に出た。

そして、寮からそれほど離れてない場所にステイルを降ろした。

翔「ふう〜、さすがに疲れるな。・・・俺は神父は嫌いだけど、俺はお前を1人の人間として尊敬してるぜステイル。1人の女の子のためにそこまで必死になれるんだからな。お前は俺の憧れの対象でもあるからな。ロリコンなところは除いて」

その呟きはステイルには聞こえてはいなかった。  
だが、それでいい。

正直、あまり聞かれたくないしな

翔「さて、なにをしても起きなさそうだし。少しイタズラでもしておくか」

ニヤリッとイタズラをするときの笑みを浮かべた。

そして、鞆からある物を取り出した。

翔「パンパカパーン！ 超凶力、ワックス& 超凶力、油性ペン！  
ふざけて買ったのがここで役立つとはな」

翔はそこらへんの枝を櫛に変えた。  
イタズラをするときの翔は常に元気百倍なのだっ！

翔「これをこうして、くくっ。あとはこれも書いとくか」  
数分後、それは完成した。

翔「ぶはっ！こ、これはわ、笑える。写メ撮っとこ」  
腹を痙攣させながら、パシヤツと写真を撮った。  
そして、あることを書いた紙をステイル近くに置いた。

翔「よしっ、起きる前に逃げるか！」

その場を脱兎のごとく逃げた。

SIDEステイル

ステイル「う、ん。ここは？」

と目を開けると、腹を抱えて笑っている神裂がいた。  
しかも、目元には、涙が浮かんでいる。

なんだ、この状況は？

神裂「ス、ステイル起きたのですね。プッ、アハハハハハハ」

僕の顔を見た瞬間、また笑い出した。  
非常に不愉快だ





## 魔術師出現（後書き）

どうだったでしょうか？

ステイルファンの方はすみませんが、しばらくリーゼント状態で登場します。

では、アンケートをもう一度書いておきます。

今回のアンケートは翔たちが別の世界に転生させてみるというifストーリーです。

では、候補は

・魔法少女リリカルなのは 無印

・バカテス

・ネギま

になります。

ついでに、誰と誰をカップリングさせたいなどの要望も聞きます！

アンケートに答えてくれるとうれしいです！  
では、

## 覚悟への問い（前書き）

いや〜遅れてすみません。

ついモンハン3rdに熱中してて更新するのを忘れてました。

今日の一言・・・モンハン最高っ！

では、第23話のはじまりはじまり〜

## 覚悟への問い

SIDE翔

ステイルにイタズラしてから、翔は学生寮の駐輪場に戻った。戻る途中で、消防隊やら、透たちがいたが緊急事態ということで見なかったことにして人ごみの中を掻き分けて進んだ。そして駐輪場に置いてある黒いバイクを取り出し、キーを挿し込んで、アクセルを踏んで当麻がいるところまで走行した。

もともと近かったおかげでそれほど時間はかからなかった。俺がバイクを止めて当麻たちに近づくと、当麻はポカーンと口を間抜けに開けていた

翔「なに間抜けな顔してんだお前？」

当麻「どっからパクツて来たんだそのバイク?!」

当麻はビシッと黒いバイクを指で差しながら言う。

・・・お前の中で俺は犯罪者か?!

翔「パクツてねえよ?! コレは俺のだ!」

当麻「嘘つけっ! そんな嘘に上条さんは騙されませんよ!」  
「っつか免許持つてねえだろ!!!」

翔「なめんなっ! 無免許だ!!!」

当麻「胸張って言うな!」

突っ込み疲れたのか肩が上下に動いていた。

翔「一旦バイクの件は置いて。インデックス大丈夫か？一応包帯と消毒薬は持ってきたが」

インデックス「無理だよ・・・出血が酷すぎて、このままじゃ大量出血で死んじゃうだよ。魔術が使えれば直るかも」

当麻「俺たち能力者じゃ回路が違うから、能力者じゃない人間じゃないと使えないらしい」

子萌先生には悪いけど原作どおり進ませてもらいますか

翔「んじゃ、子萌先生だな。あの人は能力者じゃないし」

当麻「俺もそれは思いついたが、家がわかんないからな・・・待てよ青髪なら」

翔「いや、俺が知ってるから当麻は後ろに乗れ。」

当麻「インデックスはどうすんだよ？流石に三人乗りは無茶だぞ」  
翔「なら、サイドカーを造ればいいだけだ。」

腹ごなしにポケットからカロリーメイトを一箱取り出して、中身を全て食べた。

翔「つたく、俺の能力もとことん燃費悪いよなっ！」

言い終わると同時に、地面の一部分が光り、そこから生えるように四角の物体が出てきた。

それは弱い光を放ちながら段々とサイドカーに姿を変えていった。その光景を見たインデックスは目を見開かせ驚いていた。

インデックス「ま、魔術？」

翔「残念。能力だ。」

インデックスの質問に答えながら、もう一箱のカロリーメイ を食べていた。

そして、また能力で工具を作りサイドカーをバイクに取り付けた。

当麻「相変わらず便利な能力だな」

翔「だが、さっき言った通り燃費が悪い。今なら大盛りのチャレンジメニューを制覇できそうだ。」

その証拠にグウ〜と翔の腹は獣のうなり声みたいな音が聞こえる。

翔「当麻、間違っても触るなよ。ほら、ヘルメット」

当麻「わかってるっの。」

当麻は翔から投げ渡されたヘルメットを被った。

サイドカーを取り付けた翔はインデックスをそこに乗せた。

翔「よし、当麻乗れ」

当麻は翔の後ろの席に跨った

翔「当麻しっかり捕まってるよ」

突然翔が当麻に警告した。

当麻にはこの後の結末がわかり顔を青くさせていた。

当麻「お、おい・・・まさか」

翔「最速でいってやるからよ！3」

当麻「待てっ翔！」

翔「2」



翔は適当な所にバイクを置き、小萌先生の部屋に向かった。すると、当麻が部屋の扉の前で悔しそうな顔をして立っていた。

翔「中で治療中か・・・」

当麻「アイツが苦しんでるのに俺じゃなにもできねえ。」

当麻は拳を強く握りしめ、奥歯を噛み締めていた  
・・・ったくこいつは

翔「あほ、お前はやれることはやったんだ。自分をそう責めるな。それに俺たちじゃ儀式の邪魔にしかならねえよ」

当麻「儀式？」

やべっ、口が滑ったな

翔「い、いやあれほどの傷なら大掛かりな儀式でないとダメかな思っただけだ」

当麻「そういえば、本で読んだことあるって言ってたな」

翔「そ、そう！それで知ったんだよ」

それで当麻は納得したのか、それ以上は何も追求してこなかった。

翔「当麻」

翔は真剣な表情で当麻の方を向いた。

それに対して当麻も真剣な表情になった。

当麻「なんだよ？」

翔「これからお前はいろいろと危険な事に巻き込まれるかもしれない。それでもあの子を、インデックスを守る覚悟はあるか？」

当麻「なに言ってるんだよ。ここまで来て、はいさよならなんてできるかよ」

翔「それもそうか。なら当麻、お前がその道を進む限り俺は全力でお前をサポートする」

当麻「なっ？！別にお前までかか「ストップだ」・・・翔」

翔「俺だつてここまで関わったんだ。だったら最後まで関わらせてくれ。それに親友が危ない道に行くのにただ見てるだけなんての

は俺にはできないよ」

当麻「はあ、これ以上お前に何を言っても無駄みたいだな」

翔「ああ、無駄だ」

翔は笑いながら言った。

当麻はそれを見て照れくさくなり頭を少し掻いていた。

2人はそれ以上にも言わず、無言のまま時間は過ぎていった。

おまけ

当麻「そういえば、何でお前が小萌先生の家を知ってたんだよ」

翔「たまたまなんだが空中散歩してる時に小萌先生がいたから興味本位で空を飛びながら後をつけてたら家の場所がわかった

ということだ」

当麻「ストーカーじゃねえかよっ？！」

翔「ち、違う！？偶然だつての！！！」

翔のロリコン疑惑が浮上した瞬間だった。

覚悟への問い（後書き）

それでは皆さん次回をおた「こんにちは」

あれ？なんで翔がここにいるんですか？

「暇なんで遊びに来た」

「俺惨状！」

「炎哉、字が違うよ」

あんたらまた来たんですか？！

そして、翔お前に言わせてもらいますが遊びに来るのになんで工具箱もつてきてるんですか！？

「いや、ちよつと改造をしようと思ってな」

「……一応聞いておくがそれって俺？

「Yes！」

三人揃っていい笑顔で言うな！！

「大丈夫だよ。痛くはしないから」

じゃあ、今すぐその麻酔銃を捨てる！！

「やだ」

笑顔で言うな！あとなに マークつけちゃってんですか！お前はテヘツ、やっちゃた みたいなあれかー！！

「動いてんじゃねえよ。環境汚染物質」

酷くない！？俺はあれが存在が有害物質って言いたいのか！！

あと、羽交い絞めするときの力がおかしくない。体中からミシミシって音立ててるんですけど！？

「僕からのプレゼント」

いらねえよ！そんな

プスッ

な……も……ガクッ

「よし、これより改造手術を行う」

手術終了

アタラシクウマレカワツタキブンダ

ナンカトテモハレヤカナキブンニナレタヨ

シヨウタチアリガトウ

「お、おう。・・・あれやばくね（汗）」

「お前はなにをしたんだよ（汗）」

「軽く脳を弄ってみた」

「なにやってんの?!」

ジャア、シヨウタチイツモノアイサツヲイコウジャナイカ

「。。。では（デハデハー）」

透の幼馴染再び！と炎哉の誓い（前書き）

マジで久しぶりの投稿になります（汗

ここまで日が経つと話の流れを忘れかけた（笑

第24話のはじまりはじまり〜

## 透の幼馴染再び！と炎哉の誓い

翌朝

場所は小萌先生の部屋……ではなく

透「ほら、翔。次の場所に行くよ！」

翔「か、勘弁してくれ（泣）」

街中を駆けずり回ってレベル<sup>バカ</sup>アッパーを逮捕している。  
なぜかって？

それは約1時間前のこと

1時間前

小萌「妹……!?」

当麻「そうなんです」

小萌「大嘘にも程があります。モロ銀髪碧眼の外国人少女です」

翔「実は当麻の義理の妹なんですよ」

小萌「……変態さんです?」

小萌先生は首を傾げながら俺と当麻を交互に見る

その一言に対して翔は当麻を指差しながら抗議した

翔「ちょっと待ってください！当麻はともかく俺は変態じゃないです！」

当麻「ちょっと待てや！それじゃあ俺だけが変態みてえじゃねえか!?」

翔「え、違うのか？」

当麻「違うわ！大体そう言ったらお前もそうじゃねえか！このマッドサイエンティスト！」

翔「俺のどこがマッドサイエンティストだ！？」

当麻「普段のお前がやってること思い返してみろー！」

翔と当麻がギャーギャー騒いでいると突然殺気を感じた。  
その殺気の主は

小萌「2人とも近所迷惑になるので静かにしやがれです」

にっこりと笑いつている小萌先生だった。

だが、目がまったく笑っていない。

それを見て2人は反射的にコクコクと頷いた。  
すると突然翔の携帯が鳴り出した

当麻「翔、お前の携帯鳴ってるぞ」

翔「誰だこんな朝早くに？」

当麻と一緒に画面を確認すると氷村 透の文字があった。  
いつもなら出ているが

当麻「どうしたんだよ？氷村からの電話だろ？」

翔「いや、何か今出たら非常にめんどくさい事に巻き込まれる気がする。」

当麻「だけど、出ないと更に酷いことになる気がするぞ。上条さんの不幸アンテナがそう言ってる」

翔「お前は鬼 郎か？」

翔はハァーと深いため息を吐いて電話に出た。

翔「もしもし、透なんか用か？」  
透『あ、翔。今から第一七 ブツッ』

神速と言っているほどの速さで電話を切った。  
その行動に小萌と当麻は呆然としていた。  
インデックスはわけがわからず頭に？が幾つか浮かんでいた。

翔「よし、何もなかった」

翔がやりきった顔をしていると、また電話が鳴り出した。  
もちろん電話の相手は透だ

当麻「また鳴ってるぞ」

翔「出るべきか出ないべきか・・・ブツブツ」

携帯に背を向けた翔を見かねて当麻が代わりに出た

当麻「もしもし、氷村か？」

透『え、上条君?!あれおかしいな?翔の電話に掛けたはずなのに』  
当麻「今ちようど一緒にいるんだよ。何か伝える事があるなら伝えとくが」

透『ん〜じゃあお願いするね。え〜と翔に第一七七支部のビルに来てくれるよう言ってくれろ?』

当麻「まあいいが・・・こいつ何かやったのか?」

当麻は透が風紀委員だという事を知っている。

透『う〜ん?やったと言えばやったのかな?とにかく伝えてもらえろ?あと動かないときは・・・って伝えれば翔は動くから』

当麻「わかった。伝えておく。ブツツ・・・そんな言葉で翔が動くのか？」

当麻は電話を切り、未だにブツブツ言ってる翔に話しかけた。

当麻「翔、氷村からの伝言だ。」

と言うと、壊れたブリキのようにギギギツといった感じで振り向く。その顔はなに電話にでちゃったの？と語っている。

翔「透はなんて言ってた？」

当麻「たしか、来なきや昨日の反省文50」「よし、行って来ます！」  
って本当に動きやがった!？」

翔はものすごい勢いで小萌の部屋を出て行った

小萌「一体全体なんなんですか？」

当麻「さあ？」

現在

そして今に至る

翔「た、頼む。昨日からほとんど飯食ってないから死ぬ」

ベンチの背もたれにだれる。

透のため息が聞こえる

透「あとで、食べに行くんだから、ほら、がんばって！次の場所に向かうよ」

翔「お、おう・・・」

きつと今の俺って頬がこけてガリガリ状態だろうな

・・・おなかすいた

翔は氣力を振り絞り絞りベンチの背もたれから重い腰を持ち上げた  
目的の場所に着くと

A「俺のこの力を！」

翔「うっせえ！」

レベルアップーを使ったと思われる人物を発見した瞬間、翔が相手に回し蹴りを喰らわして気絶させた。  
今ので丁度10人目ぐらいだろうか。

翔「お、終わった」

透「うんっ、今のでちょうど終わりみたいだよ。翔、お疲れ様」

翔「さあ、透。速く飯を食いに行こうぜ」

ダラけモードに入った翔はぐでーと透の肩にしなだれた

透「ちょ、ちょっと翔！？僕にしなだれかからないですよ！」

翔「うっせえ〜早くななんか食わせる〜。でないと俺が死ぬ〜」

透「わかってるから、速く離れてよ〜！」

透は腕をブンブンと振りながら言った

もぉ〜と言わんばかりに頬を膨らましている

翔「うえ〜い」

翔が笑いながら離れた。

2人にとつてはこれくらい軽いスキンシップみたいなものだ。  
そして、2人がファミレスに向かって歩いていると

「やつほ〜、透〜！」

2人の歩いていると前方に腰までありそうな黒髪の女の子が手を振っていた。

それを見て透は少し顔を歪めた

透「・・・っげ、やばいかも」

翔「どうかしたのか、透？」

SIDE透

透「・・・っげ、やばいかも」

翔「どうかしたのか、透？」

透「えっ、なんでもないよ」

翔「そうか？で、あの子はお前の知り合いか？」

あれ、絶対、秋ちゃんだよ

・・・どうしよう、翔に幼馴染の子って言えば絶対からかってくるよ

う〜ん、でもどっちにしてもバレる気が・・・もういいや諦めよう

透「うん、幼馴染なんだ」

翔「へえ〜、幼馴染ね〜・・・ニヤリッ」

それを聞いて翔は一瞬嫌な笑みを浮かべた  
それを見逃す透ではなかった。

秋葉「お〜い、透〜また無視ですか〜」

と女の子が言ってるが、呼ばれている透は

透「翔、今の笑みはなに！」

翔「いやいや、なんでもないですよ」

透「嘘だっ!!！」

ひぐらしのネタをやっていた。

それを見た女の子は顔を俯かせ拳を握りながら肩をプルプルと震わせていた。

秋葉「ほお〜、無視かまた無視なのね」

透たちゆつくと歩き出した。

透と翔は突然、背筋にゾワツとするものを感じあたりを見回すと

秋葉「透う〜！」

秋葉が真っ黒なオーラを放ってこちらに向かってくる

ザアアつと秋葉の通る道はまるでモーゼのように人が別れた。

その道の先は綺麗に透と翔がいた。

透と翔はその光景を見て冷や汗をたらたらと流し、逃げようと思う  
が恐怖で体が動かなかった。



ファミレスに昼食を取っていた  
もちろん、自己紹介は終わっている

秋葉「へえ、アンタが透の言ってた友達だったんだ」

翔「あ、ああそうなるな。それより透は良いのか？なんか目が死んでるんだが」

透は明後日の方向を見てながらブツブツ何か呟いていた。

透「・・・撮影会・・・女装・・・ブツブツ」

秋葉「良いのよ、透が私を無視するのがいけないんだし」

頬を少し膨らまして私不満ですと言わんばかり顔をしている。

翔「くくっ、透のやつも大変だな」

翔は秋葉たちに聞こえないぐらいの声で言った。

そして、透の額に手を近づけて

翔「さっさと戻って来い。」

ペシッと軽いデコピンをした。

透「いたっ?!・・・あれ？僕何でここにいるんだろ?」

透は額を押さえながら辺りを見回した

その様子に翔はくつくつと笑っていた。

翔「くくく、お前が上の空だったから勝手に運ばせてもらったんだ

よ

透「そうなんだ。でも、何でそんな状態になってたの？」

透の問いに翔は少し固まってしまった。

ジト目で秋葉の方を見ると明後日の方を見だした

翔「……………まあ、世の中知らなくてもいいこともあるからな。気にするな」

透「ん〜ならいいかな？」

翔「そう忘れる忘れる。それより透なんか奢ってくれ。俺の腹がもう限界だ。今頃俺の腹は」

ぎゅるるるる〜！！！！  
食い物よこせー

と翔の腹の音が店内に響いた

その音を聞いて透と秋葉はブツと吹き出した

翔「と訴えています」

透「アハハ、しょ、翔のお腹ってタイミング良いね。プツハハハ」

秋葉「アハハハハにそのタイミング！マンガみたい！」

秋葉は翔を指差しながら笑っていた

初対面の人間に失礼な行為だが翔はまったく気にしていない

それより、頭の中には飯が食いたい、この一点のみが渦巻いていた

翔「笑笑笑この野郎。それより透頼んでいいか？」

透「はは、良いよ。今日は僕が奢るよ」

その言葉を聞いた瞬間、翔はさっそく店員を呼んだ

翔「すみません、ジャンボチャーハン、特選海鮮ドリア、オムライス、カルボナーラ、ミートスパゲッティ、和風ステーキサイズが一番大きいので、後デザートに杏仁豆腐、バニラアイス、DXパフェをお願いします！」  
「・・・・・・はい」

マシンガンのように次々に注文を言う翔に店員が呆気にとられ口をポカーンと開けていた  
店員は啞然としながらも注文を繰り返して持ち場に帰っていった

秋葉「ア、アンタよく食うわね（汗）」

翔「腹減ってたからな」

秋葉「いや、おかしいでしょ！？なにあの量！？お腹が空いたから食べるって量じゃないわよ！？」

透「あはは、僕の財布だいじょぶかな」

透が虚ろな目で天井を眺めていた

翔「いや、大丈夫だろ。ほらここ見てみる」

メニューを開いてあるところ指差した

秋葉は目を細めながらその部分を読んだ

秋葉「なになに、このジャンボチャーハン食べれる物なら食べてみる！30分以内に食べ終わったら代金はタダ・・・・ってええ！？代金タダ?!」

透「秋ちゃん、代金タダつてことは相当な量が出るよ。はあ、でもジャンボチャーハンの料金だけなんだよね」

財布を確かめる透に翔はチツチツと指を振った

翔「透、もう少し続きを読んでみる」

透「え〜っと、なおこのジャンボチャーハン以外に料理を3品以上頼めば賞金ができます。って賞金!?!」

翔「そう、賞金!食ってなおかつ金もらえるこれって最高!しかも、3品以上からはプラス一品につき賞金に1万円が追加されます。なおデザートは含まれませんと書いてあるってことはだ」

透、秋葉「・・・賞金5万円・・・って無理でしょ!」

翔「なにがだ?」

心底不思議そうに首を傾げる翔に秋葉が詰め寄った

秋葉「どう考えてもその体にあんだけ量が入ると思ってるの!しかも制限時間は30分・・・無理でしょ!」

透「僕もそう思うよ。翔本気でやる気?」

翔「フツ俺をなめるなよ!これくらい軽く食ってやる」

「なら、食ってみるい!」

野太いその言葉と共にドンッと大皿に盛られたチャーハンと言う名の山が目の前に置かれた

そして、次々に翔が頼んだ料理が並べられた

チャーハンを見た周りの客も驚いていた

秋葉と透は目が飛び出るような勢いでチャーハンを凝視して思った

10人居ても食べきれるかな?・・・無理だよ!!!

翔「えっと、アンタは?」

大山「俺はここのオーナー兼シェフの大山だ!坊主が今回の挑戦者か?」

翔「ああ、そうだよ。」



翔「ありがとう」

賞金と書かれた茶色い封筒を投げ渡された  
翔はそれをポケットに入れて礼を言った

大山「坊主！次はおめえように新しいチャレンジメニューを出しと  
くから覚悟しろよ！」

翔「くくく、おう。また食いきってやるよ」

大山「ガハハハハハ！そうか！じゃあお前ら持ち場につきな！お客  
様の皆様はゆつくりと召し上がっててください」

大家は一度礼をすると厨房に戻っていった

翔「ふう〜、ひさしぶりによく食べたな。で、いつまでお前らは鳩  
が豆鉄砲くらったような顔をしてるんだ？」

秋葉「あ、アンタの腹ってどうなってるの？！なんであれだけの量  
を食べてるのにお腹が出てないの！」

翔「消化したからじゃね？」

秋葉「そんなに速く消化できるかー！アンタの胃袋はブラックホー  
ルかナニカか！！！」

翔「おお、ナイス突っ込み！さすが透の幼馴染！」

秋葉「透は天然なだけでアンタみたいにボケてないわよ！」

透「2人とも仲良くなるの早いね」

秋葉「違うわっ！」

透の言葉に秋葉が速攻で否定した

翔「くくく、またおもしろいのと知り合っ たな」

秋葉「アンタよりはおもしろくなっ た憶えはないわ！」

秋葉がガーツと言った感じで吼えていると

ウエイトレス「お待たせしました杏仁豆腐、バニラアイス、DXパフェです」

ウエイトレスが翔が頼んでいたデザートを置いて、一礼して去って行った

翔「さて、食うか」

透「よく食べるよね」

透は呆れながら呟いた

翔「いや、杏仁豆腐は透のだぞ」

透「え、僕の？」

翔「透は杏仁豆腐好きだろ。だからお前のだ」

透「あ、うん。ありがとう翔！」

満面の笑顔で透が礼を言うと顔を真っ赤にさせた……秋葉、客、ウエイトレスが

翔「おう、どういたしまして」

翔だけは平然としていた

それを見た秋葉は翔に詰め寄った

秋葉「あ、アンタあの笑顔を見て何か思うところはないの?!」

翔「思うところって……そうだな良い笑顔？」

秋葉「ええ、確かに最高の笑顔だった……って違うわー!」

翔「おお、ノリ突っ込み!」

翔は軽く感動していた  
今までここまで突っ込みがうまい人にあつたことがなく、まさかの  
ノリ突っ込みまで見れるとは

秋葉「普通、もうちょっと何かあるでしょ！可愛いとか愛でたいと  
か誘拐したいとか！！」

翔「おい、二つ危険なキーワードがあつたぞ！？」

秋葉「シヤラップ！アンタには今から透の可愛さについて徹底的に  
教えてあげるわ！」

翔「落ち着けいっ！」

バシんツとハリセンで秋葉の頭を叩いた

秋葉「はっ！私は今まで一体何を？」

翔「・・・トリップ状態から戻ってきただけだ」

秋葉「あれえ〜なんのこと？」

秋葉は先ほどのことが微妙に記憶が残ってるようだとぼけていた

翔「お前、実は覚えてるだろ？まあいいや、これ食っとけ」

テーブルに置かれているDXパフェを秋葉の方に寄せた

秋葉「あれ、良いの？」

翔「俺がなんのために3品頼んだと思ってるんだよ。それともバニ  
ラアイスにするか？」

秋葉「こっちを貰うわ！」

さっそくパフェを食べだした

それを見た翔は軽く笑った後、自分も食べた

秋葉「そういえば2人ってどこで会ったの？私今まで透と一緒にいたからわかるけどアンタと会ったことなんて一度もなかったわよ？」  
翔「あゝ、その、あれだ」

咄嗟の事にどう言おうか言葉を濁していた  
そこに透が助け舟を出した

透「実は僕が不良に囲まれたときに助けてもらったんだ」

秋葉「えっ、透が?!何で?」

透「ほら、僕ってジャッジメントでしょ。それで喧嘩売ってくる人がいたんだ。僕って弱そうに見えるでしょ?」

秋葉「ま、まあそうよね。でも透は柔術使えるでしょ?それで倒せなかったの?」

透「相手が5人で僕は1人だもん。一斉に来られたら対処できないよ。そこに来たのが」

翔「俺と炎哉だよ」

聞きなれない名前に秋葉は首を傾げた

秋葉「炎哉って誰?」

翔「俺の親友だ。バカだが良い奴だよ。それで透を助けた後、お互いに気が合ってた」

透「それから翔達とは親友だよ」

秋葉「そうなんだ。ありがとね透を助けてくれて」

笑顔で礼を言われたが翔の心境は罪悪感で胸がいつぱいだった

翔【透、罪悪感で死にそうだ・・・】 目で会話

透【我慢して翔、僕も秋ちゃんに嘘をついて胸が痛むよ。それに転生したなんて言えないんだから】

翔【・・・確かに、言ったら今頃病院行き決定だ】

長年一緒に居た2人だ目で会話するぐらい造作もない  
炎哉も目で会話可能

なお、距離が近くないと使えない

2人が目で会話しているとプルルッと透の携帯から着信が鳴った

透「ごめんね。はい、もしもし氷村ですけど」

『もしもし、氷村君。例の子が来たから速く戻ってきてくれる』

透「あつ、わかりました。今すぐ戻ります」

透は慌てた様子で電話を切って席を立った

翔「ど、どうしたんだよいきなり立って？」

透「固法さんからの電話で炎哉が来たみたいだから速く来てだって」  
秋葉「炎哉ってさつき言ってた。アンタの親友？」

翔「ああ、そうだよ。あと、できればアンタってのはやめてくれな  
いか？せめて風間って呼んでくれ」

秋葉「わかったわよ」

透「翔、速く行こう！」

透が急かしてきたので翔も立ち上がった  
すると

秋葉「ねえ、私も行っていい？」

透「え、いいけど。僕達バイクだよ。秋ちゃんって乗り物酔いひどくなかった？」

秋葉「ば、バイク!?・・・まさか無免じゃないでしょうね？」

透「・・・翔、そのところどうなの？」

ジト目で見てくる2人に顔を逸らす翔ではなかった  
むしろ堂々と

翔「無免許だ！」

秋葉「胸張って威張るな！」

透「・・・それを堂々とジャツジメントの目の前で言えるのがす  
いよね」

翔「違反ぐらい誰だってやってるだろ」

透「少なくとも僕はやってないよ」

秋葉「私もよ」

翔「・・・バイク取ってくる！」

ダツと走って店から出た

秋葉「逃げたわね」

透「逃げたね」

透と秋葉が店を出るとバイクに乗った翔がいた

秋葉「ア、アンタ速すぎでしょ!?!」

翔「そりゃあ速攻で来たからな！」

秋葉「速攻レベルじゃないわよ！」

透「秋ちゃん、気にしたら負けだよ」

翔「そうそう。ほら、2人ともヘルメット」

秋葉「うわっ、とと」

翔はヘルメットを2人に投げ渡した

翔「透は俺の後ろな。霧澤はサイドカーに座っててくれ」

翔の言葉に2人は頷き、いわれた場所に座った

軽くアクセルを吹かせた後、翔はすぐに走行しだした

と言っても前みたいに爆走してるわけではない。秋葉が乗り物酔いがひどいと聞いた翔はそれを配慮してできるだけ揺れないように走行していた

数十分後

翔「ほい、到着つと。透、俺はバイクを置いてくるから先に中に入  
つててくれ」

透「うん、わかった。秋ちゃん酔いのほうは大丈夫？」

秋葉「うん、大丈夫。今回は珍しく酔わなかった」

翔「それは良かったな」

翔はそう言うのとバイクを置きに行った

その背中を見ながら秋葉が呟いた

秋葉「何気に風間って優しい？」

透「そうだよ、翔はやさしいよ。たぶん、秋ちゃんが乗り物酔いつ  
て聞いて酔わないように配慮してたんじゃないかな？」

秋葉「そうなんだ。後でお礼でも言つとこうかな。あ、そういえば  
透2人以外の時は秋葉って呼んでって言ったのに」

透「あっ・・・ははは。翔のせいで驚かされてたせいですっかり忘

れてたよ」

秋葉「はぁー風間の前では良いわよ、今更だし。でも、今度から気を付けてよね」

透「うん、がんばってみる」

2人は中に入っていった

そして、部屋に入ると不機嫌そうな顔をしてイスに座っている炎哉がいた

体中から怒りのオーラが漂っているせいで誰も近づけないようだ

炎哉は透を見つけると

炎哉「ん、透か。翔の野郎はどこだ？」

透「翔ならもう少しすれば来るよ。でも、そんな不機嫌そうな顔してるけど何かあったの？」

炎哉「それがあの野郎メールでいきなりここに来てって言い出したんよ。来なきや飯は二日間抜きだそうだ」

透「・・・そうなんだ（汗）」

そろそろ自炊できるようになるうよ（呆れ

と思った透であった

秋葉は透の背から顔を出しながら透に聞いた

秋葉「ねえ、この人が炎哉って人？」

炎哉「あゝ？」

秋葉「ひゃ?!」

秋葉は炎哉の睨みで透の背に隠れた

透「炎哉も落ち着いて、ね？」

翔「そうそう。カルシウム足りてるか？」  
炎哉「翔てめえ！」

秋葉の後ろに現れた翔を見て炎哉は勢いよく立ち上がった  
そして、翔に向かって歩こうとしたが

翔「まあ、座れよ炎哉。話したいことがあるからな」  
炎哉「けっ！」

炎哉はいらつきながらもドカツとイスに座った  
翔はその隣に座った

翔「ほら、透も固法も座れよ。じゃなきゃ話が進まないぞ」  
固法「え、ええ」  
透「うん」

透と固法は対面するような形で席に着いた

炎哉「で、何で俺を呼びやがったんだよ」  
翔「それは固法が話してくれる」

と翔が固法のほうに首を向けると固法は話し出した

固法「風間君の推薦でね。アナタを一時的にジャツジメントの助っ  
人を頼みたいのよ」  
炎哉「あゝ？なんで俺なんだよ、翔」

翔「お前は人助けが好きみたいだからな。うってつけの仕事だろ？」  
炎哉「好きなんじゃないやなくて当たり前のことだろうが」

当然のこのように言った炎哉に回りのジャツジメントや秋葉は驚

いていた

翔「だそうだ。固法どうだ？」

固法「ええ、合格ね」

炎哉「おい、俺を置いて話を進めんじゃねえよ」

翔「すまんすまん。そういえば炎哉、お前最近妙に喧嘩売られないか？」

翔の質問に炎哉は思い出そうと首を捻っていたが、ポンスと手を打った

炎哉「おお、よくわかったな。たしかに最近妙に喧嘩を売られたな。もちろん全員気絶させて放置したが」

固法「はあゝあなたも風間君と同じ問題児なのかしら」

炎哉「お前何やりやがったんだ？（汗）」

翔「まあ色々とな。で、喧嘩を売ってくる奴らはあることをやってるんだよ」

炎哉はすぐに察しがついた

炎哉「もしかしてレベルアップか？」

翔「正解」

固法「ど、どうしてそれを?!」

ガタンツと席を立ち上がる固法

まさか知ってるとは思ってはいなかったようだ

翔「結構有名だぞ。ネットでも高額で取引してる奴もいるしな。だが、ブツは不明ときた」

言つなよと目で炎哉に伝えた

炎哉はそれを理解したのか軽く頷いた

炎哉「まさかと思うが俺にレベルアップを使った奴を捕まえるのを手伝えつてか？」

透「実はそうなんだよ。人数があまりにも多すぎてこっちじゃ対処できないんだ」

炎哉「・・・はあゝわかった。手伝つてやるよ」

二カアと笑いながら了承した

透「ありがとね炎哉」

炎哉「お、おう」

透が笑顔でお礼を言うつと顔を少し赤くさせながら頷いた

翔は話が終わったと判断し立ち上がった

翔「がんばれよゝ炎哉」

炎哉「はあ？お前は手伝わねえのかよ」

翔「できる限りは手伝つが無理なときもあるからな。一応言つてみただけだ」

炎哉「なんだそりゃ？」

翔「当麻とのゴタゴタでな」

その言葉でわかったのか炎哉は納得してくれたようだ

翔に続いて炎哉も立ち上がった

炎哉「で、何時から俺は来ればいいんだ？」

固法「そうね、できれば明日の13時頃に一度ここに来てちょうだい。その時に色々と話したい事もあるし」

炎哉「わかったよ」

出て行こうと炎哉が秋葉の前で立ち止まった

秋葉は何故自分の前で止まるのか?!と困惑していた

炎哉「さっきは睨んじまってすまなかつたな。俺は近藤炎哉だよ  
しくな」

秋葉「え、えつと霧澤秋葉よ。よろしく」

透「大丈夫だよ秋葉。炎哉は基本的におもしろい性格だから」

炎哉「おーい透。その評価はどうかと思うぞ」

ガツクリと肩を落としている炎哉の横で翔は首を傾げていた  
その様子を見て秋葉と透はヤバツと思つた（翔の動きを見て）

翔「なあ、透。さっきまでだよ」ちよつと翔こつちにきて「ん？」

透が手招きしていた

翔が近くまで寄ると透が屈むよう指示してきた  
言われた通りにすると透は耳打ちしてきた

透「秋ちゃんに言われてね。2人以外るときは秋葉って呼んでるん  
だよ」

翔「なんでそんな面倒なことしてるんだ？それに俺の時は秋ちゃ  
んって呼んでただろ」

透「あの時は今更だったからね。それでね、そういうことだからよ  
ろしくね」

翔「了解」

翔は立ち上がって扉のどこまで移動して炎哉に声を掛けた

翔「炎哉行くぞ。それじゃまた何か手伝いが必要だったら連絡してくれ」

炎哉「邪魔したな。それじゃあな透」

バタンツとドアが閉められた

その時誰かが言った

「嵐が去っていった」

翔と炎哉はバイクに乗って帰宅した後、炎哉の部屋にいた

翔「なあ、炎哉」

炎哉「なんだよ？」

翔「お前がいらついていた理由って俺じゃなくて別の事だろ。たとえば・・・佐天、とか」

炎哉「なっ、てめえ気付いてたのか!？」

炎哉は顔を驚愕に染めていた

その顔を見て翔は軽く鼻で笑った

翔「何年お前と親友やってると思ってんだ。お前が俺に無理やり呼び出されたぐらいであそこまでイラつくことなんて今までなかっただろうが。で、歯痒いのか何もできない自分が」

炎哉「そうだよっ!今、佐天を止めたら彼女は能力に目覚めることは絶対がない!けど、それで佐天が倒れると思うと何もできない自分に嫌気が差しやがんだよ!」

吐き捨てるように炎哉は言った

翔「たしか原作では佐天は倒れたけど最終的には目覚めるだろ」

炎哉「それは原作での話だ！ここではわからねえだろうが！」

翔「IFの世界、か。確かにな。そういえば炎哉、悪い知らせがあるぞ」

炎哉「な、なんだよ」

翔「この世界だが、だいぶ逸れてるぞ」

その言葉だけで炎哉は理解できた。

できてしまった

それは今一番、炎哉が聞きたくなかった言葉だった

翔「お前は知ってるか？無能力者襲撃事件のこと」

炎哉「ああ、知ってるよ。俺が忘れてるだけかと思っただが違っのか？」

炎哉は心の内で否定してほしい願ったが翔はそれを肯定した

翔「ああ、透と話したがあんな事件はインデックスでもレールガンでも起きていない。既にこの時点で原作とはズレてる」

炎哉「そ、そんなまじかよ。それじゃあ佐天は……」

翔の言葉に炎哉は顔を青くさせていた

そんな様子を見て翔は炎哉を落ち着かせた

炎哉「すまん思わず取り乱しちまった」

翔「いや、しょうがないろ。それで問題は佐天のこともそうだがAIMバーストのことが面倒なことになりそうだ」

炎哉「AIMバーストってあのキモ胎児か？」

翔「キモ胎児って、お前な（呆れ）」

炎哉のネーミングセンスに翔は呆れていた

翔「それでだ。AIMバーストの特徴は脅威の再生能力とレベルアップパーを使った能力者の能力を使用できることだ」

炎哉「その何が問題なんだよ？それくらいなら御坂でもどうにかできるだろ？」

翔「問題は能力の使用のほうなんだよ。お前、電気で重力をどうにかできると思うか？」

炎哉「いやちよつと待て！重力を使った能力者なんて聞いた事がないぞ！？」

翔「実際に俺が戦った。無能力者襲撃事件でな」

炎哉「それで、どうだったんだよ？重力ってというのは？」

翔「あれは御坂でも無理だな。俺が戦った奴はワンパターンだから何とか勝ったがAIMバーストは加減なしでやるからな。そこで炎哉一つ提案がある」

炎哉「何だよ？」

翔はニヤアと口元を歪めながら言った

翔「俺らも参戦するってのはどうだ？初めて能力を全力で使えるぞ」  
炎哉「それはいいねえ。俺が本気で殴ったらどこまで吹き飛ばか考えるだけで腕が鳴る」

翔「透にもこの話は言っておく。ところで炎哉、お前もその日ぐらいいは覚えてるだろ？」

炎哉「ああ、24日だろ」

翔「正解だ。それじゃあ俺は小萌先生の部屋に戻って当麻と一緒にインデックスの看病してるからじゃあな」

炎哉「おう、わかった」

翔は立ち上がって玄関に向かった  
そして靴を履き変えて扉を閉める時に翔は言った

翔「炎哉、お前はバカみたいに真っ直ぐ自分が歩きたい道を歩け。  
それがどんなに辛くても絶対に諦めるな」

炎哉「言われなくてもそうしてやるよ！」

翔「それでこそ俺の親友だ」

そして、扉を閉められた

炎哉「そうだよな。いつまでも悩んでもしかなないな。もし、佐  
天が目覚めなかったら俺ができる全力で助けてみせる！」

炎哉は拳を固く握り締めて誓った

透の幼馴染再び！と炎哉の誓い（後書き）

またしばらく遅くなるかもしれませんが（汗

ではです

## 幻想猛獣（前書き）

ようやく書けたー！ー！ー！！！！

と言っても文章量少ないけど・・・まあ気にしない！

では、第25話のはじまりはじまり〜

## 幻想猛獣

あれから三日が経ち翔は当麻と一緒にインデックスの看護をしながらAIMバーストに向けて色々と準備していた

炎哉と透はレベルアップを捕まえながらこの三日間を過ごしていた

翔は小萌の部屋でインデックスの寝顔を見ながら当麻と話し合っていた

先ほど翔のご飯を食べた後、体が回復に努めたのかすぐに寝てしまった

翔「インデックスのほうは大分回復したみたいだな」

当麻「ああ、おかげ様でな。たぶん、今日の夜には体力も戻って走り回れるだろうな」

翔「それは良かった。それじゃあまずこの町の銭湯にでも連れて行ってやれよ。今日までの体の汚れを落としたいだろうし」

当麻「お前は行かないのか？」

翔「残念ながら用事があるからな。まあ、間に合いそうなら一緒に行くとするよ。ほれ」

ピンツと指で500円玉を弾いて当麻に渡そうとしたら

当麻「アダツ!？」

ものみごとに当麻のデコに命中した

500円玉が剥がれるとデコに綺麗な500円玉のマークが描かれていた

翔「ぷっ、ははは。すまんすまん。ほれ」

翔は笑いながら今度は普通に500円玉3枚を手渡しした  
それを見て

当麻「おいおい、明らかに多いだろ（汗）」

翔「良いんだよ臨時収入が入ったからな。それに多いと思うならその報酬に見合った分インデックスを楽しませてやれ」

当麻「翔ってインデックスのこと猫可愛がりしてないか？」

翔「まあ、妹みたいに見てるからな」

当麻「何だよ翔って妹とか欲しかったのか？それとも妹系の女の子か？」

翔「後者は絶対ちげえから！まあ、欲しいと言えば欲しいが今更だしな」

ケラケラと笑いながら立ち上がる翔だがその目には微かな悲しみが宿っていた

当麻はそれに気付かず急に立ち上がった翔に首を傾げていた

当麻「どっか行くのか？」

翔「さつき言ってた用事だよ」

玄関まで移動し靴を履いた

そして、扉の取っ手に手を掴みながら

翔「あと、何時魔術師が襲ってくるかもわからねえから俺が渡しといた物つけとけよ」

当麻「あ、ああ。けどこんなものどこで手に入れて来たんだよ？」

翔「ん？それは俺が使ってたやつだよ。ってことでじゃあな」

当麻「おう、いつてら」

バタンツ

扉は閉められた

それから翔はバイクに乗って一度寮に帰って旅行バッグを肩に掛けてバイクのところまで移動して行った

歩きたびにバッグの中からガチャガチャと何かがぶつかり合う音がしていた

翔はバイクに跨るとおもむろに携帯を取り出し、炎哉に電話を掛けたすると、炎哉はすぐに出た

炎哉『もしもし』

翔『よお、炎哉そっちのほうはどうだ？』

炎哉『大方終わってる。で、翔のほうは準備は終わったのか？』

翔『ああ、終わってる。で、今どこにいるんだ？』

炎哉『公園の入り口だ。透もここにいるから速く来やがれ』

翔『了解』

そう言うと翔は電話を切り、急いで炎哉たちが待つてる公園まで走り行った

それはもう当麻とインデックスが酔ったときの速さで

十分もしない内に目的の公園が見えた

キキキキキイイイイー

と地面にタイヤの跡を残しながら公園の入り口に停車した

それを見た周りの人は驚いていたが、透と炎哉は見慣れているのか特に反応はしなかった

翔「待たせたなっ！」

ヘルメットを脱いで脇に抱えながら言った

透「ううん、翔が最速で来てくれたおかげでそれほど待つてないよ」

翔「そうか、なら良かった。」

炎哉「で、お前が持つてるそのでけえバッグは何だ？これから旅行でも行く気か？」

翔の肩にぶら下がっているバッグを指差しながら言った

翔「これか？まあ、色々と入ってるんだよ。主に透のだから」

透「え、僕の？」

透はまだわかっていないようだが炎哉は察しがついた

炎哉「お前はどこに戦争しに行く気だ！？」

翔「適材適所って言葉があるだろ？」

その言葉に透も察しがついた

透「翔、待つてよ！？僕が捕まっちゃうよ！」

翔「大丈夫だろ？俺が作りましたって言えば」

炎哉「どっちにしる悪いわ！」

翔「まあ、細かい気にするなよ。はい、これでコントは終わりだ。さて、本題に入るが」

翔がパンツと手を叩いてその場の空気を真剣なものに変えた

翔「前にも言ったがこの世界はもう俺らが知ってる物とはだいぶズレてる。それによつて最悪の事態も考えられる」

透「AIMバーストが原子炉に突っ込んだじゃう事、だね。でも、翔」  
翔「なんだ？」

透「翔はこの先の事が予測できなくて危険な目に合つても上条君と一緒に人を助けるの？」

翔「・・・何か勘違いしてるかもしれんが俺にとっては他人が死ぬがどうだつていい」

炎哉「てめえ！」

人を助けることを当然と思つてる炎哉にとつては今の言葉は聞き流せなかつた

その言葉に炎哉は翔に掴みかかるが翔は表情一つ変えなかつた  
胸倉を掴まれながらも炎哉の目を真つ直ぐ見ながら言つた

翔「前にも言ったが炎哉。俺とお前の思想は違う。俺は俺にとつての大切な物が守ればそれで良い。他人は二の次だ」

炎哉「てめえの考えは耳にタコができるほど聞いてんだよ！だが、今の言葉は聞き逃せねえ！他人は死のうがどうだつていいつてどういふことだ！」

翔「どう思おうがお前の勝手だが他人は二の次と言つたんだ。誰も他人を助けないとは言つてない。ただ優先順位が違ふだけだ」

透「じゃあ翔は上条君に危険な目に会わないようにするために一緒に行動するの？」

その言葉に翔は頷いた

翔「そつだ。当麻に関わらず俺が守りたいと思つた物全てを守るために俺は当麻と行動する。他人が大切な物かと言われれば、俺は迷わず他人を切り捨てる。炎哉お前はどつするんだ？どちらか天秤に

掛けられてどちらもなんて回答はだせないぞ」

翔の問いに炎哉は胸を張って答えた

炎哉「それでも俺は両方を助けてみせる！一人でやるから出来ないだけで仲間がいればそれも出来るだろうが！」

翔「はあくいつかその甘さが後悔を生んでも知らないぞ」

ため息をつきながら呆れて言う翔だが口元は嬉しそうに笑っていた

炎哉「しねえ！いや、する気はねえ！これが俺、近藤 炎哉の進む道だ！」

翔「いくら言っても変わらない、か。」

炎哉「ああ、変わる気はねえ！それにお前が昨日俺に言っただろうが」

翔「そうだったな。だが、俺もこの考えを変える気はない。そこはお前も了承しろ」

しばらくお互い睨みあっていたが

翔の真剣な表情を見て炎哉は無駄だと判断し舌打ちしながら掴んでいた手を放した

炎哉「ちっ、良いぜ。だが、これだけ言わせてもらう。お前が大切な物のために人を殺すようなら俺がお前を止める」

翔「そんなときはよろしく頼む。どうやらここに来てずいぶん鎖が弱くなってるんだよ」

炎哉「・・・あん時みたいなことは二度とごめんだな」

それを聞いた瞬間、過去のことを思い出したのか炎哉は苦虫を潰したような顔をしていた

鎖、それは翔の殺人衝動を抑えるものだ  
過去に翔を苦しめたそれは彼の祖父のおかげにより抑えられていたが、最近での殺意、怒りなどの負の強烈な感情が発生したせいで少しづつ脆くなってきた

翔「安心しろ、しばらくは大丈夫だ。それにやばくなったら少しの間居なくなるからよろしく」  
透「どこに行くきな？」

翔「思う存分暴れられる場所、かな。さて、これでこの話は終わるだ。時間もそろそろか。お前ら乗りな！」

翔は携帯を開いて時刻を確認すると、二人に乗るよう指示した  
2人は頷いて、炎哉は翔の後ろに透はサイドカーに乗り込みヘルメットを被った

翔は2人が乗った事を確認すると美琴が戦っているであろう原子力実験炉のところまで超特急で走らせた

#### S I D E 美琴

私は木山をなんとか倒したとかと思ったら、頭の中に直接誰かの記憶が流れ込んできた

美琴「これは木山の記憶？」

記憶は止まることなく頭の中に映像として見えた  
そこで見たのは最初は老人と会話している若い頃の木山、また場面が変わり教室の黒板に自分の名前を書いている木山

場面は変わっていくがそのたびに子供たちの笑顔が溢れていた。

だが、次の場面はガラリツと変わりどこの研究施設に変わった  
回りには多くの研究者と頭に機械を取り付けた子供達がいた

そして、実験が開始された次の瞬間、回りに実験失敗のエラーの音  
が鳴り響いた

その様子を二階のガラス越しから見て絶望に染まる木山

実験終了後、下に下りて子供達がいた場所を確認すると血の跡があ  
った

それを見た木山が崩れ落ちた

最後に木山が誰かと話してる場面が変わった、そして最後に木山が  
頷くと同時に、現実に戻った

美琴「え、今のは？」

木山「う、見られた、のか。うぐっ」

木山は頭を抑えて苦しんでいた

私は先ほどの光景が信じられなくて・・・いや、信じたくなくて木  
山に聞いた

美琴「なんで、なんであんなこと？」

すると、木山は立ち上がりながら教えてくれた

木山「あれは表向きAIM拡散力場を制御するための実験とされて  
いた。・・・が実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ！」

美琴「えっ」

木山「AIM拡散力場を刺激して暴走の条件を知るのが本当の目的  
だったというわけさ」

ここまで言われて私は確信した

美琴「じゃあ」

木山「暴走は意図的に仕込まれていたのさ。もっとも気付いたのは後になってからだがね」

美琴「人体・・・実験・・・」

木山「あの子どもたちは一度も目覚めることなく今なお眠り続けている！」

振り向いた木山の目には涙が溜まっていた

木山「私達はこの子ども達を使い捨てのモルモットにしたんだ！」

美琴「でも、そんなことがあったんならアンチスキルに通報して23回「え？」

木山「あの子ども達の回復手段探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うためにツリーダイアグラムの使用を申請した回数だ」

ツリーダイアグラム：高性能な並列コンピューターで、正しいデータさえ入力してやれば、完全な未来予測シミュレーションが可能。表向きは完全な天気予報を行うために作られた代物だが、主目的は研究の予測演算。

以上！

木山「ツリーダイアグラムの演算能力をもつてすればあの子ども達を助けられるはずだった。もう一度太陽の下を走らせてやる事もできただろう・・・だが、却下された！23回とも全てっ！」

美琴「えっ・・・」

木山「統括理事会がグルなんだっ！アンチスキルが動くわけがないっ！」

美琴「だからってこんなやり方」

木山「君に何が分かるっ！！！」

木山の激昂に思わず言葉を失った

今まで冷静に話していた木山から怒りという感情がひしひしと伝わってきた

木山「あの子達を救うためなら私はなんだってするっ！この町の全てを敵に回してもやめるわけにはいかないんだあ！」

ドクンッ

木山「ぐっ、あ、があ！くう」

突然木山が頭を抱えて苦しみだした

木山「ネットワークの暴走・・・これはま」

美琴「あ！」

バタツと倒れた木山の頭から突然何かが吹き出てきた

それは段々と形作られ

美琴「胎児？」

頭に天使の輪が着いた透明な胎児の形になった

そして、閉じられていた目が開かれるとギョロリと真っ赤な目玉が姿を現した



急いでその場から逃げた  
氷の塊は次々と美琴の居た場所に突き刺さった  
そのまま逃げていると

初春「御坂さん！」

美琴「初春さん！？なんで！？」

階段のすぐ近くに木山に捕まっていたはずの初春さんがいた  
これ以上逃げれば初春さんにも被害が及ぶと思いい体を反転させて

美琴「ぐっ！」

バチバチ

体中から電気を放出させて

パリンッ

飛んできた氷の塊を全て破壊した

初春「きゃあー！」

爆風で瓦礫が飛んでいくが2人とも怪我はしなかった

美琴「初春さん大丈夫！」

初春「あ、はい！あの」

美琴「ダメじゃない！こんなとこに降りて来ちゃ」

初春「ごめんなさいっ！でも」

美琴「そこから出ないで！」

初春「あ」



翔「あほ。それは俺が能力で作ったんだよ。言っとくがそれはゲームみたいな特殊能力なんてないただのガントレットだからな」  
炎哉「いや、充分だ。俺は特殊能力よりデザインが気に入ってたからな」

翔「それはよかった。そのガントレットはタングステン合金でできてるおかげで壊れにくいから全力で殴れるだろ？」

炎哉「タン？・・・まあいいや。それより存分に使わせてもらおうぞ」

炎哉はタングステン合金を知らなかったらしく少しだけ考えようとしたがすぐにそれを放棄したみたいだ

炎哉は嬉しそうな顔をしてガントレットを装備した

翔「存分に使え。壊れたりしたらまた作ってやるからいつでも言えよ」

炎哉「ありがとよ！」

翔「どういたしまして。さて、お前らもう少し速度上げるからしっかり掴まれよ！」

炎哉「おう」

透「うん！」

更に速度を上げて原子炉まで走らせた

## SIDE美琴

木山からあの胎児の話聞いた

木山が言うにはあの胎児はAIM拡散力場の集合体でありレベルアップパーを使った1万人の子供達の思念の塊であるだそうだ

名前をつけるとした幻想猛獣と木山が名づけた

あれを止めるには初春さんが持っているレベルアップパーの治療プログラム、それを使えばネットワークとの回線が遮断されて止まるか







## 幻想猛獣（後書き）

バカテスの方も書いていくのでよければお願いします。

また投稿するのが遅くなるかもしれませんが・・・すみませんorz  
ではでは

ズレていく物語（前書き）

なんとか今月内に出せた（涙  
わかりにくいかもしれませんが第26話の  
はじまりはじまり〜

## ズレていく物語

SIDE 炎哉

AIMバーストは俺達を敵と認識すると橋に向かって進路を進めた  
それを見て翔の野郎はガッツポーズをした  
そういえば、原子炉に行かせたらやばいだったな

翔「よし、原子炉から引き離す事には成功したな」

炎哉「で、こつからどうするんだ翔？」

翔「炎哉と俺は御坂と一緒にAIMバーストを食い止める。透は初  
春のところに行って彼女を守りながら俺達の援護だ」

透「でも、どうやって向こうに行けばいいの？」

透が見るさきには木山と美琴の戦いで橋に大きな穴が開いていてジ  
ヤンプで向こう側に渡るのは無理だな

しかも、銃器が入った重たいバッグが持ってならなおさらだ

俺が本気やればいけるだろうがな・・・こう考えると俺って人間の  
領域超えてんだよな

翔「それは俺が向こうまで運ぶから安心しろ。炎哉その間は・・・

そうだな、そこにある橋の瓦礫をAIMバーストに撃ちこめ」

炎哉「了解！」

翔「では、作戦開始！」

我らがリーダーからの期待に答えてやるとするか！

その言葉と共にさっそく俺は適当な瓦礫を持ち上げて、それを自分  
の真上に放りなげた。

瓦礫は重力により地面へと落下していき、目の位置までくると



炎哉「そんな氷今すぐ蒸発させてやるよっ！」

手から自分より遙かに大きい炎の玉を出し、それを氷柱に投げつけた  
炎の玉が先頭にあつた氷柱に着弾すると

ドオンッ！！！！

爆音を立てながら後ろにあつた氷柱は爆風に巻き込まれて碎けていった

炎哉「どうだこの野郎！」

と勝ち誇っていると言幕の中から2本の氷柱が飛んできた  
どうやら、一番後ろにあつたらしく爆風の影響を受けなかったようだ

炎哉「やばっ!?!」

能力を使ってるほどの距離は既になく殴って打ち落とそうと構えていると

ブオン！

突然、暴風が吹き荒れた

氷柱は吹き飛ばされ俺から遠く離れた場所に突き刺さった  
誰が、突風を巻き起こしたかは既に判っていた

炎哉「助かったぜ、翔」

翔「お前は油断しすぎなんだよ」

橋の穴の真上を浮かびながら真っ直ぐとAIMバーストを見据えて

いる翔がいた

すると、俺の近くに下りてきたかと思いきや、いきなり襟首を掴んできた

炎哉「おい、いきなり何すんだよ！」

翔「いまから、御坂のどこまで行くぞ。どうやら事態が面倒なほうに動いてる」

炎哉「な、うおおおおお!?!」

俺の言葉の最中に、翔は飛んで御坂のところに向かった

当然、俺も首が絞まりながら飛行中だ

飛行中、チラツとAIMバーストの方を見ると体をこちらに向けて大量の触手を伸ばしてきた

それを見て焦った俺は翔にそれを知らせた

炎哉「おいしい、翔、後ろから触手が来たぞ！」

翔「んなのっ、わかってんだよ！」

いつもより荒々しい口調で返された

それだけ翔の野郎も焦ってるってことだ

翔「透、撃て！」

ガガガガガッ!

翔が叫ぶと返答の代わりに無数の弾丸が触手を貫いた

翔「今のうちだっ！」

更に速度を上げて御坂のところに向かった

それにしても、何だ面倒なことって？  
やっぱ原作だいぶズレてやがんのか

SIDE翔

炎哉がAIMバーストの相手をしてる隙に透を背負って初春たちが  
いる向こう側に飛んだ

ガアンツ！

鈍いと音があたりに響くとブチブチと懐かしい音が肉を抉る音が聞  
こえた

つととこんなこと考えない方がいいな  
そんな思考してる間に向こう側に着いていた

翔「透、行くぞ」

透「うんっ！初春さん」

透が声を掛けると驚いたようにこちらを見る初春とアンチスキルの  
2人

初春「えっ、透さん！？それにか、風間さんも」

俺を見た瞬間、怯えた表情をする初春

あらら、やっぱ怖がってるねー

まあ、仕方が無いか

翔「現状はどうなってんだ？」

初春「え、は、はいっ。この治療プログラム使えばAIMバースト  
を止めることが出来ると木山さんに聞きました」

初春の手の中には原作と同じチップがあった  
この辺は同じようで安心した

翔「了解。後は頼んだ。透がお前を守るから速くそれを使ってくれ」  
初春「は、はいっ！」

透が守るといった瞬間、安心した顔をする初春  
愛されてるねえ〜透  
と思っっていると

黄泉川「風間！なんでここにいるじゃん！」  
翔「こんちわ、黄泉川先生」

怒った表情の黄泉川先生が来た  
いつものように挨拶をすると黄泉川先生は毒気を抜かれたのか呆れ  
た表情をしていた

黄泉川「こんちわって・・・」  
翔「アレの足止めは俺達に任せてくださいよ」  
黄泉川「そんなの任せられるわけないじゃん！」  
翔「適材適所という言葉あるでしょ？今、先生や初春ができること  
は治療プログラムを使ってアレを止める事ですよ」

それでも黄泉川先生が食い下がらないでいると

初春「なんでっ!？」

初春の悲痛な悲鳴が聞こえた

透「翔、ちよつと来て！」  
翔「どうした！」

急いで透達がいるアンチスキルの車の中に向かうと既にチップの身をパソコンに転送できる準備は済んでいた  
しかし、初春はパソコンの前で体を震わせて顔を真っ青にさせていた

黄泉川「どうしたじゃん！」  
初春「ないんですっ！」

初春は顔を涙でぐしゃぐしゃに歪めながら叫んだ  
その言葉を聞いた瞬間、全身の血の気が引いた  
まさか……………

翔「…………治療プログラムがないのか？」  
透「そうなんだよ……………」  
翔「くそっ！」

思わず車の壁を蹴ってしまう  
よりもよって最悪のズレ方をしてくれたな。くそっ、どうすれば……………

透「翔、誰かが……………」  
翔「わかってる。」

透が言いたいことはわかる  
俺達の知らない第三者が木山の持っている治療プログラムのデータを消したか別のものと摩り替えたと言う事だ  
まったくもって最悪な事態だ  
一旦、頭を切り替えるか

翔「とにかく、ここで絶望に浸っていても時間の無駄だ。初春、木山って奴はまだいるか？」

ここでいなければ俺達は終わりだ

初春「あ、はいっ！たぶん、橋の下あたりにまだいます！」

よしっ、まだいるならやりようはあるっ！

少しだけ希望の光が見えた気がした

翔「わかった。俺は木山を探してアレを止める方法を聞いてくる。それまでの間ここから離れるか安全なとこにいてくれ。透は橋の上で援護射撃を頼む」

透「うんっわかった！」

透はすぐにバッグを背負って車から出て行った

黄泉川「待つじゃん！」

翔「先生、その子のことよろしくお願いします。」

先生の言葉を無視して軽くを礼してから車の外に出た  
戦闘状況を見ると2本の氷柱が炎哉を襲っていた  
しかもあのバカ自分より遥かにでかい氷柱を殴って壊そうとしてやがる

翔「あの、バカがつ！」

考えるよりも速く体が動いた  
能力で風を操って氷柱を吹き飛ばした

少し、加減をミスったがまあいいだろう  
そのあと、橋の上の真上まで飛んでA I Mバーストがどんな行動を  
取るか注意しながら炎哉の近くに降りた

炎哉「助かったぜ、翔」

翔「お前は油断しすぎなんだよ」

助けられた炎哉はやっぱりなつて顔をしていた  
この野郎、人を心配させやがって・・・  
俺は炎哉の近くに降りて襟首を掴んだ

炎哉「おい、いきなり何すんだよ!」

翔「いまから、御坂のとこまで行くぞ。どうやら事態が面倒なほう  
に動いてる」

炎哉「な、うおおおおお!?!」

絶叫をあげていると炎哉を放って置いてチラツと後ろを見るとA I  
Mバーストの大量の触手が襲い掛かってきた  
アレに近づくとどんな能力を使われるかわかったもんじやない

炎哉「おいしい、翔、後ろから触手が来たぞ!」

翔「んなのっ、わかってんだよ!」

炎哉の言われずともわかっていた

イライラしているせいで口調が荒くなるのも仕方ないだろう

翔「透、撃て!」

透に指示すると

ガガガガッ！

返答の代わりに無数の弾丸が触手を貫いた

翔「今のうちだ！」

更に速度を上げて御坂のところに向かうと呆然とした顔でこちらを見ていた

翔「到着つと。おい、御坂」

美琴「な、なに！？」

いや、俺に驚いているというより先ほどの炎哉の攻撃に驚いているんだろう

翔「木山がどこにいるか知らないか？」

俺が聞くと御坂は驚いた顔をしていた

美琴「なんで、風間さんが木山を」

翔「初春に聞いてな。事態が面倒なほうに進んだんだよ」

美琴「えっ」

炎哉「どうなつたんだよ？」

翔「木山が初春に渡した治療プログラムなんだが・・・その中身がなかった」

「そんなことがあるわけないだろうっ！」

翔達から5mぐらい先に脇腹を押さえながら木山が歩いてきた

美琴「木山っ！？」

翔「お前が木山か？」

木山「そうだ、それより治療プログラムの中身がないなんて有り得るわけがないっ！」

翔「だが、現実起こってる。木山、お前のほかにレベルアップの実験に協力した奴はいるか？」

木山「君が、なんでそれを……」

翔「いいから答えてくれ！」

そう言つて急かすと木山はポツポツと話し始めた

木山「1人だけ、坂城という男が私の実験に協力してくれた」

翔「そいつはいまどこに？」

木山「わからない……突然姿を消してな」

翔「くそっ、手掛かりなしかよ。……いや、待てよ。木山、再び治療プログラムを作ることは出来るか？」

木山「作れないことはないが時間が掛かりすぎる」

炎哉「そんなの関係ねえ！作れるなら今すぐにでも作りやがれ！」

炎哉が木山に詰め寄った

翔「どれぐらい掛かる？」

木山「2時間以上は掛かる。それまで君たちが持つか」

木山が言い切る前に話を進めた

元より諦める気などない

例え不可能でも最後まで足掻き続けるそれが俺のやり方だ

翔「了解した。透、聞こえてるか？」

ずっと通話状態にしていた携帯を取り出し透に聞こえるか確認した

透「うん、話は聞いたよ。木山さんが治療プログラムを作るまでもたせればいいんだね？」

翔「そういうことだ。すまないが御坂、お前も手伝ってくれるか？」  
美琴「言われなくてもそのつもりよっ！」

翔「助かる。木山は俺が連れて行くから御坂と炎哉はアレの相手を頼む」

炎哉「おうっ！」

美琴「わかったわ」

2人が頷いたの確認するとさっそく木山を抱えてアンチスキルの車がある場所まで向かった

抱える際に木山が君は大胆だなと言っていたが風間さんはそんなの聞いていません！

つか、木山のマイペースぶりは凄いな

後方でバゴオンツと爆発音やバチバチと火花が散る音が聞こえてきた  
2人ががんばってると思うと更に速度をあげた

翔「よし、まだいた！」

橋の上に着くとアンチスキルの車があるのが確認できた

急いで中に入ると黄泉川と初春と眼鏡をかけたアンチスキルの人がギョツとした顔でこちらを見ていた

しかし今は、一刻も争う事態だ。

驚かれている時間すらもつたいない

翔「初春、そこをどいてくれ。今から木山に治療プログラムを一から作ってもらう。先生もそれまで木山を捕まえるの待ってください」  
黄泉川「わかったじゃん。私たちにできることは他にないじゃん？」

翔「なら、透と一緒に援護射撃をお願いします」

そう言うと先生は頷いて車から出て行った  
出て行く間際に

黄泉川「あれらの銃のこと後でたっぷり聞かせてもらっじゃん！」

とありがたーいお言葉をもらった  
これだと反省文かな・・・とほほ  
の前に今はやることをやるか

翔「木山、後は頼んだ。治療プログラムが出来次第すぐに使ってくれ。初春はジャッジメントに連絡してあることを伝えてくれ」

初春「え、なんですか？」

翔「坂城という男を見つけ出し次第拘束してくれってな。ソイツが治療プログラムを台無しにした奴だ。特徴は木山が知ってるようだから木山に聞いといてくれ。罪状はレベルアップの協力者って言葉ばいい」

初春「はい。わかりました」

翔「じゃあ頼んだ」

車から出て急いでいつものように飛んで炎哉たちの所に向かった  
戦況を見るにまるでリンチだな

後方からは銃弾の嵐、前方には砂鉄のチェーンソー&電撃の乱発と  
炎哉の瓦礫弾丸&炎の玉による爆発

だけど、いくらやっても再生し続けていた

・・・思ウ存分殺ソウゼ？

翔「っ！？」

突如、頭の中で囁かれる言葉  
そして、いきなり回りが一切見えなくなり、音が聞こえなくなるよ  
うな感覚に襲われた

【殺ソウゼ、何を我慢シテルンダ？】

再び、頭の中で地獄の底から響くような低い声が響いた  
いや、俺はこの声は何なのかを知っている、その声が自分自身だと  
いうことには既に気がついてた

いきなりビデオが再生されるように片手、両足、首を鎖に繋がれた  
俺が映し出された

・・・ちっ、片手の鎖は外れてたか

【よー久しぶりじゃねえか翔】

翔「俺は会いたくなかったんだけどな」

【つれないねえ。俺はお前と会いたかったぜえ。何せ俺をこんな  
鎖に繋いだ糞野郎だからなギャハハハハ！】

口を裂けんばかりに開けて不快な声で笑い出した  
これが俺だと思つと

翔「不快だやめろ」

【へー今日の翔君はクールですかー？】

翔「お前と話してるだけでも吐き気がするんだ。とつとと俺を現実  
に戻せ」

【そうはいかねえよギャハハハツハハ！俺はアノ化物をバラバラに  
して串刺しにして潰してえんだからよお！】

翔「俺はお前と違ってそういう行為を楽しむ気はないんだよ【嘘だ  
な】なに？」

【あれ？マジでわかってねえの？これは傑作だな！ギャハハハハハハ



よくよ悩むと思っただか？」

【お前も相当異常者だなあ、翔】

翔「お前もなシヨウ。だがな俺はお前と違って刀を振るう理由が違  
うんだよ！」

俺が言った言葉にシヨウは鼻で笑った

【はっ、どんな御託を並べても人を殺せば殺人鬼だ！お前も既に人  
を殺めてるんだ！俺と同じ殺人鬼のくせに何言ってるやがる！】

翔「ああ、そうだな！殺人鬼、好きだけ言えっ！俺はあいつ等を  
守るためならいくらだってこの手を血で汚す事も厭わない！！例え  
アイツ等が俺を見限ってもそれでも命を賭けて守り通すっ！お前み  
たいに何も考えないで欲望のままに殺す殺戮者と一緒にするなっ！」

【（殺戮者か、良い響きだねえ）ちっ、残念だ。せっかく楽しめ  
ると思っただのによお】

口ではそう言ってるが口元は愉快そうに歪めていた

シヨウはゆっくり立ち上がるとジャラジャラと鎖を引きずりながら  
一歩一歩確実にこちらに近づいてきた  
身構えようとするが体が動かなかった

その間にシヨウは近づいてきてとうとう目と鼻の先の位置まで来た  
そして、グイッと俺の胸倉を掴んでお互いの息が掛かるぐらいまで  
顔を引き寄せてきた

【翔、今回はおとなしく引いてやるよ。だが何時かその体は俺が頂  
く。その時はお前の大切な物を片っ端から殺してやるよ！ギャハッ  
ハハハ！】

翔「なっ！？そんなことをしてみろ殺すぞっ！」

我ながら幼稚な言葉だ。体を奪われているのにどうやって殺すとい

うのだ。

だが、理性より感情が動いてしまった

【やってみるよお。俺もお前を殺したくてたまんねんだよ。こんな鎖がなきゃ今にでもその体を奪ってお前と言う人格を殺してやるのによお】

翔「一度俺に負けた負け犬は一生その鎖に繋がれてるのがお似合いだな。」

【言ってくれるじゃねえか。せいぜい今のうちに生を楽しんどけよお。そっから一気にお前を絶望に落としてやるからなあ】

その言葉を最後にシヨウは姿を消すと感覚が段々と戻ってきた

透「翔、どうしたの！」

翔「い、いや、なんでもない！」

どうやら、いきなり空中で立ち止まった俺を心配に思ったようだ  
現実ではあまり時間は経ってないようだ。

その証拠に時間を確認すると2分も経っていなかった

翔「楓、ありがとう。お前のおかげで俺はまだ歩けそうだよ」

「アアアアアアアアアアア」

ここにいない楓に感謝しているとAIMバーストの声で思考が中断された

微かに苛立ちが沸き立った

翔「ほんとにやかましい。まずはその口を潰すか」

風を操って炎哉が飛ばした瓦礫を自分の周りに浮かび上がらせた

その数は16

一つ一つの弾丸の大きさは相当でかいから全身蜂の巣になるだろうな

翔「セット完了。発射」

その言葉を合図に16の弾丸が意思を持つてるかのようにAIMバーストに飛んで行った

AIMバーストは炎哉達と戦っているせいで後ろから来る脅威に気付いていない  
そして

パアンと弾けるような音を立てながらAIMバーストの全身を蜂の巣に変えた

AIMバーストを再生しながら後ろを振りむこうとすると

炎哉「余所見してんじゃねえよ！」

炎哉の炎の玉で頭を爆発させられていた

更に後方から透たちの射撃のおかげで体中が穴だらけになっていた  
その隙に炎哉達の傍まで降りた

すると、御坂がこっちに駆け寄ってきた

美琴「治療プログラムは！」

翔「今、木山が作ってる最中だ。にしても炎哉」

炎哉「なんだよ？」

翔「瓦礫が無いからって原子炉の壁壊すなよ（汗）」

後ろに首を向けるとAIMバーストでも楽々に入れるぐらいに壁が粉砕されていた

おーい壁を守ってた意味がなくなってるんだが



今までの苦痛に耐える悲鳴ではなくまるでこの世全てを恨むような  
怨念の音が響き渡った

翔「おいおい、ここに来て第二形態ってか？」

炎哉「どうなつてやがんだよ、いつたい」

翔「・・・っ！お前からこっちから退避しろ！」

炎哉「おう！」

美琴「え、ちよっ！」

全部の赤い目玉がこっちを見た瞬間本能的にヤバイと思い、俺は御  
坂を抱えて風で自分の体を吹き飛ばして離れた

炎哉も全力でその場を走って離れた

突如、ドオンツ！と音共に俺達が先ほどいた場所にクレーターがで  
きた

美琴「なによ、あれ・・・」

翔「成長したんだよ。今まで胎児だったけど今じゃ立派な化物だな」

炎哉「ここまでズレるときついな」

美琴「ズレる？」

炎哉「い、いやこっちの話だから気にすんな」

御坂は首を傾げながらも気にしないことにしたようだ

このバカは・・・いや、それより目の前のこいつをどうにかしなき  
やな

ポケットから携帯を取り出して透と連絡を取った

翔「透、聞こえてるか？」

透「うん、聞こえてるよ。成長したってほんと？」

翔「ああ、全身が目玉だらけ&能力の使用方法が変わった」

透「・・・もしかしたらバリアでも張られたりして」



翔「少しは加減しろよなっ！」

急いで目の前の地面をダイヤモンドの壁にカスタマイズにした  
すぐにズガガツと数の暴力が襲った

おかげで回りは砂煙が舞って見えなくなっていた  
すぐさま風を操って視界を良くすると、また更に同じ攻撃をしよう  
としていた

確認のために風の刃を放つてみるとバリアに当たって本体には届か  
なかった

やっぱり、バリアも復活するか・・・だが十分な収穫はあつた

翔「単細胞で助かった。2人とももう少しこっちに来てくれ」

炎哉「げほっげほっ。なんだ、翔？」

美琴「けほっ。どうしたの？」

砂煙のせいで咳をしながらも2人は近寄ってきた

俺は適当に地面から石ころを適当に何個か掴みとってメダルに変えた

翔「これから作戦を伝えるから実行してくれ。御坂レールガンは後

何発使える？」

美琴「良くて後2発ね」

翔「わかった。炎哉、体力は充分か？」

と俺が聞くと不適な笑みを浮かべた

炎哉「誰にものを言ってるんだ？俺はまだまだやれる！」

それを聞くと思わず笑みが零れた

翔「そうだったな頼りにしてるぞ。御坂はこれを」  
御坂「え、これって」

御坂が使ってるゲーセンのメダルを渡した

翔「そこらへんの石ころをメダルに変えた。ここからが本題だ。御坂がさつきみたいに雷の槍でアイツのバリアを壊してくれ。」

美琴「え、それならさつき私が」

翔「いや、確認のために攻撃してみたが既に復活してた。で、御坂がバリアを壊したらすぐに炎哉がこれでアイツを叩き潰してくれ」

俺は地面から倒した状態のAIMバーストの大きさの半分ぐらいの槌を作り出した

言っておくが叩く面もAIMバーストの半分ぐらいだ

炎哉「叩き潰せばいいのか？」

翔「お前が本気を出せば余裕で出来るだろ？」

炎哉「それぐらい余裕だっ！」

翔「その後に槌をAIMバーストの腹のあたりまで持ち上げる」

炎哉「了解！」

炎哉は一度深呼吸をすると槌を一気に持ち上げた

御坂は人外を見るような目で炎哉を見ていた。まあ、それもしかたがない

翔「俺が囷になるから2人とも頼んだぞ。」

美琴「わかつたわ」

炎哉「わかつた。だが、体の方は大丈夫か？」

少し心配そうな顔で炎哉が聞いてきた





翔（・・・ぐっ、やばいな。目の前が霞んできた）

炎哉「おい、翔逃げろっ！」

翔「え・・・うおわ!？」

AIMバーストの触手が翔の足首を掴んで一気に引き寄せた

美琴「このっ！」

砂鉄を集めて風間さんを掴んでる触手を狙って振るうが

ガキーン!

とまた、バリアが復活して砂鉄の剣が届かなかった

AIMバーストのお腹が口のようにガバツと開き風間さんを飲み込もうとしていた

「まったく何をやっておりますの」

美琴「え・・・この声」

声が聞こえたと思ったら触手に捕まっていたはずの風間さんがいなかった

代わりに隣に風間さんを背負っている・・・って

美琴「く、黒子っ!？なんでアンタここに?!」

黒子「ったた。お姉さま後数分で治療プログラムができますのでそれまで持ち堪えてくださいまし」

私の質問には答えず傷が痛むのか涙目になりながら治療プログラムことができることを知らせてくれた

風間さんを背負うのがこれ以上辛いのかゆっくりと降ろした  
そこに炎哉さんが心配して風間さんに駆け寄った

炎哉「おい、翔大丈夫か!？」

翔「・・・なんとかな。ありがとな白井助けてくれて」

黒子「何時までそこで倒れているつもりですの!殿方なら勇ましく  
立ち上がったらどうですの!」

喝を入れる黒子に風間さんは苦笑しながらゆっくりと立ち上がった  
・・・こんな黒子初めて見るかも

翔「ああ、今立つよ。っとと」

危なげに立ち上がると黒子が一瞬だけ心配そうな顔をしていた  
それを見て思わず苦笑してしまった  
もう少し素直になったら良いのに

炎哉「翔、お前は離れて休んでろ。能力の負荷で体が限界だろ?」  
翔「正解だ。けど見てるだけってのは嫌なんでね。うしっ!」

自分の顔を叩いて気合を入れなおしていた  
それを見て黒子が軽く溜め息をついていたがどこか安心した顔をして  
いた

炎哉「おい、アイツ抜き取るみたいだぞ」

美琴「え?」

AIMバーストに顔を向けると柄の部分に触手を絡めていた  
そして一気に抜くとブチッ、グチャと音が耳に異様に残って慌てて  
耳を塞いだ

黒子も塞いでいたが炎哉さんと風間さんは顔をしかめているだけだった

翔「あゝあ取っちまったか」

ゴドンツと轟音を立てて巨大な槌が地面に落ちた  
すると遠くから音楽のような物が聞こえてきた

美琴「なにこの音楽？」

翔「つくく。まるで治療プログラムがラスボスのBGMに聞こえてきたよ」

炎哉「同感だ。これでアイツは再生しないし存分にやれるな」

黒子「よくこんな状況で軽口が叩けますわね。ですが聞こえなくてもいいですわね」

炎哉さんはなんで再生しないって知ってるんだろう？

まあ、いいわね

翔「これぐらいは作れるよ」

風間さんが手を前に出すとその下の地面から柄のようなものが顔を出していた

それは地面から伸びるように出てきて次に刀身が姿を出した

美琴「に、日本刀!？」

翔「そんなに驚くことかよ。透だつてライフルに機関銃その他諸々ぶっ放してるし」

炎哉「・・・その出所は全部お前だけだな」

白井「風間さんそのことについて後でゆっつっつくりとお話を聞かせてもらいますの」

翔「はは、お手柔らかに（汗）」

髪を逆立てて怒りのオーラを出す黒子

正直、風間さん1人で戦争起こせる気がしてきた

## SIDE OUT

翔「さて、ラストスパートと行きますか」

炎哉「あんま無茶するなよ」

翔「善処する。御坂すまないがバリアをもう一度壊してくれ」

美琴「良いけどレールガン後一発しか撃てなくなるわよ?」

翔「構わないよ。最後はお前が決めるからな。白井は御坂がやばいときにテレポートで回避してくれ」

黒子「言われなくてもお姉さまはこの黒子が守りますの」

美琴「じゃあ行くわよっ!」

余力を残しつつ雷の槍を放つとバリアが衝突したがさきほどより固く壊すだけで終わってしまった

AIMバーストの目が4人に向けられると大量の触手が襲い掛かってきた

しかし触手は誰かを狙うように一定の場所に向かっていった  
その狙いの先には翔がいた

翔は美琴達に被害が出ないように空を飛んでAIMバーストの回りを移動しながら日本刀で触手を斬っていた

何本もの触手は斬られて地面へと落ちていった

炎哉「俺も行かせてもらうか」

炎哉はAIMバーストの真下に移動すると腰を屈めて構えだした

そのとき僅かに炎哉の回り空間が一瞬だけ歪んだ

炎哉「剛昇破ッ！」

ドオンッ！と音ともにAIMバーストの体が天高く打ち上がった  
その光景に美琴と黒子は呆然と見ていた

黒子「……………あの人は本当に人間ですか？」  
美琴「……………私も疑いたくなってきた」

あんな光景を見たら誰だってそう思いたくなるのは仕方が無い

普通に考えて自分達の何十倍もあるものを打ち上げるなど不可能だが炎哉には神からもらった肉体強化と氣を使うことができる  
おかげでこれを可能にしている

その分体にもそれなりの負担が掛かるが炎哉は普段からの体力作り  
のおかげでまったく無問題なのだ

AIMバーストはそのまま落ちていき地面に落下するかと思えば触手を絡ませて腕を作り上げ、腕をクッションのように使って地面への衝撃をやわらげたが倒れているおかげで美琴が狙いやすくなっていた

落下したAIMバーストの目が一斉に炎哉に向けられたと思いきや  
翔、御坂達にも向けられた

「アッアッアッアッ」

AIMバーストが触手を輪に掲げると頭の輪に徐々に光が集まっていた

それは球状となり段々と大きくなりだした

炎哉「やらせるかよッ！」

炎哉は手に炎の玉を作り出し、それを光の玉に向かって投げた  
炎の玉は吸い込まれるように光の玉の中に入っていき更にでかくな  
った

光の玉は能力を吸収する性質を持つようだ

炎哉「つてなにいい!？」

翔「あのバカが 風牙！」

翔が剣を横に振ると、そこから風の刃が飛び出し掲げられた触手の内4本が切断された

もう一度振るおうとする前に光の玉が爆ぜた  
すると、幾つ物光の刃となり周囲に飛び散り、翔達に襲い掛かった

炎哉「お前もバカじゃねえか!つと、オラオラオラオラッ！」

翔「うっせえ!つち」

美琴「どっちもバカよ！」

炎哉は両腕に気を纏わせ光の刃を殴って自分の体に当たらないように弾いていた

翔は美琴達に向かっていている光の刃を両腕と両足に風を纏わせて当たらないように弾いていた  
だが、数が多く光の刃が多く、全て弾いた2人の体中あちこちから血が流れていた

翔「御坂、撃て！」

美琴「わかったわ！」



美琴「よかつた〜・・・あ、もうダメね」

美琴も電気不足のためか背中からゆっくりと倒れた

炎哉「お前もか御坂」

美琴「そういう炎哉さんは元気よね」

炎哉「普段から鍛えてるからな。それよりあんま無防備に倒れてると白井に襲われるぞ」

美琴「大丈夫よ。黒子なら」

美琴が指差す方向に炎哉が顔を向けると翔を自分に膝に乗せている白井がいた

翔はとても安らかな顔で寝ている。

その様子を見て炎哉と美琴はニヤニヤと笑っていた

黒子「ち、違いますのよ！ここ、これは風間さんが勝手に私の膝の上に倒れこんでくるので仕方なく・・・」

それに気付いた黒子は慌てて弁解をするが2人は聞かずに暖かいを視線を送っていた

美琴「わかつてるわかつてる。アンタはもう少し素直になりなさい」

黒子「なな、なんのことですか！／＼／＼」

美琴の言葉にボンツと顔を真っ赤にさせていた

それを見て炎哉と美琴は声を上げて笑った

その後炎哉と翔は病院に運ばれた

炎哉は切り傷の手当てだけで終わったが翔は病室で寝込んでいる

極度の疲労のせいで体が一時的な休眠状態に入っているらしい医者  
の見解では2、3日に経てば目覚めるらしい  
それを聞いて病院についてきた炎哉達はホッと息を吐いた

それから美琴と初春と黒子は先に帰り病室には炎哉と透だけが残っ  
ていた

病室のベッドには翔が規則正しい寝息を立てて寝ている  
ふと、透が炎哉に顔を向けた

透「ねえ、炎哉」

炎哉「なんだよ？」

透「きつと翔は今日の夜に上条君を無理してでも助けに行くんだよ  
ね」

炎哉「なんできよ・・・ああそうか。今日は当麻と神裂の初の会合  
だったな。だったらこのバカは無理してでも行くだろうな」

透「だよ。はあー」

透は軽く溜め息を吐くとジーンズのポケットからチョーカーと紙を  
取り出し、それをベッドのすぐ横にある台の上に置いた

炎哉「そのポリスチョーカー翔のか？」

透「うん、これは翔にあげる予定のものだよ。これはね魔術に対す  
る効力を阻害する効果があるんだ。つまりこれがあれば翔は人払い  
の結界があってもそこに侵入することができるってことだよ」  
炎哉「これは透が作ったのか？」

炎哉はポリスチョーカーを指差しながら言った  
それに対して透は困った顔をしながら答えた

透「ううん、僕がしたのはこの金属部分にルーン文字を刻んだだけだよ。これ自体はお店で買ったものなんだ」

炎哉「そうか。それでもお前はすげえよ。俺には到底無理だろうからな」

透「僕はただ翔への恩返しができればと思ってやったことだからね」  
炎哉「恩返し、か。ほんと、こいつがいなきゃ俺と透ってどうなつてたんだろうな？」

透「たぶん僕はあの時気弱だったから回りからいじめられて、それに耐えれなくなって身を投げてたかもね」

炎哉「俺は際限なく人に暴力を振るって傷つけて報復にあつて死ぬか一生涯少年院だったかもな。そう考えると翔がいるから今の俺達がいるんだよな」

その言葉に透は静かに頷いた

透「だから僕は翔の歩む道を否定しないよ。それが例え人を殺すことになつても翔から離れることなんて絶対じゃない。正直言つて僕にとつて家族より翔のほうが大切がだもん」

炎哉「俺もだよ。まあ、そんなこと言つたらコイツに怒られちゃうがな。俺の事なんかより周りを大切にしろ！つてな」

透「はは、そうだね。さあ僕達もそろそろ行こ」  
炎哉「ああ、そうだな」

2人は椅子から立ち上がり病室から静かに出て行った

時間帯は7時頃

真っ暗な裏路地でスーツを着た男が何度何度も忙しなく左手の腕時計を確認していた

男の右手に赤いキャリアケースを大事そうに抱えていた

「何してんだよ早く来やがれってんだ」

男は苛立たしげに呟いた

どうやら男はここで誰かと待ち合わせをしてるようだ

「それにしても木山の奴治療プログラムを再度作りやがって俺がダメーまで作って騙した意味がないじゃねえか。あのまま暴走させておけば理事会のカスどもが死んだかもしれねえのによ」

この男が木山に協力して事態を最悪な方向に導いた坂城という男みたいだ

「けどもう関係ねえか。約束の時間まで後5分。カカカ、後5分経てば俺は大金持ちか。カカ笑いが止まらねえ」

男が笑っているとコツコツと足音が聞こえてきた。

「お、来た来た」

男はニタニタと気持ちの悪い笑みを浮かべながら足音の主を待っていた

「カカ、予定より早いじゃねえか。例のブツはここにある。お前等が欲しがってたAIM拡散力場の書類もな」

男はキャリーケースをバンバンと叩きながら言った  
「どうやらここでキャリーケースの中に入ってるブツを取引する予定らしい」

「テメエが坂城か。見るからに強欲そうなおっさんだな」  
「あ？」

坂城と呼ばれた男は怪訝な顔をした

暗闇の中で姿は見えないが声からすると声変わりしてない少年の声だったからだ

足音の主は暗闇の中からゆっくりとホストっぽい格好をした少年が現れた

その姿を見て坂城を恐怖で顔を真っ青にさせた

「おお、お、お前は?! なな、なんでここにいるんだ!? 垣根提督!」

垣根提督レベル5の7人の内の1人で第2位の实力を持つ男だ  
能力は「未元物質 ダークマター」と言いこの世に存在しない素粒子を生み出し(または引出し)操作する能力

「はあ? なんでって決まってるだろ。ゴミ処理をしにきただけだ。  
どっかのバカがこの学園都市の重要な書類を外部の人間に売ろうとしているってことで俺が駆り出されたわけだ。まあ、途中でもう一つのゴミも処理したかな」  
「こ、こんなところで死んで」

坂城が懐から銃を取り出そうと手を伸ばすが、その前に坂城が地点から正体不明の爆発が巻き起こり彼は死んだ  
あたりには爆発のせいどころどころに坂城の体の一部分が飛び散

っていた

提督はどこかに電話するとその場を去った

それから数分後作業服を着た男が坂城の死体を黒いゴミ袋に詰めて  
キャリアケースと飛び散った紙屑を集めて別のゴミ袋に入れるとそ  
れを持ってその場を去るとそこには何も残ってはいなかった

ゆえに誰も気付かない、ここで誰かが死んだなど思いもしない  
これが学園都市を裏切った者の末路だ

## ズレていく物語（後書き）

天翔竜閃・・・相手の懐に潜り込み股から一気に切り裂き相手を二分割する技

戦闘シーンのアドバイスをくれると嬉しいですが  
ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3904k/>

---

とある三人の転生者たち

2011年10月6日17時13分発行